
Blue Rosette

Rigid-Midget

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Blue Rosette

【Nコード】

N3353G

【作者名】

Rigid-Midget

【あらすじ】

地方都市・蒼乃。世間から最も怖れられる街。異常殺人と少年犯罪が横行する、地上に隆起した地獄。少年・社慶太の街。神罰代行者・マリオンの訪れた街。出会うはずの無い二人の邂逅が、蒼乃の街の真実を暴きます。

1. 今日のバイト / 0

「もしもし——ん、何か用か？　——あー悪い、今バイト中。二、三時間は優にかかる。——あん？　いや無理だから。今？　おっさき桜崎だよ、この前出来たでかいマンション近く。——ああ、わかった。気が向いたらな。ん、じゃあな」

通話を切ると、無人島に一人取り残された気分になった。

携帯電話の液晶画面が異様に映える、仄暗い昼下がり。

見上げる空は、俺の憂鬱を代弁するかのような曇天色で塗り込められていた。今朝早くから降り出していたご無沙汰な雪は、廃れた住宅街を貧相な銀世界へとイメーჯチェンジ。寒気がするという意味では、化粧に失敗した女と顔を突き合わせているのと同じ様なものである。やば、思い出したら頭痛してきた。

生き延びるための呼吸すら自傷行為。肺は凍結するんじゃないかと思う。加えて冷気が喉に引っ掛かる感覚たるや、冷やした金平糖をいくつも丸呑みするかのような難行苦行で気持ちのいいモンじゃあない。

見渡す限り、人影はおろか行き交う車さえなし。というか雑音も死んでる。鼓膜が壊死したわけでもないんで、こりゃご近所さん全員病院送りかも。ほら、都市部の人間って虚弱体質だから。新型インフルエンザの流行でここ一帯に避難勧告が出されたんです、なんて嘘なら簡単に信じられる。今日がエイプリルフールでなくてよかった。住民全員参加のドッキリなら間違いなく騙されてたね、俺。

携帯電話を見やれば、時刻は丁度午後一時。雇い主の留守電に定時連絡。えゝ、道路を挟んで正面に聳え立つ築五年、中流家庭層から定評のある五階建て市営マンション『蒼乃フロンティアA』。その三階・三〇五号室のドス黒い玄関にこれといった変化なし。：うゝん、毎回補足説明するギャグも、もうコレつきりにしとくか。さすがに三回目は都瑚みやこさんのニコパチもらえないだろうし。

張り込みつてのは久しぶりだが、正直しんどい。身を隠しながら、ひたすらマンションの一室と周囲を監視し続けてかれこれ五時間。メンタルフィジカルともに限界に達しつつある。しかし、ここであつちやるとバイト代が消え失せるんで、心身に鞭打って耐えろ俺。そして早く出て来い、ブタ野郎。

＊

「ほら杜やしろさん、ご注文のコーヒーです」

「ん、さんきゅ。遅かったな。……って、なに、嫌がらせ？ 俺のだけかなり冷めてるんだけど。カップにフタ、ついてないんだけど」

「そんなに責めないであげてくださいよ。店員の子だって何も悪意があつて杜さんのだけ手え抜いたわけじゃねえんだから。で、さつさと金よこしてください」

「いや、お前責めてんだけど。少し飲んだ形跡あるし。……おい、ちよつと待て、ツリをよこせ。このクオリティで千円ってぼったくりも甚だしいぞ」

「今はそういう格差なんですよ、日本」

「意味合いが異なるだろ」

「知らないんですか？ 現代では駄菓子屋の水飴がウン万円の値段で、とある店に商品として出されてることを」

「うわ、それ知ってる。駅前のセクパブじゃねえか。いいんだよアレは。単に水飴食べるだけじゃないんだし、というかパブ嬢のオプションメインなんだし。他にもハチミツとかチョコレートとか」

「……博学ですね、社さん」

「嬉しくねーよ。そんな話どーでもいいからツリをよこせ。高校生のお小遣い事情なめんな」

みみっちいなあ分かりましたよ、と悪態をついて釣り銭を渡す相原治郎じろう十六歳。本当に後輩なのか時々不安になる。

「中身はちゃんとしたブラックだろうな？」

「ただいま期間限定でガムシロップ十二杯、角砂糖二十四個入り、脳ミソまで溶ける地獄甘党コーヒーを配布中だったりする」

「ふざけんな」

「冗談ですって。はい、砂糖とミルク」

「お前、やりかねないから怖い」

ザラザラした感触を舌に残す激甘の黒いというかグロい飲み物を想像しちまったせいで、プチ甘いもの恐怖症オン。ということポ

ーションミルクだけ受け取る。想像力強いくせにメンタル弱い俺。泣けてくる。

「次の買出しはアンタですからね。今からきっちり二時間後。三時のブレイクタイムに求められるのは、温かいドリンクだけでなく量より質のドルチェ諸々。庶民でも優雅な一時を味わえる、そんなお茶請けを用意する義務がありますよ」

「……あのさ、何回か聞いたかもしれないけど、何でお前いつもそんなに強気なの？」

何言ってるんだコイツ、みたいなあからさまに冷たい視線が辛い。

「もっとこう、先輩に対する謙虚さみたいのがな」

「たかだか一年無駄に長く生きてるだけでエラソーにされちゃたりませんよ。ね、社さん」

うわー、微塵もかわいい気ねえなコイツ。

「……ま、いいや。次の買出しは善処するよ。それより、早いところに戻らないか？ 手が悴んできた」

もう指先の感覚がなくなりかけてる。手のひらの筋肉だけで寒波を防ごうとした試みがまず間違いだったか。俺ってけっこー貧弱だったんだ。

「おいおい三十分外に出ただけで早くもダウンかよ。まったくこれだから虚弱体質は足手まといになるって言ったんだまったくしつかりしてくれよ社さん」

長くてあと四時間。コイツと二人で仲良く張り込み出来るのか、かなり不安。

張り込みの前線基地として支給されたのは、とある高級外車Fだった。気の毒に、高二の俺も後輩の治郎も無免許でことでキーは渡されず、ほとんど雪よけと隠れ蓑としてしか機能しない可哀相な奴。移動手段としての利便性まるつきりゼロなのである。

かてて加えて、火が点けられないもんだからヒーターやらなにやら持ち込んで勝手にカスタマイズする俺達。追い討ちをかけた計画性ゼロのリフォームのせいで、もはや車の中はちよつとした居住空間。誰が見ても、これが走るために生まれてきた四輪駆動車だとは思うまい。

「治郎、ヒーター弱めてくれ。少し暑い」

パシリじゃねえんですけど、という文句は無視。
助手席に陣取り、ラックトップパソコンをチェックする。

「————ニュース、更新されてました？」

「売れっ子モデルとベンチャー企業社長の熱愛報道、政治家の汚職に官公庁の不祥事内部告発エトセトラ」

「世はなべて事も無し、ですか。この分だと、あのマンションの標的がビンゴって可能性、ますます高まりますけど」

「個人的には空振りであって欲しい。『G件^{ジイ}』の犯人張り込んでま

したって、ゾツとしない自慢だ」

そう。監視対象『蒼乃フロンティアA』・三〇五号室の住人こそ、最近この蒼乃市で多発し、市民を恐怖のどん底に突き落としている怪奇事件・通称『G件』の一つの容疑者に挙げられているわけ。と言っても、それは警察の見立てではなく俺達の独断。信憑性を疑われても文句が言えないが、我らがボスの先見は往々にして正鵠を得ている。そんな神話に加えて、独自ルートから仕入れた目撃情報と近隣住民の証言から、あの住人はほとんど真っ黒なのである。

「いいじゃないですか。一生ものですよ」

治郎は双眼鏡で監視を続けながら恐ろしいことを口走りやがる。

「他人に披露する前に五体不満足になっちまう自慢を一生ものとは呼びたくないな」

「それも教訓ですね。失って初めて気付く大切さって言うの？」

「ならせめて取り返しつくものであって欲しい」

「そりゃ我が侘って奴ですよ。デッドエンドの罠は人生いたるところに仕掛けられているんで、むしろ手足なくなるだけならマシなほうです。というか、命奪られることは考えないんですか？」

「いや、俺死なないから。去年のクリスマスプレゼントで死んでも死なない特性もらったから」

ちなみに訪問勧誘でもらった新興宗教のありがたいお札ね。『不死身』ってへたくそな字で書かれたヤツ。多分まだ財布に押し込んであるはず。

「主人公気取りかよ。まあ最近のドラマじゃダメ男デキる女つてのが主流らしいし、社さんはハマリ役かもしれないですね」

「そこはかたなく馬鹿にしてるな」

「鈍感、甲斐性なし、面倒くさがり、無愛想、ひきこもり、守銭奴、猫好き」

「待て待て。何その素敵ワード。お前のパラメータ？」

「いや、社さんの欠点ってヤツですね。ダメ男の条件とも言いますけど」

ひどい言われ様だな、俺。

「ちょっと待て。猫好きって……なんか個人的意見入ってるぞ」

「うちの姉ちゃん、猫アレルギーなんですよ。触るとくしゃみが止まらなくなるみたいで。猫好きの男は絶対無理って」

「じゃあむしろお前の姉ちゃんの欠点だろうが。というより、何、お前、姉ちゃんいるの？」

「言いませんでしたっけ？ 社さんと同じクラスですよ」

「……ワリ。相原って女子は二人いらっしやる。ギャル系か清楚系

か。俺個人では、たぶんギャル」

「清楚系ですね」

「……ん、納得。今の切り返し方、前にも覚えがあるような」

たぶん文化祭の時。詳細は忘れた。

「なんで気付かなかったんですか。学校も苗字も同じっていったら普通感付きませんか？」

「興味なかったんだよ、そーゆー人間関係に。だけど、そーか。俺、お前の姉ちゃんにそんな風に思われてたのか」

っていうか、何で治郎の姉貴にここまで言われなきゃならんのだ。大体、そんなに付き合いもないのにどうして鈍感とか甲斐性なしとか守銭奴とか発想が出て来るんだ。謎だ、謎過ぎる。今度会ったら詳しく訊く必要があるな。

「あ、ご心配なく。あながち間違いでもないってフォローしときました」

そこは俺に対するフォローがあってほしかったんだけどな。

1. 今日のバイト / 1

「六人、か」

「口に物を入れてしゃべるなよ」

というか、どこにあったそのメロンパン。

「……この『G件』の失踪者って、女ばかり六人でしたっけ」

「あ、それ一人はプチ家出で昨日見つかったらしいから正しくは失踪者、つまり誘拐されたのが五人。他に未遂が五人いる。勿論、全部女限定。ま、言うまでもなく凶悪犯」

「『G件』認定されたってことは人間以上のことをやっちゃっていう世間からのお墨付きみたいなんですよ。根拠は誘拐未遂がありながら誰も犯人の顔見てないってことと、失踪者全員が不可解な誘拐のされ方をしているってことかな」

「多分な。失踪者が死体で発見されているわけでもないし、これまでの『G件』とは毛色が変わってるが、一ヶ月で都合十人に被害を与えながらも、被害を受けた本人以外は目撃証言どころか手がかりすら一切無し。犯行声明はあるものの身代金要求などはなし。神隠しなんて浮世離れた言葉がしっくりくる時点で『G件』有力だな」

ちなみに神隠しに遭った人間は二度と戻って来なかったり、後に死体で発見されたり、生きて発見されても虚脱状態で何も覚えていないという。縁起悪イ。

「犯人はどんな能力の持ち主なんでしょうかね」

「透明人間實在説って視覚の問題で否定されたんだっけ。じゃあ後は……都瑚さん曰くなんでもアリみたいない言草だし細かいこと気にしないんなら他に空間を拉致するとか、生物時間を止めるとか、まあいろいろ考えられる」

「もはやアニメの世界ですね」

「同感。言ってるこつちが馬鹿らしく思える。でもそれが現実。言うなれば犯人は頭の中の住人だし、設定考えたらキリねえよ。人知を超えた力って割と多かったのな」

例えば視線の先を丸焦げにするとか、念じただけで人様の体捻じ曲げるとか。現実だと洒落にならない殺人技術だったの。

「……じゃあ賭けません？ 犯人の能力」

「……あのなあ、お前、自分の死に方予想なんてしておもしろいか？」

真っ黒な炭の塊である俺の体、不規則にツイストする俺の体、死に方としてはほとんどサイアクの域である。

「誘拐に使った能力だって言ってるでしょう」

「俺には『G件』犯の特殊能力なんてのは全部人殺しの力しか思い浮かばない」

「そりゃ同感ですがね。一口千円ですけど、ほんとにやりませんか

「？」

「やらねえよ、縁起悪ィ。死地に赴く前くらい楽しいこと考えたいんだよ」

「死地って……心配しすぎですよ。大体、俺達のバイトって三〇五号室のオオクボさんがマンションから出て来たら部屋に侵入して中を物色するっていう、空き巣まがいの探索作業ですよ」

いや、まがいつていうか、立派な空き巣。

「直接オオクボさんと顔を合わせるわけでもないし、そもそもまだオオクボさんが『G件』の犯人と完全に決まったわけでもない。仮にそうだとしても、相手は誘拐に能力使ってるような奴ですよ。理不尽な殺人能力は持ってない可能性はかなり高い。そんなにビクビクしなくてもいいでしょう。まったく、杜さんってほんとチキンなんだから」

「でもなあ、百パーないってことも言い切れないじゃん。肉体生命懸かってんだぞ、このバイト。気構えは重要だろ」

「はいはい、分かりました。アンタの言うとおりですよ————と。杜さん、噂をすればご登場です」

「まあたゴミ捨てとかじゃないだろうな」

携帯電話を準備しながらマンションの一室を双眼鏡で眺める。

「違いますね、明らかにさっきと雰囲気。どうやら俺達、前科一犯は免れねえみたいですよ」

「あー俺の希望ある将来設計があ……」

三〇五号室から出て来たのはうら若き長身の女性。茶髪のショートヘアに真っ白いコート、この雪の中寒くねえのかと突っ込みたいくらいのミニスカート。写真で見る限りかなり美人のオオクボさんである。

「あんな美人が連続誘拐犯とはね」

「ああいうのにありがちな『性格困ったちゃん』ってわけでもないみたいですね。外も中も整った奴がえげつない誘拐するなんざ世も末だ」

「みんな同意見だよ。事件ってこの付近で起こってるのに警察もまったく疑ってなかったし。まあ、『G件』犯はどこかが欠けた人間って先入観があるから真っ先に捜査対象から除外されたかな、オオクボさんは。聞けば聞くほど出来た人らしいぞ。勤め先の美容室でも人気だった」

「でも杜さん。人間、いろいろ足りてる奴に限って凡人が持っているものを持ってないものですよ。当たり前すぎて見落としてる部分とか」

「ま、それを確かめに行くんだけどな、俺達」

オオクボさんを双眼鏡で追いながら、携帯の番号をコールする。コール名はズバリ、『尾行少年A』。

「……………ああ杜さん、今度こそ動いたんスか？」

「ああ、多分な。打ち合わせ通り、オオクボさんの監視と尾行よろしく。少しでも引き返しそうな気配があったら連絡してくれ」

「了解ッス。バイト代の分は働かせてもらいますよ。んじゃ」

通話を切ると丁度、オオクボさんがマンションを出て住宅街に消えていった。

「杜さん」

「わぁーてるよ」

ではでは、オオクボさん家に突入の旨を都瑚さんに連絡。「これが彼の最後の言葉です」にならないように祈りつつ、俺達は車から降りてマンションに向かって走り出した。

＊

今回のバイトは不吉だ。

何せ謎が多すぎる。犯人の標的も、目的も、犯行手段も、何もかもが不明瞭。何をするか見当つかない人間ほど恐ろしいものは無い。不安と緊張はずっと全身に張り付いたままだった。

治郎もこういうことに関しては消息筋。ありやかなり参ってるな、面には出さないが。普段ふてぶてしい奴だけにこの状況は面白すぎる。本人には黙っておこう。

お互い無言のままマンションの中へ。

薄暗いエントランスはかなり不気味。最近じゃ頭の中が非常識で

一杯なんでそこらの物陰から怪物でも出やしないかと、どこでもいい恐怖にそわそわする。あーダメだ。そういうこと考えるな俺。この状況で症状出すのはいろいろまずい。

エレベーターは何かとアブナイので使わない。命の危険を感じ取って逃げ場があるほうにしたのに、階段を一段上る度に死刑台に上っているみたいな感覚が襲ってくる。結局、このマンションに入った時点でそういう連想は止められないわけね。でも死ぬなら畳の上で死にたいっての。

「社さん」

マンションに潜入して初めて治郎が口を開いた。映画だとういう時、別れの挨拶言った奴が大抵死ぬんだよなあ。死亡フラグってヤツ？ いっそのこの生意気坊主には踏んでもらいたいフラグだ。

「あん？」

「携帯貸してください」

「何に使うんだよ」

焦げたパンみたいな色のマイ携帯を渡す。治郎は何やら操作して俺に戻した。

「……何？」

画面には何故か誰かさんの電話番号が表示されていた。

「いや、最期の別れ。理子先輩としてないでしょ」

こ、コイツ……！どうしても俺を悲劇の殉職者に仕立てたいらしいな。しかも俺が電話するところを携帯のムービーで録る気満々。

「映画監督になりたいのかお前は」

「題名は……そうですねえ、『社の最期エピソードワン』

何回死ぬんだ、俺。

心の中で突っ込みながら、携帯をコートのポケットに突っ込む。

「電話しないんですか？ 理子先輩と話せる最後のチャンスなのに」

「ふざけんな、縁起悪イ。大体、俺にとって理子はそういう女じゃない」

あのマイペース女に俺がどれだけ振り回されているか切々と説いてやりたいが、今は時間がないのでこのやるせない気持ちは飲み込んでおく。

「おいおい照れ隠しですか。みつともねえなあ。素直になれよ杜さん。地獄で一生後悔するぜ？」

「あーもう、うるせえなあ！ 俺の心配しなくていいから自分の命の心配しやがれ」

そうこうしているうちに三階へ到着。

けっこー騒いでたつてのに三〇五号室に辿り着くまでマンションの住人には出会うことが無かった。みんな、部屋の中で死んでるん

じゃないだろうな。ま、空き巣働こうとしている俺達にとっては都合だけど。

*

1. 今日のバイト / 2

事前に手に入れておいた合鍵で三〇五号室の施錠を破る。

ドアノブに触れた瞬間、全身に強い悪寒が走った。ドロドロに溶けた飴みたいな感触。ドアノブに指がのめりこむようなイメージ。気味悪い感覚に思わず腕を引っ込めてしまった。

「社さん、どうしました？」

「いや……ワリ。きつと静電気」

治郎が首を傾げている間にもう一度ドアノブに触れるが、気のせいでもないらしい。この時点で何となくオオクボさんがヤバイ人間だってことは感じ取った。ドアノブでさえこの異常。中はどんな暗黒空間だ、クソ。

意を決してドアを開くと、真っ昼間だったのに中は深夜のような光景だった。重く垂れこめた闇が部屋の奥へ行けばいくほど濃い。溶け切らないココアに似てる。

「廊下の先が居間です。手前の扉がトイレ。その奥の扉は脱衣場。脱衣場の向かいにはキッチンですね」

治郎が間取りを説明してくれるが、実は一方通行なんじゃないかと思うほど視界の先は真っ黒だった。貧弱な玄関灯でなまじ入口が明るいだけに奇妙なコントラストである。初めて通る長いトンネルってこんな感じだったな。こっちから出口は見えないけど、あることを信じて進むんだよね、アレ。

土足のまま部屋に上がる。人様の家で心苦しい蛮行ではあるが、俺達なりの「すぐにお暇します」の意思表示なので、見逃してくださいオオクボさん。

持参した懐中電灯片手に廊下を進む。中は中で海中にいるような感覚だ。空気っていうか、空間そのものが俺の動きに抵抗する感じ。ほんと気味悪い。

「しかし……これが若い女性の一人暮らしですか？　女は魔物、なんてよく言うけど、なんて解り易い根城だ」

「俺にとってはそんなことより、このグチャグチャのキッチンの方が衝撃的だ。冷蔵庫の中なんて……ああ。ちよつとしたカルチャーショックだな、これは」

まったく、物が多過ぎる。消費期限切れの食材が奥の方に溜まってそうで見えるからに絶望感。顔は綺麗でも冷蔵庫の中が汚え奴は総合的に見てブサ男ブス女決定。スゲー萎えた気分になるんで冷蔵庫の探索は終了。

「まずは居間を調べよう。お前はトイレと脱衣場頼む」

へいへい、とダルそうな返事をして治郎は脱衣場のドアを開ける。刹那。

「な……」

見てはいけないものを見たような声。

「ん、どうした？」

振り返れば、口を手で覆い隠して中を険しい眼で見つめる治郎。かなり嫌な予感。

「おい、治郎。何があった？」

一応聞いてみたが、脱衣所に近づくだけですぐに悟った。二ヶ月ぶりに感じた、この世で最も嗅ぎたくない匂い。腐敗臭だった。

「無駄に高性能な部屋ですね。死体遺棄を助長しているとしたか思えねえ」

洗面所には電気コードで首をつった女の死体があった。

懐中電灯の光で照らし出される死に顔は、本人には悪いがかなりホラーだ。指一本動かさない人間の体って、そこに在るだけで不気味でもある。

清潔がモットーの脱衣所が一転、悪臭漂うゴミ捨て場を連想させる。近づけば近づくほどその腐敗臭はひどくなり、もう腐った生ゴミだなんなのレベルじゃなかった。

「う————。やば……………おい治郎、写真」

「……了解」

お互いこういうのに慣れているとはいえやっぱり人間。こんなでかい生き物が発生源の腐敗臭には吐き気を催さずにはいられない。

「……冬でよかったと安堵する俺は異常かもな」

「いや、俺もそれ考えてました。蛆虫が大量に蠢いている死体なんて、見ただけで脳ミソ取り替えたくなりますからね。あ、たぶんこ

の女です」

治郎がコートから取り出した一枚の写真と仏さんを見比べてみる。顔面は蒼白で唇は青く変色し、髪の毛も荒れ放題。加えて化粧も付け睫毛もとれているもんだから同一人物であると断言は出来ないものの、身につけているファー付きの茶色いジャケットとボーダーのワンピースは同一。恐らく写真の人物だろう。

「えー……コイツですかね。大島由岐^{ゆき}、十九歳。現在一浪で予備校通い。誘拐されたのは二週間前の深夜です。何でも援助交際常習者で、事件当日も電話で呼ばれて深夜ホテルを出たそうですが、その途中でさらわれたみたいです」

「ヤンチャ娘、ね。ま、言っちゃ悪いが自業自得。蒼乃の街で悪ぶって一人出歩くななんて今じゃ自殺行為だっての」

気の毒だとは思うが、同情出来ないケースだな。

年若い女のことだ。死んだ後の姿なんてあまり見られたくはないだろうが、合掌して許可を願いつつ死体を観察してみる。

表情は穏やかだった。まるで何かから解放されたような安堵の雰囲気漂っている。第三者から危害を加えられたならこういう表情で死ぬことはない。

「自殺……か？」

「まあ、抵抗した形跡もないし、近隣住民も騒ぐ声は聞こえなかったっていうし、極めつけはこの表情ですからね。自殺って考えるのが妥当じゃないですか？」

「ということは。とうとう人を死なせちゃったか、オオクボさん」

「……でも、死ぬくらいなら何で逃げるなり大声出すなりしなかったんでしょうかね。自殺で来たってことは、縛られていたわけでも薬を打たれたわけでもないのに」

「自殺する人間の心理なんて本人以外解んねえよ。それより、早く終わらせねえと。胃液が逆流してきそう……」

いろいろ調べてみたが、目ぼしい発見はない。これ以上現場を荒らすと警察に目つけられるしオオクボさんが帰ってくる恐れもあるんで、脱衣場を出て居間の探索に移る。

居間は九畳らしいが暗闇が多いせいでひどく狭く感じる。様相はまるでテレビに出てくる監獄。誘拐犯の根城には似つかわしい。

慎重に進む。ここは『G件』犯の住まう魔窟。どんな非科学的な現象が起きてもなんら不思議ではないのだ。いきなり壁が襲ってくるとも限ら……ない。

しかし、まずい、と思ったのが遅すぎた。

突然聞こえる小さな息遣い。そして奥の暗がりからシクシクと誰かが声にならない泣き声をあげていた。明かりを向ければ人の形をしたモノが横たわって助けを求めるように虚ろな眼差しでこっちをじっと見つめている。やば、また症状か。クソ、都瑚さん秘伝の薬もやっぱ効果なしってことか。

こっちを見るな。

いつの間にか呼吸が荒くなっていた。額からは脂汗。指なんか少し震えてた。

こっちを、見るな。

牢獄に看守は付き物だけど、監察する対象が外出中だからって俺に乗り換えるなよお前。消えろよ、目障りなんだよ、クソ。

こっちを……見るな。

俺に求めるのは懺悔か、謝罪か、命乞いか。悪いが身に覚えないんでどれも出来ないね。解るか？お門違いって奴だ。

だから、こっちを見るなよ。

「――ろさん、社さん！」

「な、何だよ」

「何だよじゃねえよ。生存者発見」

「え」

「ほら、奥で倒れてる女。まだ死んでませんよ」

治郎にも見えている。ということは幻ではないらしい。――はは、焦って損した。なんだ、葉、効いてるじゃないか。そういやここに来るまで絶好のシチュエーションばかりだったのにアイツを見てない。ビビり過ぎだよ、俺。

「本当に大丈夫ですか？」

「へーきへーき」

薬を飲んでまだ二時間。余裕だ。でも、少しでもリスクを減らすべく平常心をなるべく保とう。

黒く塗りつぶされた部屋の一番奥、これまた黒いソファに女、いや女の子が下着姿で横たわっていた。衰弱しているのか、微動だにしないので生存を疑わせる。

「治郎、写真全部貸して」

被害者の写真を受け取って、あと毛布探せ、と付け足す前に治郎はいつの間にか部屋を引っかけ回して、モウフモウフと呟いていた。ちよい気味悪い呟きだが行動早くて助かる。

コートを脱いで女の子にかぶせてやりながら生存を確認。

「おーい、生きてる？」

声は出せないらしい。息遣いの強弱だけで応答している。ひどくやつれた顔とやせ細った体。下着姿なので眼のやり場に困る。でも、この状況で恥ずかしがるなど女の子に失礼なんで、一心不乱に黙々と、写真照合を行う。

………本人と断定する材料がさっきの女より少ないが、やつれ方はひどくないので自信はある。佐伯明日菜、十六歳。写真で見ると男受けしそうなツラだが、今は面影ない。写真を見せると少し頭を動かしたので本人に間違いないようだ。

治郎が毛布を見つけて女の子にかける。俺は写真を治郎に渡して居間の探索に移った。

「佐伯明日菜、ですか。四日前に誘拐された一番最近の被害者ですね。可愛い見かけとは裏腹に、ぼったくりバーの呼び込みなんかやってみたいです。コイツも深夜、自宅に電話がかかってきて家を出たところ、誘拐されたみたいです」

「こっちもヤンチャ娘かい」

「非行少女だけ狙うんなら解り易いんですけどね。未遂の五人と誘拐された残りの三人は、女という共通点以外統一性ない。一体、オクボさんは何を考えているやら」

「その手掛かりが、ここで見つければいいんだがなあ。どうだ？他に人間、いる？」

「いない……みたいです」

「残りの三人はどこに監禁されてんだ？」

治郎が居間全体を調べているうちに、俺は小物を漁る。桃色のかにもファンシーな筆筒を物色していると、二段目から奇妙なものが大量に見つかった。色とりどり機種よりどりみどりの携帯電話だ。

「二、四、六………十一個？」

オクボさんは携帯電話をフェティッシュに愛好する数寄者なのか？

まったく現代ツ子は携帯電話依存症の奴らが多過ぎる。一番身近で危険な通信ツールだよ、アレ。パソコン以上に操作が簡単だから、どんどん使う奴増えてるけど。無知はもはや自業自得、ネット上で実名とか電話番号とか住所とか書き込むの、自殺行為ですっての。

「……あ、いや待てよ。携帯電話………」

そういや、大島由岐も佐伯明日菜も誘拐される前に電話を受けてたって言ってたな。

「……なあ治郎」

「なんです？」

治郎は佐伯明日菜を抱えて既にエスケープ準備を完了していた。
明日菜ちゃん、ちょい悪いがもう少し辛抱してくれ。

「もしかしてこの『G件』の被害者って、みんな『声』が共通してないか？ 例えば電話だったり会話だったり」

「いや……確認してないんで何とも。でも、言われてみれば大島由岐もこの佐伯明日菜も他の被害者も、確かに電話で呼び出されたり友人と話し込んでいる最中だったりした直後、誘拐されたケースが多いような……」

今度は佐伯明日菜に問うてみる。

「なあ、明日菜。苦しいだろうが答えてくれ。誘拐された日、どんな奴から電話を受けた？」

治郎の背中にもたれかかる佐伯明日菜は、ストローみたいな細かい息遣いで何とか声を出そうとしていた。

「……しら………な、い………お、んなの………ヒト」

「何て言われた？」

「……おぼ、え……てない」

「何でここから逃げ出さなかった？」

「……なに、か……いわ、れ、て……から、だ……うご、か、なか……」

息遣いが荒くなった。限界らしい。これ以上、佐伯明日菜が口を開くことは難しいと思い、礼を言いながらまた休ませてやる。

誘拐前に見ず知らずの女から電話を受けて、佐伯明日菜は家を出た。脅迫の線も考えられるが、だとしたら電話で何を言われたか覚えていないというのは不自然だな。事件に目撃者はなし。自業自得、自分から誘拐されに行ったようなもの。監禁されていたとはいえ、抵抗なし。言葉で人を懐柔。弱みや知られたくない過去を突きつけるよりも遥かに強い力。『G件』犯は特殊な力を使う。自殺した被害者。言葉。命令。拒否を受け付けない言語。

「うーん……まさかなあ。ありえねえけど、ありえないことはありえないご時世だし」

「は？　　どういふことです？」

「いや、まあこれは俺の推測だけど、『G件』犯お約束の人知を超えた力ってのは、いわゆる言霊かもしれない」

「言霊って……。言葉で相手を言いなりにするって、アレですか？」

「ああ。多分、被害者はみんな、電話かなんかで命令されたんだと思うんだ。『黙って私の家に来い』だなんだ。で、言われた本人は言いなりになっちゃって助けも呼べないままこの部屋に自分から監禁されに来た」

「人混みの多い場所で誘拐されたケースで、犯行を目撃した人間がいないのはそれが答えですか。でも確かにそれなら辻褃が合う。まさか自分から誘拐されに行ったとは思わねえですからね」

「大量の携帯電話は、被害者一人につき一台使われたんじゃないかな。足がつかねえように。偽造免許証とか、調べればこの部屋から同数見つかると思う」

「でも、未遂がいるのはどういうことですか？」

「そればかりは失敗した、と思うしかねえ。能力の発動条件とか諸々制約は考えられるが、その道のプロが今ここに居ないし、考えるのは無駄だな」

「じゃあ、佐伯明日菜達がこの部屋から動けず、助けも呼べなかったのは……」

「何か言われたって言うし、そういうことだ。大島由岐は、なんとか呪縛から逃れようとして、力を振り絞って自殺したところか。あの穏やかな表情は、この束縛状態から解放された安堵感からってところ。証拠もないし確証もないけど、一番しつくり来るんだよね。今まで見聞きしたこと総合すると、な」

「他者から言語を封じられ、行動を制限される苦しみから逃れるた

めの死、か。そんな極限状態では、死すら救いに見えたのかな。まあそれなら、俺も理解出来なくは無いですかね」

だが、何かが頭の隅で引っ掛かっていた。言葉で相手を言いなりに出来る以上、死んだ大島由岐はもしかしたら『死ね』と言われて死んだのかもしれない。だが、それなら最初から誘拐なんていう面倒な方法を取らずに殺してしまえばいい。それとも殺人を誘拐に見せかける偽装工作、未遂はわざと起こした布石か。それとも、殺せない事情があったのか。もしくは当初の予想通り、大島由岐は自殺したのか。そもそも俺の推測が最初から破綻、もしくは的外れなのかもしれない。

答えは出そうにない。知恵も知識も材料も今は不足している。オクボさんが今回の『G件』犯で、言葉だけで相手を意のままに操る事が出来るヤバイ人間かもしれないという可能性が見出せただけでも十分な収穫だ。今はオクボさんに接触せずにこの場を離れることに専念しよう。

「早いところ出るぞ。俺の推測が正しければ、オクボさんは近づくなくても俺達をどうにか出来る」

佐伯明日菜をおぶった治郎を先頭にとんずらしようとすると、暗い地獄のような部屋に死の宣告が響き渡った。

発信源は俺の携帯。佐伯明日菜にかけたコートから急いで引っ張り出し、通話ボタンを押した。

「――や、社さん、まずい、早く逃げろ」

電話の主、『尾行少年A』は息を切らしていた。

「あん？　　どうということだよ。標的は今どの辺りだ？」

「マンション近くの、公園、です」

「何？ おい待て、何でそんな近くなんだよ！ 動いたらすぐ知らせろって言っただろ！」

「いや、それが……あの女、駅のトイレで着替えやがって。気付いた時にはもう、公園まで」

着替えた？ 尾行に気付いたか、それとも単なる習慣か。どちらにししろ空き巣の俺達には芳しくない報告だ。

「わかった。お前も早く逃げろ。その女に見つかるなよ」

通話を切る。平静を保とうとするが自分の気持ちを押さえつけられない。名状しがたい恐怖、サイアク。

「どうしました、杜さん？」

「まずいことになった。オオクボさんが近くまで来てる」

言いながら廊下を駆け抜ける。ドアは元通り鍵をかける余裕はなく、開け放たれたまま後にする。

「どういことです、それ！ 予定と違うじゃないですか」

「イレギュラーだ。大目に見ろ」

マンションの階段を駆け降りながら都瑚さんに連絡。

「都瑚さん。ヤバイことになったんですぐ駆けつけてほしいかも」

当の本人が聞いているか、そこはかとなく不安だが、信じるより他にない。通話を切って携帯電話を握りしめつつ階段を下り終える。エントランスを三〇五号室の廊下よろしく駆け抜けようとした最中、また俺の携帯の着信音が辺りに響き渡った。

液晶に表示された名前は『尾行少年A』。

この時点での連絡。いい報告ではない。

立ち止まって深呼吸。来るなら来いよマジで死の宣告。通話ボタンを押してゆっくりと携帯電話を右耳にあてた。

「————社さん、手遅れだ。もう女がマンションに入る」

＊

1. 今日のバイト / 3

脅威が、見える。

正面玄関に佇立するオオクボさん。その綺麗な容貌もお洒落な着こなしも映像として俺の脳が認識しない。今の俺には黒いマントにでかい鎌を持った、いわゆる死神にしか見えなかったからだ。

不気味。オオクボさんは一切動こうとしないし、何も言葉を発しない。ただ澄ました表情でこちらをじっと見つめている。虚ろな眼差しは、もう正常な思考をかなぐり捨てちまったことを如実に表現している。

エントランスに人気はなし。こういうのを不幸中の幸いって言うんだろうな。や、俺にとってじゃなくて般ピーにとって。この危機的状况だと、赤の他人なら身代わりにしてしまいたくなる人間失格な衝動に襲われるから。人間、どんなことになっても品性だけは失っちゃいけないよ。

『言葉だけで人を意のままに操る』

もしそれが本当なら、オオクボさんは一步も動かずに俺達を従順な傀儡かいらいとすることが出来る。恐らく、俺達のどちらかが逃げ出そうとすれば躊躇なく言葉を紡ぎ、自我を奪い、生を抑圧する。

だがそれは俺の推測。あるかどうかも分からないトンデモ能力に怖れをなして、むざむざ生還のチャンスを逃すのは馬鹿げてる。

距離は十メートル。このままオオクボさんの真横を抜ければ外には出られる。だが、触れて作用する類の能力だった場合、正面に走り込むのは崖から飛び降りるようなもの。はつきり言って自殺行為

に等しい。

……ま、どっちにしろリスクはある。ここでガタガタ震えているよりは博打打ったほうがまだ生還の可能性はあるわな。要は走りぬけりゃいい。

気懸りなのは、だ。

「……治郎、走れるか？」

明日菜を背負った治郎がいつもの俊足を披露出来るかということだけで……。

「や、社サ……。逃……。ゲ」

「あん？ 何言って」

『社慶太君、黙って動かないように』

響く女の声。固まる俺の体。マジか。今日の俺ってば冴え過ぎ。いや、でもここまでは考えなかった。クソ。

相変わらずオオクボさんはピクリとも動かないし、恐らく聞き心地のよいであろう美声も発していない。

俺の見立ては間違っていなかったらしいが、その前段階が間違っていた。つまりは、俺達の見立てが間違っていたというわけ。

呪いをかけたのは、俺達が救い出したと思っていた少女・佐伯明日菜その人だった。

1. 今日のバイト / 4

*

治郎の背中からヒョイと軽快に飛び降りた明日菜は、でかい毛布をはためかせながらこちらに近づいてくる。さっきまでの、触れたら崩れそうな印象はどこへやら。大した演技力だよ、マジで。

治郎は何が楽しいのか、冷たい床とハグ状態。よかった。俺って比較的救いがあるのな。やっぱり日頃の行いがいいからだろ。うな。でかい縫い針で両足が地面に縫い付けられたような面白い佇立の格好だけ。

明日菜は俺の目の前まで来ると歩を止め、わざとらしい溜め息をついた。

「心外。ここ、仮にも『G件』犯のアジトだよ？ 知ってて来たんだよね、君達。……私って軽く見られてるのかなあ。高校生二人でも十分捕まえられるって」

んなわけねーだろ。こりゃ不可抗力の賜物だったの。

しかしそれは言葉にならず、生唾と一緒に喉奥へ押し込まれる。代わりに口から洩れるのは、ストローみたいな細かい空気だけ。

そんな俺の惨めな姿を一瞥して明日菜は憫笑。地獄に落ちろ。

「大変そうだね。私、自分の力を自分で体感したこと無いから分からないの。どう？ 他人の命令に絶対服従しなくちゃいけないって、どんな感じ？」

答えてやろうじゃねえか。胴体そっくり張りぼてにすり替えられた感覚ですよ。マジでサイアク、足なんかピノキオも真っ青な棒っ

ぶり。つーかそういう経験は社会のヒエラルキーに組み込まれれば何度もあるから余計なおせっかいだったの。

「ああ、そか。答えられないんだっけ。ごめんごめん、今のナシ」

ふざけんな！

……って思い切り叫びたい。この、沸々と湧き上がる反抗の意思と反論の台詞を吐き出したい。いつもは煩わしく思う言葉ってやつが、今日ほど恋しく思える日は、俺の人生、後にも先にもきつと無いな。失って初めて気付く大切さ？ 治郎の奴、余計なことを。

自らの言葉だけで絶対服従するいたいけな少年の無様な姿に自尊心をくすぐられたのか、明日菜は不敵な笑みを俺に向ける。

「ああ、楽しいな。言う事をきかせるってなんて快感なんだろう。君には理解出来ないよね。道行く人がね、みーんな私の思い通りに動くのよ。ううん、人だけじゃない。だって人を自由自在に操れるのなら、この国、世界すら私の思い通りに出来るの！ ねえ、すごいでしょ？」

誇大妄想狂の小娘が。世間を甘く見るな。

「誰もが羨む、求める力を私は持っている。そして誰も私に逆らえない、私を拒絶出来ない。ふふ、ふふふふ……」

明日菜は不気味な笑いを囁み殺していた。

狂っている。強大な力はある人を変えようと言うが、まさにその格好の例証が目の前で肩を震わせ狂喜している。俺は全身を這い回る悪寒

を感じずにはいられない。冷気だけでなく、明日菜の放つ狂気、そして殺気に、体の震えが止まらない。

怖れ。そう、これは生き物に備わる根源的な恐怖。得体の知れないもの、未知の世界、想像のつかない行動に対する原初の感情だ。それ故に、身体は意志を受け付けず、機械のように黙々と蠕動を継続するだけだった。

「うふふ、そう、いい事を教えてあげる。典司様は仰ったの。私の言葉は音ではなく鎖で出来ているんですって。だからみんなの自由を縛る事が出来る。けれどね、本来、この言霊の力はそういう用途じゃないの。暗愚なる者、秩序を乱す壊乱者を、冥府の鎖に繋ぎ止める。その役割を担うのが私の言霊という鎖」

俺を見下す明日菜の酷薄な眼差しに、一際、心臓が高鳴った。まるで警鐘を鳴らすかのように。

『さあ、この二人を殺しなさい』

またも響く明日菜の声。その合図に反応したのは、今まで微動だにしなかったあのオオクボさん。どこぞのブランド物の小さなバッグから、電灯を照り返して眩暈がするほどに輝く果物ナイフを取り出し、狂ったような足取りでこちらに近づいてくる。

「君達はいろいろ知り過ぎちゃった。そして私の平穏を阻害した。もう監禁なんて生温い制裁じゃ済まさない」

待て待て。これはかなりまずい。

声も出せなきや足も動かない。

動け動け動け！

ヤバイ、オオクボ容赦ねえ。一步一步、確実に距離を詰めやがる。クソ！ クソクソクソクソツ！

こんなところで死ぬのか俺。ふざけんなよ、おい！
必死に足掻こうとも、実感もなく成果もない。絶望感が一層鬱積しやがる。内心反抗しながら、けれども何の抵抗も出来ずに死んでいく。

犬死に。それは卑小な生よりおぞましい。

そんな結末を否定したい。無様だろうが救いのない死を拒絶したい。けれども身体は一向に言う事をきかない。

刻一刻と眼前に迫り来るナイフ。その、吐き気がする程眩しい刃の光沢が眼球を冒す。

そしてフェイドアウト。

……ああ、ダメだ。俺、死んだ。

グチャ、と。

不自然に肉が裁断される音が、気味悪いほど鼓膜にねっとり残った。

1. 今日のバイト / 5

何かの感触で眼が覚めた。

ついさっきの恐怖体験が、もう悪夢となって逆襲してきやがったらしい。どでかいのに繊細な柔らかさを持つソファから体を起こせば、そこは夢の世界とは打って変わって、明るい光に包まれた馴染みのある豪華な部屋だった。

視界に入るのは暖炉にソファーに大理石の机。夢が夢だっただけにその見慣れた光景に少し安堵する。

カーテンの開けられた窓を見ると、どうやら雪が降り始めたらしい。あれからどれくらいの時間が経ったのか。少し暗くはなっているものの、今が何時かを推測するのは難しかった。

冬真っ只中だったのに額からは水滴が垂れてくる。というかひどい濡れようだった。体の水分のほとんどが放出されたんじゃないかと不安になるくらい。どうやら悪夢の攻撃は俺の硝子のハートにクリティカルヒットしたようだ。

「……冷や汗、ね。俺ってホント、メンタル弱いんだな」

「いや、それは俺がぶっかけた水です」

「地獄に堕ちろ」

覚醒直後だったのに治郎のボケに付き合ってやる。目覚めた瞬間から予想していた展開ではあるが、コイツには俺に対する気遣いの気持ちというものがまるで皆無らしい。というかさっきまでへばっ

ていたはずの治郎は、涼しい表情でソファアの横手に座っていやがった。

「何だよ、社さんが見苦しい姿でうなされてたから親切心でやってやったのに」

「余計なお世話だバーカ。ってか、お前もう平気なの？」

言いながらハンカチで顔を拭う。治郎め、ふざけたことを。服もソファアもびしょ濡れじゃねえか。

「大丈夫ですよ、後遺症じゃなくてただの疲労だったみたいですから。小一時間も眠ったら全快でした」

「そうかい。そりゃ残念だ」

もちろん本心からの一言。

「慶太くん。終わったらそのハンカチ貸してくれる？ 紅茶こぼしちゃった」

暖炉前のテーブルから都瑚さんの小気味いいソプラノが聞こえてくる。そのあまりの日常さに力が抜ける。さっきまでの鬼気迫る表情はどこへやら。俺達を助けてくれた命の恩人兼俺達を死にそうな目に遭わせた張本人の超能力者は、何とも呑気な事を口にしていた。

なとりみやこ
名執都瑚。

女性の中では長身のうちに入る見かけを有し、整った顔立ちに切れ長の眼、色白でスリーサイズも平均以上を軽く上回る、一言で言うとうと美人である。

能天気というか呑気と言うか、ぶっ飛んだ樂觀主義を持つ変人だが、基本的には気さくで優しい二十六歳、独身。俺が知り得る都瑚さんの情報はそんなものだ。ああ、あと自称超能力者。ちなみにデンプアさんじゃない。

こういう謎のある人間との出会いってのはちょっと普通とは違うものだが、例に漏れず都瑚さんとの邂逅もこれまたちょっと特殊だった。逃げる俺、迫りくる狼男、助けに入る黒髪の美女なんて、どこの映画の話だよって自分でも突っ込みたくなる。

そんな出会いから二カ月ほどたった現在では、治郎と一緒にこうして都瑚さんの家にまで屯出来るくらい打ち解け合ったわけだが。

ハンカチを渡すと、都瑚さんは緩慢な動作でテーブルを拭く。それから思い出したように引き出しを物色し始めた。

「さてさて、慶太君も起きたことだし。二人とも。はい、日当金」

都瑚さんはお年玉をくれる親戚みたいな表情で茶封筒を二つ俺達に差し出す。

都合五時間の張り込みに人間越えちゃった人型との対峙、死闘。寒いわ退屈だわ、オマケに危うく命かなぐり捨てちまう瞬間まであるものの、この日当五万は魅力的なバイトなのである。危機的状況になってもお助けキャラが理不尽な強さなので、そこらへんも心配ない。

特殊な仕事を持つ都瑚さんのもとで、これまた特殊な俺達はアルバイトなんかをしていた。別に自慢とか驕りとかじゃなくて、俺達は一般人と少し違う人間だったりする。社会から隔絶される種類の人間だったりする。俺はちょっと特殊な病氣、治郎も同種の怪我を背負う苦勞人なのだ。その手のことに詳しい都瑚さんに社会復帰治療をお願いし、だがただ診てもらっただけじゃ暇だったんで都瑚さん

の仕事を手伝い始めたわけである。今じゃ休日ほとんど都瑚さんのところでアルバイト漬け。さっきの張り込みみたいなことを懲りずに行っていた。

「今回は危うく二人を見殺しにするところだったわ。丁度シャワーの後だったからよかったけど、もう少し早かったらあの伝言は聞いてなかったわね。私、電話嫌いだし」

都瑚さんはさらっと恐ろしいことを口走る。

「定時連絡しろって言ったのは都瑚さんでしょうが。ちゃんと聞いてくださいよ」

「ちょっと試してみたかっただけだったのよ。カッコいいじゃない、逐一私に報告しろって、なんだか探偵事務所のボスみたいで」

「というより、実際は空き巣集団の頭領じゃないですか？ 俺達ほんとに空き巣状態だったし」

「いや、だから立派な空き巣だったから」

*

1. 今日のバイト / 6

「———なんだ、留守電かよ。あっちからかけといて勝手な女だな。じゃあ、どうすっかなあ……。えーと、七時に駅で待ち合わせな。都合悪かったら連絡してくれ。んじゃ」

踏む度に沈み込む赤い絨毯。白い壁には金の装飾。部屋の隅には真新しいグランドピアノ。部屋に響くチープな機械音。

上品な造りのこの洋間には似つかわしくないポップな鳩時計の文字盤は、既に六時を示していた。理子との待ち合わせまであと一時間。少し余裕もあるので誘拐事件の帰結を聞いてみようと思った。

「ところで都瑚さん」

携帯を閉じて視線を向ければ、都瑚さんは入れ直した紅茶をふうふうしていた。アーガイル柄のニットセーターに長めのスカートは地味な色でまとめられているのに、美人は何着ても輝いて見えるんだな。理子には到底出来ない出で立ちだ、なんて取り留めもないことを思った。

「何？」

「関わった手前、連続婦女誘拐事件の真相を知りたいんですけど」

「あら、説明してなかったっけ？　———あ、そっか。慶太君はあの後眠っちゃったのか」

「え、じゃあ治郎はもう聞いたのか？」

「いや、杜さんが起きた時にまとめて話してもらおうと思って遠慮しました」

「……そうね。事態も一段落したし話しときましようか。この『G件』の犯人は、監禁場所である『蒼乃フロンティアA』・三〇五号室の住人、大窪華絵おおくぼはなえを犯人と仮定して、地道な張り込みを続けてたのよね」

「そうですけど、見事に裏切られましたね。まさか替え玉だったなんて」

「あれは私の完全ミスだから、ごめんね。で、真犯人は誘拐されたと思われていた佐伯明日菜だったわけだけど、そもそも彼女の起こした『G件』は連続婦女誘拐事件じゃないの」

「どういうことですか、それ？」

「私達は最初からありもしない事件像を追いかけていたってことね。これは連続誘拐なんかじゃない。連続殺人と殺人未遂が同時に起きていた『G件』だったのよ」

言いながら、都瑚さんは部屋の中央にある黒檀製のでかい机から一冊のメモ帳を手にして、ページをパラパラとめくる。恐らく、明日菜から引き出した情報の確認だろう。

「じゃあ佐伯明日菜は、大島由岐を含む失踪者四人を殺害し、他の五人を殺そうとしたってことですか」

「そういうことらしいわ。彼女の能力は慶太君の推測通り。名前を呼び掛けることで相手の存在そのものを支配して指示通りの行動を

強制するものだったわ。だから大島由岐の自殺は他殺ね」

「でも、大島由岐以外の他の三人の被害者は一体どこに……」

治郎の問いはマンションに入った時に感じた疑問でもある。あのマンションには大島由岐以外の人間の死体なんてなかった。なら、明日菜は他の三人をどこで殺害したのか。

「どこって……あのマンションの一室よ？」

当然じゃない、とでも言いたげな都瑚さんの表情に俺達は首を傾げる。

「浴槽の中と冷蔵庫の中。死体はバラバラにして保管してたみたい。調べなかったでしょ？」

「……確かに、首吊り死体があったんで浴槽の中までは見ませんでしたね」

「でも冷蔵庫は社さん、調べたじゃないですか」

「物が溢れすぎていてちゃんと見なかったんだよ。あー、でもよかった、見ずに済んで。トラウマが一つ増えるところだった」

アブナイアブナイ。やっぱり俺って割とツいてる。

話を元に戻すという合図なのか、咳払いを一つしてから、都瑚さんは話を続ける。

「基本的に、言霊系の能力って意識を極限まで集中させないと効果

が希薄になるの。佐伯明日菜はかなりの臆病体質だったみたいね。替え玉を用意するために自ら監禁場所に閉じこもって被害者として偽ったり、人気のない場所に監禁してから殺害するなんて面倒な方法を採用くらいなもの。それに、臆病だったが故に、雑音や警察の捜査に過剰に怯えていたみたい。結果、未遂事件は五件も発生してしまった。けれど、その失敗はあろうことか彼女にいいように働いた」

「……そうか。今までの『G件』では死人が出なかったことがない。明日菜が十件の殺人を全て殺人で片づけていたら、死体が発見されていないとはいえ警察は疑うことなく殺人事件と断定して捜査を進めたはず」

「でも未遂事件が発生してしまったことで誘拐事件との見方は強まったわけですか。『G件』は必ず死亡者が出るっていう先入観が仇になったんですね。犯行声明がダメ押しだったかな」

「ええ、そうして警察は間違った事件像を持って捜査を開始してしまった。周辺の聞き込みと失踪者の搜索、誘拐理由の解読なんかに時間は割かれていった。ある方向に定義づけられた見方はその他の異常を関連付けさせにくくするの。」

異常はそもそも存在した。十人も誘拐する必要性があるか、被害者には女性であるという一点以外共通性がなく動機が推し量れないし、要求のない犯行声明だけが出されている。失踪者の安否は不明瞭。ほら、この事実だけで容易にシリアルキラーによる殺人の可能性を想起出来るでしょう？ でも、一度定めた『誘拐事件』という枠組みにそぐわないこれらの異常は、『G件』犯の異常性という形で無視されてしまった。そして、この殺人は一月もの長期間続き、その間犠牲者は増加の一途をたどったというわけ」

それがこの『G件』の真相。実行者である佐伯明日菜も含めて、みんなこの『G件』そのものに振り回されていたってことか。

「現象が個人の行動を規定する、ね。『G件』なんてデタラメなものに理論武装で対抗なんか出来ないってことだよな」

「ちなみに、そのデタラメな『G件』の動機は何だったんです？」

治郎の問いに、都瑚さんは肩をすくめる。

「怨恨、といっても逆恨みね。女性そのものに憎しみを抱いているらしいわ。自分以外の女の実在は許せないって。そういう高慢ちきな女の子よ。いろいろとかわいそうな事情はあったみたいだけど」

「……おっかない女」

治郎はドン引きらしい。俺も似たような感想だが。

都瑚さんが話さないってことは、どうせ深い事情があるんだろう。『G件』犯のそんな人間らしいコトなんて知りたくもない。知ったところで力に負けた犯罪者に同情なんて出来ないから。

都瑚さんの話はまだ終わっていないかったらしい。でも、と付け加えて再開する。

「本当に怖いのは、そんな馬鹿馬鹿しい理想を、普段なら口に出すことさえ憚られる幼稚な絵空事を、強大な力を得たことで実現出来ると思ってしまう人間の心の弱さよね。そうやって権力にとらわれた結果、大事なものを失っていくというのは歴史が証明しているでしょうに。……まあ知識では知っていても、人個人の心は不連続だから過ちは繰り返されるんだけど」

都瑚さんはアハハ、なんて自嘲じみた笑みをこぼす。何か悲しい経験でもあるのか、気にはなるがあれこれ詮索するのは俺の趣味じゃないんで気にしないことにした。第一、この人には謎が多すぎるんで、いきなりヘヴィーな設定話されてもこっちは処理しきれないだろうし。

「ま、何はともあれ、これで一件落着いてことですかね。佐伯明日菜も警察に引き渡したし、大窪華絵も命に別条なかったし、俺は生きてるし杜さんは昏睡したし」

「お前……とっ。そういえばさ、ずっと気になってたんだけど、何で明日菜は俺とお前の名前を知っていたんだ？ 名前さえ知られていなかったらそもそも俺が昏睡するような目に遭うことなかったじやねえか」

「俺が知るわけねえでしょうが。あ、俺、クラスの奴とボーリングに行く約束あるんでこれで失礼しまーす」

そそくさと部屋を出ていく治郎。……実に怪しい。あの社交性ゼロの無愛想な奴がクラスの友達とボーリング？ ないない。嘘がまる分かりだぞ。

「都瑚さん。明日菜が俺と治郎の名前を知っていた理由ってわかります？」

「ん、ええ。……ああ、しまった。治郎君に返すの忘れてた」

苦笑する都瑚さん。どうしよう、言っていないのかなあと呟きながらメモ帳としばしにらめっこする。

「んああ、仕方ない。慶太君と治郎君の友情を信じて教えてあげましょう。何故佐伯明日菜が君達の名前を知っていたか。それは単純明快。あの時、コレを治郎君が落としてしまったから」

そう言っ、都さんがポケットから取り出したのは俺と治郎の学生証だった。

あの野郎……。いつの間にか俺の学生証くすねてやがったな。じやなきや学校のロッカーに入れっぱの学生証がここにあるわけが無い。よりにもよってあの時に落とすなんて不幸な奴。いや、それは俺か。

大方何に使おうとしてたのかは見当つくんで、明日会ったら一発ぶん殴ってやる。

頃合いかとみて携帯の時刻を確認すれば七時二十分前。ここから駅までは十五分弱だし、そろそろお暇するか。

「じゃあ、俺も帰ろうかな。また来週来ます。どうせその頃にはまた新しい『G件』が起きているだろうし」

「あ、ちょっと待って慶太君」

何ですか、と振り返れば白い小さな紙袋を投げて寄越された。中身はかなり軽い。

「忘れ物。これから夜になるでしょう？ 一週間分入ってるから、ちゃんと朝昼晩二錠ずつ飲むのよ」

——ああ、そういえば。何でコレのことを忘れてたんだろう。俺にとっては一番重要な代物じゃないか。

「ありがとうございます。今日はコレ、効果覲面でしたよ。それじや」

＊

1. 今日のバイト / 7

重厚な造りのドアを押し開けて外に出ると、既に雪は止んで黒い雲の合間からいくつか星が見えるようになっていた。

市の郊外にある小高い丘陵、そこにひっそりと在る古風な洋館はかなり不気味でいやでも目立つ。この辺りの小学生の間では『お化け屋敷』なんてありきたりなあだ名をつけられていたりもする。でもまあ的外れってわけでもない。住んでるのは超能力者だし、人知を超えてるっていう意味では似てなくもない。

その都瑚さんの自宅から、駅前的大通りまで出た。この時間帯は帰宅するサラリーマンや学生が多くて息が詰まりそうになる。

人の波を押しわけ、やっとのことで駅前広場まで辿り着く。駅ビルの大型スクリーンが表示する時刻は七時二分前。突っ立って待つのは疲れるからベンチで落ち着くことにした。少し雪を被っていたが、まあ問題はない。コートが少し濡れるだけだし。

駅前広場、いつもの場所、とだけのメールを理子に送信しとく。あとは勝手に見つけてくれるだろう。

辺りを見回せば、ダンスの練習に勤しんでる奴らや缶ビール片手に休憩する企業戦士、ドロップアウトした学生集団など、ユニークな連中がそこかしこに点在していた。

目の前には派手に着飾った女二人。駅の入り口一点を食い入るように見つめる姿は肉食獣に似てる。多分妖しげな店の出張客引きだろう。ここじゃいかがわしい店なんてわんさかあるから。ちなみに、男を食おうとしているという意味では肉食獣といっても差し控えないだろうな、うん。

街灯の光が届かない広場の隅には、クスリでハイになった男女が奇声を上げつつ絡み合ってる。こっちはまさにケダモノ。生物の授業で見た猫の交尾じみている。

これが蒼乃の街の日常。夜が深くなればなるほど狂気性はどんどん増していく。自分の街ながら酷いところだ。キッズギャングの少年犯罪は多いし、おまけに今じゃ『G件』の巣窟。本当はここ、地獄なんじゃねえのって真面目に考えるときがある。

この街は、一度大戦で焼け野原にされてから復活したらしいし、何か憑いたまま還ってきちゃったのかも。……最近じゃそういうフアンタジーな発想に違和感を持たなくなっちゃったなあ。現実と感覚がズレ始めているのは自分でもどうかと思ったりする。激しく自己嫌悪だ。

そんな取り留めのないことを考えていると、突然目の前に色とりどりの花束が指し出された。鮮やかな色調と花特有の匂いがあまりにもこの場所に不釣り合いでちょっと目眩に襲われる。

「お花は興味ありませんか？」

そして聞き覚えのある若い女の声が続く。

「バイトの延長か？ 何度も言うけど興味ないな。それより、寒いから早く移動しようぜ」

「あ……そっかそっか。ケイちゃんは花より私に興味がある、と」

「言ってねえだろそんなこと」

軽い足取りでひよい、と理子が目の前に現れた。芝居じみた登場

と真っ白いコート姿が、コイツには似つかわしくない雪の妖精を連想させた。疲れてるな、俺。

「もう照れ屋さんなんだから。正直になれって」

疲れているところに理子の態度は追い打ちをかける。あーウザりたい。面倒なんで無視することにした。広場を出るべく一人歩き始める。

「あれ？ ケイちゃん、どこ行くの？」

「ファミレス。喉乾いたし」

「だったらさ、ちょっと歩くけど駄ビルの喫茶店行こ。飲み物奢るから」

理子から予想だになかった発言が飛び出して、不覚にも面喰らってしまう。

「え、何、どうしたの？」

「……なんか、お前が殊勝な態度だと裏がありそうで怖いな」

何せ俺に勘定を払わせるために、わざと財布を忘れるくらいの狡猾な女だ。用心するに越したことはない。

「えー、ないよ。全然ない」

「前科持ちが簡単に信用されると思うなよ」

「ひどいなあケイちゃん！　それはひどいよ」

ヒドイヒドイ、と駄々をこねる赤ん坊みたいに理子は抗議する。

……………。

「……………わーたよ！　その喫茶店にする」

収拾がつきそうになかったからこっちが折れることにした。口喧嘩って土俵じゃ女には勝てないってのは重々承知してる。

やたっ、なんて嬉しがる理子。切り替えの早い奴。

「じゃあハイ、これ持ってね」

そう言って理子が手渡したのはさっきの花束と、どこから持ってきたのか、でかいビニール袋に入った鉢植え四つ。これは何だ、という俺の視線に理子は満面の笑みを浮かべる。

「最後の配達。喫茶店の隣のお店だからついでに一緒に届けようね？」

＊

クラスメイトの仲原理子なかはらりことは、高校一年の頃からの付き合いだ。よく分からないまま打ち解け合い、こうしてしょっちゅう馬鹿をやり合ってる。男女の仲を噂されることもしばしばだが断じて否。男受けするツラと見てくれなのは認めるけれど、性格に難があり過ぎてちょっとカバーしきれない。

人柄は飄々として未だにつかみ辛い。でも基本、テンション高めであつたさつたく、自由闊達。たまに恐ろしく計算高く、人に不幸をまき散らす。俺は人間界に昇ってきた悪魔じゃねえかと踏んでいる。

その悪魔女の術中に見事にはまっちゃった俺。クソ重い鉢植えを配達させられ、無駄に高い喫茶店のコーヒーでやっと一息つくことが出来た。

こざっぱりした店内は広くもなく、かといって狭くもない。時間が時間だから多くの客で賑わっていた。それでもやかましくないってのはこの手の店の長所だろう。静かな場所がお気に入り俺としては歓迎すべき店である。

「だらしないなあケイちゃん。それぐらいでへばっちゃうなんて。あの鉢植え、店長なんか表情一つ変えずにで持ってきてくれたんだよ？」

体力有り余ってます、みたいな笑顔で、対面でメロンソーダを飲む理子。そうか、広場まで運ばされたのはバイト先の店長か、お気の毒。大方、安請け合いたしたのは俺をアテにしたからだな。でなきゃこの女がこんな体力仕事をオーケーするわけない。

「いや、発言おかしいから。まずは劳いの言葉と報酬で俺のささくれ立った心を癒しなさい」

「御苦労さま！ お礼に今日は朝まで一緒にいてあげるからね」

「やっぱ却下。それ、下手なホラーより恐ろしい」

「あー、そうやって乙女の純情を傷つけるー。そんなんだからケイちゃんはモテないんだ」

「余計なお世話だバーカ。あ、すいませんお姉さん。水、もう一杯

もらえます?」

グラスに水を注いでもらってから、都瑚さん特製の薬を服用する。……あー、いつ飲んでもこの味慣れねえ。コーヒーを飲み干して味をリセット。これで今夜は心置きなく眠れるな、うん。

「ケイちゃん、また風邪?　ほんと身体弱いよね」

風邪薬と見たか、理子は呆れ顔で俺の虚弱体質をなじる。

「おーいコラ勝手に決めつけんな。俺が年がら年中風邪ごときに負けてると思うなよ。これはアレだ。サプリメントだったの」

「へえ、そうなんだ。そういえばいつも階段で息切らしてるもんね。鉄分不足?」

「あれは鉄分不足っつーか……運動不足?」

「カッコわるーい。私、階段は二段飛ばしで最上階まで昇れるようなスポーツマンタイプが理想なんだけどなあ」

「簡単に手が届きそうなスポーツマンだな。というか、お前の好みは聞いてない」

「そうだ!　ねえケイちゃん!　髪、染め直したんだけど、どう?」

何をどう思いついたのか、脈絡のない話題を振ってきやがる。理子は、赤味のないちよつと暗めの金髪を持ちあげて感想を求める。

「どうって……。別に色ムラなんてないぞ」

「そーゆーことじゃなくて。似合ってるかどうかだよ」

「前から同じ髪色だろーが。何回同じ質問繰り返すんだお前」

「あーアウト！ 女の子が容姿のことで質問したらちゃんと答えな
いといけないんだよ！？ 私じゃなかったらケイちゃん、完全に好
感度落としてるからね」

ムーツ、とふくれる理子。はいはい、と軽くあしらってグラスの
水に手をつけようとしたら、隣の席から『G件』なんて単語が聞こ
えてきやがった。せっかく数時間前の悪夢を忘れかけてたのに、と
んだ伏兵がいたもんだ。おかげでまあた思い出しちゃった、あの臨
死体験。脳裏にはナイフが振り下ろされる瞬間がグルグル繰り返さ
れてる。マジでサイアク。

「……………そういえばさ、今回の『G件』って、犯人逮捕されたん
だよね」

理子も聞き洩らさなかったらしい。この街の住人なら気になって
当然。『G件』の二文字には過剰に敏感になっちまってるんだよな。

「ああ、そーだな。つーか、もう報道されたんだ」

警察も事後処理だけは手早い。捜査は一カ月の間、何の進展もな
かったっていうのに。

「さっき店長さんが言ってるさ。これで二、三日は夜道もそんなに
危なくないねって」

——ああ、その言葉は、もうすぐ襲ってくるだろう次の惨劇を予感している。

怪奇事件『G件』が初めて世間に存在を知らしめてからもう四月。誰もが既に弁えてる。『G件』は終らない。もうすぐ、次の『G件』で不幸な誰かが死ぬってことを。

＊

1. 今日のバイト / 8

腹も減ったんで良心的な価格のBLTサンドを注文する。夕飯はパサパサなバンズに肉を挟んだジャンクフードと決めていたが、買っていくのも面倒なんでここで軽く済ますことにした。

「へー。今日のバイトも大変だったんだね」

今日一日の大まかな内容を漫ろに聞いていた理子は、パクパクとショートケーキを削りながら、やはり漫ろに相槌を打った。適当な態度はいつものことだからともかく、生クリームを生理的に受けつけない俺としては信じられねえ光景が繰り広げられている。

「大変っつーか……単に疲れた。目まぐるしい状況の変化についていけない」

サイアクついでに思い返せば、なんてデタラメな一日だ。遊園地のアトラクションを速足で全て制覇した感覚。でも、遊園地のアトラクションでさえここまでシチュエーションに富んだものってないんじゃないかと思う。

「あ、私も今日のバイトはちょっとしんどかったかな。いつもより声をかけてくる男の人が多くて」

「ハイハイ、そういう嘘はいらないから」

「嘘じゃないもん！ ケイちゃん知らないでしょ？ 私ってけっこうモテるんだからね」

知ってる。

俺が見かけるのはほとんどが高校の連中だが、コイツに想いを寄せる男子は結構多い。どいつもコイツも頭がおかしいのか、こんな扱いが面倒くさい女に進んで自ら近づいてる。見た目だけならそこら辺にも同じようなのがちよつとは生息してるってのに。

「でもモテ過ぎて困っちゃうこともあってさー。この前もしつこい男の子がいて。何度も断わってるのに追いかけてくるんだよ？　ねえねえケイちゃん、どうにかしてよー」

「どうにかってどうすりゃいいんだ？　闇討ちでもすればいいのか？」

「彼氏になってくださーい。五年間ぐらい」

「パス。それなんて拷問？」

「ヒドイなあ、美少女に言い寄られてるんだからちよつとは動揺しなっ」

「どこにいるんだ、その美少女とやらは」

「目の前、金髪に色白の美少女あり」

「悪いな、俺、裸眼視力0.1だからよく見えないんだ」

それは事実。

でもまたもムーツ、と膨れる理子。怒りの表現なのか悲しみの象徴なのか判断付かない微妙な表情してて、ちよつと笑える。

「でも本当に困ってるんだよ。どうにか出来ない？」

「俺がメンチ切って出て行ったら余計にややこしくなるだろうーが」

「あー、そっか……」

「というか、何でそこまでゴタゴタしてんだよ？ 最初から断ってたんだろ？」

「……えっと、男の子がさ、私と付き合いたいがために彼女を捨ててきちゃったらしくて。後には退けない、みたいな？ そういう気構え持っちゃってて」

「……モテる奴もいろいろ大変だな。まあお前が必要以上に男受けする面だからいけない。自業自得^{ツラ}」

「ケイちゃん薄情。ストーカー殺人が起きたら呪ってやる」

「そこまでの事態になったら助けてやるよ」

「……かそこまですらなくても一応話だけは明日にでも聞いてやろう。『G件』のおかげで神経過敏になってて、こんな小さい出来事でも気になってしょうがない。どんな奴でも事件を起こす可能性があるわけだし。」

「そうだよなー。ケイちゃんは私が大事だもんねー」

「……こうまで言える自信はどこから出てくるのか、厚かましいにも程があるな。いちいち指摘してさらにコイツをおもしろがらせるのも癪なんで放置することにした。」

丁度BLTサンドも来たから小休止。今は熱量補給に専念したい。

「ところで。ケイちゃんはさあ、好きな人とかいるの？」

だがそんなささやかな願いはこの女に通用するワケもなく。理子は唐突にワケ分からない質問を投げかけてくる。

「何だよ、さっきの話ならパスだって」

「違う違う、純粹な好奇心。ケイちゃん、身体はひ弱君だけど、見た目はそれなりなんだから付き合おうと思えば誰とでも付き合えるでしょ？」

「俺はそんな節操なしじゃない」

「あ、じゃあやっぱり好きな人がいるんだ」

理子の顔にはワクワク、なんて言葉が背景に出てそうな表情が浮かべられている。そんなこと聞いて何がおもしろいんだかさっぱりだ。誰が誰を好きだなんて下世話な話を聞いたところで、そんなの毎日見かける雲の形ぐらい印象に残らないっていうのに。

「とりあえず、『好き』だなんて薄っぺらい感情ぶつける相手は今のところいねえよ」

「えー、そんなんじゃないよー？」

「アホか。恋なんて金も時間もかかる上に不安定ときてる。果敢に挑戦する奴の心理が分からん。第一、恋愛事でがんじがらめになっ

てるお前よりマシだったの」

確かに、なんてケラケラ笑う理子。

「でも仕方ないよ。苦しいって分かってても、人を好きになるのは止められないもん。だって、恋は理屈じゃないからね。衝動だよ、衝動」

何か遠いものを見つめるような虚ろな目をして、飲みかけのメロソードをストローでくるくる回している。何だか理子らしからぬ姿でちよっと不気味だ。

「————お前はいるの？　好きな奴」

サンドを食べ切ってグラスの水を飲み干してから、大丈夫かって意味も込めてどうでもいいことを聞いてみる。

「……ん————ナイシヨ」

「なんだそりゃ」

「だって言ったら、ケイちゃん泣いちゃうでしょ？」

真顔でふざけたことをぬかしやがる。

「泣かねえよ。ってか、何で俺が泣くんだよ」

「いーからいーから。聞いたら絶対泣くよ。うん、絶対」

ワケわかんねえ。理子の煙に巻く発言はいつものことなんで気に

しないことにした。

唯一、理子の顔にいつもの能天気な笑顔がなくて、絵画の中の人物よりしく悩ましげな微笑が浮かべられていたことが、気になると言えば気になった。

＊

喫茶店を出てもう一度駅前広場まで移動する。

「じゃあケイちゃん、また明日学校でね」

「理子」

うん？ と振り返る。その表情はいつもと同じで少し安心した。バカはバカなりに悩みを持ってるもんだよな。詮索は禁物。頼られたら助けてやる、ぐらいのスタンスが円滑な人間関係には丁度いい。

「明日、話だけならちゃんと聞いてやるよ」

「アハハ、そう言うと思った。やっぱりケイちゃんは優しいな」

「うるせー、とつとと帰りやがれ」

「わかったわかった。今日はありがとね」

バイバーイ、と手を振って人の波に消える理子。うるさいのがいなくなっってやっと一息つきつつ、家路につく。今日も今日とてアイツのどうでもいい世間話に付き合わされただけだったな。だが本当の戦いはここから。これから帰って期末考査の試験勉強。頭痛くな

ってくる。

我が家に着いたのは九時半過ぎ。家の中は真っ暗だった。両親は同僚の弔事に出掛けたきりまだ帰ってきてないらしい。最近多いもんな、教師の自殺って。

二階の自室に上がってデスクトップパソコンの電源を入れる。起動が済むまで時間があるんで、散らかってる部屋を片づけておく。床に散乱した資料はほとんどが今回の『G件』に関するものだから迷わずゴミ箱行き。これだけでもかなり見違える。基本、整理整頓はちゃんとやってあるんでこういうミラクルはよく起こる。

さて、半端な時間なんで試験勉強をする気にはなれないな。やっぱり、スタートはキリがいい時間帯にしたいと思うのが人情。それに、几帳面な俺としては見た目がキレイじゃないのはちょっと不愉快。いや、女の趣味じゃなくて。

じゃあ何をして時間をつぶそうかと考えて、そういえば今日は『G件』専門サイトの定期更新日だと気付いた。目新しい情報の追加はないだろうが、時間的にも閲覧は丁度いい。サイトを開いて、チカチカする文章を上から順に読んでいく。

『G件』とは、二〇〇×年八月から蒼乃市で発生した無差別連続殺人事件の通称で、正式には『グリモワールの典司事件』^{てんし}という。

グリモワールの典司と名乗る愉快犯が一時街中の全放送をジャックし、声明を発表した事件に端を発し、以後猟奇的な無差別連続殺人が多発。事件が事件を呼び、四か月で計二十人の模倣犯、内九人の『G件』犯が逮捕された。被疑者は皆口々に「グリモワール」の名を供述しており、その中でも怪奇的及び凶悪な殺人事件を、特に

『G件』と呼称するようになった。

被害者は三十人を優に超え、内『G件』認定された事件での死亡者は二十二人。そのほとんどが非行常習者や犯罪集団のメンバーである。

被疑者が自供した殺害方法は各々非現実的で、殺人の証拠はほとんどなく、立件は困難を極めるケースが多い。

現時点では単なる模倣犯の姿は消えたが、未だ「グリモワールの典司」の声明に触発された『G件』犯は登場し続けており、今後も犠牲者は増えると予想されている。

これが『G件』の概要。この蒼乃市を恐怖のどん底に突き落としている元凶の骨子だ。一般人の認識ではこの辺りが限界だろう。

だが『G件』にはまだ恐ろしい事実がくっついてる。世間的には認められていないし、俺もつい最近まで半信半疑だったが、都瑚さん曰く『G件』犯は各々異なった異能の力——つまり超能力を使って殺人に及んでいるという。事実、一件目の『G件』は睨まれただけで身体から発火して被害者は焼死。二件目の被害者はかまいたちによって全身バラバラにされてる。

普通、そういう先天的な力ってのは、そうポンポン生まれないらしいのだが、蒼乃の街は異常で大量に、しかも後天的に発現しているそう。そうやって境界超えちゃった人間がこの街で殺人事件を繰り返している。手が届かなくても殺意さえ届けば人を殺せるあたり、ミサイルなんかと大差ない。

当然のことだが、その超能力がどういった経緯で、どういう人間

に発現するかは分からない。明日はお隣さんが『G件』犯になるかもしれないし、俺がそうなる可能性だってなくもない。

恐怖は二倍。殺されるかもしれないという恐怖と殺してしまうかもしれないという恐怖。この街に住む限りその恐れは常に付きまとう。

明確な殺意がなくても殺人を犯さないという自信は誰にもない。何せ誰もが何かしら人の営みに不満を持っているんだから。極論だが解決法はいたって簡単。事柄に関わる人間を殺してしまえばいい。それをしないで平和的に解決しようとするのは、法と倫理が頸木となってギリギリのところであれは綱渡りしているから。

でも都瑚さんの言う通り、人知を超えた力は常識を食い潰し、抑圧された思考を表層に押し上げる。人を傷つける方向性の力なら、たやすく人は人を殺すためにその力を行使する。それが現実だ。

抑圧された感情の解放。『G件』犯の殺人の拠り所であり全ての発端、グリモワールの典司の声明はそれを終始謳う。あまり気分のいいものでもないが、サイトに動画がアップされていたんで再生してみた。

「我はグリモワールの典司。封じられし強大な力を喚起する、知識の墓場を見つめる者。」

魔を孕むけんしやう???が開闔する度に、街には此の世ならざる蛇蝎だかつの如き怪異が跳梁跋扈し、この世の悪を殄滅てんめつせんとその凶爪きやうそうを揮うだろう。

正しき者達よ、怖れる事なかれ。その力は、ただ悪行を断罪する剣なり。

同志よ、我に続け。社会の法という頸木くびきから今解き放たれ、強大であるが故に悪と侮蔑された力を以って真の悪を滅せよ。

これは澎湃ほうはいたる変革の幕開け。ここに、グリモワールの開闔が開始される。

流血淋漓、死屍累々。悪き烏合の衆はその尽くが荼毘だびに伏す。

生の価値すらない蒙昧の百鬼夜行がとこしえに続くというのなら、グリモワールの開闔もまた、未来永劫繰り返されるだろう。

羸弱るいじやく者は去れ。

恐懼きようくの心に興味なし。

望むは、ただ純粹にして強靱な魂の持ち主。

汝の正義を信じるならば我を受け入れよ。

高潔なる意志と決意、そして自身の犠牲をも厭わぬ義人にこそ、魔の力は授けられる。

願いは、ただ背徳という剛剣を以ってこの世の悪を討ち滅ぼすことのみ」

映るのは趣味の悪い、不可解な模様がついた仮面を被る人型、そして人の声ならざるノイズみたいな声。当時、駅ビルの大型スクリーンで俺も一部始終を見届けていた。イカレてるとは思ったが、『悪人を殺せ』なんて信条、前衛的過ぎて信者はゴロゴロいる。結果

はこの通り。現時点で惨劇はいくつも繰り返されてる。まあ、今回の事件は社会的正義の体现ってわけじゃなかったが、抑圧された感情の解放っていう目的は十分達成されてる。グリモワールの典司はほくそ笑んでいるだろうな。ホント、奴こそ地獄に堕ちればいい。

近いうち、必ず『G件』は再発する。もうそれは預言に近い。根拠も論理もないってのに、それを実感してる自分がいる。出来れば止めてやりたいがそれは警察や都瑚さんの領分。無力な俺の本職は高校生なので、当面の問題は一週間後の期末考查である。

気はのらないがやるより他に選択肢はない。パソコンをシャットダウンして、人文系科目の教科書を通学カバンから取り出したけ引っ張り出した。

……まずは風呂に入ってこの殺伐とした気持ちをリセットしよう。今なら思い切って教科書を破り捨てかねないな。

1. 『G件・神隠し』

刃物が、生きた肉にめり込む鈍い音が、薄暗いロビーに落ちてくる。響く肉声は少年の断末魔でなく、愚鈍な痛みに喘ぐ幼い少女のそれだった。

佐伯明日菜の右腕に深々と刺さった細身のナイフは、殺意を浸透させるかのように、ゆっくりと邪魔な血を体外に押し出している。

刺された。

明日菜は、その事実だけで卒倒しそうになる意識をなんとか押さえつけて前方を見据える。

飛来した殺意はマンションの自動ドアの方から。そこにいる誰もが気付かぬうちに扉は開かれており、冬の冷気がロビーに侵食していた。

——否。それは外気によるものでなく、一人間の冷たい感情の露頭。

足音を響かせて近づいてくるは一つの人型。飾り気のない黒いコートと、長く流麗な黒髪をなびかせる長身の女——名執都瑚だった。

明日菜は焦燥に駆られる。もとより極端に気の弱い女である。高校生二人の侵入でさえ彼女の平常心は著しくかき乱されたのに、追い打ちをかけるように次の闖入者。思考はもはやこの女をいち早く消さねばならないと、そのことばかりに腐心していた。

機先を制するなら今。奇襲さえできれば殺すのは容易い。

『目標を変更する。まずはあの女を殺せ』

明日菜は右手に侍る大窪華絵に指令を送る。

彼女の言霊は人の肉体そのものを支配する。血を、筋肉を、体組織全てを支配下において服従させる。例えその身が朽ち果てようとも、死して魂を亡くそうともこちらの命令は絶対に遂行する、従順な肉塊に人を変える力。いかな武器を持つ人間だろうと、死を恐れず死して尚襲いかかる人型に敵うはずもない。

だが目の前の傀儡は命令を行動に移さない。それどころか、まるで糸の切れた人形のようにその場にガクンと倒れ込む。

明日菜はその光景に目を疑った。

———やられた？

状況を問う声が、思わず口から漏れだす。

「無駄よ」

鈴を転がしたかのような澄んだ声音が、明日菜の問いに答えを与える。

「あなたの言霊はきちんと機能しない。痛みで集中力が乱れている

もの。人一倍臆病なあなたじゃ、もう人一人を支配するなんて不可能よ」

——まさか。

嘘だ、と明日菜は頭を振る。

力が使えないことは、それしかアテのない自分はもうここで終わりだということ。なら断じてそれは認められない。認めてしまえば、その先にあるものは有象無象の糾弾、拘禁、制裁。『G件』犯を名乗る以上、もはや人として人間社会に復帰は出来ない。

それは嫌だ。それは苦しい。

負けることへの恐怖が負けを認めない。これは自分の無力を表す凶兆でなく、あの女の仕業なのだと、明日菜は自分に言い聞かせる。

だが彼女は、視界の隅に膝をつく少年の姿を捉えてしまう。言霊によって眼球の動きすら禁じられていた人間が、今こうして自ら脱力し直立の拘束を解いている。

言葉がかからないのではなく、言葉の力が破られた。

その事実、もう十分なくらいに明日菜の心を折ってしまった。

「そ、んな……」

「あなたは知っていたはずよ？ フフ……いや、無意識だったの

かしらね。自らの平常心を保つためだけに、コソコソと殺人に及んでいたのは。わざわざそこまでしないと正常な自我を維持できない弱い人間だってこと、自分じゃ認められていなかったの？」

蔑むかのような小さな笑いを都瑚は漏らす。

お前は単なる臆病者だと、そう罵る女に、だが明日菜はもう憎しみすら抱けない。ゆっくりと崩れ落ちながら、己の手詰まりを絶望的なまでに感じていたのだから。

都瑚は明日菜の間の前で歩みを止める。

「……嫌だ、嫌だ嫌だ嫌だ。負けたくない。償いたくない。償えと言われたくない。見られたくない。怒られたくない。嫌だ。バカにされるのは嫌だ。罵られるのは嫌だ。嫌だ、嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ——！」

声はロビーを震撼させる。もはやその声に力がなくとも、圧倒的な拒絶の意志に周囲のモノがうごめいた。

だが都瑚の心は震わせられない。相も変わらない冷たい表情と感情のない声で、錯乱する明日菜を追いつめる。

「拒絶しても、あなたの末路は変わらない。犯罪者として人の群れの中に放り込まれ、永遠にその罪科を象徴する記号となる。社会集団の法を超えてしまった、見せしめとして」

「ならいっそ殺してよ！ 死ぬのは怖くない。でも人の中に還るのは怖い！ 誰かの無責任な悪意にさらされたくない！」

彼女は人という集団の制裁を恐れていた。背徳者に対する憎悪、問責、蔑み。無責任な負の感情を絶えずぶつけられることは、明日菜にとって死ねと言われているのと等しかったのだ。

佐伯明日菜は人一倍臆病であるが故に、人一倍他人の言葉に敏感だった。自分が他人にどう思われているのか。言葉の内に秘められた意味を推し量る度に明日菜は恐怖していた。

だから周囲と同調することによって自分を隠し、誰かの特別にならないように生きてきた。好きも嫌いも心地悪い。誰からも見向きも干渉もされない、そんな自分の在り方を望んだ。

注目されることは拷問。そして蔑み、憎まれることは彼女にとって死と同じ。故に明日菜は、今ここで殺してくれと都瑚に嘆願する。この静かな人ゴミのない世界で。

都瑚はゆつくりと言葉を紡ぐ。それはまさに死の宣告だった。

「私は——あなたを殺さない」
すくわ

その言葉に、明日菜は愕然とする。

「甘えないで。あなたは人を殺め人倫の境界をまたいだ。人ならざる力で人を殺め、人の境界を越えた。なら、もう人として生きられないし、死ぬこともできない。

果てのない懺悔、贖罪に苦しみなさい。人間として死ぬことが出来ないあなたは、永遠に記号として生かされ続ける。殺人者という記号は魂そのものに烙印を押し、異端者という烙印はあなたの存在

そのものにとって代わる。肉体が朽ち果てるまで痛みにさらされ、死して魂は蔑みと憎しみに苦しむ。

あなたはもう、人らしく死ねないの」

明日菜は滂沱の涙を流す。

「人らしく死ぬのは、人らしく生きた人間の権利。私達の死とは、人として積み上げた人生という名の作品の完成。それを放棄したあなたが、人らしく死ねる道理はないでしょう？

永遠に苦しみ続けなさい。永遠に完成しない人生を引きずって」

都の言葉は、明日菜の心を抉るがごとく突き刺さる。

死ねない。人として死ねない。

今までの自分が、人として生きるために人の中での抑圧に耐えてきた自分が、その甲斐もなく人として死ねない。

なんて酷い結末。

今まで積み上げたものが崩れ落ちる虚しさ、切なさ、やるせなさ。万感交々到り、明日菜の心は次第に摩耗していく。

見える未来に希望はなく。過去に目を向ければ、何故こんなことになってしまったのか、という自問ばかり。そしてその度に思い浮かぶ、夕暮れ時の交差点。燃えるような赤が眼に眩しい、少し暑い日だった。

それまで、少女は群れに自分を隠して生きてきた。決して目立たず、目立とうとせず。それは自分の強みも弱みも曖昧にして生きる

こと。

個性も長所も欠点も特徴も、その人間に「色」をつけてしまう。「色」である以上、好悪の嗜好は人それぞれ。それでは誰かの特別になってしまう。だから少女は「色」を拒絶し、ただ透明であることに努めた。

誰も無色透明な「色」を好きか嫌いかなんて判断しない。判断する必要もない。それは空気と同じ。誰もがそこに在ることを知っているが忘れている「色」。見る人によって自らを変化させる同化の「色」。

だが無色透明は、無色であるが故に「色」に絶えず依存する。「色」のある世界でしか自分は認知されないから、「色」の中に溶け込むしかない。誰からも見向きされたくないのに、誰かがいる世界でないと生きられない。

少女は、ただ懂れていたただけだった。

日々否が応でも強烈に見せつけられる様々な「色」に、自分も「色」があればと夢想するのが辛かった。無色であるが故に、どんな「色」にでもなりえるのではという淡い期待に踊らされる自分が嫌いだっただ。いつだって、自分をさらけ出す気もないのに、自分をさらけ出せる日が来ると思い込む自分と戦うのに疲れていた。

だから、力を得た時、嬉しかった。他人の「色」すら塗りつぶせるほどの強大な「色」が、この不毛な自身との戦いに終止符を打つ。最初はそれだけの思いだったのに、気がつけば同性を殺し続ける自分がいた。今まで見せつけられ続けた「色」に、懂れから憎しみを持つようになってしまっていた。

——だって、愛と憎しみは紙一重だから。

今まで自分を虐げていた奴らに、今度は自分の「色」で塗りつぶしてやろうと、そんな凶悪な復讐心だけが彼女を突き動かすようになった。

それが大きな過ちだった。

それが大きな間違いだったと、何故気がつかなかったのか。

近づくべきじゃなかったのだ。

過ぎた憧憬は、足許を狂わせる。見上げるのは遠すぎて、手を伸ばそうと高く飛び、明日菜は佐伯明日菜という器から零れ落ちてしまった。そして、佐伯明日菜だったモノの思いから遠ざかり、異能力を持つ殺人鬼となってしまった。

——なんて、滑稽。

そう締めくくるのが限界だった。

明日菜は、絶望と後悔に押しつぶされて、遂に意識を失った。

1. 社慶太

*

夢を、見ていた。

カタカタなんて古臭い音を奏でながら映像が映し出されている。

それは一人の少女の誕生から十六の冬までのフィルム映像。どうやら三流監督による、どこぞの人間のドキュメント映画らしい。どういう原理かは分からないが、登場人物の気持ちが流れ込んでくるようだった。

幼稚園に通う頃。まだ他人が、自分を無条件で好いてくれていると、信じて疑わなかった幸福な日々。人より少し賢く、成熟していた少女は、いつだって友達の輪の中心にいた。

小学生の時。いい成績をとって、先生から褒められて、友達に受け入れてもらって、少女はとても嬉しかった。私は愛されている、これからも愛されようと、人よりさらに努力を重ね、人の輪の中で中心になり続けた。

中学生の時。少女は知ってしまった。周りの誰もが、もう自分を無条件に好きでいてはくれないのだということ。

「へえ、すごいじゃん（何だよ、自慢？ ウザいんだよお前）」

いい成績をとれば誰かに妬まれる。

「分かってるよ、そんなこと（テーマに何がわかるんだよ、消えろクソ女）」

正論を言えば誰かに憎まれる。

「それ、似合ってるね（かわいい子ぶんなよ、マジキモい）」

自分を出せば誰かに嫌われる。

言葉に隠される悪意が少女は怖くなって、輪の中心から自分の居場所をなくしてしまった。

高校生になって、少女は人の中に隠れようと努力した。成績も一度真ん中。趣味も髪型も服装も、とりわけ珍しいものはないようにした。誰とも深くかわからないようにした。先生にも友達にも家族にさえも目立たないよう生きる日々。少女は自分を見つけられる時に怯え、苦悩していた。

そして十一月。燃えるような赤い夕陽がビル群に隠れようとしていた夕暮れ時の交差点。

少女は神託を聞いた。力をもらった。皮肉にも、それは彼女を怯えさせ続けた『言葉』の力。少女は殺人を犯す。虐げられ続けた言葉で、今度は他人を虐げた。怖くて逃げだした個性に憧れて、でもいつの間にか憧れは憎しみに変わって、個性なんか消してやろうと思った。

しかし、やはり少女は、恐れ続けた個性に押し潰されて、自分を殺してしまった。

——ああ、これはあの女の歴史。

状況の何故を問う前に、本能的にこれがあの『G件』犯の記憶だと理解した。ありえないことはありえないご時世。どんな超常現象が起きても不思議はない。

フィルムの上映が終わり、視界は重く垂れこめた闇に支配される。もうすぐこの夢が終わることをなんとなく感じ取った。

どうやら、俺とヤツは似ていたようだ。

だからこそ、出会うはずのない俺達は出会ってしまったのかもしれない。異常はいつだって異常を引き寄せるから。

人と関わりたくないのに、人の中で生きている矛盾した生活は、辛い。

でも、俺とお前は、似てるだけの違う種類の人間なんだ。

お前は他人が好きだった。

俺は他人を好きになれなかった。

そんな些細な、けれど決定的な違い。

好きだから理解されたいと思う。好きだから自分と違うものに憧

れる。そして近づきすぎて自分を殺される。

ほら、やっぱり同情なんか出来ない。

結局、お前は自分から死に行ったようなものだから。

人は自分の知ることしか知りはしない。他人の辛さも苦しみも、『言葉』^{りごん}で知るだけで実感はない。だから分かり合えない。共有出来るのは薄っぺらな音声だけだ。

それでも分かってもらおうと思うなら自分が傷つくしかない。お前は、そんな簡単なことを忘れていたんだ。

俺は、お前とは違う。

誰かを好きだなんて感情は、どこにもない。

ココロが壊れていても、ヒトでなくなることはない。

力に負けは、しない。

何故なら――――。

いつだって、この俺を突き動かす感情は、あらゆるものへの『恐怖』だけだから。

2. 崩された日常 / 0

携帯の無機質なアラームで眼が覚めた。

日付は十二月五日の水曜日。死にそうになった日曜日からもう三日。実に平和な日々を満喫中。

カーテンの開け放たれた窓からは、生温かい太陽の光、そしてやかましい小学生の叫び声。……友達呼ぶだけならもうちょい声のトーンを落としやがれ、クソ。

寝覚めは最悪。というか寝不足だな、こりゃ。理子の奴が深夜に電話してきたのがイタイ。例のストーカーまがいの男についてなら対策を考えるとはいったが、天才でも暇人でもない俺がこんな短時間でも何か閃くわけねーだろーが。調子乗ってやがるな、あの女。その後は毎度おなじみのくだらねえ世間話しやがって。おかげでこのヘタレたザマだ。

ベッドから降りて制服に着替える。寒さが体に引っ掛かっている。動きはスゲーぎこちない。誰かに見られたらきっと笑いモンにされてる。

今日も今日とて気が乗らない。ていうか面倒くさい。ていうかモチベーション上がらない。登校に対する倦怠感はいつものことだが、こうまで凶悪だと心が折れそうになる。何とか自分の体と折り合いをつけて一階に降りる。

朝食を摂ろうと居間へ顔を出すと、お袋が通勤の支度を整えているところに行くわした。

「おーいこら少年、寝坊だぞー」

気のなくせにすっかりとこちらの士気を下げてくれる非難の言葉。中年ババアはこちらに一瞥もくれず、テーブルいっぱいの方アイルをカバンに詰め込んでいる。

「世の高校生の半数は敵に回す発言しやがったな。寝坊って、まだ七時だろうが」

「アンタ、共働きの家庭で七時は十分寝坊だっていつも言ってるでしょう。食事の後片付けするこっちの身にもなれっての」

「知るか。俺に実害がないんだから寝坊ではない」

「む、ムカつく……………。まあいいや。朝食は勝手に作って食べなさいよ？　じゃあ　アタシもう出掛けるから戸締りよろしくね」

「あん？　親父は？」

「日直だから早めに出掛けた」

そう一言だけ言い残して、お袋は家を出て行った。

毎朝恒例のハートフルな母子間交流を済ませて意識を覚醒させつつ、何か食えるモンはないかと戸棚を漁ってみる。パン、米、インスタント食品といった炭水化物は何もないらしい。

冷蔵庫も漁ってみる。葉物から何から見事なほどに何もない。

……あんのババア、やりやがったな。勝手に作れって材料が何も

ねえじゃねえか。

肉親にささやかな憎悪を覚えつつ、近くのコンビニで朝食を調達する算段を立てる。早く事を済まさないと通勤者の暴挙で食料が買いつくされるんで、急いで準備を整えて家を出た。

＊

何とか生存競争に勝って戦利品を手に入れつつ、余裕を持って学校に到着した。

校門にさしかかると、【宝裏ほうじょう高等学校生徒会】の腕章を着けた男女の学生数名と教師達が、朝の挨拶運動と称した生徒の身だしなみチェックに勤しんでいる。

ところどころで呼び止められる生徒の中を潜り抜けながら、校舎の玄関である生徒ホールへ。

さて、目先の目的は熱量補給。場所は……今の時間帯なら人気もないだろうし食堂にするかな。

「待ちなさい、社君」

……終わった。俺の熱量補給時間はたった今失われた。

「な、何よその顔。何か嫌なことでもあったの？」

「生徒会長……。なあ、悪いけどアンタに構っていられる体力はこれから手に入れるんで、話なら後にしてくれないか」

「そんな論法通用しないわ。いいからちょっと話を聞きなさい」

コレだよ。うっちゃって食堂に行くことも出来るが、この女は怒らせると性質が悪いんで、いい落とし所が見つかるまでおとなしく聞くしかない。

「へいへい。で、どんな話？」

どうせいつもの小言だろうけど。

「社君、何度も言ってるけど、生徒会室の備品勝手に持ち出さないでよね。この前もノートパソコンが一台行方不明になって大騒ぎだったんだから」

「あー、アレな。黙って持って行って悪かったよ。今度はちゃんと置手紙するから」

「私に許可をとりなさいよ！ 結局黙って持っていく気満々じゃない」

当たり前である。『G件』犯を張り込むために必要なんです、なんて言ったら、絶対コイツ貸してくれない。

「理由さえちゃんとしてれば貸し出すから。もうそういう悪さしないよね」

「無理。でも安心しろ。校則は破るが風紀は乱さないから」

「その発言が矛盾してるのよ。今度私を怒らせたらタダじゃ済まさないわよ。寒い冬空の下で強制労働させるから」

もはや恫喝。悪逆生徒会長の本性見たり。コワイコワイ。

普段からこんな感じの生徒会長ことクラスメイトの藤原梢^{ふじわらこうすけ}。愛称はまんま生徒会長。非行と墮落を許さない正義の人。要するに面倒な種類の女である。ホント、俺の周りって変に手間のかかる奴多いのな。

「スイマセンデシタ。モウシマセン、セイトカイチヨウサマ。じゃ、そゆことで」

「ちょ、待ちなさい！ 何、その誠意を感じられない棒読み。アンタのせいで学校からお咎め食うのは私なんだからね」

「そりゃ役得だな。打たれ強くなるぞ」

「全然反省してないわね社君。いいわ、社君がそういう態度ならペナルティ課してやるんだから。罰としてもう一回生徒会の仕事手伝いなさい」

「ふざけんな。お前んところの従順な部下にやらせろ」

「この前の社君の仕事評判良かったのよ？ データ入力も間違っ
てなかったし何より早かったし」

「派遣社員に頼るんじゃねえ。自前の社員を育成しやがれ。使い捨てに頼ってるといつか足元すくわれるぞ」

現在の日本社会をしてみるがいい。お前の末路がそこにある。

「いいからいいから。二時間労働でチャラにしてあげるから」

「割りに合わねえんだよ、二時間もあんな個室に引きこもれねえつての」

話は平行線のまま。俺は絶対譲らない。あんな狭くて鬱塞とした場所で一人デスクワークなんかしてたら気が滅入ってしょうがない。

先に折れたのは藤原だった。案外あっさりした奴だったらしい。

「……はあ、仕方ない。この話はまた今度にでも」

前言撤回。スゲーしつこい。いい加減あきらめろよ。

「じゃーもう話は終わりだな」

「まだよ、まだ聞きたいことがあるの」

マジかよ。メシの時間がなくなっちまうって。

「社君、まだ仲原理子と付き合ってるの？」

「……それってどっちの意味だ？ 『恋人同士なの？』って意味か、それとも『つるんでるの？』って意味か」

「もちろん、恋人同士なのかってこと」

「おいおいビッグな冗談だな。俺があんな面倒な女と男女関係築くわけないだろ」

「そうなの？ でもいつだって一緒にいるじゃない」

「ストーカーってのは何も男だけの特権じゃないぞ。物好きな女はそういう不毛な行動に手を染めるんだ」

「……どうかしらねえ」

ダメだコイツ。信じてません。

「まあとりあえずその怪談は根も葉もない噂だ。これで満足か？」

「満足かって……何よ、それじゃ私が社君と仲原さんの仲を気にしてたみたいじゃない」

いや、お前から聞いてきたんだからそういうことだろ。

「深読みしないでよね。ただ単純に興味があったから聞いてみただけよ」

「へえ、お前意外に人の恋路とか気になる性質だったんだ」

「いや……気になるってほどでもないんだけど、私だって女だからね。そういう噂は反応してしまうというかなんというか」

言い淀む藤原。

つまりは生徒会長だって普通の人間だってこと。頭はいいし面倒見いいし見た目はそれなりだし、コイツも追われる恋に悩むお年頃とか？ ははは、笑える。

「まあ付き合っていないならそれでもいいんだけど。私が言いたいのは、あの子には気をつけなさいってこと」

「言われるまでもねえよ。気を許したことなんて一度もない」

弱みでも見せようものなら一瞬で付け入られるからな。

「そういうことじゃなくて。何て言ったらいいかなあ……」

よく分からないことでまたも会話が滞る。言わんとしていることがまったくつかめないでこっちもフォローのしようがない。

「——ああ、もう！とにかく、仲原さんとあんまり仲良くしちゃダメよ！？」 素行不良問題児が手を組んだらこちらでも対処しきれないから！ 以上！」

生徒会長、逆ギレ。

何なんだ一体。言うだけ言ってどっかに行っちまいやがった。

生徒会長の多感な内心については推し量れないが、勝手に話を切ってくれたんでラッキー。もうそんなことどうでもいいし、早いとこ食堂に向かいたい。

「やほー。ケイちゃんおはよー！」

後ろからかけられる悪魔の声。そして肩にかかる疫病神の手。今日の俺は心底運がない。いや、悪運はあるのか。

「あれ？ どうしたのその顔。アハハ、すごく変」

「人様の面貌をバカにするんじゃない。お前ホント空気読めないのな。スゲーよ、怖いものなしだよな」

珍しく神妙な顔をする理子。そこまで取り乱してるのか、俺。

「……本気でどうしたの？ 何か嫌なことでもあった？」

「藤原と同じ質問しやがって。お前らには俺に対する罪意識が希薄なのか。まあ丁度いい。今日の俺の寝不足とさっきの時間のロスの半分はお前に責任がある。よって、まず俺に謝れ」

「えー何でよ。何かあったの？」

「黙りなさい。お前が謝れば俺の気が済むから言う通りにしろ」

「……ごめん、なさい？」

疑問形なのが少し納得いかないがまあ及第点だ。これ以上時間を食うのも馬鹿らしいんでさっさと移動する。

「理子、もう俺は何が何でも食堂に行く。あしらうのも面倒だからついてきたいなら勝手についてこい」

「あ、朝ご飯まだなんだ？ じゃあ私のお弁当少しあげるよ。今ダイエット中だから」

「……な、何？ そういうことは早く言いなさい。知ってたらもう少し優しく接してやったのに」

「そういう打算的な優しさはいらない」

わがままな奴。まあこちらは食料が増えたから文句はない。

「あーでも代わりに飲み物奢ってね。自販のでもいいから」

「ふざけんな。それじゃプラスマイナスゼロじゃねえか」

いや、よく考えれば微妙にこちらがマイナスなのでは。

「いいじゃん。乙女の手作り弁当を食べられるんだから。その経験はプライスレスだよ」

「単なる女子の科学実験だろうが……って。え、何、お前料理出来たの？」

「あれ、言ってなかったっけ？ おかしいなあ。ケイちゃんにだけは教えてたと思ってたのに。私の得意分野なんだよ、料理」

人は見かけに寄らないとはこのこと。いや、誰でも一つは取り柄がある、か。

「あーケイちゃん、今ものすごく失礼なこと考えてたでしょ？」

簡単にバレてた。

「いや、感心してただけだ。スゲーなお前、けっこう家庭的じゃん」

「絶対嘘。ケイちゃんはそんな素直なカワイイ奴じゃない」

「はいはいそうですよ。つーかそんなことはどうでもいい。時間がなくなるから、とっとと食堂行くぞ」

「あーはぐらかしたー。ちゃんと誠心誠意真心込めて褒めてよね」

理子はしつこく食い下がってきやがる。何が何でも褒めなきゃならんのか。女ってマジで扱い困る。

＊

授業をつつがなくこなして昼休みを迎えた。

治郎に昼メシの調達を任せて、俺は一人屋上への階段を緩慢に上る。

天気は突き抜けるような青空。太陽も燦々と輝いてる。が、屋上は冷たい風が吹き込み、まったく心は晴れ晴れとしない。

微妙にテンションを落としながら、もはや定位置となったベンチに陣取って食料の到着を待った。

＊

「杜さんは焼きそばパンとカレーパンでしたっけ」

「……一応聞いとくけど、今日はちゃんとした食いモンだろうな」

「論より証拠。はい、どーぞ」

渡されたのは一見何の変哲もない焼きそばパンとカレーパンだが、

包装の裏に『激辛』なんてシールが貼られている。俺が辛いものを嫌いなこと、知った上での狼藉らしい。

「もう……なんか突っ込むのも億劫になってくるな」

労力ケチって治郎に買い出しさせた俺が悪いと思うことにしよう。

「え、何か気に入らないことでもありました？」

とりあえず、お前は一度地獄に堕ちろ。

パンの包装を破る音がやけに響く。

それもそのはず。周囲に人気はまったくない。秋口ぐらいまではまばらに人がいたもんだが、どうやらヤツらちょっと賢いらしく、この時期ここに居座るバカは俺と治郎くらいのもんだった。

屋上にあるのはいくつかの古びた木製ベンチと汚ねえプランターだけ。人類のいなくなった世界めいていてちょっと切なさを誘う。

「社さん、理子先輩はどうしたんです？」

「知らん。というかどうでもいい。あのやかましいのと四六時中一緒にいたら過労でいつか死んじゃう」

「素直じゃねえなあ。あれぐらい強引に寄ってくる女が好みのくせに」

「治郎くーん。何だそのふざけた認識。もうさ、頼むから一度殴ら

せてくれない？ いやマジで」

「イヤですよ。第一、アンタ二日前、俺にボディー食らわせたばかりでしょ」

「――ああ、アレね。アレは自業自得ってヤツだから。学生証盗むお前が悪い」

「へいへい。まあこっちも今回ばかりは悪いと思ってるんで報復しないんですから、感謝してほしいですね」

「いや、その理論おかしいから」

「俺が本気の左を食らわせたなら、社さんなんてイチコロなんですから」

それはきつと真実。いや、誇張とかじゃなくて。

「やめてくれ。イチコロっていうか、たぶん死体が残らない」

つまりは、治郎の『怪我』とはそういう種類のものだ。コイツもいわゆる超能力者である。

とてつもない破壊力を持つ治郎の左腕は、しかし能力としては致命的な欠陥がある。何せ使用回数に制限があるのだ。使う度使い物にならなくなる左腕。肩に爆弾抱えた豪速球ピッチャーみたいなものだ。なら『怪我』としかいいようがないワケ。

「ってか、治療ってもう終わったのか？ 今までは包帯まいてたじやねえか」

「ああ、あれは自己暗示みたいなんですよ。ああでもないとするに力の存在忘れちゃうんですよね」

このお茶目さん、なんて軽く扱えねえぞ。脅威にさらされる俺達の身にもなりやがれ。

「治療というか、力そのものをなくすのは無理なんで、変なところで動き出さないようにしてもらってますよ。社さんと同じように」

あ、やっぱそうなんだ。まあ原因が分からないんだから治療のしようもないのは道理だよな。

「社さんこそ、幻覚症状の方はどうなんです？ 都瑚さんの薬、効きました？」

「効いた。最近じゃ恐ろしいモノ見てない。というかな、何度も言うけど幻覚じゃねえから、錯覚症状だから」

「大して差はねえでしょうが」

それが大アリなのだよ治郎君。

錯覚は幻覚とは違う。

混同されがちだが、幻覚症状というのは外部からの入力しげきが無くても成立する。が、錯覚は見間違い、聞き違いなどの別名もあるように外部の入力を間違えて認識することを指す。つまり外部からの入力が無ければ起こらない。

俺はその錯覚を病的なまでに起こしてしまう。

パレイドリア、感動錯覚、不注意性錯覚、生理的錯覚の四大別に分類される錯覚症状を、限定的とはいえ全て高度かつ頻繁に経験する。この異常のせいで都瑚さんにお世話になることになったわけだが。

ちなみに、都瑚さん曰くこれも超能力の一種らしい。自分で自分の力に苦しめられてるのは単なる力の反動とか。そういうややこしいのは勘弁してほしい。

「そういや、最近やっと夜も一人で出歩けるようになったなあ」

「事情を知らない奴が聞いたら、ただのヘタレにしか思えない発言ですよ」

「うるせーよ。俺からしたら切実な悩みだったんだよ」

暗いのが怖いから夜は出歩けませんって、小学生でもそうはいないぞ。

「ま、夜が怖くて夜更かし出来ない高校生なんて、この餡のないアンパンみたいなもんですからね」

餡がないならもはやアンパンじゃありません。

「そこはかとなく俺の存在全否定してるよな、お前」

治郎はナチュラルに無視してメロンパンを頬張っている。いちいち腹を立てるのも馬鹿らしいんで俺も意識はミルクティーへと移す。

「あ、そうだ。社さんに伝えようと思ったことがあったんですよ。もしかしたらもう知ってるかもしれないけど」

どこぞの怪しげなサイトにつないで、携帯の液晶画面を見せてくる。

それは見慣れたおどろおどろしい見た目の『G件』掲示板だった。利用者が半端なく多くて実質公式な『G件』掲示板として認知されている。真面目に事件の概要を載せているかと思えば、最近の事件現場の写真投稿とか犯人の目撃情報とかの地域密着型情報から、果ては「俺が『G件』犯」なんていうアタマの悪い書き込みも満載である。

「最近新しく立てられたスレなんですけど。あ、それですよ、その『命名について語るスレ』」

「————『G件・神隠し』？ うわ、もう名前つけられたんだ」

仕事の早い暇人どもである。

「ええ。それで、今まで名前が曖昧だった『G件』も名付け直されたみたいで」

「『発火魔』、『切り裂き権兵衛』、『右回転』……突っ込みどころ満載だな」

トンチが利いているのかいないのか判断困る。

「今じゃ全事件を制覇してましてね。連中、やることないんで次の

暇つぶし材料求めてるんですよ」

「まるで次の『G件』熱望しているみたいだな」

「どうしてもコイツも自分は蚊帳の外だから無関係だなんて思ってる。深く考えない奴は純粹に今を楽しめて幸せだよな。俺もそうやって気楽に生きたい、いやマジで。」

「俺に伝えたいことってコレか」

「そーですよ。社さん、こういうの嫌いでしょう。だから見せてやろうと思って」

「ははは、地獄に堕ちろ」

携帯を治郎に返したら連鎖反応のように屋上のドアが静かに開いた。ひょっこり出てきたのは見慣れた金髪。悪魔・仲原理子再登場である。

「あ、いたいた。ケイちゃん、治郎君、一緒にご飯食べよう」

深く考えない奴は幸せ。コイツの能天気見ると真面目にそう思える。

「何話してたの？好きな子の言い合い？」

「バカかお前は。治郎とそんな話してるの想像しただけで気持ち悪くなるっての」

「それはこっちの台詞だぜ、社さん」

「じゃあ……私の好きなところの言い合い？」

「お前……すがすがしいほどのポジティブ野郎だな」

「野郎じゃありませーん。美少女でーす」

「うるせっ——いや、待て。こんな不毛なやり取りで食事時間を削られるのは何か悔しい。早いとこ食っちゃおう」

「あ、ケイちゃん、朝の約束。私のお弁当の感想は？」

「あれ、理子先輩、料理なんか出来たんですか」

治郎も俺と同じリアクション。理子から「料理出来ます」なんて言われて、そうだと思ったなんて言うヤツ、この地球上にはきっといない。

「そうなんだよ、出来ちゃうんだよ。天は私に二物を与えたの」

「他に取り柄らしい取り柄ってあるのか」

「それはケイちゃんが見つけてくれるはず」

人任せだった。

「そんなことより、どうだった？ おいしかった？」

「ああ、うまかったうまかった」

とりたてて変な見た目をさらす食材もなかったし、味も美味いといえる部類に入るだろう。俺にしてはかなり素直な感情表現だ。

「……ホントにおいしいと思ってる？」

だというのに疑い深い製作者。素直になれば疑われる。捻った態度出そうもんなら喚き散らす。どうすりゃいいんだ俺は。女ってマジで扱い困る。

2. 崩された日常 / 1

＊

無機質なビルとビルの間、およそ道とは呼べない細い路地裏へ、私は逃げ込んだ。

後ろを振り返れば、血走った眼を見開いて、何事か叫びながら追いかけてくる青年が二人。

走る。無我夢中で走る。息切れさえ厭わず、運動不足の体の悲鳴すら気にかけず、ただ闇雲に走る。

職場からの帰りであったことを、私は今、心底恨んでいる。パンプスは長距離走には不向きなのだ。

いくつもの角を曲がり、ただ逃げ続ける。だが非情にも、入り組んだ路地裏は私を阻む壁となって立ち塞がった。

深閑とした深夜の路地裏。殺伐とした気配が充満する無味乾燥の空間で、私はとうとう彼らと対峙した。

回りはビルに囲まれた、寂れた一角だ。鬱塞として粘りつく泥のような空気は、吸えばたちまちに倦怠感に襲われる。きつと昼間でも光の届かない、閉じられた黒い世界なのだろう。

そんな世界では、非行もまた日常の何気ない手段として君臨していた。

助けを求めたところで、駆けつける人間など皆無。息を潜めて傍観する者達にとって、こんなシチュエーションは日常茶飯事、取るに足らない常日頃の風景。

勢い良く金網のフェンスに叩き付けられて、カシヤンと甲高い音が響く。

短い嗚咽を漏らして、私は地面に倒れ込んだ。ズキズキと軋^{いた}む鳩尾を押さえながら、ぬかるみのような生温かい、しかし無機質な地面に沈み込む。

ゆっくりと、私を蹴り倒した少年達が歩み寄ってくる。見るからに不良と判る、柄の悪い大柄な学生達だった。

「やってくれたなあ、お姉さん」

そう言っ、少年の一人は私の脇腹を思い切り蹴りつけた。何の小細工も無いスニーカーは、だがその有り余る剛力で私の肉を、骨を、内臓をえぐるが如く突き刺さった。

一回。

情けない喘ぎ声が漏れる。

「カッコつけたつもりか、ああ？」

二回。

「やっと捕まえた女逃がしやがって」

三回。

「まったく、良い度胸だよ。アンタ」

四回。

「だけどな、一つ教えてやるよ。あんたの逃がした女、ありや普通の女じゃねえんだ」

五回。

「夜の街に徘徊して男に寄生しなきゃ、その日暮らしもままならない性質の悪い女だね。アンタが助けたところで意味はねえ。むしろアンタは、あの女の食い扶持を非情にも奪い取っちゃまったんだ。怨みはされど、感謝はされないぜ」

六回。

「残念だったな。アンタのお節介は誰も救えてねえんだよ」

七回。

———数えるのも、もはや馬鹿らしい。

全身に太い杭でも打ち付けられるかのような愚鈍な痛みが、何度も何度も駆け抜ける。

下界の汚れに一番近い四肢、詩人が謡うなら最も暴力へ特化した原始的な手段で以って私の体は、もはや指一本動かせないほどに痛めつけられ、汚されていく。

『彼らの縄張りに近づいてはいけない』

……いつだかの、周囲からの小言が思い起こされる。

ここ一帯の路地裏は、俗にキッズギャングと呼ばれる不良少年少女の溜まり場だ。だから一般人は不用意に近づきもしないし、入ってしまえば最後、無事で済むことがない。その数の多さと凶悪さ故、権力機関も思うように手が出せない無法地帯。『関わるな、振り向くな、見て見ぬフリをしろ』、それがこの街の暗黙のルールだ。

最近『G件』の影響で多少治安が良くなったものだから、私も少し油断していたのかもしれない。こんな場所に自ら進んで足を踏み入れるなんて、自殺するのと変わらないというのに。

正義感なんて、これっぽっちも無かった。

つい出来心だった。その出来心で、私は意味もなく人助けなどをしてしまったのだ。

帰途の途中で偶然見てしまった凶行。大通りに近い路地裏で、女の子が二人の少年から暴行を受けていた。

滂沱の涙と、悲痛な叫び声。顔中を殴打されて紫に染められてもなお、間断ない暴力で全身を痛めつけられる少女。そしてその様子を嘲笑い、何度も何度も拳を振り上げる少年達。

大通りを通る大人達は、皆その惨状に憤りを隠せずにはいたはずだ。

だが通り過ぎざるをえなかった。大通りのこちら側と路地裏の向こう側とでは世界が違う。ちっぽけな正義感などという盾は、悪意と欲望と至上の自由という剣の前にいとも簡単に貫かれる。

『関わるな、振り向くな、見て見ぬフリをしろ』

それは、この街で生き残るための先人達からの訓戒。

私も例に漏れずこの街の古くからの住人だ。そんなことは九九を覚える前より弁えていた。

でも、私はその訓戒を破った。

酒を飲んでいたわけでもないし、薬もやっていない。浮かれていたわけでもない。今日の私は、ただおかしかったのだ。

出来もしない人助けに臨み、勝てもしない争いに身を投じ、運よく逃げ出せたというのによりにもよって彼らの縄張りである路地裏に駆け込む始末。

馬鹿だ。私は馬鹿だ。

しかし後悔は微塵も感じない。

———何故？

やはり私は———。

死に場所を求めているのだろうか。

「お姉さんが代わりに相手してくれるって言うなら見逃してやるよ？ アンタなら及第点だ。でもさ……」

少年の一人が、パーカーのポケットから折りたたみ式のナイフを取り出した。乾いた音とともに、蒼白い月光を反射して輝く刀身が姿を現す。

その神々しさに、目が眩んだ。ぼやけた視界がさらに不鮮明になる。

少年は残った左腕で私の服の襟を掴んで、フェンスに押し付ける。

「どうも言うこと聞きそうにねえって面しているな。力尽くってのも嫌いじゃないけど、押さえつけるのは骨が折れそうだ、アンタ。無傷で帰す気もないし、サツにチクられてもアレだから——死人に口なし。いっそのこと殺してやるよ」

殺す。

その響きは、深層に眠る理性をも抉る凶暴さ。その言葉を突きつけられただけで、全身の体温がこぞって冷めていくのを感じた。全身が寒さで震え始める。

「お、おい！ 何も殺さなくても……」

「悪いな。ひどくそういう気分なんだ。『G件』に感化されたのかもしれないが、無性に人を殺したくてウズウズしているんだ。この衝動は止められねえ。誰かを殺すまではな」

「……ど、どうしちまったんだよユウタ！」

「どうもなつてねえよ？　へへへ……わくわくしてきた。ああ、こんな愉しみ方もあるんだ。今まで何人も女を相手にしてきたけど、こういう趣向は初めてだ。うれしい、タノシイなあおい！」

喜悦満面の少年。そして、狂気と愉悦に駆られた友人を畏怖するもう一人の少年の形相が、かろうじて見て取れた。

気味の悪い景色から眼を逸らそうと、少年の頭越しに月光を降らせ続ける、遠い群青色の空を仰ぐ。

目玉のような満月が、こちらを見つめていた。

まるで私を哀れむかのように、蔑むかのように。

私はただ、寒さで震え続けていた。命乞いをするでもなく、最期を受け入れて静かに死を待つでもなく。

ドクドクと、心臓が脈打つ。

全身に感じていた悪寒は一変して、煮えたぎるような熱さを感じていた。

ブクブクと、血管が沸騰する。

未だ体は震え続けていた。だが寒さによる身震いとは違う。全身は熱さを通り越して、痛みすら感じていた。

ジュージューと、体の水分が蒸発していく音が聞こえるようだ。

異様な喉の渴きが私を蝕む。それでも蒸発は止まらない。早く、この熱を発散しないと。

「そ×○ろク△イマ △スだ」

少年の声が聞き取れない。まるで私の体温で声が蒸発してしまっただけのようだ。

熱い、熱い、アツイ、あつい。

左手が、すごく熱い。

この熱を、迅速に正確に凄烈に確実に残酷に凄惨に無駄に発散したい。

「あ×よ、×姉△ん」

聞こえない。言葉が聞こえない。

耳に届くのは、ただ不愉快なノイズのみ。

眼に映る景色は白く霞がかったまま。

——違う。眼球も強烈な熱に冒され、視界が溶けている。

早く、早くこの熱を放出しないと、私が溶解してしまう——！

凶悪な危機感は、私の感覚神経を鋭敏にさせる。初めて感じ取った殺気の根元。かろうじて視覚が捉えたモノは、少年が中空で構えた小振りのナイフ。

魔性の月、その月光に彩られた妖しい輝きは一筋の線となって振り下ろされる。

寸暇、私は、襟首を掴む少年の腕を素早く左手で握る。

そして。

ボギッと、それは嫌な音をたてた。

「え」

そして肉の挽き潰れる、気味の悪い音が続く。

そのまま力一杯、引き抜いた。

瞬間、世界は、紅く満たされる。

飛び散った鮮血は、まるで意思でもあるかのように私と、私の背後の壁に綺麗なまだら模様を描ききる。

彼の腕。間接から先の人体は、いとも簡単に外れた。

闇雲に液体を放出し続けるその姿は、夏場のグラウンドで重宝する、あのスプリングカラーに似ている。

少年の右腕は私に振り下ろされることなく、不出来な彫像のよう

に半端な位置でその運動を止めていた。

「え————」

まだ状況が把握できていないらしい。少年は自分の腕の無残な間接部分をしばらく凝視した後、痙攣でもしたかのように全身をブルブルと震わせ始める。

「ああ、ああああああアアアアアアアアア—————！」

獣のような雄叫び。いや、もう獣そのものの尋常ならざる絶叫を上げる。

————無理もない。理性そのものさえも、腕と共に奪い取ってしまったのだから。

だがそうだとしても、騒がしかった。耳障りだ。人様の迷惑になるといけないので、その不愉快な咽喉を掴んで、握り潰した。

グチャリと、スプラッター映画で出てきそうな音を響かせて、私はその首をもぎ取った。案外首も簡単に外れる。何せ私のような女の細い腕でも引き抜けるくらいだから。

骨や管がだらしなく垂れている、歪んだ形相のヒトの顔。気味が悪いので投げ捨てた。

「な、あああ」

まだ、一人いた。

声にならない悲鳴を上げながら、狭い路地裏を壁にぶつかりつつフラフラと逃げ出す。

目撃者はまずい。

本能的に、今度は逃げる少年を捕まえて膝部分の間接を割った。

私の左手は肉を潰し、血管を引き千切り、神経を貪る。そして代わりに言いようもなくおぞましい死のイメージを植えつける。

膝から下の右足を引き抜くと、夕暮れ時のカラスのような声を上げてから、彼はピクピクと身体を痙攣させながら動かなくなった。本当に死んだのか心配だったので、念のために咽喉は砕いておいた。

死体は大通り近くまで引きずって移動させた。あの路地裏にあったのでは発見が困難だろうからだ。常にやましいことを抱える彼らここの住人は、何があっても警察というものに頼ることが無い。それは、仲間の無残な死体を見つけても変わりはないはずだ。

現場を見れば、ただ赤い液体を際限なく撒き散らすだけの機械が横たわっている。先刻まで人だったモノ。私はその人だったモノの部分を持ち帰る。今回は左腕と右足だ。

意味などない。ただ戦利品として譲り受けるだけ。それ以上も以下もない。

もう人ではなく機械だから、その部品を持ち帰ることに罪はないだろう。不法投棄物を持ち去ってもお咎めが無いように。

そうだ。塵だ、屑だ。

社会という名の宇宙に無数に浮遊するデブリ。立脚点を見出せない浮浪者。矩を踰えた背徳者。そんなものは塵屑と同様、淘汰されるべき存在。最近は塵でさえ再利用出来るそうだが、ここに生きる住人は利用する価値もない。

路地裏を出て、空を仰ぐ。

林立する高層ビルの合間から、さながら絵の具を滲ませたかのような具合の、ぼんやりと光る紅い満月が垣間見えた。

深い夜。そこかしこの光は眩しさを衰えさせることがないが——
——ああ、とても静かだ。

体は軽く、今なら風に乗って飛んでいけるような気がする。

これが境地。法と倫理から解放され、大衆の抑止から抜け出し、尊属への尊重報恩というしがらみを取り払った人間の羽ばたき。人の世に魂を引かれない、超越者のココロ。

私、こんなに簡単に人が殺せたんだ。

自分の左手をしてみる。

こびりついた血が気持ち悪かったので、私は家路を急ぐことにした。

＊

後から知人に聞いた話だ。

翌日の夕方。ネットの掲示板で書き込まれた私の所業は、『G件・肉体強盗』と銘打たれた。

＊

2. 崩された日常 / 2

日常は俄かに騒がしくなり始めていた。

お茶の間は既に次の『G件』の話題で賑わいつつ、一報は電波から電波へ、人から人へ急速に市内に浸透中。もうこの蒼乃の街で新しい『G件』の存在を知らないヤツはいないだろう。平和な日常は、四日目にして遂に崩れ去った。

＊

「え、またかよ」

「ああ、二人死んだってよ」

「『G件』再来か。今回は早かったな」

暇人どもめ。ここでも話題はそれか。周囲に聞き耳を立ててみれば、なるほど今日はクラスメイトのほとんどが『G件』の話題で暇を潰しているらしい。

「今朝早くにね、南口の大通りで」

「嘘、マジ？ あたしの家近いんだけど」

「足と腕がもぎ取られていたらしいぜ。しかも見つかってない」

「どういうこと？」

「持ち去られたんだろうって、犯人に」

「恐れー。相変わらず殺し方がえげつねえなあ」

「通称『肉体強盗』、掲示板の奴らのセンスを疑うな」

「まさか、家に持ち帰って犬のえさにでもするのかな」

「それウケる」

「結局目立ちたがり屋の暴走じゃない。興味ないわ」

「でも、殺されたのってキッズギャングの人でしょ？　なら殺されても仕方ないじゃん。自業自得っていうか」

「ああいう奴らは死んだほうが世の中の為なんだよ。みんなそう思ってるさ」

「おい、死体の画像手に入れたぞ」

「ほんと？　見たい見たい」

「今朝早く現場を取材していたキャスター、放送中に倒れたんだよ。死体を一瞬見ちまったらしい。そしたらパンチラしててさ。黒のレース、眼福眼福」

「うわ、グロッ……。何だよコレ。原型留めてねえじゃん」

「このままG件が悪い奴らを皆殺しにしたりするのかな？」

「やだ……そんなモノ見せないでよ」

「お前から見たいって言ったんだろ」

「最初の事件で言ってたじゃん。悪者をやっつけるって。あたし、応援してるんだあの人達。正義の味方だからね」

「アンタだって殺されないとは限らないでしょ。悪さばっかしてんだから」

「バレたか」

気分が悪くなった。

どいつもコイツも、自分が次の被害者になるとは露とも思っていない。それどころか、事件を面白半分で見ている奴もいれば、自分には無関係だと決め込んだ頭ん中平和ボケの奴もいる。

どうしてそこまで自分が安全だと、自分の命は誰にも奪われることがないと感じていられるのか。他人の優しさやモラルに期待して自分の命の安全を確保しようなんて他力本願、もうこの街では通用しないってのに。危機意識バカになってんじゃねえの？ 生物として致命的だよ、それ。

クラスメイトが何人か話しかけて来たが面倒なんで無碍に追い返した。どうせ一言目には『G件』の単語が出るに決まってる。普段なら名前の知らない誰かのことなんて気にも留めねえ連中が、こういう事故みたいな不幸に見舞われたヤツなら話題にするのって納得いかねえ。——あ、そっか。いや、さすが都会の現代っ子。他人に

無関心でありながら誰よりも恵まれない、優遇されたいと望んでやまないから他人の不幸を知りたがる、話したがる、伝えたがるワケね。納得。

担任が教室に入ってきて間もなく、不快な音はまるつきり死んでいく。代わりに聞こえる鐘の音は、学校という世間と隔絶された日常が始まる合図。ここから先、浮世の事情はことごとく締め出されるのだった。

＊

殺されたのは二人。

名前は塚原亮介^{つかはらりょうすけ}と山本大智^{やまもとだいち}。十九歳の大学一年生コンビ。何れも、生きたまま手足を引きち切られた事によるショック死。凶器は巨大な万力のような器具ではないかと見られているが、目下捜査中。また、不可解なことに彼らの腕と脚は持ち去られている。彼らが殺された日に、若い女性を追いかける二人が目撃されているものの女性の身元は不明、一切手がかりもなし。ネットでの通称は『肉体強盗』。

ニュースで報道されている事件の大まかな内容はこんな感じだった。

今日も今日とて屋上で治郎と昼メシを食いながら雑談。昨日と変わらず、寒々しい風は容赦なく体温を奪っていきやがる。加えて朝のイライラがまだ尾を引いていて、俺のテンションはかなり低めだ。

「生きたまま手足ぶんどってそのまま持ち去ってる殺人犯って……このまま都市伝説化しそうなホラーですね」

またしてもメロンパンを食ってる治郎。どんだけ好きなんだ、緑色。

「悪趣味だ、どいつもコイツも。俺、人間不信になりそう」

「なりそうっていうか、アンタ、基本人間不信でしょうが」

「まあ……そうだな」

最初っから信用ある他人なんていなかった。俺ってば悲しい人間。

「何ですか。またクラスの連中の話に腹立ててるんですか？ 社さん、いい加減大人になれよ」

「いや、なんかスゲー居心地悪いんだって、あの手の談話。あそこで笑える奴は精神どうかしちゃってるんじゃないかねえかって心配になる」

「みんな、死んだ奴より自分が恵まれているって実感したいだけなんですよ。今ある悩みも苦しみも、殺されて突然終わっちゃまった人間よりはマシだって、『G件』の話題はそう言った意味でタイムリーなんですから」

それが真実ならやっぱ悪趣味。名前も知らない誰かの死をおかずに自慰行為するようなもんじゃねえか。

「そんなことでいちいち不機嫌になってねえで、今後の予定を立てましょうよ。どうせ、この事件も関わる気満々なんでしょ、社さん」

「まあ……。余計なことに首突っ込むのって俺の流儀に反するんだ

けどな」

「……あの、前々から気になってたんですけど、社さんって何で『G件』に関わろうとするんです？ 単に能力を持ってるってだけで、巻き込まれたワケじゃねえのに」

他人に興味なくせに他人のことに関わろうとする。矛盾した行動に疑問を持たないヤツはいないわな。

「――嫌いなんだよ、ああいう連中」

「『G件』犯のことですか。そもそも殺人鬼好きな人間ってそうはいないでしょ」

「そういうことじゃなくてさ。近親憎悪っつーの？

都瑚さんも言ってたけど、超能力って持つだけで人間性が失われる。そりゃ道理だよな。一般人と同じ世界が見られないんだから、同じ世界にいることは出来ない。なのに、連中はしぶとくまだ人の世にぶら下がってやがる。理不尽な力で人生を狂わされる苦しみを知っているはずなのに、他人に理不尽な力の痛みを知らしめようとする。それってただの甘えだろ。自分だけが痛むのが許せないから、他人にも同じ痛みを感じてほしいっていうただのわがまま。

なら俺は、普通じゃない連中が普通の人間に痛みを負わせようとするのが気に食わない。自分を他人に押し付ける連中が気に食わない。だから邪魔したいだけなんだよ」

そんなガキ臭い反発心から始めた『G件』との付き合い。気付けば俺は臨死と顔なじみになってた。それでもやめることは、もう出来ない。憎しみてどんな感情よりも抗いがたい。そして一度表層に出すと簡単には拭い去れない。しかも、引きずり過ぎてすり減る

こともない。異常は異常を常に引き寄せるから、俺の憎悪は消えることなく、次の事件へ次の事件へ、と連鎖する。悪循環ってまさにこのこと。自分で死に行ってるなんて、もう飛んで火に入る夏の虫を馬鹿に出来ない。

「そんな理由で『G件』に……ねえ。自殺願望あるなら、今そのフェンスから飛び下りればいいのに」

じゃあちよつと一度死んでくれば？　みたいな軽いノリで俺に対する暴言。

「死にたいわけじゃねえっつーの。お前、俺の話聞いてねえだろ」

「冗談ですよ。いや、社さんらしい共感できない理由なんで納得いきませんでした」

それって喜んでいいんだよね？

「俺も他人の賛同は得られない理由ですし、お互い似た者同士ですね」

「お前と似た者同士って、なんか気持ち悪い。ってか何？　お前の理由ってスリル目的とかか？」

こういうヤンチャ小僧にはありきたりな設定だ。

「いや、単なる暇つぶしです」

ビックリ。コイツの心は平成生まれの現代っ子を一部の隙もなく体現してやがる。スリル楽しむどころか何も楽しんでなかった。

「おい、お前の方こそ自殺願望あるだろ？」

「ご心配なく。社さんより早く俺は死にませんから」

「そうかい。んじゃ俺が死んだらお前呪い殺すから」

「お好きにどうぞ。霊媒師見繕って日がな一日魔除けさせますから」
そして沈黙。

「……なあ治郎。不毛な未来予想は止めて、まずはこれからのことを考えるか」

「同感です。昼休みももう長くないんで」

切り替え早いのがコイツの数少ない美点だな。

「じゃあ、まずはキッズギャングの連中に話を聞くのが先決だな。
出来れば犯人像を特定できる情報を連中がつかんでくれていると御の字なんだが」

「犯行当日、殺された二人に追われてた女ってのがかなり怪しいですよね」

「そうだな。今のところ『肉体強盗』に一番疑わしい」

襲われる恐怖に呼応して力が目覚めるってパターンなら、今まで
も前例あるし。

「容疑者は女、か。この前もそうですけど、何か異性がこういうえげつない事件起こしてるって思うとぞっとしませんね」

「逆もまたしかり、だろ」

「男なんてほとんど鬼畜だから不思議でも何でもないですよ。狂気性こそ男の本性です。どんな奴でも倒錯した趣味嗜好を必ず持っているんですから」

「お前が言うのと妙に説得力あるんだけど」

暇つぶしで死に行くような奴だもんな。

「まあそんなことはどうでもいいんです。分かり切ってることなんで。それよりも、どんな能力なんですかね、『肉体強盗』って。人間の体引きちぎって殺してるって、何か他人の気がしないんですけど」

「案外、お前と同じような力だったりしてな」

「なら自分の堕ちた姿見せられているみたいでいい気分じゃないです。すね。つーか最悪です」

「ま、能力云々は都瑚さんに相談してからじゃないとな。専門家がないと信憑性に欠ける。目先の予定は、俺がキッズギャングに話を聞きに行ってくるから、その後都瑚さんの屋敷に集合ってことで」

「アレ、杜さんが行くんですか？」

よく分からないところで疑問符を付けてくる。

「何？ お前ってきたかったの？ 進んで自らあんな場所に行きたがる奴は初めてだぞ」

何せ暗い、怖い、気味悪いの3Kを見事に取り揃えてる。しかも住人はかなり閉鎖的で敵意むき出し。いつでも外界の人間に対して、問答無用で戦闘態勢である。

「違いますよ。社さん、先にやることやらなくていいんですか？」

「期末考査のことか？ 人間諦めが肝心、さらに男は引き際が肝心なんだ」

「じゃなくて、理子先輩のストーカー男事件ですよ」

「……………あー、あったな、そんなローカルニュース」

そういやあれから何も考えてなかった。そもそもが口から出任せだったんで当たり前の結果といえればそれまでだけど。

「でもまあ、放っておいていいんじゃないの？ 優先順位は間違いない『G件』が上だし」

「約束したからには完遂してからこっちに来てください。なんかスゲー気持ち悪いから」

ドのつく潔癖症か、お前は。

「……ホント言うと、お前、ただ単に俺が理子と一緒にいるとペース崩されてておもしろいだけだろ」

「アハハ、何馬鹿なこと言ってるんですか。当たり前でしょ」

む、ムカつく。取り乱さずに平然と肯定するあたり、さらにムカつく。

「でも、約束したからにはやり遂げろってのは本心ですよ。これだけは唯一、母親から徹底されてたことなんで」

「お前と違ってお母さんはえらく人間味溢れる人なんだな」

冷血人間一家でなくて安心した。

「俺の母親のことなんてどうでもいいんですよ。俺が言いたかったこと、分かってます？」

「わーてるよ。やりやいいんだろやりや。ストーカー行為なんぞパッとやめさせてやる」

「へえ、何か打開策思いついてるんですか？」

「ねえよ。皮算用」

「……聞いた俺が馬鹿でした。忠告はしときますけど、最近のストーカーは何するか分かりませんよ？ 甘く見てると後ろからグサリと刺される可能性もありますからね」

「へーきへーき。そこら辺は弁えてる」

『G件』犯のこともあるし、揉め事では下手に逆上させるよりスマートに手を引かせるって方針はいつだって変わらない。

話が終わると同時に、昼休みの終了を告げる予鈴が鳴り始めた。丁度話もまとまったんで幸先はいいが、いかんせんこの手の鐘の音は学生のテンションを等しく下げやがる。五限目を思っただけ俺はブルブル突入。

「んじゃ、キッズギャングからは俺の方で話聞いとくんで、杜さんは理子先輩の一件にちゃんと見通しつけてから合流してください」

そしてそんな俺に、後輩は食事の後片付けを押し付けて去っていく。言っても持ち帰らねえだろうからしぶしぶ俺が引き取ることにする。そうだよ、だって俺の方が年長者だし、俺は寛容な人間だからな。今度のリベンジ覚えてやがれ。

「へいへい。気は乗らねえけど善処するよ——と。そうだ、治郎。アイツらに会うならちよつと頼まれてくれねえか」

何です、と振り返る治郎。

そーいや今まで忘れていたことがもう一つあったんだ。

財布から万札を二枚。

「はい。尾行少年Aにこの給料払っというて」

＊

「待ってたよケイちゃん！ さあ、一緒に帰ろ」

七限目の授業を終えて学校を出ようとすると、生徒ホールの入口で理子が待ち伏せしていやがった。

「いや、何で？」

「殺人犯が徘徊している怖れあり。極力複数で下校」

「女友達と帰れ」

「ひーどーいー。ケイちゃんを通りかかるの、ここでずっと待って
たんだから」

「そりゃごくろーさん。何だよ、何か用でもあんのか？」

「用がなかったら待ってちゃいけないの？」

「ダメ。めんどくさいから」

あ、やっぱ出た。理子恒例の膨れっ面。

この後、非難の言葉がバシバシ投げつけられるんで、その前にこ
こから退散……したいところだが。

今日はこっちの方に目的があるから言う通りになってやる。

「おいコラその金髪、早く来いよ。帰るぞ」

「え、アレ？ ……何だあ、やっぱりケイちゃんたら私のこと好き
なのか」

意味不明な妄言吐いて俺の隣について歩く理子。

「ははは、おめでたい奴。期待裏切るように悪いけど、例の付きま
とう男の話な、もうちょい詳しく聴かせてくれ。歩きながらいい

から」

「えー、そういうのはあんまり面白くない」

「うるさい。助ける言っただけはお前だろうが。最大限協力しろ」

理子はブーブー言ってやがったが無視する。こっちもそろそろこの問題に本腰を入れたい。『G件』しかり、期末考査しかり、気になる件はいろいろ多いから、解決出来るものから片づけないとキヤパ超えて頭がまいっちゃう。

＊

「――うーし、全部メモった」

手帳をしまって伸びを一つ。不自然な体制で文字を書いたから肩が凝って仕方ない。

「今の話でよかったの？　この前話した内容とあんまり変わらないよ？」

「いいのいいの」

だってメモ取り直すのが目的だから。あの時は話聞くだけで関わる気ゼロだったんで、情報の記録なんてまったく頭になかった。

「後はこっちで何とかしといてやるから。――あ、お前もう帰っていいぞ」

「うっわ、ありえない一言が！　ここまで来たんだから駅まで一緒

に帰ろうよ」

「いや、だってなあ、お前の話疲れるしさあ」

特に理子の家の猫の話？ はっきり言って、どこぞのペットが何をしてるのがカワイイとかどうでもよすぎる。

「そんなこと言わないでさ。何ならテストの話でもする？」

「やめてくれ。気が滅入る」

「そっか。あ、じゃあ『G件』の話は？」

「無理に話題を探そうとするな。お前、誰彼が死んだ話って嫌いだろ」

理子はその手の話は面白おかしく騒ぎ立てない性質。見た目前衛的な現代っ子にしてはモラルあって助かる。

「まあそうなんだけど。じゃあどんな話題ならケイちゃん疲れない？」

「もう究極的には何も話さなければ疲れない」

「それじゃ私がつまんない」

「いいじゃん。無理してお互い神経すり減らすような関係じゃないだろ、俺達」

「それはそうだけどさあ……」

そんな取り留めのない話をしていたら、いつの間にか駅前的大通りにまで差しかかっていた。

街は早くもクリスマススムード一色に変貌。街路樹には青いイルミネーションが瞬き、公園の噴水は普段より豪華にライトアップされてる。赤服（たぶんウル百パーセント）に扮装したケーキ屋の店員が店頭販売に勤しみ、隣のファーストフード店は負けじとクリスマス仕様のチキンセットを必至に売り込み。忙しねえし節操ねえ。日本は一体何がしたいんだか。

「ケイちゃん、もうすぐクリスマスだよ」

「……だから何だ」

「私、ケーキ食べたいなあ」

「赤服のオヤジに頼め。そこら辺にいっぱいいるから、媚びへつらつて強請ってこい」

「やだよ。そんな恥ずかしいこと出来ませーん。ねえねえ、クリスマスと一緒に食べに行こうね、ケイちゃんの奢りで」

「同級生にたかるのは恥ずかしい行為じゃないのか。すっげーなお前の脳ミソ。ぶっ飛んでるよ」

「いーからいーから。駅ビルのケーキ屋さん、二十五日はケーキバイキングだから」

「知るか。勝手に行きやがれ」

「一人じゃ寂しいんだもん。お互い独り身なんだからいいじゃん」

「俺を餌食にするな。男捕まえるなり女友達誘うなりして行けばいいだろ。俺は絶対奢らないからな」

「えー、ケイちゃんのイジワル」

ウザったいから無視する。しばらくして理子は静かになった。

無言で二人、大通りを歩く。いつものことながら帰宅する連中は多く、人混みが嫌いな俺としてはテンションガタ落ち。ゴミ箱が近くにあって蹴り上げているところである。

やることもないんでストーカー事件の打開策なんか考えてみる。スマートに手を引かせるって、一体どういうシチュエーションが考えられるのか。同じ穴のムジナを装って脅迫でもするか? 「僕の理子ちゃんに手を出すな」みたいな。……我ながら気色悪いにも程があるな。これは却下だ。第一、俺のキャラにそぐわない。

「――ねえ、ケイちゃんはさ、私と一緒にいて辛くない?」

口を開いたかと思えば、また脈絡もねえことを聞いてくる理子。

「……急にどうした?」

「急じゃないよ。私、いつも考えてるんだよ。ねえ、ケイちゃんは怒ってない?」

「何で俺が怒るんだよ」

「私、事件のことで相談して勉強の邪魔してるし、いつも付きまと

ってるし、うるさいし」

そういう自覚あったんだ、コイツ。ただの天然さんじゃなかったらしい。

「おいおい、本気でそう思ってるんなら態度で示すっつーの。別に怒ってねえし辛いとは思ってねえよ」

ウザったいとは思ってるけど。

「言わなくても分かるだろ、そういうの」

「分からないよ」

喧噪の中、かろうじて聞き取れるぐらいの声だった。

「みんな気を遣って、本当の気持ちは隠してるんだから。

知らないから、分からないから、気を遣って遣われて、みんなお互いに本音を隠しちゃう。その方がうまく付き合っていけるって言う人もいるけど、私は嫌だよ。本当の気持ちが分からないまま、誰かの優しさに甘えるなんて。

ねえ、本当にケイちゃんは、私と一緒にいて辛くない？」

「自信ないのか、お前」

「ないよ。みんなに好かれないとは思ってるけど、それでも必ず誰かに嫌われるちゃうもん。それは仕方ないって思うけど」

みんなに好かれない。その言葉でどこかの女を思い出した。悲しい結末を迎えてしまった少女の姿が何故か理子に重なった。

「私、何も知らないから。もし、ケイちゃんの優しさに甘えているだけなんだとしたらさ、これ以上――」

「お前、ホント馬鹿だったんだな」

理子の顔は、いわゆる鳩が豆鉄砲食らったかのような表情だった。そりゃそうだ。普通の男ならここで、それこそ優しく慰めるだろうからな。

「俺が他人に対して、そんな優しさかけると思ってたのか？ ならとんだ買いかぶりだ。俺は他人に優しくなんかしない。俺も、他人の優しさなんかアテにしてないからな」

理子にいつものテンションが戻らないんで、駅前広場のベンチで休憩する。あったかいというより熱いミルクティー二本買ってきて片方を理子に手渡してやるが、何とも気のないお礼しか返ってこなかった。

「おい、いい加減元氣出せって。怒ってねえって言ってるだろーが」

こういう時でも素っ気ない俺って、一般人から見たらスゲー冷血人間に見えているんだろうか、なんてどうでもいいことが脳裏に浮かんだ。

「元氣だよ、もう氣にしてないもん」

と、言いつつも溜息をつく。何なんだ一体。

慰めるのっていうのは俺の性分に合わないから、あとは時間に任せることにして、理子の隣に座る。幸せを呼ぶ青い水晶玉、なんて押し売りが来たが、ウザったかったんで他所でやるよう追い返した。この場所でシリアスな展開なんて似つかわしくないんだよな、すぐ近くではブレイクダンスなんかやってやがるし。

周囲の空気読めねえ行動にイライラしながら理子の機嫌が治るのをただ黙って待つ。しばらくして理子は口を開いた。

「ケイちゃんさ、本当に、言わなくても分かることってあると思ってる?」

「あん? さあな。あってもなくても、そういう“見えない”ものを信じて人は付き合うものだろ。友情にしろ愛情にしろ、言葉にしないから意味があるものって割と多いぜ?」

神だの真実の愛だの、あるかどうか分からないものって、口に出すと途端にその重さが軽くなるだろ」

だから言わなくても分かるものはきつとある。いや、分かってほしい、の方が正しいか。

「じゃあ私達も、本音を隠して付き合う方が仲良くなれるって、そう思ってる?」

「そういう場合もあるんじゃないの? お互い黙ってた方が幸せなことも世の中にはある。結婚生活にしろ世界のパワーバランスにしろ、人って勘違いから平和を作り出せる特殊な生き物だからな」

「でも……………ならケイちゃんは何も分かってないよ!」

迫力も恐怖もないが理子は怒っているらしい。

「好きな人にはどうやって私の気持ちを分かってもらうの？ お互い傷つくのが嫌だから本音を隠して付き合っていくの？ 私は嫌だよ、そんなの。傷つけたり傷ついたとしても、言わなきゃやっぱり何も分からないよ。言葉にしなきゃ、伝わらないんだよ」

「はあ？ 何の話だ」

言うだけ言って、理子は駅の方へ歩いて行っちゃまいがった。なんかデジャヴ。女ってこういうハケ方好きなのか。

近寄りがたい雰囲気なんで後は追わない。ただ理子の後ろ姿を見送りながら、何でこんな話になったんだろうと、記憶を探ってみたが何も分からなかった。

理子の様子は気にはなる。何だっけいきなり恋の話？ アイツ、恋煩いにでもかかっているのか。どいつもコイツもおめでたいことこの上ない。

理子には悪いが、何の感情もない状態が平和だとすれば、恋なんて戦みたいなものだ。金も時間もかかる上に常に情勢は不安定。いつ自分のココロに危害が加わるか心配して日々を過ごしてる。馬鹿みたいだ、好意をもつ相手との、そんな不毛な争いなんて。

深く考えても、どうせ俺には多感な女の恋心なんて垣間見ること出来ないんで、明日会った時にでもまた聞いてみよう、と樂觀的な予定を立ててみる。

理子は冗談じゃなく帰りやがったみたいだからこっちも家路につ

く。来るかどうか分からないヤツを日がな一日待ってやる、なんて虚構の世界の中だけです。素っ気ない、甲斐性なしなんて言われても痛くも痒くもない。そう自分を鼓舞しながら駅前広場を後にした。

＊

理子の癩癩のせいで予想以上に時間を食ってしまった。

時刻はもうすぐ七時に差し掛かる。

本格的な夜まで外をウロウロするのはただけない。自然、その心持ちは帰宅する足を速くする。

別段特別今夜が寒いわけでも、家の門限が厳しいわけでもない。

ただ、俺自身が長く夜の世界を徘徊することを了承出来ないだけ。

人気の少ない住宅街を歩く。

家々から洩れる人工燈の灯りと街灯の眩い光で、夜だというのに地上の視界は騒がしい。

けれど立ち止まって一度頭上を見上げれば、月はぶ厚い雲に隠れていて、自然の光は面影もなく、ただ重くるしい深い灰色の昏闇くらやみが空を塗りつぶしていた。

嫌な、夜だ。

いや、違うか。

夜は嫌なのか。

冷気は制服を貫いてチクチクと肌を刺激する。その感覚が妙に気味悪い。

身震いをしながら足を踏み出そうとしたその時。

——ゾクリ、と。

背筋を蛆虫が這うような、おぞましい嫌悪感に襲われる。

怖い。

しまった。今日はまだ薬を飲んでいなかったのか。クソ。

振り返ってはいけない。見てはいけない。

脳で理解しているというのに、身体はまるで俺以外のモノであるかのように勝手にギチギチと動き出す。

恐る恐る振り返ればそこには——。

“アイツ”が立っていた。

眼球の無い眼窩、真っ白な、たるんだゴムのように引き締まりのない肌、不自然に吊り上った口元、黒いコートに黒い帽子。

その、人間以外にはありえない“アイツ”は、俺をじっと観察していた。

――怖い。

喉が、渴く。

カラカラに、まるで照りつける太陽の下、全速力で走り終えた後のような、そんなカンソウ。

冬の**暮暮**^{ベキベキ}とした夜空、気温が低いのはもはや当然。だというのに、身体のアちこちから玉のような脂汗が吹き出しているのが分かる。

――コワイ。

ああ、ダメだ。

怖いと思うな。怖いと思うな。コワイと思うな。

手足が震え、歯はガチガチと音を鳴らして声も出せない。

それでも、渾身の力を込めて、“アイツ”から眼を逸らして一目

散に走り出した。

周りから音が聞こえない。

まるで全てがなくなってしまったかのように空気の音さえ聞こえない。

周りから人の気配が感じられない。

まるで最初から誰もいなかったように家の明かりはない。

怖いと思うな。怖いと思うな。コワイと思うな。

そう自分に言い聞かせて、一心不乱に走り続けた。

もうどのくらい走っただろう。感覚的には一時間フルマラソンを完走した気分だ。

眼を開けて追跡者をマいたか確認する。

だが、アイツはしぶとくついてきていた。

いつの間にか正面から、地面を縫うように、音もなく動きもなく幽霊みたいに近づいてくる。

眼を硬く閉じた。

拒絶するようにきつく瞑る。

そのまま全速力で、自宅の玄関まで走り抜けた。

「ハア、ハア———ハア」

情けなく、息が上がってしまった。

これが、俺の錯覚だった。

感情によるスイッチ——怒り、不安、困惑、罪悪感、絶望感、孤独感、悲しみ、恐怖の負の感情の高ぶり時にのみ錯覚症状が現れる。一番顕著なのは、さっきみたいな恐怖を感じ取った時だが。

夜道を歩くと、否応なくさっきの気味の悪い人間がはっきりと見えてしまう。頭の中では錯覚だと理解はしていても、視覚はその命令さえ跳ね返してアイツを視認してしまう。

視覚がその存在を確認する以上、眼を閉じてしまえば奴は見えない。それだけが救いといえれば救い。

だがそれでも、耐えられない。

何もせず、ただ傍観する人間を見るのは怖い。

相手が明確な敵意を持っていれば、それに正当防衛するための思考が脳を支配してくれる。生き残るためだけの思考は、恐怖なんて感情を意識の隅に追いやる。

だが、何をするでもなくただ視線を送り続ける相手では、嫌な先入観ばかりが蜘蛛の巣のように広がっていつて、厭な最期ばかりを

夢想してしまう。何をするか分からないという、人間の根本的な醜悪さに則って。

玄関の扉を開けると、奥のリビングからおかえりー、なんて気のない母親の声が返ってくる。やっと現実に戻ってきたことが実感出来て少しニヤついてしまう。

足取りおぼつかなく、階段を上る。

片っ端から電気をつけて、何とか自室まで辿り着いた。

カバンをぶん投げてベッドにダイブする。そして一度深呼吸。やっと息が整ってきた。

初めて自分の異常に気付いたのはいつだっただろう。いや、異常というにはおこがましい、ただの人と違う部分というだけだったかもしれない。

友達と外に遊びに行った時、無造作な雲の形が化け物の腕に見えた。

映画館の何でもないようなシミが、悲痛な叫びを発する女の形相に見えた。

どうってことはない。そんな錯覚、誰にでも一度は経験あるし、眠りにつけば次の日には忘れてる。でも俺は違ってたってだけ。簡単に言えば思い込みが激しいってこと。

ここまでは、そう自分に言い聞かせてなんとかなった。シミや雲の錯覚、言うなりや安物のB級ホラーの小道具を毎日見てるような

もんだ。現実感が希薄すぎて怖いとは到底思えない。

だけど“アイツ”だけは違った。

その不気味さは、毎日すれ違う赤の他人と重なって、俺は人一倍人間に対して臆病になっていった。何もしない人間ってのが一番不気味で、人間の本質は醜悪だってことを子どもの頃から見せつけられてたようなもんだったんだから。

——だからだろうか。

他人に興味ないフリをして、距離をとって。

本心は他人を、怖いと思うようになったのは。

＊

ちなみに後日談。

次の日。理子とはまったく会うことがなかった。気まずい雰囲気
を長引かせるのもどうかと思ったが、あえてこっちから話を聞
きに行くのもおかしいんで、結局何も解決せずに一日を終えた。

＊

2. 崩された日常 / 3

今日もまた、人を殺してしまった。

おかしい、オカシイ。今の私は何かおかしい。

確か私は、仕事を終えて人探しをしていたはずなのだ。名前も顔も、通う学校すら知らないものだから、見た目の特徴から、それらしい学生に声をかけて話を聞いていたはずなのに。

いつの間にか私は、またあの路地裏にいて。

さっきまで楽しそうに笑っていた女の子を、汚らしい肉塊に変えてしまっていた。

手に残る血は生温かく、引きちぎった金色の髪の毛は対照的に氷のように冷たい。引き抜いた臓物は未だ蠕動を繰り返し、残り少ない命を全力で表現している。

赤い血の水たまりに映る私は、酷く不気味なまだら模様を全身に描いていて、気味の悪い程綺麗な微笑を浮かべていた。

殺す気なんて、なかったのに。

殺意も憎しみも恨みも、何もなかったのに。

オカシイ。私は狂っている。何の感情も持たない人間を死に至らしめるなんて、正気の沙汰じゃない。

狂っていたら、人でなくなってしまうたら、私はもう、あの人に

見向きされない。

それだけはダメ。それだけはいけない。あの人をまた振り向かせるためには、狂ってはいけない。これから私は、綺麗で、器量がよくて、おしとやかで常識ある人間であるよう努めないといけないのだ。

——でも、本当に私は狂っているの？

彼女は何も悪くないの？ 私が危害を加えたいと思うほどの何かをしでかしたんじゃないの？

——そうだ。彼女は、私を苛立たせた。

こちらが妬ましく思うほど、満ち足りて幸せそうな表情で、好いた相手のことをペラペラと口走っていたじゃないか。

私はそれが居心地悪くて、ちよつとその可愛い顔をグシャグシャにしてやりたいって、そんなちっぽけな反抗を覚えただけ。

それで死んでしまった女の子。この街では、ちよつとした感情の発露さえ命取りになる。彼女もこの街の住人ならそれは弁えていたはず。ならこれは不可抗力、彼女の自業自得ではないか。

——ああ、そうだ。

私は彼女に殺意があった。なら私は狂っていない。これは仕方がない結果。『殺人』は、力を持ってしまった私が当然なしうるべき結果だから。『殺人』という表現こそが今の私の憎しみの発露だから。そう、仕方がないことなのだ。

でも、今日はもう、人探しを続けられない。

それに、明日からは仕事が忙しくなる。

ならここで小休止するしかない。急いては事をし損じる。あの人と幸せになるためには、ここで、他の『G件』犯のように人間以下に堕ちるわけにはいかないのだから。

家路にこういうと思ったら、年若い少年の大きな笑い声が聞こえて、大通りへ向かう足は止まってしまふ。どうやら誰かと電話をしているらしい。下品な言葉遣いはためらいもなくこちらに近寄ってくる。

目撃者はマズイ。

人として当然感じる危機感。なら私は彼を殺しても狂うことはない。

——さあ、殺してしまおう。どうせ社会に適應出来ない屑ゴミ。生きていたって害悪しかもたらさない。シュレッダーみたいに細かく引きちぎって、ゴミ箱にでも捨てておこう。これは路地裏清掃と同じ。私、掃除は好きだし得意なのだ。だって、彼が褒めてくれた、私の美点の一つだから。

彼が褒めてくれる優しい声が脳裏に響く。それだけで私は何でも出来る。人殺しだって例外じゃない。汚らわしい血が、また私に降りかかるのも厭わない。

———全ては、あの人をまた、私に振り向かせるために。あの人との幸せな日常を取り返すために。

足音と笑い声は、もう目の前まで迫っていた。

私は力なく立って獲物を待つ。

少年が姿を現し、紅い水たまりに足を踏み入れた。様子の異常に気付いてこちらを見据えるのと同時に、私は少年の顔を握り潰す。

紅い血が迸る。鉄臭い臭いが暗い一隅に充満する。

小さなうめき声が左手に掻き消され、グシャリと、脳漿を握り潰す音は路地裏に高く響く。そうして私は、今日二人目の人間をこの手にかけた。

ピクピクと痙攣する少年の身体。その惨めさを少し鑑賞する。人間は、死して尚こうまで醜い姿をさらす生き物なんだと、少し哀れに思ってしまった。

程なくして少年の活動はことごとく停止した。今日も今日とて私は機械の一部をもらい受ける。『肉体強盗』なんて呼ばれている私だけど、この行動にやっぱり理由なんてない。戦利品として、ただ持ち去りたい欲求が私にあるから、私はそれに従うだけ。今回は左

足と、女の子の綺麗な右手。

今日も月が綺麗だった。満月から少し欠けてしまったけれど、その煌煌は少しも衰えていない。

月は異界がこちらを覗く穴。あそこには怪物が住んでいる。

彼らの視線を追う。月光に彩られた惨状は、なかなかどうして幻想的だったから、私はしばらくその光景に見惚れてしまっていた。

＊

「————あークソッ。いい考えなんか浮かぶわけねえだろ！」

『嫌がらせ大全完全版』、宙を飛ぶ。そのままゴミ箱へナイスシュート。ちよっとしたミラクルも今の俺には何の感動もない。

午前中をまるまる費やして、理子のストーカー男事件の打開策を考えたがまるで収穫なし。無情にも時間だけが過ぎ、イライラは募るばかり。気付けば昼メシに丁度いい時間になっていた。

このままじゃ埒が明かない。一旦、休憩を入れよう。メシを食ってちよっとブラブラするのがいいかもしれない。

そう思っで一階に下りると、ウザいにも程があるインターホンが鳴りやがった。間が悪いことに両親は外出中。居留守したいところだが、何回もしつこくインターホンを鳴らされるとイライラがさらに増すんで、しぶしぶ応対に出ることにした。またマンションの売込みとかだったら一喝して追い返してやる、ちくしょう。

ドアを開けた先に立っていたのは、コテコテに着飾った小太りの

おばちゃん。嫌な予感しまくりの出で立ちである。

「宗教に興味御座いませんか？」

ほーら来たよ。甲高い声でこっちの神経逆撫でするような話題を口走りやがった。

「ないです。失礼しまーす」

「あ、ちょっと待って」

強引に身体を入れて、ドアを閉めるのを邪魔してくる。不法侵入で訴えるぞクソババア。

「あなた、今、もの足りない生活を送っていらっしやるでしょう。分かりますとも、その覇気のない顔、物事に価値を見いだせないんでしょう、ねえそうでしょう？」

初対面早々失礼なおばちゃんである。いきなり人の顔をけなしてくるとは死にたいらしい。

「あーもういいですから。他所でやってください」

「未来ある若者がそんな調子じゃいけませんよ。さあ、私と一緒に主への祈りと人々への奉仕活動を通して、お金では得られない、幸福で満ち足りた清き方便を手に入れましょう」

ウザってえお話をタラタラと。興味ねえって言うてるだろーが。

「いいです、間に合ってます。今、友人への奉仕活動に忙しいんで」

嘘はついてないから、今日のはすがすがしい断り文句だ。ポカンとしているおばちゃんの間を見計らってドアを閉めた。

玄関の外では、罪を雪ぐなら私とともに、とかまだ馬鹿らしいことをほざいてる。罪とか罰とか、そういう面倒くさいものは、恥を重んじるこの土地じゃ流行らないっての。流行ってるのは人間超えちまった連中の復讐か虐殺です。

さっさと飯を食おうと思った矢先、俺以外の何かの気配を足元から感じ取る。なんとも珍しい銀色の猫が、いつの間にか行儀よく玄関に居座っていやがった。

毛並みは申し分なく綺麗に整ってる。眼の色は深い緑、私いい生活してます、とでも言いたげな子生意気な顔つき。どう見ても成金趣味の連中が好みそうな猫である。

一難去ってまた一難。さっきのおばちゃんとの問答中に忍び込んでいたらしい。どこの家猫か分かんが、ここにはお前が食うような高級な食い物はありません。野に返してやろうと玄関を再度開けると、あろうことか猫は二階へダッシュで逃亡。結局イライラを募らせながら後を追う。

猫は俺のベッドの上でちゃっかり寛いでやがった。いい度胸だ、猫の分際で人様の寝所をぶんどるとは痛い目に遭いたいらしい。

「恥を知れ、クソ猫。住居不法侵入で訴えるぞ」

猫と視線を合わせて罪状を糾弾。当たり前だが効果はない。こっちを嘲笑うかのように無邪気な顔でニャーと鳴くだけだった。

わざとらしい溜息なんかついてみる。どれだけ悪態つこうと、根は優しい社慶太。恩情をかけて、というか面倒くさいので放置することにした。どうせ入ってきたのと同じように、いつの間にか消えていなくなるだろう。猫ってそういうきまぐれ者だ。

「おい、その銀猫。窓は開けておくからな。俺が帰ってくる前に、塀でも伝っていなくなってるよ」

通じるはずもないのは百も承知。でもヤツも馬鹿じゃないからこっちの意図は推し量るだろう。そうでなかった場合はお国に強制送還するだけである。……おっと、一階に降りられたら迷惑なんでドアは閉めておこう。

家事も出来ないロクでなしの俺はインスタントラーメンで熱量補給。何気なくテレビをつけると、ワイドショーが丁度『肉体強盗』の新しい事件について取り上げていた。

昨日の夜も犠牲者が出たらしい。今回は男女一人ずつ。脳ミソ潰されて即死っていう、いつも以上にえげつないやり口だった。今回は男の方が左足、女の方が右手をそれぞれ持ち去られている。

殺人に関しては予想の範疇だから驚きもしないが、死体の一部を持ち去っているっていう理由がどうにも推し量れない。基本、『G件』犯は異常なんだから、なんて言っちゃえばそれまでなんだが。

考えられる理由を挙げると、数寄者、収集癖、証拠隠滅、不可抗力……。

——ああ、ダメだ。考えると頭痛くなってくる。

やっぱり目先の問題を先に解決せねば。予定通り、気分転換を兼ねて外出しよう。歩いているうちにいい考えが浮かぶかも。

……ストーカー事件の解決、ねえ。何でこんな面倒くさいこと引き受けたんだか。

＊

気分転換で外出といいつつ、気付けば駅前広場のいつものベンチに腰かけていた。俺ってば行動範囲狭っちいな。ちょっと自己嫌悪である。

土曜の駅前広場は、平日と変わらない盛況っぷり。つまり、平日に集まってる暇人が多いってこともある。

相も変わらずユニークな連中は多い。今日なんて各々様々な芸を披露する大道芸人がいたりするし、すぐ横では下手なギターで弾き語りなんかしてる。その横では、怪しげ極まりない紫色のマントをつけた占い師なんかが出没中。イマイチまとまりというものを分らないヤツらだ。

広場を横切るカップルは二、四、六………数えるのも馬鹿らしいくらい大量である。まばらではあるがその波が途切れることがない。まるでアリの行列。連中が目指す先にあるのは甘い甘い生活ってか？ 自分で言ってて恥ずかしくなってきた。

おっと、目の前を横切る知り合いを発見。手持無沙汰なんで声をかけようと思ったら、なんか男二人がかりで女に言い寄ってる。関わるのはやめようかとも思ったが、一度動き出してしまった以上戻るのも億劫だった。それに、何だか女の方が妙に気になったこともある。

「おい立倉、^{たてくら}何やってんだ？」

背の高いがっしりした金髪は、俺に気付くなりわざとらしい声をあげやる。

「社さんじゃないですか。あ、給料は治郎からもらいましたよ。ああいうバイトなら大歓迎なんで、またのご利用を」

「わかったわかった。それはいいからこっちの質問に答えろ。何やってんだ、お前ら」

「いや、ちょっと可愛い子がいたんでお茶に誘ってるだけですよ」

そう言う立倉の横に女が一人。近くで見ると、確かに何ともまあ男受けしそうな見た目の女である。長い黒髪に白い肌。小柄で細い体は立倉みたいなデカブツが触ったら折れちまうんじゃないかって思うほど華奢だ。

女はこちらに視線を寄越す。感情の読み取りにくい表情だった。助けを求めるでもなく、ただこちらをじっと見つめているだけ。しかし、眼を凝らせば、眉間に少ししわが寄っていた。俺もコイツらの仲間と思われて警戒されているのだろうか。だったら悲しすぎる。俺とコイツら節操なしを一緒にするなって意味合いを含めて、柄にもなく立倉達を邪魔することにした。

「立倉、悪いな。そいつは俺の知り合いなんだ。ナンパなら他所でやってくれ」

「げ。マジですか、社さんの知り合い？ ……あー俺達まだ何もしてないんで怒らないでくださいよ？ いや、マジですから。原付に細工するとかやめて下さい」

人聞き悪いことぬかすな。

「しねえから。とっとと次の女を探しに行け。何なら面のいいピンサロ嬢でもデリヘル嬢でも紹介してやる」

「うっわ、それ、スゲー魅力的なお言葉なんですけど、今は手持ちが少ないんで遠慮します。今度バイト代が入ったらお願いします」

「はいはい。そっちの少年はいいのか？」

「あ、コイツはまだ筆下ろしが終わってないんで」

「律儀なこった」

その手の店がひしめき合う蒼乃の街の男にとって、金を払って初体験するのは御法度なのである。どうでもいい縛りと言うことなけれ。これは切実な、男の尊厳の問題である。

「じゃーそれは善処するから。――あ、あそこの女、お前の好みじゃね？」

「いやいや社さん。俺達、何もナンパだけが目的でブラついている

わけじゃないですから」

と言いつつもしつかり獲物を品定めする。この肉食系男子曰く、女を選ぶ基準は食える、食えないでなく、食うに値するかかどうかだ。言うのはカッコいいが、単に気分がノればどんな女でもいいっていうことである。

どうやらお眼鏡に適わなかったらしく、立倉は大袈裟に肩を落としながら続ける。

「ほら、アレですよ。『肉体強盗』。こっちもただやられるわけにもいかないんで、ここらで攻勢に出るために情報収集をしてるんです」

あ、なる。それでキッズギャングらしき連中がさっきからそこら辺をウロウロしてるワケね。いわゆるローラー作戦ってヤツ。数の多いキッズギャングだから可能な人海戦術である。

「へえ、意外と考えてたんだ、お前ら。で、何か掴めたのか？」

「いんや、まだ何も。何せ顔も名前も性別も分からないターゲットなんで。まあ、なんか面白い情報が手に入ったら社さんにも流しますよ。今回の『G件』も調べてるんでしょ？」

「まあな。毒だって分かってるのに懲りずに食いついちまってるよ」
毒を食らわば皿まで。いつか裏返ることを切に願う今日この頃。

「みんな社さんに期待してますから。また、ババーンと犯人とっ捕まえちゃってください。あ、その後引き渡してくれれば、こっちで

事情聴取なんかはしときますから」

大人数でのリンチ行為は事情聴取とは言わないぞ。

立倉達が広場から消えるのを見送っていたら、隣で終始直立不動だった女が、音もなくこちらに向き直った。

「ありがとう。助けてくれて」

抑揚ない、感情ない、愛想ない。本当に感謝されているのか判断つかないが、こっちも慇懃なお礼のために助けたわけじゃないんで良しとする。というかやつぱり困っていたらしい。

「いや、悪かったな、嫌な思いさせて。アイツらも悪気はないから許してやってくれ」

「ええ、わかっているわ。彼ら、言葉は不躰だったけれど、手荒なことはしなかったもの」

美しき誤解。それは悪気がなかったわけじゃなくて、ただの根性無しだっただけなのである。

「でも、今時人助けなんてしてくれる人がいたのね。ちょっと驚いた」

「ああ、いや、それはただ単に……」

単にアンタの外見が俺の好みのタイプだったからということだけで。

「……何だろうな。ある種の気の迷いとも思ってくれ。思春期の男にはありがちな行動なんだ」

つまり精神的欲求でなく、肉体的欲情ってヤツ。男ならコレしようがない。いくら恋愛を否定する俺でもこの本能には抗い切れないのである。とは言え、造形として好きなだけで内面まで好きになろうと思わないのは変わらない。

「さて、発情づいた獣も追っ払ったことだし、いつまでもこんなところに一人でいると、また変なのに捕まるぞ。アンタ、見た目はかなり目立つからな」

どの辺が？ とでも聞いた気な視線を寄越す。見た目が整っている奴に限ってそういう自覚ないんだよな。ナンパされるのは今回が初めてじゃないだろうに。……いや待て、ここまでクールな出で立ちだと相手の方がしり込みするケースが多かったのかもしれない。もしかしたら立倉達って勇者？ ……ンなわけないか。

「まあ、俺には関係ないことだな。こっちの話だ、忘れてくれ。じゃあ、俺はもう退散するよ」

こう騒がしいんじやリラックスも何もあつたもんじやない。やっぱり別の場所に移動しよう。

「ちょっと待って。ねえ、あなたってこの街に詳しい？」

引き留められたかと思ったら、何とも意外な質問。ちょっと面喰らって対応が遅れてしまう。

「あー、どうだろうな。人並み以上には詳しい……のか？」

自信なんてあるわけない。自分の街だからって隅々まで熟知する必要もないし。知っているのは自分の日常せかいにあるものだけである。

「私、静かな場所を探しているの。この辺りで公園とか図書館とか心当たらない？ 越して来たばかりだから見当がつかなくて」

なんと、ニューカマーさんである。この時期に蒼乃に越してくるなんて間が悪いにも程がある。しかも静かな場所を探しているらしい。さらに間が悪い。蒼乃はそういう場所が致命的に少ないんです。人嫌いな俺が言うんだから間違いない。同族のよしみで場所だけは教えてやろうと思う。

「そういうのならいくつか知ってるけど、ここからだちょっと遠いぞ」

「そう。時間があるなら、連れて行って欲しいんだけど」

というか、それを言ったらもう連れて行って言ってるようなモンである。悲しいかな、面のいい女にはノーと言えない男子高校生。この女、ホントは分かって言ってるんじゃないだろうな。

しかし、こっちも行くアテがなかったから丁度いい。乗せられていようがそうでなかりうが、案内ついでに気分転換が出来るだろ。何せ隣を歩くのは、こっちの好みを絵に描いたような女なんだし。

ざっと労働と報酬を計算したが、こっちの利益は高そうだ。というわけで今日二度目の柄でもないこと、道案内なんかをしてみることにした。

2. 崩された日常 / 4

＊

女のフルネームは八代沙耶やしろうさやというらしい。俺と同年で、桜花学館おうかがっかんに通う高校二年生。桜花学館と言えば、知る人ぞ知るミッシヨン系のお嬢様校である。俺達一般高校生とは対照的な言葉遣いとか立ち居振る舞いなんかやらにも、なんとなく合点がいった。こうまでクールで無表情が貼りついていられるのも箱庭育ちのせいかな？ 百年くらい人付き合いしてないか、はては今さっき生まれてまだ人付き合いをしたことがないかって感じがする。苦手とか嫌いとかいう以前に人付き合いというもの知らないんじゃないかって心配になる。

にしても、ビッグな冗談だ。住む世界が百八十度違うお嬢様が隣を歩いているなんて。何だか少し緊張する俺。情けないことこの上ない。相手は同じ高校生だというのに。

「で、本題なんだけど、八代……」

「自分と同じ苗字を呼ぶのって変な気持ちでしょ？ 沙耶でいいわ。私も名前で呼ばせてもらうけど、それでいい？」

「あ、それ名案。採用」

違和感バリバリだったからお言葉に甘えることにした。お互いやシロ、ヤシロと呼び合ってる姿はなんかシュールで、傍から見たらたぶんスゲー不気味な二人に見えるだろう。注目を集めるのは出来過ぎた沙耶の外見だけにしてほしい。

「さて、と。んじやどこに行きますか？ 選択肢は多くないけど」

いろいろ要望を聞いてたどり着いたのは、市街地から少し離れた場所にある公園だった。公園といっても、鉄棒やら滑り台やらの遊具のある、あの公園じゃない。海を見渡せる立地に造られたお洒落スポットで、何かで遊ぶというより、散歩をしたりベンチで休んだりするのが王道のタイプの公園。ご老人夫婦が好んで訪れる、喧噪とは切り離された場所である。

道のりはそれほどでもなかったが、いかんせんやることもないんで、海沿いにかかるボードウォークのベンチで休憩することにした。

いつものミスチョイスで、自販で買った熱いミルクティーを沙耶に手渡してやる。お礼を言うその顔は、心なしかさっきより少しほころんでいるように見えた。

「ここ、気に入ったか？」

小さく頷く。そりゃ、あの駅前広場の騒々しさを知っていたらここは楽園。時々聞こえる汽笛の音や人の話し声は、いい塩梅でこっちの心を和ませる。

「そっか。アテが外れてなくてよかったよ」

「ここにはよく来るの？」

「たまにな。基本、俺も騒がしい場所は苦手だからさ」

「そう。じゃあ似た者同士ね、私達」

「かも、な。騒がしい連中の多い街だし、少しくらい気の合う奴がいてもいいよな」

ホント、それは心の底からの望み。街の特性からか変にテンション高い奴が多くてマジ困る。

人もそうだが、蒼乃って街は無駄に都会で、どこに行っても人と機械の雑音が鳴り止むことがない。年がら年中咳き込む病人みたいだ。痛々しくてこっちが泣けてくる。

基本的なプロフィールは言い合ったし、他に聞きたいこともないんで俺は無言。沙耶はさっきからずっと前方を見据えたまま微動だにしない。親子連れの微笑ましい姿を見ているのか、その先の海を見つめているのか判断つかないが、とにかく視線は前を向いたままこちらも無言を貫いてる。

しばしの沈黙。この時間が何だかスゲー楽。他人と一緒にいても俺って安らげるんだ。コレ、今世紀最大の発見である。

……………いや、待てよ。寛いでる場合じゃねえって。ここまで慈善事業で案内したわけじゃない。こっちの気分転換を兼ねてついでに沙耶も連れてきてやっただけのこと。本題はストーカー事件の打開策を考えることだったの。

いろいろ方法を考えてみるものの、どれもこれも銀の弾丸足り得ない。刀折れ矢尽きた俺。猫の手も借りたい、いや待て、そういや丁度良く相談相手がいるじゃん、半ば自暴自棄気味に隣で行儀よく座るお嬢様に助けを求めてみる。

「なあ、沙耶。一つ聞いていいか？」

「ええ、何？」

「お前、ストーカーってされたことあるよな？」

あること前提。何せこの面、この見た目。悶々と後をつける男がいなかったはずがない。

「どうかしら。あまり気にしないから」

甘かった。この女はそういうのに鈍感だった。

「あー、じゃあ質問を変えよう。しつこく言い寄って来た男はいたよな？」

「それなら、いたような気がする。何度も断ったけど、とても熱意のある人だったから」

ま、端的に言えばウザったかったってことね。

「そういう相手ってさ、どうやって手を引かせたか、覚えてるか？」

「さあ。自然とあちらからやめていくもの」

ああ。きっとそれは、お前が鉄仮面でノー一辺倒だから、相手が士気を無くしたんです。

「……そうか。いや、何でもない。ありがとよ」

収穫ゼロ。というか沙耶に聞くだけ無駄だったんだ。理子と沙耶じゃ性格がまるっきり正反対。過去の対処法が参考になるはずもない。

「誰かに縁切りでも頼まれたの？」

「ああ、まあな。んで、女に言い寄る男をどうやって諦めさせるか考えててさ、今ちよっと手詰まり中」

さっきまで治まっていた頭痛がまた襲いかかってくる。何で俺が他人のことでこうまで悩まなきゃいけないんだろ。スゲー馬鹿らしく思える。

「慶太はその女の子のこと、よっぽど好きなのね」

内面でこうも悪態っているってのに、何も知らない沙耶は恐ろしいことを口走る。

「おいおい、ビッグな冗談だな。あの女とはそういう関係じゃないし、こっちも仕方なしに引き受けただけなんだよ」

「そう。でも、悩む必要はないんじゃないかしら？　だって、答えはもう出ているもの。あなたが直接、その男の子に会ってやめさせればいい」

まさに常套手段。それは最初に思いついて、途端に却下した案でもある。

「言葉や態度で巧みに好悪を表現するのは女性の領分。遠回しな説得方法を考えることは得意分野よ。そんなこと、わざわざあなたに

は期待しないと思う。

その子は多分、あなたが直接一言言ってくれることを望んでいる。女の子が、男の子のあなたに頼んだっていうことは、そういうことじゃない？」

「そう、だろうな。でもダメなんだ。それは出来ない。俺はさ、他人が嫌いなんだ。だから必要以上に関わり合いたくないワケ。トラブルなんて特に避けたい」

他人。その言葉で薄気味悪い出で立ちの“アイツ”が眼に浮かんだ。あれが人の本性。知恵を持ち、感情を胸に秘めた、何をしでかさか分からない生き物。好きになれる方がどうかしてる。

死への恐怖が、死そのものよりも恐ろしいのと同じように、危害を加えられるよりも、何をされるか分からないという恐怖の方がずっと恐ろしい。だから、何食わぬ顔でそこらをうろつく他人は、俺にとって不気味な“アイツ”と同じ。もしかしたら、今ここであの爺さんがナイフで襲ってくるかもしれない。そんな馬鹿げた恐怖は脳裏に張り付いたままだ。関わりたくない、近づきたくない。こっちが遠ざかれば、連中は俺に手を出せないんだから。

「だから無理。直接対峙なんてしてやれない。そんなことするくらいならこの話は無視するさ」

「……あなたは出来ないわよ。」

多分、慶太は本当に他人が嫌いだし、これからも好きになることなんてないのかもしれない。でも、人のために何かする自分は嫌いじゃないはずよ。だから、私を助けてくれたし、ここまで案内してくれた。あなた、根は優しいもの。人を好きになる自分は否定しても、人の存在そのものは否定し切れない。困っている人がいれば見捨てられないって、そういう人だと思うけど」

「買いかぶり過ぎだつて。俺はそんなお人好しじゃない」

そう、とだけ言って、沙耶は黙りやがった。何だかこっちが駄々をこねるガキみたいに思えてスゲー居心地悪い。

「……仮に、俺がそんな稀代のお人好しだとして、でも、だからって他人のために自分が傷つくって馬鹿げた事だろ？」

「そうかもね。でも、人が嫌いでも、人の中で生き続けることを選んだのなら、自分が傷つくことは前提として覚悟しなければならないんじゃないかしら。」

どう上手く生きたって人は傷つき続けるから。傷を癒そうと生き続け、また傷付いていく。覚悟を決めるしかないのよ。現実を受け入れ、理不尽な痛みに耐え続けることを選ぶか、虚構を構築し続け、見えない恐怖に怯えて逃げ続けるか」

「……お前、変わってるって言われないか？」

「ないわね。そういうことを言うまで仲が深まらないから」

げ。しまった、地雷だったか。

「あー、悪いな。俺は初対面でそういうことを言う礼儀知らずだ、大目に見てくれると助かる」

「別に気にしてないわ。初めてだけど、言われて嫌な気はしないものの」

驚くくらいクールな表情が貼りついたまま、でも声は優しげなト

ーン。そのアンバランスさが何だか俺は嫌いじゃない。というかこの女、いつも無表情のくせに感情は簡単に顔に出る性質らしいので、本当に怒ってはないらしい。一安心である。

「――ちなみにさ、お前はどっちを選んだんだ？ 耐える方か逃げの方か」

たっぷり間を使って一言。

「耐える方。もともと私には、それ以外の選択肢は用意されていなかったから」

意味深な発言の多い沙耶。いちいち聞くのも無粋だから何も言わないことにする。

「覚悟、ね……」

確かに、答えははっきりしていたんだよな。要は俺に覚悟が足りないだけのこと。他人の存在を否定し切れないなら、自分が傷つく覚悟を決めねえと。孤立することを望んでも、孤独になることは耐えられないから、俺は人の中で生きている。なら他人から逃げ続けるなんて土台不可能なことだったんだ。それで誰かから傷付けられても、それは俺の責任として受け入れなくちゃいけない。

どうせいつか訪れる試練なら、今乗り越えてやるさ。乗り越えられなかったから堕ちていった連中と俺が違うことを証明するには、怖くても、恐ろしくても、ビビりながらも、そこにいる在りのままの他人を信じてみるしかないんだから。

「ありがとよ。なんとなーく、士気が上がったわ。いや、初対面の

人間にこうまで言われるとは思ひもしなかった」

ホント、用意していたかのような凝ったアドバイスしてくれたんでちょっとビックリ。

「ごめんなさいね。余計なお世話だったかも」

「そうでもなかったぞ。占い師にでもなればいいんじゃないか」

「何か言えるのはあなたのことだけよ。初めて見た時から、多分あなたは私と同じタイプの人間だと思った。だから、なんとなく悩んでいることは分かる気がしたの」

「そっか。で、どうだった？ 俺はお前と同じ種類の人間だったか？」

「――ええ。本当、似た者同士だったみたい」

微笑する沙耶。初めての笑顔。絵になるなんてレベルの表情じゃない。何だか精巧な人形でも見ている気がして寒気すらした。

でも、沙耶は人間以外の何物でもなかった。その笑顔が同族を見つけた喜びなのか、自分の内面を体現する人間を見ての哀れみなのか、どちらとも判断つかない複雑な表情だったから。

「お前もいろいろ、大変だな」

そんな言葉が漏れる。何もわかつちやいないが、ただそんな労りをかけてやりたいという衝動があった。

「何か言った？」

「いや、何でもない。――――さて、と。俺はもう行くわ。これから人と会う約束があるんだ」

正確には、これから会う約束を取り付けるわけだが。

しかし、沙耶との会話は予想以上にいい気分転換になったし、ストーカー撃退の方法も見通しついたし、なかなか有意義だった、と柄にもなく素直に感謝。今日は俺らしくないな。いつもの反骨精神が抜けちまつてるみたいだ。

「そう。今日はありがとう。いい所を教えてくれて」

「また会えることがあったら、今度は別の場所も紹介してやるよ」

ほら、こんなトゲのない言い方で優しさ見せる俺は俺じゃないだろうが。

「そうだったら、いいわね」

沙耶は何も言わなくなった。さよならを言わないのは、また会えるからという自信からか期待からか。特に何か言い忘れたことも、言うべきこともないんで、俺も無言でその場を立ち去ることにした。

振り返れば、もの寂しそうな肩が見える。さっきの例もあるし、女を一人放置するっていうのは男としてどうなんだと思ったが、慇懃にエスコートするのは俺のキャラじゃない。それにお互い静寂を好む同好の士、基本的には一人でいたいのが本音。ここなら立倉みたいなバカも出没しないし平気だろ。

きっぱり頭を切り替えて、治郎の携帯をコールしながら公園を出る。

——さて、俺のやるべきことは分かってる。必要なのは覚悟だけ。もしかしたら、俺が思いつかないもつといい選択肢があるのかもしれないが、覚悟に勝る決断はない。どんな結末も受け入れるさ。自分の弱さを誰かに押し付けるようなことだけは、絶対にしたくないからな。

＊

「女の子同伴の食事中に呼び出しながら、社さんはよっぽど死にたいらしいですね」

「ほーらイラつくだろう、ムカつくだろう？　メシ時に茶々を入れられるのは誰だっていい気分しないよな。ならいつものお前の行動を悔い改めろ、バーカ」

「はいはいケンカしないでー。ほら治郎君。今日の調査の報告よろしく。アルバイトに最も大事なのは雇い主に対するほうれんそうよ、ほうれんそう。報告・連絡・相談三原則」

高校の教師みたいなことを都瑚さんは言う。いや、案外ハマリ役なのかも。日がな一日茶ア飲んで寛ぐ保健室の主なら俺、アリだと思ふ。白衣に消毒液の匂いとか似合いそうだから。

一週間ぶりにお馴染みのメンバーがお馴染みの部屋に集合。相変わらず都瑚さん家の応接間は豪華だが、ここには似つかわしくないチープな鳩時計をいつ来ても見してしまう。毒々しい原色の色使いは

お世辞にもお洒落とは言い難い。

会うなりブーブー文句を垂れてた治郎が急におとなしくなったんで何事かと意識を鳩時計から戻す。

「どうした？ 何か言いたげな顔だな」

「ってか、社さん。アンタ、理子先輩の方はカタついたんですか？」

「カタはついてないが見通しはついた。というか覚悟が出来た」

首を傾げる治郎。ははは、滑稽だ。面白いから一生お前には答えを教えてなどやらん。

「何？ 理子ちゃんって、噂の慶太君の彼女？」

こういうゴシップネタには耳聡い都瑚さん。

「違いますから。それより、おい治郎、早く報告しろって」

「へいへい。」

塚原亮介と山本大智がよくつるんでたグループに話を聞いてきましたけど、言うまでもなく、恨まれる理由は多過ぎて犯人の見当はつかないそうです。今日死んだ男の方も同様ですね。女の方はキッズ・ギャングじゃないんで一切分からないそうです。あーあと、事件当日に追われてた女にも心当たり多過ぎるようでこちらも不明。ただ、目撃した奴の話だと、二十代後半のOLさんだったらいいですよ」

「あれ、一般人か。てっきり素行不良少女だと思ってたけど」

「俺ですよ。そうすると探し出すのは困難ですよ。範囲がデカすぎますから」

「確かに。ここにもいるものね、二十代後半のOL」

若干疑問が残るOLさんである。何故って、都瑚さんの仕事は一銭にもならない『G件』犯退治。日々の方便の収入源は俺達も知らないのだ。だと言うのに年収は三千万以上あるらしい。どっからその金ふんだくっているのか。日本社会の暗部を知ってしまいたい。それで深くは聞かないことにしている。何だかんだ言ってもデスクワークが多いという意味ではOLと言っているかもしれない。

「何か他に特徴って分からないのか？」

「そう、ですね……。いや、分かるのは背が少し高くて髪が長い、とかくらいです」

「何だか他人の気がしないわね……」

「都瑚さん、何気なく現場に出没したりしてないですよね」

「慶太君、いくら私でも殺人を物見遊山する趣味はないわ。あ、でも解剖は好きよ？ 司法解剖とか特に」

「おっかないこと言わないで下さい。で、都瑚さんはどう思うんです？ 俺達、この女が『肉体強盗』に一番近いって踏んでるんですけど」

「そう考えるのが自然よね。今朝になって女性被害者が出たけど、

二十代女性の死体ではなかったし、結局行方は知れない。共犯者がいるとか、そもそも事件とは無関係である可能性もあるけど、まずはこの女性を探し出すのが当面の仕事かしら」

「でも、この事件って本当に『G件』なんですかね？ まあた『G件』に見せかけたジャンク狩りの可能性ってないですか？」

治郎の言うジャンク狩りとは、キッズ・ギャングを狙った襲撃事件のこと。日頃悪行を働く連中への報復を主な動機として、数ヶ月前まで街の人間達によって頻繁に行われた。最近じゃ『G件』がキッズ・ギャングを襲ってるんでほとんど見なくなったが、それでも血の気の多い阿呆な正義漢がたまに連中を闇討ちしてる。

「それはないわね。この事件が『G件』足り得る証拠が出てしまっているもの。世間にはまだ知らされていないけれどね」

都瑚さんは部屋の奥の机の引き出しからデカイ封筒を取り出して、中の写真をテーブルに置く。

人型らしき物体のグロテスクな絵が写っていた。たぶん、最初の事件で死んだ二人の死体だろう。警察からぶんどってきたに違いない。

「鑑識の結果、二つの死体から、わずかだけどマニキュアの成分が検出されたらしいの。それ自体は広く流通するもので、犯人を特定する証拠にはならなかったんだけど」

マニキュアは手の爪に塗るもの。ってことは……。

「素手で人の体を引きちぎったって事ですか？」

自分で言っというて寒気がする。しかもマニキュアを塗っているってことは女の可能性大。さらに寒気がする。

「恐らく、ね。もうこれは人以上の仕業としか言いようがないわ。素手で人の肉、骨、神経を握り潰しているんだもの。これが、今回の事件が『G件』たる理由」

「社さん、アンタの予想、大当たりですよ。素手で、なんてまるつきり俺と同類ってことじゃないですか。今回賭けなくてよかった」

賭けときゃよかった。

「さて、と。各々今後の動きを決めましょうか。いつも通り、二人は情報収集に徹すること。女の素性と居場所を突き止めてね。私は独自ルートで事件を調べるから」

「うーす。でも、都瑚さん、さっきも言いましたけど、女を探すのは時間がかかりますよ?」

「特に社さんは、今個人的な女関係がグチャグチャした生活してますから、さらに時間かかるんですよ」

「うるっせえんだよ。今に見てろ、きっちり消化してやるからな」

「否定しないところは潔いですね」

しまった。まだ本調子じゃない俺。毒毛が抜かれて反骨精神が弱まっているんだった。

「とにかく、二人とも頼んだわよ。どうにか手掛かりを探してほしいの。犯人にしろそうでないにしろ、非日常を経験して何かしら精神に歪みや異常をきたしているはずだから、そういう人間を探してみるのも一つの手かも」

「分かりました。とにかくやってみますよ。おい、治郎。お前はそのままキッズ・ギャング方面頼むわ。連中、ローラー作戦とかやってるから、混ざりつつ情報集めてくれ」

「社さんはどうするんですか？」

「類は友を呼ぶってな。俺は俺で手当たり次第に街のOLに当たってみるわ」

「ま、社さん、顔だけは整ってますからね。そういうキャッチ商法じみたことは前世からの宿命かも」

「人を生粹の詐欺師みたいに言うな」

巧みな話術で女を籠絡なんて俺は出来ねーっての。出来たら理子なんて簡単に追い払ってる。

「よし、じゃあ今日は解散。来週また集まりましょう。あ、でも新しい情報はどんどん私に報告すること。よろしくね」

「社さん、夕飯食べていきます？」

「ああ、そうだな。安上がりな牛丼でも食うかな」

「あ、ちょっと待って慶太君」

部屋を出ようとして都瑚さんから呼び止められる。あれ？ コレ
なんかデジャヴ。

「はい、今週分。効き目はどうだった？」

そして見覚えのある、小さな白い紙袋を渡された。

「――ああ、例の薬ですか。おかげでここ一週間はほとんど錯覚症
状は出てないですよ」

「そう、よかった。思った通りだわ」

「原因が分かったんですか？」

「それは分からないけど、何が必要なのかは分かった」

「……どうせまた度胸とか言うんでしょ？」

根性論支持者の都瑚さんに何度も言われていることである。だが
患者としてその対処療法は曖昧すぎて信じる気にもなれない。

「流石、分かってるわね。とにかく気をしっかり持つことよ。薬を
飲んでも、君が弱気になってたら見えないものも見えてしまうから」

ま、曖昧なものに怯えてるんだから、その対処法が曖昧でも仕方
ないか。薬のお礼をしつつ、治郎と一緒に応接間を後にした。

2. 崩された日常 / 5

*

治郎と駅前で夕飯を食い終えて、家に戻ってくる頃にはもう時刻は夜の八時。暇だからって治郎の趣味に付き合うんじゃない。家電量販店巡りなんて俺にとっちゃ不毛過ぎる。

ドアを開けるなり、ニャーなんて俺の部屋には似つかわしくない声が聞こえてきた。どうやら俺の敵意は通用しなかったようだ。よっぽど気に入ったのか、相も変わらず今朝の銀猫が俺のベッドの上で丸くなっていやがった。

「クソ猫め。俺がいつまでも、お情けかけていると思ったら大間違いだ」

恥を知らない銀猫をベッドから追いやる。しかし今度は床に置いてあるクッションに陣取りやがった。あくまでここを出ていく気はないらしい。

「……ったく。早く飼い主のところへ帰れよな。でないと、メシにありつけねえぞ」

ネコ缶なんて洒落た代物、我が家には一つ足りとてストックはない。そして闖入者に分け与える食料も何一つないし、勝手に家に上がり込んだ礼儀知らずに与えるつもりもない。よって動物虐待の意志がなくともお前にメシは奢れないのだ。

そんな俺の思考を読んだのか、途端ネコは怖いくらいにピクリと

反応する。エスパークかコイツ。スゴイ勢いで窓に突進し、ガリガリと引っかく狼藉を働きやがる。

「おいコラてめえ、住居不法侵入の次は器物損壊か」

急いで窓を開け放つと、猫はベランダを疾走して夜闇に消えていった。やりたい放題やって何も言わずにとんずらするとは泥棒と大差ねえじゃねえか。いや、説得も通じねえし、こっちが為す術もないからどっちかっつていうと台風の類かも。

そうだ。アレはもう避けきれない自然災害だったんだと考えよう。そっちの方が後腐れないし俺の腹の虫も何とか収まる。……でも待て、台風だったらまた必ずやってくるんじゃないか。それ、サイアク。もう戻ってくるなと願掛けしておく。

いつもの癖でベッドに横になると、凶悪な睡魔が襲いかかってきた。今日はいろいろと働いたし、奇妙な奴との出会いもあったから疲労が溜まっているらしい。やることをさっさと片付けて風呂にも入ろうと思う。

携帯を取り出して理子の番号をコールする。少し気まずい感はないが、こっちも早く問題を処理したいんで気にしてない風を装うことにした。元来、あえて空気を読まないのは得意である。嫌われるのも拒絶されるのも慣れてるってワケ。

少し長いコールの後、覇気のない理子の声がかなりの間を使って聞こえてきた。あっちは遠慮の度合いマックスである。

「お、ちゃんと出てくれはするんだな。てっきり放置されるかと思った」

そんな軽いジョークもシカトされる。これは予想以上の陰悪ムードなのかもしれない。だが厚顔無恥に定評のある俺はそんな理子の態度も意に介さずに、いつも通りの対応をとる。

「おいおい、お前、まだふてくされてんのか？」

「……………そういうわけじゃ、ないけどさ」

「まあ怒っていてもいいや。文句なら聞いてやるから、お前、明日一時からって時間取れる？」

「だから、怒ってないってば」

「わかったわかった。で、明日来れるか？」

「……………うん、丁度バイトが休みになったから」

「そっか、そりゃ好都合。んじゃこの前の喫茶店に集合な。例のストーリー男と話をつける」

「え、そんな急に…………」

「お前に立ち会ってもらわないと効果が薄いんだよ。まーいろいろ危険は高いが何とかする。引き受けたからには手は抜かねえさ。つてことで、ちゃんと遅れずに来いよ？　じゃあな」

用件だけを伝えて通話を切る。電波の向こうでは理子は何やら騒いでいたが、あっちの都合なんて知ったこっちゃない。仮に理子が来なかったとしても、俺はストーリーカー野郎をこっぴどく罵ればいい

ただだから問題ないし。

携帯を放り投げて再びベッドに横になる。

眼を閉じて明日の俺を想像してみると、緊張し過ぎでオロオロしている自分がいた。不安と恐怖でいっぱい、終わったら終わったでとてつもない後悔に苛まれてる。治郎辺りが見たら爆笑する俺の醜態である。

困っている人を助けずにはいられない生粋のお人好し。沙耶のそんな言葉が思い出される。

そうだったら、俺は自分の頭の悪さに泣き続けるしかない。何にしても明日、いろいろなことに片がつく。今日は遠足前日の小学生よろしく、眠れない夜を過ごすことになりそうだった。

＊

「あら、今日は随分早いご帰宅ね」

うら若き助手達が帰っていったから、しばらく応接間で物思いにふけていた都瑚は、深い茶色の外套に身を包んだ闖入者にそんな言葉をかけた。

「ここ一週間の無理が祟ったようだ。体力の消耗が著しい。今日はもう休ませてもらう」

インゴットを溶かしたかのような鮮やかな金髪と、深く吸い込まれそうな碧眼は、青年の美丈夫たる容姿を恐ろしいまでに際立たせていた。

風貌から、歳は都瑚とそう大差なく見受けられる。しかし、面貌に似つかわしくない厳格な口調が、年齢以上の時の経験を感じさせる。

さっさと部屋を出て行こうとする青年に都瑚は拗ねたような表情を向ける。

「テイラー卿、私には結果を報告してくれないの？」

「その呼び方はよせ。調査はこれといった収穫もない。話すだけ無駄だろう」

「それはこちらが判断するから。疲れているでしょうけど、ちょっと会話に付き合ってください。丁度手持無沙汰だったのよ」

都瑚はいそいそと部屋の隣にあるキッチンへと向かう。

青年――ローデリック・ショウ・テイラーはしぶしぶ都瑚が座っていたソファアの対面に座り、無然とした面持ちで旧友が戻ってくるのを待ち続けた。

＊

日がな一日調査に東奔西走していたというのに、ローデリックは姿勢を正してソファアに行儀よく座っていた。その出で立ちも精悍な表情も、疲労というものを微塵も感じさせない。旧友のそんな周囲に対する気遣いと根っからの気真面目さに、少しくらいリラックスすればいいのにと、都瑚はいつも感じてならなかった。

そんな都瑚の視線も意に介さず、淹れ立ての紅茶を見つめながら、ローデリックは話を切り出した。

「先刻も言った通りだが、目新しい情報は持ち合わせていない。今日も今日とて霊脈に沿った調査を行ったが、手掛かりすら見つからず徒労に終わった。話の種としては、せいぜいにわか能力者と二回ほど対峙したことくらいか」

「あら、また？ これで何回目かしらね。あなたって彼らによっぽど好かれているみたい」

ローデリックはここ一週間で都合七人もの異能力者と接触していた。本来、異能力者はその異質性故の迫害を恐れて社会の奥深くに潜むのが常であるため、遭遇率が異常に高いローデリックに都瑚は殊更驚いた。

「違うな。私は君と違って大衆の道を通らない。人の世と隔絶された能力者達と相對することが多いのは道理だ」

「そっか、そういう見方もあるか。で、どんな能力者だったの？」

「念動力サイコキネシスと発火霊視パイロキネシスだ。発火霊視の方は前にも人里に現れたんだろう？」

「ええ、最初の『G件』犯ね。通り名は……確か発火魔だったかしら。深夜、通り魔的に路地裏に出没して都合三人を焼き殺した異能力者」

アレが悪夢の始まりだったかと、都瑚は思いを巡らせる。第一の『G件・発火魔』は、睨んだ対象を発火させる、発火霊視能力を有

した能力者であり、また都瑚が初めて敵意をもって対峙した能力者でもあった。

「世間に知られぬ小物は多いが、今回の能力者もその類だった。細々と、他人に危害を加えることで充足感を得ていたらしい。殺人にまで手を染めていないのが不幸中の幸いだった。命を奪うまでにならなくて、あちらもこちらも僥倖というべきだな。」

だが、そうは言ってもこの蒼乃は異常過ぎる。街の多くの異能力者は自らを隠匿しようとせず、あえて人込みの中を闊歩している。……まったく、カインの末裔がこうまで人の社会にひしめいているなんて、悪夢そのものだ」

「彼等は違うわよ。異能力を後天的に、しかも誰かの仕業によって発現させた種類の人間ですもの。広く一般的な異能力者とは存在からしてズレているわ」

ローデリックは都瑚の言葉に首を傾げた。

「私はその手の知識に関しては消息筋ではない。いわゆる異能力者というのはどういうものなんだ？」

旧友の問いにしばらく思案する都瑚。彼女は面倒な説明が好きでない性分だった。だが、協力してもらっている立場で説明を渋るのは礼に失すると判断して、言うべき必要最低限の情報を頭の中できとめる。

「……そうね。異能力者、超能力者とも言うけれど、彼等は自己の精神力によって、通常の間人が出来ないようなことを起こした、紛れもないヒトなのよ。」

先天的に、自己が未だ意識していない魂の領域——無意識領域か

ら流れ出る情報を受け取ってしまった人間でね。超能力って言うのは、自然界から外れた人間だけが持つ、生まれながらの特異な機能。能力者は純粋な人間として異能を保有する者なの」

「なるほど。確かに、その理論はこの街の異端者には当てはまらないな。カインの末裔と呼ぶにもおこがましいイミテーションということか」

「第一、カインの末裔であるのなら『ノドのまとい』が黙っちゃいないわ。街を監督する私の意向を無視して保護しに来るから」

声は平静を保ちつつも、都瑚は苦々しい表情を浮かべていた。腹立たしさを飲み込むかのように紅茶に口をつける。

「彼らに会ったことがあるのか？」

「昔、ね。父がまだ監督の任に就いていた時。市内の異能力者を勝手に保護して行ったわ。こっちに連絡も寄越さずに。」

——ああ、思い出すと今でも腹が立つわ、あの銀髪女」

都瑚はとうとう静かに、怒気のこもった声を上げる。普段なら大抵のことは笑って片づける人柄だけに、その変わりようは恐ろしさに拍車をかけていた。

何かこちらが推し量り切れない複雑な因縁があるんだろうと、ローデリックは何も言わず都瑚の憤りが収まるまで待つことにした。

「あ、ごめんなさい。一人で勝手に癪癪起こして」

「構わないよ。君のそういうお茶目なところは気に入っている」

真顔でそんな大それたことを言う。こちらとは価値観が違うというのを、英国留学で都瑚は弁えているので赤面することもない。

「話をもとに戻そう。霊脈以外にも、魔術的な要地はいくつか巡って見たが、やはり結果は同じ。こうまで異常が過ぎると逆に原因を見つけ出すのは困難だ。日に日に変わる魔力の流れは中心の異常を隠すための布石か、はたまた魔術の発動によるものなのか。どちらにしろ、この異常を引き起こしている者がいるとしたら、脅威以外の何物でもない」

「私も俄かには信じられないわ、これが人間の仕業だなんて。でも、自然摂理の起こした災厄であるわけがないのよ。彼らなら、異能力なんて面倒な手段を使わずに、もっと簡単に人類を抹殺しようとするはずだから。それこそ天変地異で効率よく大量に、ね」

よく知っているだろうとでも言いたげに、都瑚は不敵な微笑を浮かべる。ローデリックも困った風に微笑した。

「そう、だな。それにヒトを介した異常はヒトの手によるものという何よりの証拠、か。君の方はどうだ？ 何か分かったことは？」

「残念ながら何もナシ。調査は成果が上がらないし、報道された能力者の搜索、排除だけで手一杯だし、本当、猫の手も借りたいわね」

都瑚は深々とソファーにもたれかかり、大きく溜息をつく。ローデリックは気難しい顔を貼りつけたまま、ティーカップに手をつける。

「『連盟』はこの騒動に干渉の立場をとるつもりという話だった

な。これだけの異常、捨ておけば相当な被害を生み出すだろうに。彼らにとって不利益でしかないはずだが。一体何故だろうな」

「さっぱりよ。靈的に質の高い土地だから、いくら極東の地と言えど是が非でも介入して収拾を図ろうとするだろうな、なんて思っていたんだけど」

「何か、彼らが介入を渋るような要因はこの土地にないのか？」

再び都瑚は思案する。それから間もなく、眉間にしわを寄せながら小さく呟く。

「……まさか、鬼の存在を恐れているのかしらね」

「鬼？ 私も聞いたことくらいはあるが。確か、日本の精霊だったか」

「ええ。この街って過去の歴史があまり残っていないんだけど、鬼の伝承だけは何故か連綿と受け継がれていてね。昔、この土地はその鬼の一族が支配していたそうよ。真偽は定かじゃないけど」

「だが、鬼が存在するというのは紛れもない事実なんだろう？」

都瑚が伝説を語るような詩人でないことはローデリックも重々承知していた。確固たる存在の証拠があるからこそ、今この場で話題にしたのだろう、と。

「ええ、あなたの国の猫妖精ケット・シーしかり、ゲルマンのエルフしかり、歴とした実在する精霊よ。『連盟』って精霊の類に及び腰じゃない？ まあ、魔術師にとって彼等は鬼門だし、苦い経験しかしてないか

ら、警戒するのは仕方ないことだろうけど」

「『連盟』は何の証拠もなく彼らを恐れたりはしない。ならこの街の異常、その鬼の生き残りが関与しているという可能性は？」

「ない、とはいいい切れないけど、彼らの仕業にしては遠回しすぎるわね。過去の歴史を見ても猪突猛進がセオリーだったみたいだし。それに、彼等はずっとの昔に人間によって滅ぼされたわ。生き残った者達も人間と交わって、もう純血種は残っていないはず。千年間の人間への憎しみなんてこの時代にまで生き残っていないと思うけど」

黙り込むローデリック。瞼を閉じ、記憶を探るかのように熟考する。

「……………確かに、そうか。英国にも精霊の血筋を受け継ぐ者はいるが、その思いまで受け継ぐことはほとんどない。年月は生物の歴史すら風化させる。いわんや人の記憶をや、か」

やれやれ、と自分達の置かれている事態がまったく明瞭としないことにローデリックは嘆息する。だが、それでも諦めはしないという強い意志がその声からは十分すぎるほどに感じられた。

「何にせよ今回の一件、謎が多過ぎるな。まだまだ核心には程遠い位置に私達は釘づけらしい」

言いながら、ローデリックは静かに立ちあがる。百八十ほどの長身であるが故、彼が立ち上がると他を圧倒するかのような迫力があった。

「さて、今後も、私は割り振られた地域の調査を続行しよう。君も今まで通り、他の地域の調査と街の監察を頼む」

「助かるわ。本来なら、土地の魔力異常なんて感知出来るのが一流の管理者なんだけど」

「君はまだその任について日が浅いし、一流の管理者といえども、街の全てを監督するなど土台無理な話だ。加えてこれだけの不可解かつ広範な異常。誰かに協力を求めるのは当然だろう」

「ありがとう。でも私、あなたと違って攻撃系の魔術って多くないから、能力者をけん制するっていうのは期待しない方がいいわよ？」

「承知している。第一、際限なく誕生する異能力者をいちいち相手になどしてられない。ならばその原因である根源を解明し、元を断つのが正道だ。じっくり焦らず攻略するさ」

年相応の不敵な笑みをローデリックは浮かべる。まるで怖いもの知らずと言った風な印象を与えたが、それでも無謀というより勇敢という言葉がしっくりくる笑みだった。

「……本当にごめんなさいね。家督相続で忙しい時にこんなこと頼んで」

ローデリックとは対照的に苦笑いを浮かべる都瑚。申し訳なさそうに言うその姿に、ローデリックは真面目腐った顔を向けた。

「気にしないでくれ。一、二ヶ月程度の滞在はさして問題ない。それに、友人の頼みも聴けないで人民の導き手たる貴族など務まるはずもない。これも高貴なる義務の一環さ。それより、辛いのはむしろ

ろ君の方だろう」

言われても心当たりがないのか、都瑚は小さく首を傾げた。そんな彼女をローデリックを強い眼で見つめる。

「お父上の消息は未だ判明していないじゃないか」

「……………そういえば、そうか。父が姿を消してもう半年、か。早いものね。どこで何をしているやら」

「……………心配だな。気持ちは察するよ」

「あら。別に心配なんかしていないわよ」

都瑚の言葉にローデリックは少し驚いた。気丈に振る舞っているのかと思い、落としていた視線を戻して都瑚の顔をそっと盗み見る。だが、そこにはいつも通りの、純粹に凜とした美しい表情があった。

「私達、魔術師っていう生き物はね、学問のために命を懸ける学者なの。知識という海に絡めとられて溺死するのが常。どこで死のうと、残された者は頓着なんてしない。重要なのは亡骸ではなく、その人の研究の成果だけだから。だから父の安否を心配しているんじゃないの」

ローデリックには、都瑚の言わんとしていることが推し量れなかった。ただ、都瑚の次の言葉を何も言わず待つだけだし出来ない。

「分かるかしら。私が感じているのは、恐怖。この未曾有の災厄に、あの人が関与しているんじゃないかっていう、恐れよ」

「……まさか」

「疑うのは当然でしょ？ 父はこの地古参の魔術師であり、この街の霊的な前管理者。見聞深くして知識に富み、地の利を有し現在行方知れず。今回の異常をやったのけるだけの要素は満たしているもの」

「……………そうか。まあ、まだそうと決まったわけではない。早合点は禁物だ。仮に君の父上が元凶だとしても、当初の約束通り、私は君の指示に従って行動するまでさ」

ローデリックは、その言葉に対する都瑚の反応が、彼の想像していたものと異なることを認め、怪訝な顔をする。

「どうした？」

「いや、ちょっと驚いちゃって」

「ん？ いくら元凶と疑わしい人間の娘とはいえ、私が友人である君を信じるのは当然だろう？」

「そうじゃなくて。あ、いやそれは嬉しいんだけど。騎士団ってそういう種類の魔術師には容赦ないと思ってたから」

「国教会騎士団は、世界正義を謳う傲慢な組織ではないよ。国教会に仇なす怪異や魑魅魍魎を駆逐するのが私達の仕事だ。当然、その対象には魔術師も含まれるが、国教会そのものに牙を向けぬ以上、こちらとしては取り締まる大義名分もなければその意志もない。これは友人としての私的な協力。純粋に、罪科のない民を死なせたくない私の意志さ。報告などしないし、私が出しゃばるつもりもない

よ」

「そう。ありがたいことね。じゃあこれからも、縁の下の力持ちとしてよろしく頼むわね」

「それは構わないが、君は些か人使いが粗すぎるがね。では話し相手はこれくらいで解放してくれるか？ いよいよ以って身体が言うことをきかなくなりそうだ」

「ああ、そうだったわね。付き合ってくれてありがとう、ローデリック。楽しいおしゃべりだったわ、よい夢を」

では、と一礼してローデリックは踵を返す。都瑚はひらひらと手を振ってその大きな背中を見送っていたが、部屋を出ようとノブに手をかけたローデリックが一度静止して、ゆっくりと振り返った。

「――そうだ。君に一つ聞き忘れていたことがあった」

「あら、何かしら？ 彼氏ならまだまだ募集中心よ？」

ローデリックは呆れて頭を抱えた。

「そうではない。あの異能力者の少年二人のことだ。彼らを巻き込んで良いものなのか？ 事情を知っているとはいえ一般人だろう」

「彼等は有能な助手よ。私よりこの街の暗部をよく知っている。それに、彼らはこの異常の中心に近い存在かもしれない。例外的な力を持つということは、異常に対するアンチプログラムとして、実行者が意図的に用意した役者である可能性が高いもの。平気よ、彼等は私がちゃんと監督するから」

都瑚のあっけらかんとした顔と自信満々の言葉に、ローデリックは嘆息するしかない。

「……まあ、君が良しとするのなら私は何も言うまいよ。だが気をつける。正体を知られては面倒なことになるぞ。それだけは肝に銘じておくことだ」

そうして魔術師と国教会騎士の会話が終わった。ローデリックが部屋を出ていってから、都瑚は再度思案に没頭する。

父が失踪して半年。それと期を同じくして怪異は見え隠れし始め、四か月前の『グリモワールの典司事件』。そして今日まで続く『G件』。一連の異常が自分に関わりのあることだということは、都瑚にとってもはや疑う余地がなかった。それは蒼乃の霊的な土地を管理監督する魔術師としてだけでなく、前任の失踪した魔術師の娘ということからも。

それまでは、誰しもが持ち、だが法や倫理、モラルといった文明がおさえつけていた他人への不満、憤り、嫉妬という負の感情。『G件』はその感情の発露の媒介と成った。人が人を恨み、憎み、殺すことを是と思わせるだけの理由と絶対的な力を用意して模倣者を生み出した。そして模倣者を先導として悪と正義の明確な対立構造は大衆すらも巻き込んで、彼らを二色に色分けしていく。家族に、友人に、社会そのものに憎み、憎まれるという暗い色分け。疑心暗鬼は不安と対立に拍車をかけ、人々の心は今日ここにきて限界まで荒み切っている。

これが人間の用意した脚本通りだったとしたら、一体何を目的としてこの異常を引き起こしているのか。

人為的な異能力者の量産という『存在』の腐敗と、人々の『心』の腐敗。

都瑚は嫌な予感を拭い去れない。だが何も出来ない自分を齒痒く思いながら、冷め切った紅茶を見つめ続けているしかなかった。

2. 崩された日常 / 6

日曜日の昼下がり。

今日も今日とて予想最低気温は二度。現在の気温九度という、晴れているくせにまったく快適でない蒼乃市。その市街地にある駅前ビル中の喫茶店内は、厳しい寒さの影響もあってか、もののみごとに閑散としていた。屯しているのは「美女と野獣」なんて言葉がしっくりきそうな面妖カップルと、大学生らしき男女の集まり、あとは子連れのおばさんだけだった。

理子と喫茶店の入口で合流し、奥まった一角にある四人掛けテーブルを占領した。オーダーを店員さんに伝えて二人並んで座るが、理子はさっきから怖いくらいに黙りこくっていた。言葉を交わしたのは合流時の挨拶のみで、それにしただって馴染みの知人同士のものとは到底言えないようなものだった。

明らかに、理子は数日前のいざこざを引きずってわだかまりを覚えているらしい。こちらとしては気が滅入ってしょうがない。ただでさえ精神状態は良くないのに追い打ちをかけるなつての。他人を氣遣う余裕なんて持ち合わせてないのに意識を向けさせないでほしい。

「おい、理子。いい加減機嫌直してくれ。お前がそんな調子だと俺のペースが狂う」

たまらず声をかけると、何だか泣きそうな顔を向ける理子。一体俺が何をしたってんだ。

「だから、何度も言ってるけど、私は怒ってないし、普段と変わらないよ」

「ンなわけあるか。ドサクサにまぎれて過去を捏造するな。お前はそんな肃々とした態度とったことなんて一度もないだろ」

「あるもん。とにかく、私は怒ってないよ」

これ以上私に話しかけないでとも言いたげに顔を背けやがる。まったく、意味が分かんねエ。押しても駄目だから仕方なく引きさがって黙ることにした。

例のストーカー男に送りつけた呼び出し状では、一時半を約束の時間としている。店内の時計を見れば、ここに来てまだ十分も経っていないかった。気まずさで胃がキリキリする。あと三十分近くもこんな状態が続けば、きっと俺は中ボスと対面する前に満身創痍。予想以上の醜態をさらす結果になってしまうだろう。

嫌な光景を頭に浮かべていたら、いつもみたいにいきなり理子は何かを話し出した。

「あん？ 何か言ったか？」

かろうじて聞き取れたのは、「私」という単語だけ。問いかけても理子はそっぽを向いたままだった。

「……………私よりさ、ケイちゃんの方が怒ってるんじゃないの？」

「お前、よくそれを訊いてくるけどな、俺ってそんなに癪癪持ちか？」

「そんなことないけど。でも、私ってよくケイちゃんを怒らせるからさ。この間のことで、また怒らせちゃったかなって」

「この間って、お前が突然帰っちゃったあの日のことだろ？ 気にしてねえよ。大体、あの日俺の機嫌を損なう何かあったっけ？」

とりたてて思いつくのは、突然逆ギレしてバックれたことくらい。けどそんなこと俺もしょっちゅうあるし、自分にも経験がある以上、それを棚上げして怒る気にもなれない。

俺の言葉に違和感を覚えたのか、理子は向き直って怪訝な眼差しを向けてくる。

「それはケイちゃんりの優しさ？ それとも本心？」

「何度も言わせるなよ。俺は他人に優しくすることなんてない。で、俺の質問には答えてくれるのか？」

視線を落とす理子。躊躇っているのは明白だった。こういう理子は経験不足だ。どう対応していいか分からず、無意識に大人しくなっている自分に呆れちまう。

理子が話し出すのには結構時間がかかった。

「……ほら、あの時にさ、自分の気持ちをケイちゃんに押し付けちゃったから。そういうの、ケイちゃん嫌いでしょ？」

というと、理子が言っているのは、人には言葉にしなきゃ分からないことがあるとかないとかの、あの話らしい。蒸し返したところ

ろで俺も理子も譲る気がないんだから議論は平行線のまま。それならそれでいいと思う。沙耶曰く、俺は人が嫌いだが人の存在を否定することまでは出来ないお人好らしいから、それはつまり他人の主義主張も否定できないってことだ。自分を押し付けるのが嫌いつてことは、イコール他者の存在があつて初めてそれを主張できるということでもあるし。

「悪気があるんなら、同じ轍を踏むなよ。もう済んだことだつての。お前が謝つて俺が許したんだから、ホラ、後腐れないだろ？」

理子はゆっくりと静かに首を縦に振る。だが、その表情は承知はしたが納得はしていないという感じだ。まだ悪いことをしたという意識が拭い去れないのか。

悪びれて意気消沈する女には、こっちの我を通しにくい。労わつて慰めて優しくして、うまい落とし所を見つけることをどうしても目先の目標に据えちまいがち。うん、それってスゲーやり辛い。女つて、こういう時卑怯だと思ふ俺は意地の悪い男なんだろうか？

生まれの損を嘆いても仕方なし、セオリー通りどうにか理子の機嫌を治そうと試みてみる。

「……仕方ねえな。いいか？ 人が嫌がることをしないつてのは人類共通のマナーだ。でもな、食事でも何でもそうだがマナーは重視されるものであつても絶対視されるもんじゃない。時と場を選んで臨機応変に。融通の利かない公共精神なんて却って危険だぞ。「絶対」なんて言葉はそう信じてやまないからこそ他人にこれを強制するからな。それこそ自分を押し付けることになりかねない」

柄にもなく説教とは、俺も着実に歳をとつてゐるな。二十年後の未

来予想図には、新入社員に煙たがられる老練の管理職が眼に浮かぶ。酒の席で泥酔して、若人に過去の栄光やら前時代の富貴を語るのを見るに堪えないし、俺の信条に反する。

さて、安っぽいこと甚だしい薫陶を受けた当の理子はどんな表情をしているかと見てみれば、開いた口が塞がらないとでもいった風な驚き様だった。

「何だ？ 文句があるなら言っていぞ」

「あ、そうじゃなくて――驚いた。ケイちゃんってそんな真面目なこと、堂々と言う人だったんだね」

「馬鹿にしてんのか」

「違うよ、違うって。感心しただけだよ。言う時は言う人なんだな
って」

「違わねえだろ。つまり、今までお前は俺を極度の甲斐性なしと思
っていたってことだろーが」

凶星らしい。理子は引きつった笑顔を浮かべやがる。まったく失敬な奴だ。しつこく聞いてもこっちの不快指数が上がるだけなんでこれ以上の言及はしないことにした。

「でもさ、ホントビックリしたよ。ケイちゃんがお説教だなんて。今日、どうかしちゃったの？」

この空気読めない女は、こっちの恩情を無為にしたいらしい。おかげで俺の希望的観測とは裏腹に、したくもない話題は余喘を保つ

こととなってしまった。

「バカかお前は。どうにかなってなきゃこんなかったらいこと引き受けないっての」

「あちゃー。手遅れだったか」

大袈裟に頭を抱える。その仕草が何か妙にムカついた。反抗の言葉が反射的に出かかったが、かろうじて飲み込んだ。再度この話題を打ち切る絶好の機会である。ここはもう一つ俺が大人になってこのバカの尻拭いをしてやらねば。

丁度良いことにオーダーしたコーヒーとメロンソーダが運ばれてきた。お互い注文の品に口をつける。理子もや々と会話を続けるようになって眼の上のタンコブがひとつ減ったし、この際もう一つの気になっていたことを訊いてみようと思った。

内容が普段の俺とそぐわないだけに、口にするのを少し躊躇っちまう。別に恥ずかしくはないが緊張するのだ。ちくしょー、もどかしいったらありやしない。

「――なあ理子、お前はさ、本当にこれでよかったのか？」

今さらながら、これが本当に理子の望んだことなのか不安になったが故の質問である。

こんなご時世だ。他人に憎まれることは極力避けたいと思うのは普通の人間の普通の考え。沙耶から助言を受けたことで自信を持っていたが、それは沙耶の意見と俺の意見が合致していたってだけのこと。詰まる所、理子には了解をとっていなかったのだ。この方法

は、理子の求めているものとは違うのではないか、なんて、もう後の祭りでしかないことを無様にも訊いていた。

こちらを見据えたまま黙っていた理子は、しばらくして小さな笑いを漏らし始めた。

「何、その台詞？　そういうのはもっと早い段階で聞くものなんじゃない？」

「茶化すなつての。俺が珍しく真面目に聞いているんだぞ」

自分で言うかなあ、なんて呆れる理子。確かに我ながらこの言い方はなかったと少し後悔。

「助けてほしいって頼んだのは私。で、ケイちゃんは何の報酬もないのに引き受けてくれたんだよ？　そこまでしてくれてのにさ、あれこれ都合を言う権利なんて私にはないよ」

「利口ぶるなつて。権利云々を言ってんじゃねえよ。お前の気持ちの問題にしているんだ」

「意地悪だなあ、ケイちゃんは。嫌だったらこの場にノコノコ来ないと思わない？」

「いや、そりゃそうだろうけどなあ……」

「もう、今日のケイちゃんは少しおかしいよ？　自分で自分の首を絞めるようなことしたり、私のことを心配したり。まったく気味が悪い」

助けてもらっている立場でこの俺をオカシイ人呼ばわり。しかも
気味が悪いだと？ 言ってくれるじゃねえか。

「いい度胸だこのクソアマ。もういい。今の話は忘れてくれ。考え
てみれば余計なお世話だった」

人を頼る以上、その恩恵も危険も自分で許容する覚悟が前提にあ
るはず。というか、なきゃ困る。助ける側も一人間だから、一人分
以上の不幸や苦労は背負えないんだし。

理子の機嫌はかなり上向きに変わっていた。さっきの陰呑とした
雰囲気はどこへやら。ブルー入っている理子よりはマシだが正直ウ
ザったいつてのはいつも通りの感想だ。つい十五分前の俺からした
ら贅沢な不平と一蹴されるかもしれないが。

他愛もない話で時間は消費される。こっちはそれどころじゃない
のだが、空気の読めないこのバカは間断なくしゃべり続けていたの
である。理子の家の愛猫はトータという名前なんだが、そのトータ
が昨日お辞儀をする芸を覚えたとかいう話が終わりかけた頃、渦中
の人物が席に近づいてきた。

中肉中背の、これといって見た目には特徴のない男だ。強いて挙
げれば、いかにも真面目ですといった無味乾燥な出で立ちだろうか。
髪は伸ばしてもいないし、当然染めてもない。地味な色のありふ
れた格好は、この男の特徴のなさに拍車をかけている。コイツが理
子にしつこく付きまとう通称ストーカー男、池上^{いけがみだい}大樹であった。

同級生ではあるが、俺とも理子ともクラスが異なるから全く面識
はない。

「き、君が社君だね？」

相手はかなり気弱さんなのか、初対面の俺をチラ見しておどおどと声をかけてくる。何だか俺がカツアゲしているか虐めているかのようで気分は良くない。努めて優しく応対するようにしよう。

「ああ。話は分かってると思うけど、まあとりあえず座ってくれ」

＊

2. 崩された日常 / 7

＊

池上大樹は理子の対面に座った。座る方も方だが、理子ですら氣まずそうに視線を合わせまいとしていた。まるでドラマでよく見るお見合いの席みたいだ。「じゃあ後は若いお二人に任せましょうか」とでも言いたくなる、雰囲気的にも心情的にも。

氣まずい沈黙を破ったのは、その原因である池上大樹その人だった。

「社君、君の言いたいことは……分かってるつもりだ。き、君は、僕のせいで仲原さんが迷惑しているって、そう言いたいんだろ？」

「ご明察。話が早くて助かるね」

というより、コイツに渡した手紙の内容を見ればどんな頭の弱い奴でもそれとなく分かる。

「まあ確認するとだな……。うーん、はつきり言ってみるに堪えないし、聞くにも堪えない。一日に十数回も電話をかけたたり、送ったメールも相手の予定や意思を無視した自己中心的な内容のものばかり。度々理子に付きまとい、拒否しても一向に控える意思すら感じられず。理子の家の近くで、何をするでもなく突っ立ってるアンタを見たって言うタレコミも数多くある……。この情報は間違っていないよな？」

「そ、それについては、僕も配慮が足りなかったと自省している。

……謝るよ」

池上大樹は小難しい謝辞の文句と丁寧な所作で頭を下げる。流石は学年トップクラスの秀才。言葉遣いからしても育ちの良さが前面に出ているのに、表情や声量から気弱で臆病な印象を受けるせいかどこか挙動不審なのが残念である。

「頭を下げる相手が違うんじゃないか？」

「あ、ごめん、仲原さん」

「ううん、わかってくれればいいんだよ」

理子の友好的な態度に少し緊張をほぐされたか、それとも好いた相手の言葉だからこそか、池上大樹はやっと安堵した顔を見せた。

うん、案外物分かりのいい奴だった。何だか拍子抜けだが、これで丸く収まるならこちらとしては大歓迎。無駄な体力と精神力をすり減らさなくて好都合かと思った。が、事態はそう簡単に幕引きを迎えてくれるわけではなかった。

「と、ところで、社君、一ついいかな」

水を得た魚とは、きっとこういうことを言うんだ。池上大樹は理子の一言で見違えるように生氣を取り戻しやがった。こちらを正面切って睨むような大胆なことはやはり出来ないようだが、消え入りそうだった声はまともになって、挙動不審な印象もかなり薄れていた。

「君は……な、仲原さんの彼氏なのか？」

「ははは、予想通りの質問ありがとう。俺が彼氏だったら、アンタ
どうする気なんだ？」

「質問に、こ、答えて欲しいな。失礼だよ」

おっと、言い返すまで息を吹き返してきた。いや、暴走と言った
方がいいかもしれないな。この男が普段からこういう切り返しをど
んな相手にも出来るとは思えない。

さて、どう返したもののか。

事実からいえば俺は単なる一友人。もちろん恋愛感情なんて、お
互いはいはず。でも、この場で俺が存在して最も効果的になる立ち
位置は、やっぱり理子の彼氏ないしは想い人という設定だろう。そ
れなら話はすぐに、簡潔に、後腐れなく処理出来るんだが、出しや
ばったナルシストの妄言みたいであまり気乗りはしない。

……理子は何を望んでいるだろう。思えばそういう大事なことは
打ち合わせていなかったな。本人をチラと盗み見ても、この状況で
よくそんな顔が出来るなという能天気そうな表情からは何も推し量
れない。依頼主の言及がない以上、こちらの自由裁量に任せるって
意味で受けとっていいだろうか？

「……………そうだな。俺が悪かった、白状しよう。アンタにとっ
ちや切実な問題だった。

実を言うとな、俺と理子は恋人同士じゃないし、どちらかが片想
いしているっていう面倒な関係でもない。仲のいい友人って表現が
関の山かな」

「じゃ、じゃあ今日ここにこうして相席しているのは、純粋な友情からなんだね？」

「まあ……そういうことになるだろうな」

嘘も方便。この場合は俺の心情に適する最良の言葉が見つからないのだから、許される程度の誤解だろう。俺は『友情』なんて安っぽい自己陶醉と犠牲精神の塊みたいな感情は持ち合わせちゃいないっての。

「なら、ぼ、僕が仲原さんに気持ちを伝える行為そのものを、邪魔しようという気はないって意味で受けとって……いいかな？」

「ああ、俺は理子を諦めろとは言ってねえよ。アンタ自身の行いを悔い改めろって言ってるワケ」

「それは約束する。で、でも、君も僕に約束してくれないか。今後は仲原さんと交友するのを極力自重して、ほしい」

「は？ おいおい……お前、見かけによらずとんでもないこと口走るんだな」

でもまあご発言は想定範囲内。理子を狙う連中からしたら俺は羨望の的で邪魔者だろう。謂れなき流言飛語だ。俺はちっとも嬉しくないし楽しくないってのに。

「自己中心的だと詰るかもしれない。でも、僕は真剣なんだ」

「別に詰らねえよ。自己中でない人間ならそもそもこの世に生れてない。でも、さっきも言ったけどな、俺は別に理子のことを恋愛対

象としてみてはいないんだぜ？ それに、アンタの言いようだと俺が理子に懐いているみたいなニュアンスだけだな……。あん？ 違うのかって？ 冗談。コイツが付きまってくるんだ」

池上大樹は不愉快そう。理子はいろいろな意味で不満顔。この場で俺は双方から敵視されてた。

「悔しいけど、今回のことを含まなくても、きっと仲原さんの君に対する感情は僕のそれよりはるかに大きいし親密だ。それは認めるでも、だからこそ、仲原さんに興味を持つとうとしない君が仲原さんの傍にるのは、僕にとって理不尽そのものなんだ」

理不尽と来たか。まるっきりの外れってわけでもないけど。競争する気もない人間が限られたトラックを一つ占領するのは、ルール違反を通り越して悪意ある妨害としか言いようがない。

「僕だけじゃない。君が仲原さんの傍にすることで、誤解から思いを打ち明けることを断念したり、思い続けることすら諦めた人もいる。それは真剣な人達にとってフェアじゃない」

「確かに、それは一理あるな」

そういう未必の故意から生じた不幸な結果に覚えがないでもない。そういえば、寄ってくる理子を何だかんだ言いながら受け入れ続けた俺にも責任はあるかもな。バイト終りの理子とバカしてる間、俺とこんなことをしていなければ、理子を好きになっていた連中がどれだけの希望と可能性を夢見ていられるのか。どれだけの夢が現実となっていたか。それを思わないでもなかった。

しかし、それも所詮他人事。俺は、俺が楽をしたいがため今まで

意に介さなかったが、改めて連中の心情を吐露されると、罪悪感がないでもない。

「それに、そんな状況は、仲原さんだってかわいそうだよ。だから僕はそれを――」

「……勝手なことを言わないでよ」

小さな怒声を上げたのは、それまで黙って事の成り行きを見守っていた理子だった。俺達二人は、予想だになかった人物の口出しに驚いて目を白黒させていた。

「君に、私の何が分かるのよ。人一人の心は、一般論で推し量れるような単純なものじゃないの。はつきり言って、余計なお世話だよ」

池上大樹は分かりやすい程狼狽した。

「ぼ、僕は仲原さんのことを思っ……」

「君は何も分かってない！ この場での問答も今まで君の行動も、自分の善意からのものだったかもしれない。けど、それを押し付ければ悪意からの行動と何も変わらないの！ 一方的に自分の気持ち貫こうとする、君の無神経さが私には耐えられないし、ケイチちゃんもそれを問題にしているの。君は全然反省してない、何も分かってない！」

理子が本気で怒る姿を初めて見た。やっぱ女は怒ると怖いんだなとか、口が達者だから何も言い返せないとか、そういう感想はかなり後になってから思えるものらしい。今はただ、驚きで思考も呆然としているしかなかった。

「何で私と話そうとしないの！ 何で私の気持ちを知らうとしてくれないの！ ケイちゃんは何も悪くない。私から、私から……………」
大事な友達を奪わないでよ」

言い終わるのと同時、理子は早足で店を出ていった。突然の出来事で俺も呆気にとられていたが、理子の後を追うべくすぐに席を立った。好いた相手からすさまじい剣幕で呵責された池上大樹は顔を青白く変色させ、何かを無くしてしまったかのような虚脱状態を感じさせた。道理も道理、か。打たれ弱い人間なら棺桶に片足を突っ込んで。こちらはこちらで心配だが、俺としては付き合いの長い理子の方がさらに気にかかった。薄情ではあるが、自殺とか報復を考えないことを祈るばかりである。勘定だけはテーブルの上に置いて喫茶店を飛び出した。

＊

遅れること数十秒、すぐに後を追うも当然理子を見失う結果となった。そう言えばアイツ、走るのだけは異様に速かったんだった。理子の行き着きそうな場所はいろいと思いつくものの、あそこまで取り乱して娯楽施設なんか入るわけもない。多分、というか八割片、駅前広場にいるだろうと算段を付ける。そして案の定、広場に入るなり普段から待ち合わせに選んでいるベンチに座る理子を発見した。

なんて声をかけようか、などと考えながらおもむろに近づくと、理子もゆっくりと顔を上げる。今日二度目の、この女には似合わない切なさとしげしさが鎌首もたげた暗い表情をしていやがった。

「隣、座っていいか？」

陳腐な第一声だ、と軽く自嘲してしまう。

もちろん、と笑顔だが覇気のない声で理子は許可した。

今日に限って、視界をいい意味で賑やかにしてくれる得体の知れない連中や住民は見当たらない。ホント、空気の読めない奴らだ。それとも、空気を読んだから人気がないのだろうか。だとしたらミラクルすぎる。

この一隅にかろうじて聞こえる雑音は、広場を横切るカップルや親子達のささやかな話し声や笑い声、あとは名前も分からないデカイ木の、すすり泣くかのような枯れ葉を散らす、もの寂しい声だけだった。

「ごめんね、ケイちゃん」

「……何でお前が謝るんだ？」

「何て言うか……今日一日、色々迷惑かけちゃって」

「やめてくれ。お前がそんなしおらしいと気味が悪い」

俺の言葉に、理子はまた少しだけ笑顔を見せるが、それもかなり力なく、無理をしている様子は容易に感じ取られた。

「優しくしないでよ」

「してねえっての。ってか、お前おかしいぞ。今の発言をどう解釈したら優しく聞こえるんだ」

「そりゃあ、一年もケイちゃんと友人関係続けてるんだもん。それくらいの天の邪鬼だっていうのはお見通しだよ」

得意そうに理子は言う。何だか、そういう風に他人を分かった気になれることが、少しうらやましいと思った。俺には、そう勘違いすることさえ怖くて出来ないから。

「俺のこと、何でも知っているような言い方するんだな」

「癪に障った？」

「いんや。そう思いたければ勝手に思えばいいさ。ただな、フェアじゃないと思っただけだ。俺は冗談でも、そんなことをお前には言えない」

「――ああ、そっか。きっとビックリしたよね。私、今まで本気で怒ったことってそんな多くないから」

知り合って一年足らずの俺の記憶では、確かにあれが初めての理子の怒りだった。コイツ、感情豊かではあるものの、今までその感情を誰かにぶつけると言ったことは一切なかったのだ。

「お前みたいな能天気でも、本気で怒ることってあるんだな」

仏の顔も三度まで、か。なるほどどうして含蓄がある。

「どんな美少女でも怒る時は怒るんだよ。トイレにも行くし、早弁だってします」

「やめてくれ。その命題は俺達男の永遠の謎のままにしておきたいんだ」

お互いおどけ合ってみるが、やはり場は和まない。虚しさで沈黙が空気にまとわりついてしまっているかのようだ。雰囲気为重苦しいのはそのいらん重りのせいかもしれない。

何とか話題を探そうと考えを巡らせるが、ここで日頃の行いに対するしっぺ返しがきやがった。他人と話す機会を極力減らしていたんで、タイムリーな話題という話題のストックがまったくなかったのだ。

為す術もなく、刻一刻と登場人物を変えながら、しかし代り映えのしない人の波を見つめているしか俺には出来なかった。しばらくして、理子は小さな笑いをこぼした。

「どうした？」

「あ、いや、うん。今ちよっと、嬉しいかも」

「あん？ 何が？」

「ケイちゃんが追いかけてきてくれたから」

そういうことをはっきりと言われるとこっちが気恥ずかしい。

「まあ……義理というか情けというか。そんな感じだな」

努めて平静に、そんな応答をしていた。

「素直じゃないなあ」

「うるせーよ。大体だなあ、あんなハケ方されたら並みの道德律の持ち主は追いかけるっての」

「……そっか。そうかもね。でもきつと、ケイちゃんだから追いかけてきてくれたんだよ。うん、多分絶対」

「意味分からん」

いつもながら、その自信はどうやって成り立っているのか。いや待て。というか「多分絶対」って言葉はそもそも成立しないじゃないか。

「少なくとも、私が今まで親しくなった男の子の中で、一番かまってくれるからね」

「俺が、か？ ビッグな冗談だな」

この場合は付き合いの長さというより、親密度を言っているんだろうが、それにしただって信じられない話だ。恋愛の一つ二つすれば、俺以上に親密になることなんか造作ないはずだ。

「本当だよ。ケイちゃん以外の男の子は、みんな私から遠ざかっていっちゃった」

悲しげ、というより、ただただ静かに理子は語る。そこに何かしらの感情もなかったような気がする。淡々と、事実だけを伝えるような口調だった。

「あのね、私が中一の時さ、仲のいい幼馴染の男の子がいたんだ。私、その子のことすっごく好きでさ、いつも追いかけて回っていたの」

理子の日頃の行いを見ていれば、簡単に想像はつくな。

というか、女から誰か他の男を好きだったという話を聞くのって、何て言うか、あんまり面白くはないんだよな、実際。こんな状況だから一応我慢して聞いてやるが。

「その子もケイちゃんに負けず劣らず優しくてさ。いつだって相手してくれてたんだ」

ちよいちよい耳障りな単語を吐くな。

「まあ、そいつも満更じゃなかったんじゃないか？ 思春期真っ只中で異性と遊ぶなんて、義務感とか建前とかで出来るもんじゃねえし」

「そうだったらいいな。とにかく、仲良くやっていたんだけどね、ある日突然、その子は私を避けるようになって、口もきいてくれなくなっちゃった」

「彼女でも出来たのか？」

あの頃の恋愛って不器用だからなあ。男は彼女が出来ると他の女と遊んだり話したりするのを背信行為じゃないかといらん心配して自重するんだよな。今考えるとなんてアホらしい。

「ううん。何か悪いことをした覚えもないし、そうなった原因は思いつかなかった。私、それが悔しくて、どうにか知ろうと思った。」

たくさんの人に聞き回って日々を過ごしていたの。そうしたらね、ある日、男の子から告白された。そんな状態だったから、当然受ける気にもなれなくて断ったら、その男の子が全部教えてくれた。その男の子はね、仲良しだった子の親友だったんだ」

ああ、その物語のラストは大体察しがついた。

「その子は、私を好きだった親友のために、私と距離をとっていたんだって。自分にはその気がないから、傍にいたら邪魔だろうって」

そうなるだろうな。しかし、えらくませたガキだ。……いや、そう思うのは、その頃の俺が進むことしか知らないバカだったからか。

「多分、その子のやったことって、他人から見たら褒められることなんだよね。でも、私はちっとも嬉しくなかった。そんな、一方通行の優しさは、優しさなんかじゃないよ」

理子の言うことは最もだった。『優しさ』の位置付けがなまじ社会的に称賛される感情だけに、これを与えることは無条件に良いことだと思われがちだが、『優しさ』も結局、自己完結してしまえば押し付けと変わらない。

「何も分らなかった自分が許せなくて、突然いなくなった男の子を憎んだ自分が嫌いで、全てを知っても何もできない自分が情けなくて。言ってくれなくちゃ、分からないよ。何も分からないの。分からないから、自分を嫌いになって、他人を嫌いになって、全てを嫌いになっちゃうんだよ」

例えお互いが傷ついても、言葉にしなきゃ伝わらない。伝わらなければ、伝わった時以上の傷を負い、修復は不可能となる。理子の

言うことは、そういうことなんだろうか。

「——ケイちゃんも、同じでしょ？」

心臓の鼓動が速くなったのを感じた。何か、言い当てられたくないことを指摘された時の恐怖が俺を取り巻いた。

「ケイちゃんも、あの時——池上君が身を引いてくれて言った時、私の好きだった子と同じこと、考えてたでしょ？」

粗相を窘める母親のような口調で理子は問う。だが俺は、これまで何度も母親に嘘をついてきた。母親だけでなく、友人にも社会にも嘘をついている。どうってことはない。努めて平静に、俺はまた嘘をつく。癖になり過ぎて罪悪感もないワケだ。

「バーカ。俺は利己主義の塊みたいなモンだぞ。第一、他人が嫌いな俺が、んな他人の事情に配慮なんてするわけ——」

「嘘だよ」

その、気迫に満ちた静かな拒絶が俺を制した。

「だって——ケイちゃんは優しいから」

そう言って、理子はうつむいた。小さな泣き声が聞こえ始めたのはそのすぐ後だった。あまりにも唐突で、予想だになかった理子の一面に、俺は、ただ戸惑うことしか出来なかった。

「もう、いなくなろうとしないですよ。黙って、私を置いて行かないで」

哀願するかのような理子の吐露が、いつまでも俺の心の奥底に引っ掛かっていて、壊れたカセットテープみたいに、何度も繰り返し響き渡っていた。

＊

2. 崩された日常 / 8

＊

十二月十三日、期末考査全ての試験科目を終え、例によって俺と治郎は昼休みを屋上で過ごしていた。

「ベタな……」

「あん？」

「そう、ベタな馴れ初めですね。で、そのままお持ち帰りですか？」

平然と、治郎はとんでもない妄言を口走りやがる。

「アホか。どういう思考回路してるんだ、お前。今の話をどう曲解したらそういう想像に行き着くんだよ」

「精神的に弱った女はその苦悩を吐露し、男は機に乗じて介抱という名目の下、欲望を解放する……。シナリオはまあ陳腐ですけど、お膳立ては完璧じゃないですか」

「言ってる。つまんねえんだよそのダジャレ話。ってか、そもそも笑い話じゃねえんだよ、空気読め」

「杜さん。当人同士の凄惨な身の削り合いほど、傍から見ておもしろいってのを知らないんですか？」

趣味悪イな、コイツ。腹黒いにも程がある。

日曜日の一件の顛末を治郎に殊更しつこく聞かれたんで、しぶしぶかいつまんで話してやったわけだが失敗だった。俺をいびる気満々のコイツにとっちゃ面白過ぎる話題だった。

「で、アフターケアは実際のところ、どうしたんです？」

俺の軽蔑と不満の視線を意にも介さず、治郎はまたまたメロンパンを頬張りつつそんな事を聞いてくる。緑色依存症め、マジで一回地獄に堕ちろ。

「特に何もしてねえよ。しばらくしたらアイツ、「今日は帰る」なんて言い出したから言う通りに従った」

「おいおい、情けねえな社さん。そういう時こそ「好きだ、愛してる」くらい言える甲斐性見せつけねェと」

「おいコラ、勝手なことぬかすな。前提からして間違ってるんだよ。何で俺が理子を好きで好きでたまらないみたいになってるんだよ」

「……違うんですか？」

大袈裟に驚く治郎。毎度毎度否定してるってのに懲りずに同じリアクションか。こっちの神経を逆撫ですることしか考えてないらしい。

無言の回答を返すと、治郎はパックのコーヒ―牛乳に口をつけながら何かを考えるかのように、屋上のフェンス越しに景色を見始め

た。

「でも、社さんって全然女っ気ないじゃないですか。来る者拒むし。理子先輩だけ寛容な態度ってのは、そりゃどうしたって男女の仲を勘繰らざるを得ないでしょ」

「俺はな、いわゆる男受けするツラの女なら誰にだって寛容なんだ」
アイツを褒めるのは癪だが、一般論として理子は美少女に大別されるから仕方ないと思うことにしよう。

「その手の博愛主義は女性から嫌われますよ」

むむ、治郎のくせに忠告とは生意気な。

「まあそんなことより、理子先輩とはそれっきり、会ってないんですか？」

「ああ。そもそも、アイツから来ない以上俺達が出会うわけないじゃない？ クラスも違うし、基本、俺からってパターンはあり得ないし」

「社さんの愛情表現って中二以下ですからね、会うことすら恥ずかしいみたいだな」

「うるせーよ。とにかく、アイツのことは一切知らん。学校には来てるみたいだし、心配することもあるだろう」

治郎は不満そうな視線を送ってくる。こっちも負けじと睨みをきかせたりする。

「理子先輩が絡むと途端に意固地になりますからねえ、社さんはこの辺でやめときましようか。何せ時間がもったいない」

「わかってるなら最初^{ヘナ}っから振るな。……ったく、ちよつと平和だからって浮かれてんじゃねえよ」

期末考査が行われた四日間。蒼乃は至って平穏を維持していた。と言っても、相変わらずキッズギャングと正義の人を僭称する住民とのいざこざは後を絶たなかったが。ここで言う平穏とは、『G件』犯の動向が沈静化していたことを意味する。今回みたいないんターバルは前例もあるが、これが小休止でなく打ち切りであることに期待したい。

「まあ平和ついでに聞いておきたいんですけど……。テストの方はどうでした？」

「言うな。思い出したくもない」

ほとんどの科目は及第点超えは堅いが、数学と英語だけは壊滅的だ。複素数の和差があれだけ出題されるとは予想外だった。英語に関しちゃ動名詞と不定詞の領域で完全に出鼻をくじかれたし、仮定法を使った英作文なんてまるっきり自信ない。

「あーそうなんですかあ。いやあ、ダメですよ社さん。俺達高校生の本業は学業なんですから、雑事に追われてたからなんて言い訳、学力競争厳しいこの高校社会じゃ通じませんよ」

ブルー入って落ち込む俺とは対照的に、心底楽しそうに語る治郎。

ただ単に俺を馬鹿にしたいがためにこの話題持ち出してきやがったな、コイツ。二、三回地獄に堕ちろ。

「仮にも特進クラスに在籍してるんだし、この時期の成績の落ち込みはヤバイんじゃないですかね、ははは」

「すがすがしい笑顔で言うな。ちくしょー、それもこれも、あの池上大樹が余計なことをしたから……」

実際、あの一件は一要因に過ぎないが、俺の人生史上あれだけ面倒なことないんで責任を押し付けずにはいられない。

「そーいや、その池上なんたらはその後どうなったんです？」

「ん？ ああ、今朝様子を見に行ったら案の定というか、当然というか、この四日間は引きこもっているらしい。担任が電話してもシカト決め込んでるみたいだな」

このくらの後遺症は、アイツのしでかしたことを考慮すれば仕方ない。というか、そこまで俺も責任持てない。あのまま身投げとか入水自殺しなかったただけ良しとしよう。

「いろいろ弊害は残っちゃいるが、ストーカー事件は一見落着、だな。まあ、終わってみれば虚しいもんだ」

何せ部外者の俺は熱くなることも出来ず、望んでもないのに気まぐさを手に入れるだけという始末の悪さ。ならいつそのこと、得るものが何もなかった方がまだマシだった。

「誰一人喜ばないことに一生懸命だった俺は、馬鹿だったのか、そ

れとも力不足だったのか」

「反省とか後悔とかは社さんらしくないですね。ていうか気持ち悪いです」

「チッ。まったくどういつもこいつも人が真剣な時に限って、やれ気持ち悪いだのなんだの茶々入れやがって」

俺っていつもそんなに不真面目な対応してるのか？

「あ、そういや昨日、駅前で社さんを目撃したって立倉達から連絡ありましたけど。「ナンパしてる社さんって案外気味悪い」だそうです」

アイツにまで馬鹿にされるとは、かなりダメージキツイ。

「ナンパじゃねえから。テストの方は早々に見切りをつけて、二日前から『G件』犯探しに従事してたんだよ」

「仕事熱心ですね。で、結局街中のOLに手当たり次第声かけてるんですか？」

「いや、あの時は大雑把にそんなこと言っただけだな、範囲がでかすぎてどこから手をつけていいか判断つかねえから、一応大体の目星をつけてそこから攻略してる」

神経衰弱ゲームで最初にカードをめくる時でも、俺は取り組みやすい四隅のカードからめくる派なのだ。

「何か有力情報でも手に入れたんですか？」

「少しはあるけど、ほとんど俺の憶測ばっかだよ。手当たり次第よりはマシかなってレベルの。」

まあ勿体ぶらずに暴露するとだな、俺は高校の女教師がきな臭いって思ってる」

「……それって、アンタの個人的な趣味じゃないですよね？」

何だかスゲー軽蔑の眼差しを向けられてる気がする。謂れなき非難だ。確かに、女教師は男子高校生の永遠の憧れではあるけど。

「当たり前だろ。こちらら真面目に手掛かり探してるんだ。好き嫌いで選り好みしてるわけじゃ………あー、わあったよ！ そんなに疑うんなら説明してやる」

治郎の小生意気な、疑う気満々の表情に折れた。ここで変に説明渋って『女教師好きの変態』とかレッテルを貼られることは避けたい。

「第一の事件で追われてたOL風の女ってのは、殺されたキッズギヤング二人から逃げていた。その理由を推測するとだな、よっぽど見てくれと面構えがよくて連中に目をつけられたか、逆に女の方が連中に接近したか、どちらかしかない。外見が原因だった場合はそこから先の予想が立てられないんでこの際無視するとして、問題は女の方から接近した場合。そうせざるを得ない事情があったのか、それとも自発的だったのかが分かれるところだけど、女に接近を強要する第三者の存在や柵ってのは考え出したらキリがねえからこれも無視」

「何か穴だらけなんですけど、その理論」

「だから言っただろうが、手当たり次第よりはマシなレベルだって。細かいところはサラッと流せ。」

で、どこまで言っただけ……。ああ、それで今考えられる場合ってのは、女が自発的にキッズギャングの連中に近づいたことだ。この場合、並みの一般人なら相当の理由がないと連中と対峙なんてしない。俺が考えるにだな、奴さん、連中の非行を許せない正義の人なんじゃないか、と」

「あり得る話ではありませんけど、その推測も根拠はないんでしょ？」

「ない。けど気になることはある。今回の事件、久しぶりに並行してジャンク狩りが増加してる。コレ、ネットから引っ張ってきた」

ポケットから折りたたんだA4用紙二枚を取り出して治郎に手渡す。昨日警察が発表したジャンク狩り発生件数の中間統計表と、先月の月間統計表である。

「発生件数はその前の『神隠し』事件の約二倍。この数字の増加は住民の無意識の賛美なわけだが、今月はある二日間に大きく偏って発生してるんだ。それが、十二月五日水曜日と六日の木曜日。丁度事件の発生前後なワケ。まあ中間発表だし、偶然と言えば偶然かもしれないけど、俺は関係があると踏んでる」

「……つまり、一人の勇気ある正義の人が、キッズギャングに物申したのを見た有象無象が、それに触発されてジャンク狩りを増加させたんじゃないかと、そう言いたいわけですか？」

「そゆこと。明確に行動を起こす気がない般ピーも、正義の人の行動に感化されて宣伝活動は激しくする。友達とか家族とかに話すこ

とでどんどん噂は広まり、意識は高揚し、つられて血気盛んな連中がジャンク狩りを引き起こす。水平関係の共有思想で行動を起こすって、叛乱とか一揆で共通することだしな」

「まあそれはなんとなく分かりましたけど、じゃあ何で高校の教師限定なのか、そこを訊きたいですね」

治郎は少し興味をもったらしい。さっきとは打って変わって真剣な眼差しを向けてきやがる。

「正義の人、って言うとな一般人なら誰しもが成り得る可能性はあるけど、高確率なのは職業に関連してる場合だろ？ そうなると公務員、特に警察官と高校教師は外せない。キッズギャングは高校生以上の非行少年少女だからな。両者の業務管轄に面白い程はまるんだ。だけど、俺は警察の線は薄いと思う。あの連中なら個人的に摘発するより、治安の抜本的改善のために一網打尽にして大量検挙したはずだ。それに、今じゃキッズギャングに及び腰だし、一警察官に勝手な行動を許すとも思えない。自然、上からの強い圧力で現場の人間も思うように手が出せない」

これは荒唐無稽な推測話でもない。蒼乃警察署の巡査部長を父に持つクラスメイトのこぼれ話から広げた説だったりする。

「ここまでの消去法で教師の可能性が高いと思ったわけだ。組織がガチガチの警察に比べれば個人の行動は比較的自由な裁量に任されているし、非行少年少女に対する感情は報復や制裁なんかよりも教化とか指導の性格が強い。あとはOL風ってのを踏まえると、新採用以外でも仕事場でスーツ姿が推奨されてるのって高校ぐらいだからな。高校の女教師が疑わしいって、そういう結論に至ったわけ」

ここまで来て、治郎は熟考し始めた。奴なりに情報をまとめてリ
アクションを考えているらしい。しばらくして治郎は嘆息した。

「論理は穴だらけで突っ込みどころも多いですけど、まあ現状では
その推測が精一杯でしょうね。で、成果はあったんですか？」

「いや、絞り込んだとはいえまだまだ数は多過ぎる。そう簡単に手
掛かりには辿りつかねえよ」

「でしょうね。この高校だけでも七、八人はいますよ。ここの教師
は何人か調べたんですか？」

「まだ。テスト期間中で職員室にも入れないし、偶然通りかかった
ところを捕まえるしかないだろ？ 全員を調べるには時期が悪い」

「来週になれば職員室も解禁になるし、急がず待つべき、ですか」

「そういうことだな。急いては事をし損じるって言うし。――――
あー、なんかしゃべり過ぎて喉渴いた。なあ、自販機行かねえか？」

「マジですか？ 奢ってくれるなんて、社さんは太っ腹だなあ」

「いや、ンなこと言ってねえし」

さっきの理子の話といい、コイツの耳はどういう仕組みになって
やがるんだ。ご都合主義にも程がある。

＊

「社さん、また缶コーヒーですか？ カフェイン依存症かアンタ」

「黙ってる。つか、お前もまたコーヒー牛乳じゃねえか。糖分依存症かお前」

「午前中に脳ミソを酷使したんで、ちよつと甘い物が欲しいだけですよ。アンタとは違います」

よく言う。お前は年がら年中甘い物しか摂取してねえじゃねえか。不毛な罵り合いを続けながら、中庭の一隅にあるベンチで小休止することにした。

中庭は屋上と違ってまだ華がある。ベンチは洒落た造形だし、テーブルだってある。床はレンガ張りで、花壇には色とりどりの花が園芸部によって整備されてる。普段なら生徒で賑わうこの場所も、テスト終了日の今日は人もまばらだ。こういう時を狙ってしか居座れない俺達は姑息というか不憫というか。何にせよ、いつもいつも屋上に集まるってのもマンネリだから、たまにはこういう新しい趣向が必要なのだ。

だが、それが悲劇の始まりだった。

「あら、社君と相原君じゃない？ 何してるの？」

偶然通りかかった学校の正義代表、藤原梢生徒会長のお出ました。った。

「何よ、二人とも、その表情は。私に対する挑戦？」

「反抗するような血の気のある顔してるわけないだろ。あまりのシ

ヨックに貧血起こしそうだったのに」

「同感です。まさか社さんと意見が合うなんて。マジ死にてえ」

サラッと俺に対する暴言を吐く治郎。いつか痛い目にあわせてやる、ちくしょー。

「で、アンタ達、ここで一体何してるの？ まさか悪巧みでもしてたんじゃないでしょうね」

セミロングの茶髪を靡かせつつ、藤原は形のいい眉を吊り上げていた。何故にいつも疑ってかかれるんだろ、俺達。

「いや、特に何も。治郎とだべってるだけなんだけど」

「違うんです生徒会長。実は、社さんから理由ワケもなく暴行を受けていて……助けて下さい」

ちょっと気の弱い後輩を演じて藤原に助けを求める治郎。あることないこと言っただけ俺を陥れる気満々である。

「そ、それホント？ 社君、とうとうそこまで落ちぶれたの？」

そして簡単に信じる生徒会長。俺の周りは敵だらけか。

「アホか！ コイツの話を真に受けるな。むしろいつも危害をくわえられてるのはこっちの方だ。特に精神的に」

けれど誰も俺に同情も同感もしない。やっぱり俺の周りは敵だらけだった。力なく嘆息する俺を見て治郎はしたり顔。藤原は訝しげ

に俺を見てる。もうどうにでもしろ。

「ンなことより、藤原こそ何してるんだ？ 校則違反者摘発運動でもしてるのか？」

「まあ、そんなところね。校内に残っている生徒の様子を見て回ってるの。期末考査の関係で生徒の行動に注意を払わないといけないからね。こういうまめな活動が後の大惨事を防ぐ銀の弾丸となるのよ。急がば回れ、不断に努めて才気は用いず」

「ご立派なことだ。俺達は善良な一般生徒だから、痴れ者がいたらちゃんと官憲せいとかいに引き渡すぞ。んじゃーお疲れさん」

「ちょっと、勤労少女に対する尊敬とか賞賛の言葉はないの？ あんならジュースくらい奢りなさいよ」

「何でそうなる。働き過ぎてとうとう頭がおかしくなったのか？ っつか帰れ、仕事バカ」

「はい、君、逮捕。罪状は軽犯罪法違反及び公務執行妨害。私に対して著しく粗野で乱暴な言質あり。精神的苦痛と業務続行の意志を殺がれたわ。というわけで生徒会室で拘留」

「ふざけんな。公権力の著しい人権侵害だ。生徒総会でお前の恥ずかしい過去をバラすぞ」

「あー！ さらに脅迫罪！ これは懲役ものね。っていうかやめてよね。あの事知ってるの社君だけなんだから！」

「……二人とも、仲いいですね」

俺と藤原のやり取りを見て、今まで黙っていた治郎がポツリと呟いた。

その発言に、俺と藤原は双方治郎を見やる。俺、事実しか言ってませんみたいな小生意気な無表情がそこにはあった。

「や、やめてよね相原君。私と社君が仲良いだなんて。ありえないわ」

動揺する藤原。最後の方なんて声が消え入りかけてる。そこまで嫌なのか、流石の俺も傷つくぞ。

「で、気は済んだか？ とつと仕事に戻れ、生徒会長は多忙なんだろ」

「いいじゃない、少しくらい休憩したって。私は社君と違ってずっと働き詰めだったんだから。それに比べて、社君は暇でいいわよね」

俺だってこのところは働き詰めだったの。

しかし藤原に言えるような業務でもないんで、黙って引き下がることにする。藤原梢という女には立場上も性格上も勝てる気がしないのだ。ジュース一本で幕引きだっていうなら賄賂戦法も辞さない。

「わかったわかった。飲み物くらい奢ってやる。だからおとなしく座っててくれ」

「あ、ホント？ ありがとうね社君。パックのミルクティーよろしく」

「へいへい」

知り合いと出会う度に無駄な出費が増えていくとは、俺はカモられていたのか。だとしたらもっと強気に出る必要があるな。今に見てろよ、バカどもめ。

*

2. 崩された日常 / 9 (前書き)

10月25日、大幅改訂致しました。チェックが甘く申し訳ありません。

2. 崩された日常 / 9

＊

藤原曰く学校の問題児二人と、校則の番人である生徒会長が三人並んでベンチに座っていた。

珍奇な図柄だ。奇跡の共演と言っている。九十七年の歴史を持つこの宝裏高校史上、最初で最後の取り合わせに違いない。って言うかそうであってほしい。こんな奇跡は二度と起きなくていい。

「おい、休憩時間が長くないか？」

藤原はストローに口をつけながら、ジロリと無言の非難を俺に浴びせてくる。自前の腕時計に眼をやってから、

「まだ三分も経ってないわ。何よ、なんか私がいたら困ることもあるワケ？」

敵意満々にそう訊いてきた。

「生徒会長のおかげで学校の平穏は保たれてるかもしれないが、俺の心の平穏は逆に脅かされ続けてるんだ。さっさと住処に帰れ」

「言うわね社君。そう言えば、今日は仲原さんと一緒じゃないの？あの子がいなくて機嫌が悪いのかしら？」

「あんな女関係ないっつーの」

「まあ、ちよつといざこざがありましたね、以来理子先輩と疎遠になつてゐるんです、この人」

「治郎、余計なこと言うな」

「……へえ、そうなんだ」

藤原のリアクションはそれだけだった。いろいろ詮索されるんじゃないかと思つていただけにちよつと拍子抜けだ。

「あ、会長。前から聞きたかつたんですけど、会長も浮いた話一つ出てこないじゃないですか。実際はどうなんです？」

治郎め、物好きな。そんなこと訊いて何が面白いのか。

「実際も何も、噂が立たないってことは疑わしいこともないって、そういう意味よ」

「じゃあ伏線も？」

「そういう面倒くさい手法使う男はこっちから願ひ下げね」

「豪胆だなあ。でも、社さんと違って会長は正常な一般人なのに、何か問題でもあるんですかね？」

「おい、ナチュラルにちよいちよい俺を貶けなすな」

しかし、確かに藤原には欠点らしい欠点は見受けられない。とは言え、どこか女性としての魅力に欠けるっていうのは何となく感じていることではある。一体全体それは何なのか。

「そうだな。多分、胸が小さい――」

「肺に穴、空けるわよ？」

「――方が俺は好きだなあって」

あつぶな、間一髪。空前絶後の延命措置。俺って意外に地雷踏みやすいのな。気をつけよ。

「へえ、社君って意外と物好きなのね」

「おいおい、こんなところで恥ずかしい性癖カミングアウトするなんて、何考えてんだ社さん」

うまく切り抜けたと思ったら、なんだか弊害がある。

「馬鹿言え。男イコール大きい胸が好きっていう認識は間違ってるぞ。な、治郎」

「いや、俺はスイカとかメロン派なんで何とも」

「使えねえなお前。とにかく、限りなくAに近いBを好む男だって世の中には確かにいるんだよ」

「え、嘘！ 私、AよりのBよ？」

台無しだ。

というか、そういうことを男の俺にカミングアウトされても返答

に困る。

「え〜と……哀れめばいいのか？ それとも慰めればいいのか？」

どっちにしろお前への好感度が五十から三十ほど下がるがな。ギヤルゲならもうルート自体攻略不可能になってる。

「何よ、私が社君の好みだったら不服なの？」

「誰も俺の好みとは言ってねえだろ。そういう嗜好もあるってただ」

「じゃあ、社君はやっぱり、仲原さんみたいな出るところ出てるスタイルが好きだったり？」

「何でいつも理子を引き合いに出すんだ、お前。楽しんでるだろ」

「いや、至って真面目だから。悔しいけど、仲原さんがスタイル美人の代表格なのよ。性格はまあアレだけど」

褒めるのか貶すのかどっちかにしろって。というか、女ってやっぱそういうの悔しいんだ。

「社君は多分知らないでしょうけど、仲原さんのスリーサイズ、もう圧巻よ。同じ高校生とは思えないもの」

「わかったわかった。じゃ、百歩譲って理子の登場を認めよう。見た目だけに関していうなら嫌いじゃないが、好きでもない」

「何よ、その曖昧な答え。素直に守備範囲に引っ掛かってるって言

いなさいよね」

「会長。この人はいつだってそうして話をはぐらかすんです。何言っても無駄ですよ」

「あーもう、うるせーんだよ。第一、何でお前らとこんな話しなくちゃいけないんだ。俺、男女関係関連の話には興味ないって言うんだろ」

「それ、すごく不健全よ？ 高校生までが恋愛清純なんだからね。高校卒業と同時にそこには性欲が付きまとうワケ。どいつもこいつも、男はみんな感情より女の子の身体に重きを置くようになる。まったく……どうしようもない生き物よね」

なんだその極端な理論は。藤原には他人に披露出来ないかなり辛い男性遍歴でもあるのか。

「生徒会長は男が嫌いな、女にハアハア言う種類の女なんですか？」

「相原君、もう少し言葉を選んでくれると、お姉さん嬉しいかな。まあ、私だって女の子は勿論好きだけど、せ、性的嗜好としては男の子の方を選ぶ女よ」

小難しい言い方しやがって。顔を赤らめるくらいなら最初から言うな。っていうか藤原はこういう話に免疫ないよな。不器用女め。勝手に動揺して墓穴掘りやがれ。

「ただ、大多数の男の子の性欲至上主義みたいところが気に食わないだけ。恋ぐらいはしたいわよ、当然」

「やめとけやめとけ。恋なんてしたっていいことないぞ。理想が現実にかけて傷心するのが関の山だ。お前の場合、極端に歪んだ男子観がさらに歪んじまうぞ」

「……ねえ社君。恋ははしかと同じで誰でも一度はかかるものなの。食わず嫌いは人生損よ」

「食わず嫌いって、人を勝手に天然記念物扱いするな」

『天然記念物』とは高校生用語の一である。一度も異性とお付き合ひしたことのない人間を、尊敬と侮蔑の念を込めて称する二つ名だ。理不尽な制度だがそれはそれ。高校生ってのはこういうことに対して過剰に敏感なのである。

「お前ら嫌われ者と違って、俺は恋愛の一つや二つ経験済みだ」

「あの、俺も何回もしてますから、念のため」

「私だって一回くらいはあるわよ」

藤原については納得だが、治郎の話はまったく信じられん。こんな腹黒い小生意気な小僧と付き合う女がいるとは。世の中には変わった奴が多いのか。

「ちょっと、あなた達」

唐突に、聞き慣れない年若い女の声が俺達の方に向かって飛んできた。おいおい、また闖入者か。今日は他人との遭遇率高いな。

ヒールをカコカコ鳴らしながら近づいてくるのは、スーツ姿のお

姉さんだった。知らない顔だがなかなかの美人さんだ。藤原より明るい茶髪を結い上げた髪型は、気真面目そうな整った顔にお似合いだった。身長は高めで、都瑚さんと同じくらい。どこぞの学習塾の営業の人か？

「下校時間とはつくに過ぎてるわよ。そこで何を……あら、藤原さんじゃない」

どうやら美人さんは藤原と顔見知りらしい。

「あ、^{なつめ}棗先生。すみません、この二人なら今すぐ帰しますから」

立ち上がり、慌てて佇まいを正す藤原。律儀な女だ。俺と治郎はそんな藤原をただ見ているだけ。教師に対して敬意とか尊敬の気持ちゼロなのである。

「しかし先生だと？　こんな美人がこの学校にいたとは驚きだ。何かの冗談じゃないだろうか。」

棗と呼ばれた女教師は、強張らせていた表情をやんわりと崩した。教師からの生徒会長への信頼度恐るべし。

「あなたがいるなら悪事にも走らないだろうし、心配しなくていいわね。別にそこにも構わないわ。邪魔しちゃってごめんなさいね」

融通の利かない感じかと思いきや、何気に理解ある教師らしい。善哉善哉。生活指導の小宮山だったら問答無用で俺達追放されてた。

緊張は抜けても気は抜かない美人さんは、そのまま姿勢よく立ち

去って行った。第一印象、真面目っていうかクソ真面目。基本的な性格は藤原に似たり寄ったりなのかも。丸つきり同じでないことを願うばかりである。

「なあ藤原。アレもうちの教師なのか？」

ずっと突っ立ったままの生徒会長に、「お前、生きてるか」の意味合いも込めて疑問をぶつけてみる。

「はあ？ 当たり前でしょ。棗葉月先生よ、英語担当の。つて、アレって……先生に対して失礼でしょうが」

まるで母親のように言葉遣いをやんわりと窘めてくる藤原。その意識には温度差を感じずにはいられないが、話が先に進まないんで一応訂正しておく。

「ああ、悪かったよ。で、あんな美人、この学校にいたっけか？ 最近入った新任さんか？」

「ちよっと杜君、それ、本気で言ってる？ だとしたら一発殴るわよ」

意味が分からん。棗先生とやらを知らないだけで、何でコイツに殴られなきゃいけないんだ。

事情を知っていそうな治郎をチラッと見てみると、やれやれとでも言いたそうに溜息をついた。

「先月の半ばに産休に入った一ノ瀬教諭の代理でやって来た人ですよ。臨時の朝礼で会長が紹介したじゃないですか」

あ、なる。それを覚えていない、イコール藤原の話を聞いていない、イコール藤原が俺を殴るよってことね。納得。

「そーかそーか。そういやそうだったな。それで、棗先生は歳はいくつなんだ？」

「脈絡がないにも程があるわ、社君。何でいきなり年齢から訊くのよ。変なこと考えてないでしょうね？」

「年齢聞いて何を考えるってんだ。想像力豊かすぎるぞ、お前」

不満で一杯みたいな表情は依然張り付いたままだったが、藤原はしぶしぶ話し始めた。

「……まあいいか。確か、今年で二十六だったはずよ。結婚はしてないって聞いたけど」

「そう、か……。ん、サンキュー、生徒会長。助かったぞ」

「え、そ、そう？ まあこれくらいお安い御用だけど————しまった。長居し過ぎた」

腕時計を見て眉間にしわを寄せつつ呟く生徒会長。どうやら予定をオーバーしてしまったらしい。

「また奉仕活動でもするのか？ クソ真面目だなあお前ら」

「不真面目なアンタ達よりはマシでしょう。今日は児童養護施設訪問の日なのよ。これから桜崎^{おうさき}まで出向。そういうことだから、私は

生徒会室に戻るわね。社君達も、いつまでも学校に残ってないで早く帰きなさいよ？」

そう言い残して、藤原は足早に立ち去って行った。忙しねえ女。仕事中毒になっても知らんぞ。ああいう程度を弁えてない新幹線みたいな女が、過労死とか熟年結婚とかに陥ることになるんだ。何でもやりすぎはよくねえよ？ うん。

「社さん、名残惜しそうですね。そうジーーーーっと会長の去った方を見つめないでください」

またコイツはこっちの機嫌を損ねるようなことを言いやがる。

「してねえから。ちょっと現代の社会問題について思いを馳せてただけだから」

「ああ、日本っていう一夫一妻社会では二股とか横恋慕ってのはご法度ですよ」

「知ってるっての。何？ お前、俺が一夫一妻制度変えてやろうだなんて考えてたと思ってる？」

「そういうこと大きな声で言うもんじゃないですよ、社さん。大体、アンタにその気があっても、会長とか理子先輩の方はてんでからっきしかもしれないんですからね」

いつのまにか完全に一夫多妻論者に仕立てられた俺。馬鹿馬鹿しすぎるから無視することにした。

「……棗葉月、ね。来週にもアポとして調査しないとな」

「歳上にもガンガン攻めていくなんて、社さん恐ろしいな」

「お前の想像が恐ろしいわ！　ってか、いい加減にその話題から離れろ」

不敵な笑みを浮かべる治郎。ダメだ、俺、コイツ嫌い。

「まあ冗談はさておき、社さんはまずこの学校の教師を把握する必要がありますね。来週までにリスト調達してくるんで、待ってて下さい」

「マジか、スゲー助かる。頼むわ」

「身内を疑うなんざ、あんまり気の良いもんじゃねえんですけどね」

「そりゃ俺も同感」

特に、棗葉月みたいな、あんな中も外も整った美人さんがもしも『G件』犯だったら、この世の中には神も仏もねえな。アレ、何かこの発言デジャヴ。

＊

翌十四日。

月華煌煌の時刻は午前三時近く。

街はもう眠りについていて、言うまでもなく人などこの深い闇に行き交う筈も無く、神さびた境内は只厚く垂れ込めた闇の中に沈没

している。

市街地から少し離れた、ここ蒼淵神社そうえんは中々に広い。

鳥居から本堂まで続く石畳の道は四十メートル程あり、砂利の敷き詰められた敷地には巨大な古木が左右で双壁を成している。

その無人の神社に、これまた二つの影が左右に佇んでいた。

そう、影だ。影など作り遂おほせる筈も無い黒の大勝の中、本来影を生み出す筈の本体が影と化している。

端から見れば、深夜の神社に人影があることだけで異様な光景だろう。魑魅魍魎の類と見間違えられても当地人達には文句が言えない。加えて、悠久の時を刻む巨木の葉が夜風に靡く不気味な音色が、丑三つ時をまた一層強く連想させた。

月からの蒼白い光を糧にするかのように浴びて、かろうじて存在する影の一つ——黒いメルトンコートと鮮やかな水色のマフラーを羽織った都瑚が、見上げていた鳥居をくぐって神社の敷地にゆつくりと足を踏み入れた。ブーツが地を蹴る軽快な音を響かせながら、彼女は無言のまま進んでいった。

その後を、まるで本物の影のように音もなくぴたりと寄り添うのはローデリックだった。年季の入った茶色の外套なびを靡かせながら、都瑚よりも緩慢に大股に歩を進める。

「しかし、まさか市街地で君と鉢合わせするなんて、思いもしなかった」

ローデリックの静かな発言に、都瑚は歩みを止めて彼に振り返った。

「それはこっちの台詞よ。あなた目立ち過ぎ。ファーストフード店で紅茶頼んで、ティーポットとカップが出てくるわけないでしょう」

都瑚の呆れた表情を目の当たりにして、ローデリックはばつが悪そうに視線を逸らした。

事の発端は三十分ほど前にさかのぼる。

『G件』犯について市街調査——もとも実際はただの気分転換——をするべく、都瑚は駅前に足を運んでいた。

蒼乃の街は眠らない。風俗店やコンビニエンスストアは言うまでもなく、人々の往来も乗用車の行き交いも、日中よりは少ないとはいえまだまだ頻繁だった。

賑やかな通りをしばらく歩いて、都瑚は小休止と栄養補給を兼ねてファーストフード店の自動ドアをくぐった。普段の生活が庶民とはかけ離れ過ぎてはいるものの、都瑚は自分以外の生活に興味もあつたし理解もあつた。ジャンクフードには留学時代にもお世話になっていた関係もあり、世間の流行に疎い都瑚でもこれだけはお手の物だった。

店に入るなり、都瑚は驚きを隠せなかった。恐らく一生こういう場では見ないであろう見知った大きな背中が、都瑚の眼前にそびえ立っていたからである。

鮮やかな金色の髪を持つその大柄な男は、困ったように頭をかいていた。だが、彼に應對する店員の若い女性は、彼とは比較できないほど慌てふためき、ほとんど泣きそうな表情を浮かべていた。その姿には都瑚も同情を禁じ得ない程であった。

見るに見かねた都瑚は二人の間に入って解決を試みた。予想外の登場人物に男――ローデリックは静かに驚きの声を上げ、店員は救世主の降臨を見たかのように表情を一変させた。

トラブル、というにはあまりにこ滑稽な話だった。彼は、注文した紅茶にティーポットとカップはつかないのかという純粹な質問をする意図で店員に話しかけたわけだが、店員はその外見と厳格な口調からクレームをつけられたと勘違いし、怯えてしどろもどろに言葉を紡いで、結果意味不明な事を話してしまっていた。そして、そんな要領を得ない説明にローデリックはどう対処するべきか立ち尽くして困り果てていた、というのが事のいきさつだった。

都瑚は呆れつつ双方の非を説明し、お互いが謝辞を述べて一件を鎮定させた。肝心の食料や飲料については、周囲を騒がしてしまった責任も感じて諦め、反省がてら二人でそぞろ歩きしているうちに、この蒼淵神社まで足を運んでしまっていた、というわけである。

「……いや、アレは失態だった。あまりああいふ商店に入ったことがなくてな。都瑚のおかげで難を逃れた。感謝している」

友人の大仰な言い回しに、都瑚は苦笑せざるを得なかった。

「戻るのが深夜になろうと、私の屋敷に帰ってから食事を摂ればいいのに。それくらい用意するわよ」

「いつまでも女中を拘束するわけにもいかないだろう。居候の身としてはあまり迷惑をかけられない」

「呼び付けたのは私の方よ？ 迷惑だなんて思わなくていいわ。それに忘れたの？ 私だって料理くらい作れるんだからね」

得意気になって話す都瑚を、ローデリックは心中複雑そうな表情で見つめていた。

「何？ 何か言いたそうだけど」

「いや。君の料理はその……个性的ではあるが、そうであるが故に私の感性乏しい舌では正しい評価を下せないというか、何というか……」

言い淀むローデリックに、都瑚は不機嫌さを隠しもしない。

「素直においしくなかったって言いなさいよね。でも安心して。院生時代よりは腕は上達しているもの。ダメもとで一度試してみて、ね？」

都瑚の押しの強い勧めに、ローデリックは観念したかのように力なく首肯した。神妙な面持ちで彼女の作る料理に対する期待と不安を分析しているローデリックとは裏腹に、都瑚は上機嫌に歩みを再開させた。

月の光が分厚い雲に阻まれ、いくばくかの時間、地上は晦冥に支

配された。

再び黙々と敷地内を進んでいた都瑚の細い両足が、唐突に歩みを止めた。ローデリックもそれを認めるより早くその場に留まり、周囲に視線を配って検めていた。

――何者かが、ここにいる。

それが彼らの共通認識だった。

重たく、濃い闇に月光が再び差し込み始めた時、ソレは姿を露わにした。否、闇に埋没していた存在が月光によって蘇った。

都瑚とローデリックの双眸に映ったのはヒトの形をした何かだった。小柄な体軀に見事な金の刺繍が入った深紅のローブに頭まですっぽりと包まれた何かが、こちら側に背を向けて佇立していたのだ。

都瑚とローデリックはそれを訝しげに観察する。彼らの、本性を射抜くような視線に感づいて、それは徐に都瑚達の方へ振り返り、機械のような精密な動作で二人と対峙した。

都瑚とローデリックの、息を呑む音が殊更大きく聞こえた。

それは人として当然の、致し方ない反応であった。何故なら、佇立し対峙するヒト形は、高名な職人による意匠の限りを尽くしたビスクドールのようなようだったからである。

綺麗、とはおこがましい。

耽美^{たんび}、では言い切れない。

毫^{ごう}も濁りは見つからない。

理想を具現した極上の真善美が、そこにはあった。

ヒト形は一見して少女のようだった。彼女の肢体を覆い隠すのはどうやら大きめのローブ一枚だけであるらしく、華奢な体つきがローブの隙間から見え隠れしていた。

フードから垣間見える、月光を浴びて透き通り、描線を際立たせる銀髪は少しウェーブがかかっており、遠目から見てもフワフワと微風に乗る流麗さが窺える。肌は白く、生糸の生地を連想させるような柔らかで、壊れてしまいそうな果敢なさを醸し出していた。加えて、その身を着飾るのは壮麗にして精緻な装飾の深紅のローブ。もはや不完全の代名詞である人間とは思えなかった。

言葉を失っていた都瑚は我に返り、依然、疑念を持ちながら強張った口調でそれに問う。

「あなた、そこで一体何をしているの？」

白哲^{はくせき}の少女は答えない。ただ何をするでもなくその場に立ち尽くし、けぶるような微笑を崩さず、深い、翠緑色の瞳で優しげに都瑚達を見つめ続けるだけだった。

都瑚は一瞬、言いようもない不安に襲われた。この子は本当に人

間なのか。もしや月の魔力で動き出した精巧な人形なのではないか、と。少女が微動だにしない時間が長引けば長引くほど、そんな想像が彼女の思考を侵食していった。

だが、それまで黙っていたローデリックが静かに都瑚に近寄り、耳元で小さく囁いたことで、都瑚は不安を確信に変える。

「都瑚、油断するな。アレは人間ではない」

ローデリックはそう断言した。

「いつぞやの、雑精霊ゴブリンと対峙した時の感覚と同じだ。奴からは完璧に整えられた魔力しか感じられない」

ローデリックは他人や物品、地域が発する魔力を感じ取ることに長けていた。魔力の流れというものを敏感に把握する能力においても、都瑚はローデリックに絶大な信頼を置いていた。それ故に、彼を今回の事件でパートナーとすることを要請したのである。

「ありえんことだ。オドであるならば、いくら精神的に安定していてもこうまで波一つ立てない状態を維持するのは不可能。ならば…」

「マナ、大気の魔力を自身に取り込んでいるっていうことね」

ごく小さな所作で點頭するローデリック。

「小規模なマナを取り込み、魔力へと変換する工程は一介の魔術師にも可能だが、奴の手法はそもその意味からして異質だ。肉体全てがマナによって満たされ、絶えず魔力へと変換、生成を続けてい

る。こんな芸当、人間という器に耐えられるはずもない」

ローデリックの言葉を受けて、都瑚はもう一度、眼前のヒトならざる少女を視界の中心に据えた。

——人間ではない。確かにそうだろう。諸々の異常が少女をヒト以外の何かであることを如実に示唆している。

だが敵であるのだろうか。ヒトならざる者がそのまま私達に仇名す敵だとは安直に結び付けられない。都瑚は戦端を開くことに逡巡を禁じ得ず、再度少女に言葉を投げかける。

「あなた、一体何者？」

もちろん少女は答えない。依然、杳^{よう}として明瞭としない事態を開しようとして、都瑚は慎重に一步を踏み出し、少女に近づく。

何の変化も、危害もないことを確認しつつ、緊張の面持ちで都瑚はまた一步進んでいく。ローデリックも険しい表情を崩さず、後に続いた。

二人は互いの心臓の鼓動が聞こえるようだった。いつの間にかそれほどに辺りがシンと静まり返っていたのだ。空気が確かに変わっていた。何かが目覚める予兆のような静けさに、都瑚もローデリックも緊張を倍加させた。

程なく進み、少女の背後にある境内が大きく視界に映り込んできた時、それまでは少女の矮躯によって隠れていた何かが、月の冷た

い光に彩られながら都瑚達の双眸に捉えられた。

紅い、だが鉄のような鈍い光沢を発する大量の液体が、少女の背後に模様を描いていた。その中心には、気味悪く蠕動を繰り返す物体が地面に横たわっている。都瑚は考えるより早く直感した。

これは血と、人間の死体だと。

冷静に状況を把握して、都瑚が後ずさりするのと時を同じくして、それまで微動だにしなかった少女が小さな笑い声を洩らし始めた。

刹那、都瑚とローデリックは最低限の動作で少女との距離をとる。ローデリックは都瑚を庇うように彼女の前に躍り出て、微笑を続ける少女と対峙した。

「貴様、ここで一体何をしていた？ その人間を殺したのは貴様か？」

少女はその端正な顔立ちに笑みを絶やさず、身構える都瑚とローデリックを一度眺めた。しばしの沈黙の後、形のいい桜色の唇を小さく開き、滑らかな口調で答えた。

「そうだね。彼女を殺したのは確かに私だ。だが、彼女が人間だという認識は君の見当違いだ。彼女はグール、いわゆる屍食鬼ししょくきでね、殺さざるをえなかった種なのだよ」

外見を裏切らない精緻で濁りのない美声は、静謐な神社の敷地内に似つかわしい神々しさを感じさせると同時に、都瑚とローデリックにそれ以上の畏怖を感じさせた。完璧すぎるが故に、この者はヒトならざる存在なのだと思わざるを得なかったのだから。

ヒトでないのに、ヒトの形をした異形。そんなモノには誰しも恐怖を禁じ得ない。

軽やかに言葉を発する少女とは対照的に、ローデリックは重く、厳格な口調で以って応酬する。

「そんな話を信じられると思っているのか」

「信じる、信じないは君達の勝手さ。ただ、この街には、ヒト以外の怪異と呼ばれる存在も跳梁跋扈ちようりやうばっこしていることだけは記憶の片隅に留めておいて欲しいな。私を含めて、ね」

「あなた、一体何者なの？」

都瑚は再度同じ質問を少女に投げかける。普段より声に厳しさを感じたローデリックは、相手が銀髪であることを鑑みてふと思う。これはいつぞやの屈辱の代償行為ではないだろうか、と。

少女はローデリックの前に進み出た都瑚を見据えた。

「名前はまだない。立場もまだ分からない。だけど恐らく、近いうちに神託は下るだろう。それを受けて初めて、私は私たり得ることが出来る。いつだって、私は主とともにあることを望み、望まれたのだから」

先ほどとは決定的に異なる、自嘲するかのような悲しげな笑みに、都瑚は違和感を覚え、さらに問う。

「どういう意味？ あなたは、何の目的があってこの街にやって来

たの？」

少女はそれっきり、何も答えなかった。

ただ、これ以上の問答を諦めるかのように瞼を閉じた。都瑚には、それが拒絶の意志表示であると思われた。

常に微笑を讃えた少女の次の表情は、哀れみにも似た諦観の笑みだった。

「すまないね、君達。出会ってしまったからには仕方がない。逃げるのならさっさと逃げることだよ。私は手加減なんて出来ない。元より、私に選択の自由なんてないのだからね」

言い捨てて、彼女は言葉を区切る。

瞬間、此处一帯の世界は切り替わる。

魔術という、異質なモノが存在してしまう一つの異世界へと。

「J e c o m b a t s . J e c o m m e t s u n e i n
f r a c t i o n p o u r D i e u . (主より賜りしこの剣、
其を振るうは自らの罪を雪ぐ正道なり)」

それは彼女の祈り。意志の決定、自己の変革。

「まさか、あなた、魔術師だなんて……」

少女の儀礼を眼にして、都瑚は得心し、同時に驚愕した。淀みな少女の鶯舌おうぜつは、魔術師としての自身を異界と同化させる儀礼の言

霊である。

「Veuillez me r?pondre. (我が意志に応えよ)」

銀髪の少女が呪文を紡ぐ。歌うような軽さと滑らかさで、自身への申請権を行使する。

「Flambez tel que la lance. Il
br?le compl?tement la totalit?
tout. (時も満つれば滅ぶが必定。汝、ただ悉くを破却せよ。
我は、ただあらゆる存在を忘却す)」

唱えながら、少女の右手がゆっくりと差し出される。

その白磁のように滑らかな指先には、真紅に滾るほど頭になった
?が波打つように揺曳し始めていた。

「Vous devez battre l'ennemi. J
e vous donne ordre pour le
commencer. (天理の環をここに。過ぎたるはなおとこし
えに続く征旅の途次なり)」

呪文を結ぶと同時。

その姿を現した焰は一瞬のうちにまばゆい程の光を発し、耳を劈
く轟音とともに都瑚達目掛けて一直線に撃ち出される。

例えるのなら焰の槍。まるで見えない筒の中に油が充満している
かのように、摂氏三千を優に超えるそれは形を崩さずに尾を引き、

高速で空を裂く。

「避ける、都瑚！」

一瞬の出来事に立ち竦^{すく}む都瑚を抱きかかえ、ローデリックは苦心の声を漏らしながら身を捻^{ひね}って初撃を紙一重で躲す。焰の槍の軌道には空気さえ溶解させるかのような熱波がこびり付き、季節外れの陽炎を生じさせていた。

「これがマナの……？　なんてケタ外れの魔力なの……」

そんな口を利けるのも束の間だった。

気づけば、都合四本もの焰の槍が都瑚とローデリック目掛けて次々と襲いかかってきていた。

二人に突撃した焰の槍は一段と強烈な発光を夜闇に刻み込み、四方に爆散し、強烈な爆発音と酸素が滅される音を敷地内に響かせた。

焼き尽くされた領域に、もはや生前の姿を保つ者など皆無。即死は必定の熱量である。見るも無残な“今さっきまでヒトだったもの”が、爆心地の中央に打ち捨てられていた。

＊

2. 崩された日常 / 10

＊

そう、そのはずだった。

だがしかし、その現実はこちらに色を失い、時の奔流の中で、一空想として消え去ることとなる。

ローデリックは一瞬の動作で掌に忍ばせていた、小さな楕円型の植物の葉を何枚か握りしめる。

「ANKH！」
アंक

見慣れぬ記号が刻まれた十数枚の鮮やかな緑の葉は、呪文を添えられて上空へ放り投げられる。

瞬間、全ての葉が眩耀^{げんよう}し、巨大な光の円環がローデリックと都瑚を囲い込んだ。円の縁に浮かび上がった文字や記号が回転し、一層強い光を円環の外へ向けて解放する。

そして、黄金色の光の壁が渦のように取り巻いてローデリックと都瑚の周囲を取り囲んだ。

その名を王名結界。
カルトゥーシユ

古代エジプトにおいて、王を災厄から守護したとされる聖刻文字を刻んだ、神代において永遠を生きたとされる植物・イシエドの葉のレプリカを媒介として顕現する光の防御壁。呪術や魔術の類に対

してその真価を發揮する魔障ましようの結界である。

外界の接触を完全に断つ圧倒的な光の総量を前に、四本の焰の槍は行く手を阻まれて激しく衝突し、槍頭は突き抜けることなく弾き返された。

「…………防いだ、か」

少女の小さな呟きは、驚嘆や焦燥とは無縁の、脚色なくただ事実を報告する機械的な動作だった。

魔術の焰が晴れ、光の壁も、その鮮やかな存在の余韻を残しながら終息する。消え行きつつある円環の中央には、未だ生者としての姿を保ち続けたローデリックと都瑚の姿があり、力を使い切ったイシェドの葉がゆらゆらと彼らに降りかかる。

残熱は未だ空氣に焼きついて、辺り一体を高温の熱波で支配している。酸素という酸素は奪い尽され、息苦しさを感じるほどだ。都瑚は地面に座り込み、呼吸することを欲して喘ぐことしか出来なかった。

——なんて、力。

都瑚は、魔術師としての圧倒的な力の差を認めざるを得なかったと同時に、自分の不甲斐なさに内心怒りを覚えずにはいられなかった。ローデリックがいなければたちまちの内に焼き殺されていたのは必定。いくら魔術の本分が戦闘ではなく、また彼女自身戦闘へ向いていないとはいえ、敵の攻撃を前にして回避一つままならないの

では足手まといもいいところだと、自責の念に駆られ続ける。

地面に膝をついていたローデリックは徐に立ち上がる。纏わりつくかのような熱気に眉を顰めながら、彼の大きな肩に降り立った葉を静かに払いのける。

「エジプトの大典儀^{だいてんぎ}か。レプリカとはいえ、流石に突き崩すことは出来ないな」

残念そうに肩を落とす少女に、ローデリックは厳しい視線を向ける。

「貴様、やはり精霊種ではなかったか。だが、なら何故我々と敵対する？ 貴様を縛る意志とは何だ？」

「さっきも言っただろう。全てはまだ闇の中、私自身、暗中模索の状態なのだよ。」

だが、一つだけはっきりしている。私は、君達に対して恨みも確執もないけれど、君達と争うことを、ある存在から宿命づけられている。故に君達と敵対する。魔術師や、それにつき従う騎士と、ね」

自分達の正体が看破されていたことに、二人は内心驚きを隠せなかった。だが不思議には思わなかった。それだけ、この少女は未知数な存在なのである。

「解せんな。貴様も同じ魔術師ではないのか？」

「勘違いしないで欲しい。私は魔術を扱えるだけであって魔術師ではないよ。例外は常に存在する。」

君、私はね、魔術を手段として使うことを躊躇わないけれど、魔

道の探求や追究にはまったく興味はない。昔から、魔術師扱いされるのが一番嫌いだからね」

少女は初めて不愉快らしき感情を垣間見せた。

その言葉に、ローデリックは危機感を募らせる。

少女は自身を魔術師ではないと断言した。魔道に通じることなく、魔術を武器とする連中にも心当たりはある。ならば、どちらもまだこの場に存在している以上、戦いはまだ終わってはいないのでないか。ローデリックは外套のポケットに忍ばせている残り少ないイシエドの葉を握りしめ、少女の次の行動に細心の注意を払う。

殺伐とした空気に満ち満ちている中、二人の問答を聞くだけだった都瑚が、呼吸をなんとか整えて立ち上がった。都瑚は敵意でもない、それといって好意でもない、複雑な眼差しで少女を見つめる。

「まだ何か、聞きたいことがあるのかな？」

屈託ない笑みで少女は問う。

「……あなたが何者なのか、気にはなるけれど、もう訊くことはないわ。ただ、一つだけ答えて欲しいの。あなたは、この街の異常と何かしらの関係があるの？」

「関係があると言えばあるし、ないとも言えない。ただ、この異常を引き起こす元凶とは何ら関係はないよ。元凶を突き止め、駆逐することも私の存在理由の一つだからね。この屍食鬼^{グール}退治もその延長さ」

石畳の上に転がる死体に目を配りつつ、少女は言う。

「屍食鬼^{グール}の発生も、異常の一端だと言うの？」

「そうだよ。この街の住人が異能の力を発現させているのは君達も知っての通りだ。人間という存在に何らかの影響を与えているのだとしたら、死人にその余波があっても不思議ではないだろう？ 既に二つは始末した。だがこれから先も発生し続けるだろうね。ヒトが死なない日など、この街にはあり得ないのだから」

都瑚達は驚嘆した。少女の話が事実だとすれば、事態は刻一刻と変動している。それも最悪の方向に。生きとし生けるものが憎しみ合う地獄に、さらに死人までもが彩りを加えようとしているのだ。ただでさえにわか異能力者の存在で、蒼乃の街はギリギリの綱渡りをしているというのに、もしもそのような超常の存在が街を闊歩し、街の人々に認識される恐れが懸念され始めれば、蒼乃は終る。超常の存在を許さない様々なヒトの意志によってこの街は『秘匿』される。この街に住む人間も含めて、全てがなかったこととして歴史の闇に葬られてしまう。

言葉を失う都瑚に、ローデリックは気遣うような眼差しを向けていた。どうか嘘であって欲しい、そのような感情も読み取れる口調で、ローデリックは少女に問う。

「貴様は、この異常についてどこまで知っている？」

「内情を知悉^{ちしつ}しているわけではないよ。私はただ感じているだけだ。異常は常に異常を引き寄せるのだからね」

「……なるほど。そして、それを信用するかどうかは我々次第、と

言いたいのだな？」

少女は答えず、ただ笑みを以って応答とする。

「君達、心して置くことだね。異常は深くなるばかりだ。屍食鬼グールや死人は間隔を短くして次々と現れるだろう。それに、さっきも言ったけれど、ヒト以外の脅威も思考の片隅に留めておくことだよ。それに……ん、限界か。私から言えるのはここまでかな」

誰かに口止めでもされるかのように、少女は言いかけた言葉をそのまま飲み込んだ。都瑚達も、それ以上訊こうとは思わなかった。

「……あなたは、これからどうするの？」

当初から感じていた複雑な感情が、都瑚にそんな言葉を紡がせた。出会えば争わなければならない運命だし、危うく殺されかけたことも事実だが、都瑚は少女を敵であるとは認識し切れなかった。故に、少女の動向が自分の目的に添っていることを期待したい意味も含め、このような問いを彼女にぶつけていたのである。

少女は今まで以上に優しげな微笑をたたえ、都瑚を真っ直ぐ見つめた。

「見えざる者の意志の通り、怪異を駆逐し、私が敵と認める人間を屠ほふるだろうね。だけど、明言しておこうか。私はヒトを護ることも宿命づけられている。君の理想と合致するかは分からないけれど、大きく違たがうことはないと思うよ」

三者の間に沈黙が降り立った。都瑚とローデリックは少女の言葉の真意を探るように、少女は彼らの反応を楽しむかのように、視線

を交差させる。

だがそれも長くは続かなかった。少女が先に緊張を解いたのだ。

「さて、気は済んだかな。君達、早く逃げたまえよ。でなければ、次こそ確実に灰となるよ」

自らの華奢な腕を抑え込む少女。見えざる者の意志が、彼女の肉体を再度支配下に置くべく浸食を開始していた。

「見逃すと言うのか？」

「ヒトは殺したくないんだ。出来れば、だけれどね」

——今ここで戦うには分が悪い。それに、そもそも戦うことは我々の目的ではない。ローデリックは都瑚に視線で逃走を促し、踵を返そうとした。だが都瑚は彼の意に反して、未だに行動しようとはしなかった。

「都瑚？」

「分かっているわ。ごめんなさい」

視線を落しながら、都瑚はローデリックの後に続こうと少女に背を向ける。だが、すぐに少女を振り返り、今までとは異なる、優しげな表情を少女に向ける。

「ありがとう、いろいろ教えてくれて。名前が分かったら、また教えに来てくれると嬉しいわ」

都瑚は最後にそんな言葉をかけ、二人は足早に夜の深い闇に消え

ていった。

少女は思いも寄らない都瑚の行動に少し驚いていた。呆然として、開いた小さな口を閉じられなかったが、すぐにまた微笑を浮かべ、何を言うでもなくその場に立ち尽くしていた。

＊

魔術師と騎士が立ち去ってしばらくの間、少女は一部始終を傍観していた旧友を、なつかしむかのような瞳で仰ぎ見ていた。

「久しぶりだね。君を見るのはいつ以来かな。本当に、君は相変わらずだな。いつだって、そうして私達を見下ろしているんだから」

頭上でぼんやりと輝く少し欠けた月に向かって、少女は語り続ける。

「君、私がどうやってここまで来たか知らないかい？ まだ自我が再構成し切っていないらしくてね。いつの間にか務めを果たしていた、だなんて、我ながら律儀なことだと思うよ」

もううんざりだとも言わんばかりに、小さく溜息をついた。実際、彼女は無意識の自分の行動に嫌気がさしていた。

それから少女は唐突に、小さな笑い声を洩らす。

「しかし、まさかヒトと会話することになるだなんて。そんな行為、遠い昔のこと過ぎて、しばらくどういう応対をしていいか考えてしまった。フッフ、私を見る彼らの顔ったらなかったなあ。会話って、こんなに楽しいものだったんだ」

それは年相応の、少女の心の底からの笑顔だった。無邪気な声と弾む笑みこそ、ビスクドールと見紛う美貌を持つ彼女に似つかわしかった。

「さて、私もそろそろ、止り木に帰ろうかな。同居者は少し捻くれているけど、あそこは存外、居心地がいい」

——そう、忘れ去っていたことは多い。だがそれを見つける楽しさもこれから数多くあるだろう。それに、まだ記憶していることだっている。知識や事実というつまらない記憶ではなく、実感という名の、心休まる記憶。

少女は音もなくむき出しの白く、小さな足を踏み出した。深夜の気温はマイナス一度を記録していたが、ローブ一枚しか羽織っていないというのに少女は一向に寒いとは感じなかった。身震い一つせず、見る者が息を呑むかのような美しく、また儚げな印象で石畳を進む。

鳥居へ向かって歩みながら、振り返りもせず、少女は小さく指を鳴らす。途端、背後に倒れていた死体から紅い炎が発火し、忽ちにその身を黒い姿へと変貌させた。灰はやがて音もなく風に乗り、中空へ溶けるかのように消えていき、同じように、先程まで存在感強く地面を彩っていた血液は、跡形もなく焼き尽くされて、元の古びた石畳が顔を覗かせていた。

「この私が炎の魔術を弄するなんて。まったく、皮肉なことだよ。これから先、何度嫌な過去を思い出せばいいのか」

少女は微笑に苦悶の表情を加える。悪夢にうなされるように、実

在しない光景が瞼の裏に鮮明に蘇り、少女の平常心を蝕んでいく。

燃え盛る炎。むせ返るほどの熱。溶ける視界。なくなる身体感覚。
覚。

心を押し潰すほどの凶悪な恐怖から逃れようと、少女は頭を振り、
幻想を否定する。

少女は再び蒼白い月を仰ぎ見る。しかし今度は、今までの少女らしからぬ、縋るような眼差しで。

「思い出したくないことばかり思い出す。家族の温もりも、友人の声も、毎日通った畑の土の匂いも感触も全て、忘れてしまったまま
だというのに」

2. 崩された日常 / 11

明けて十二月十四日の金曜日。

我が宝囊高校は他校を尻目に恒例のテスト明け休校ということで、この機会を活かして他校の潜入調査なんかしてみろ俺。学ランを着るのは久し振りだ。借り物だから着心地はあんまり良くない。

午後の授業までに、仲介人が在籍する桜崎高校わうさきの対象女性教諭全員の事情聴取を、自分でも驚くくらい手練手管を弄し、こっちの正体も意図もバレることなく終えた。が、労力に見合わずこれといった収穫なし。どの教師も限りなく般ピー思考で、無論、怪しい言動もなかった。

都瑚さん曰く、「『G件』犯は社会や他人に対して憎しみや悲しみ、嫉妬といった負の感情を強く持っているの。その感情を発露しても自分を守るだけの力を得たことで自分だけの常識を手に入れる。一般社会との隔たりは大きくなり、自ら距離をとっていくはずよ。無理に溶け込もうとしても、何かしらの軋轢を感じ、正常な社会的行動をとれない。そういう人間に焦点を当てて探してみて」。

要するに、一般人に擬態した社会不適格者を探せばいいってこと。こればかりは深層心理に立脚する思考だから、建前とか道徳で隠し遂げるものじゃない。『G件』発生時のアライバイを訊くよりよっぽど信憑性があるし、第一、高校生ごときの俺が教師に「最近、どうやって過ごしてます？」とか訊けるわけもない。

聴取内容を書き留めたメモ帳を何度も読み返すが、やっぱり骨折り損のくたびれ儲けとしか言いようがない。予想してはいたが実際そうだと心が折れそうになる。やっぱりあんな荒削りの予想じゃ『

G件』犯のジの字にも掠りはしないのか。着替えを手早く済ませて桜崎高を後にし、肩を落として意気消沈しながら、俺は駅前まで移動した。

手近なコンビニで昼食を調達してから、はて、どこで食べばいいのかと考える。午後になって少しは暖かくなったとはいえ、まだまだ冷氣は凶悪。どっか暖房の効いた静かな場所に行きたいが、そんな場所が早々あるはずもなく。気付いたら駅中を通って、いつも通り北口の駅前広場まで歩いていった。刷り込み現象か、コレは。

ここまで来たら家に戻るのも億劫なんで、この前沙耶に紹介した海沿いの公園に移動することにした。寒さはどうにもならないが、騒音はある程度抑えられる。今日はそれで我慢するとしよう。

「あつれ、社さんがいるよ」

横手から聞き覚えのある軽そうな男の声が、雑踏の中でもはっきりと聞き取れた。そして人混みを掻き分けて……と言うより人混みの方がモーゼの海割りよろしく戦々恐々と道を空け、図体のデカイ金髪がそこを悠々と進んできやがる。不肖の後輩二号、立倉だった。もう少し目立たずに登場しろよ、衆人環視の的は俺が居たたまれない。

「こんな時間に会うなんて珍しいですね。授業はボイコットですか？」

眼の前まで近づいてくる立倉。遠目からでも頭一本突き抜けてるデカブツなのに、ここまで接近されたら、もうちょっとした書割みたいだ。見上げるのは首が痛くなるから、五メートルは離れろと言いたくなる。

「人聞き悪いことぬかすな。こっちは正式な休校だ。お前は完全に自主休校だろうけどな」

「当たり前でしょう。アンタ、何年俺と付き合ってるんですか」

そこは自信持つて言うべきところじゃねえだろ。

能天気にはケラケラ笑う立倉の将来が、俺は本気で心配になった。一応先輩として、注意勧告くらいはしておいてやろうなんて思う。

「なあ、ドロップアウト。いい加減、登校日数稼がねえと本気でダブるぞ」

「変なネーミングしないで下さい。というかご心配なく。ちゃんと計算してるから平気ですよ。それより杜さん、またナンパでもしてるんですか？ 何なら俺も付き合いますよ」

言うなり身だしなみを整え始める立倉。黒いダウンジャケットにジーパンというナリには派手でルーズという不良の特徴がないからナンパも出来なくはないだろうが、やるなら一人でやりやがれバカ。

「あーウザったいウザったい。ナンパじゃねえから。こりゃ歴としたアルバイトなんだよ」

「だから、客引きのアルバイトでしょ？」

「……もういい。お前嫌い。あっち行け」

「あー冗談ですよ。拗ねないで下さい。治郎から話は聞いてますっ

て」

ならスムーズに話を進めろ。何だってどいつもこいつも俺の不快指数を上げるような余計なマネをちょいちょい会話に挟んできやがるんだ。

「どこの高校回って来たんです？ え、桜崎高？ あ、あそこはガリ勉女ばかりだから興味ないッスわ」

「いや、お前の興味とかどうでもいい。ンなことより、近いうちに
たけしたお前のとこの竹志田高もお邪魔するから。そんな時はよろしく」

「了解ッス。いやー、でも『G件』犯探しだなんて大変そうですね」

大変そうとは思ってない興味なさ気な声調だった。俺の後輩は総じて小生意気な奴が多くて困る。

「滅茶苦茶他人事だな」

「そりゃそうです。俺からしたら『G件』犯の話はどうでもいいんです。全部社さんに任せておきますから」

「懐くな、気色悪い。大体、なら何でローラー作戦なんかやってたんだよ？」

何日か前、意気揚々と『G件』犯探しを宣言していた奴の発言とは思えねえ。

「あれはその場の勢いというか、周りの空気に吞まれちゃって。俺、物事に熱しやすく冷めやすい性格なんです」

「つまり、今はもう集団行動からリタイアして、これから戻る気もねえってことね」

「ま、そんなところです。あ、でもちゃんと協力はしますよ。あっちには治郎が残ってることだし、情報は扱う必要ないでしょうけど、尾行とか張り込みとかならどうぞ遠慮なく」

立倉が言い終わると同時に、携帯の無機質な着信音がけたたましく鳴り響いた。どんだけ大音量なんだ、ちよつとは人様の迷惑考えろ。

一体どこのKYの仕業だ、なんて思いながら周囲に目を配ると、すぐそばの立倉がポケットから真っ赤なド派手ケータイを取り出していた。犯人はお前か。周囲の皆さんの不快を代弁して一発ケリを入れとく。

「イッテ、何するんですか」

「うるさい、黙れ。日々の行いを反省しろバカ」

立倉は訳が分からないようで大きく首をかしげた。納得し切れていない表情のまま液晶を見て、さらに慥然とした表情を浮かべつつ着信に応答し始める。通話時間は約三分。立倉はケータイをしまい、珍しく溜息をついた。

「あー、かったりい。すいませんけど社さん、俺、呼び出し食らったんで昼飯は付き合えないッスわ」

「いや、別に頼んでねえし」

「というか、どうして俺が昼飯をまだ食っていないと断言出来るんだ、コイツ。俺ってそういうの顔に出るタイプなのか？」

「いや、待てよ。まだ十分くらい余裕あるか……。ってことで社さん、俺の話聞いてくださいよ」

「意味が分からん。どうしてお前の暇つぶしのために、俺が貴重な労力削って話を聞かなくやいけねえんだよ」

「いいじゃないですか。俺が話したいって言ってるんだから聞いてくれたって罰は当たらないでしょう？」

しつこく食い下がってきやがる立倉。そんなに話したいのか。かったるいことこの上ない。でも、ここで終わりの見えない否定の応酬を繰り返すのはもっとかったるい。不幸だ。俺はがんじがらめである。

「……………わあーた。話せば気が済むんだな？　終わったらさっさと消えてくれるな？」

もちろん、と首肯する立倉。まあ仕方がないから聞くだけ聞いてやる。どうせしようもない話だろうけど。

「これは昨日のことなんですけど、彩夏あやかと一緒に渋谷の190（イチキューマル）に行った時の話で……。あ、彩夏ってのは先月から付き合い始めた俺の彼女なんですけど」

「お前っ、脳ミソぶっ飛んでんな。何？　彼女いるくせに堂々と駅前でナンパしてたのかよ」

ちなみにそのナンパとは言うまでもなく沙耶と初めて会ったアレである。

立倉は不敵に笑って得意気に一言。

「俺はいつだって向上心を忘れないんです」

単に節操ねえだけだろうが。

……まあ、実際立倉は女受けがいい方だし、根が遊び人だから一人の女を侍らせるだけで満足出来るわけもないか。この場合、不幸なのは恋人を次々とつくられる女の方か、はたまた一人の女に満足出来ない立倉の方なのか。俺にはどうでもいいことだけど。

「話を元に戻しますけど。彩夏、手当たり次第に服を持ってきては試着して似合うかどうか聞いてくるんですよ、ウザったいことこの上ないってゆーか。俺達健全な高校生男子からしてみりゃ、そんな表面上のお飾りなんて興味ないわけですよ。社さんもそうでしょ？」

「勝手に俺をお前と同じ変態にカテゴライズするな」

立倉は俺の否定も意に介さず話を続ける。

「やっぱり下着ですよ、下着。シルクとかレースとかコットン、それらの魅力長所を最大限に活用させるデザイン性と機能性、これに尽きますね」

曖昧に返事をする。まったくもって興味が無い。

「彩夏は水色のコットン生地を好んで履くんですけど、俺は断然、赤のレースが好きです。あの、情熱たぎを持て余すかのような燃え滾る熱気色が、蜃気楼の如く俺の炯眼けいがんを乱すんですよ。アレを履く女の肢体は、普段の四倍くらいの艶なまめかしさを幻視させますね。ああー、彩夏も履いてくれれば。きつと似合うんですよ、いや似合わなくてもいいッス！ 履いてくれるだけで俺は満足ッスよ！」

阿呆か、と思う。

大体お前は彼女を褒めているのか貶けなしているのかどっちなんだよ、と。

「わあーたわあーた、力説ごくろーさん。お前の変態性は十分証明されたからその辺でやめとけ」

「いやちよっと待って下さい。これからが本題なんですから」

「前振り長えよ！ ……あのな立倉、オレはお前の話を聞いていても全然楽しくないんだよ、わかるか？」

「奇遇ですね。オレもアンタに話を聞かせていても全ッ然楽しくないんですよ」

立倉は満面の笑顔。なら話すんじゃないよ。

「……で、早く本題を言え」

「え？ あ、ああ、そうでした」

何故か立倉は咳払いをして仕切り直し、実に深刻そうな面持ちで

俺を見る。何だ、コイツにしては珍しく真面目な話でもするのか。

「……理子先輩の下着は何色ですか？」

「地獄へ落ちろ」

期待した俺がバカでした。コイツは筋金入りの阿呆だっていうことを失念していた。

「知らないんですか？ 一か月以上も付き合ってるのに？」

「付き合ってねえから。俺の過去を勝手に捏造するな」

「つかしいなあ、俺の見立てが外れるなんて」

心底不思議そうに考え込む。どんだけ自信あったんだコイツ。「いや、お前の眼はマジで腐ってるよ」とでも言いたくなる。

「大体なあ、なんで一か月前からなんだよ？ 何か兆候でもあったか？」

立倉の話で唯一聞きたいと思ったのはここ一点だけである。あったならあったで正しい認識を教えてやらねば。変に噂を広められるのも面白くないし、釘をさしておくに越したことはない。

「ほら、十一月辺りから、理子先輩微妙に化粧も髪色も変えたから。こりゃ誰かに恋してるな、と」

髪色は何となくわかるが化粧までは気付かなかった。というか普通気付かないだろ。どんだけ敏感なんだ、お前。

「だからって真っ先に俺を連想するな。他にいくらだって男はいるわ」

俺の発言に、立倉はぶん殴りたくなるようなニヤつき顔で返す。

「甘いですね社さん。独り身にはキツイ十二月を前にして、女が興味もない男の回りをうろちよろするわけねえでしょう。理子先輩は社さんに脈アリですよ、絶対に。ということで、これからすぐにくっつく予定とかないですか？」

「ねえよ。お前の浅はかな予測じゃ幼稚園児のあみだくじも当たらねえよ。第一、最近は理子と顔も合わせてねえから」

「喧嘩でもしたんですか？」

「お前にはゼツテー教えねえ」

「ちえ……。ま、社さんに色恋沙汰を期待するのが野暮ってもんツスよね。あんな美人が傍にいてのに、今まで何のアクションも起こさねえんだから。あーあ、俺も理子先輩と同じ高校だったら、階段の下からパンツを覗き見することだって出来たのに」

立倉は分かりやすくしよげ返る。そしていけしやあしやあと「俺、犯罪予備軍です」宣言。

「黙れ常習犯。警察に突き出すぞ」

「やめて下さい。アンタは本気^{マジ}でやりかねないから」

大袈裟に怯えた振りをする。治郎にしろ立倉にしろ、どうしたって俺を無慈悲な冷血漢に仕立てたいらしい。三回ぐらい地獄に堕ちろ。

「わかったわかりました。そう睨まないで下さい。いい暇つぶしにはなりましたから、社さんの機嫌を損なう前に退散しますよ」

どうやら内心の怒りが気付かないうちに行動に影響していたらしい。じゃ、と短く別れの挨拶をして、立倉は駅へ向かって人混みの中に消えていった。

立倉の姿を見送りながら、さっきまでの会話が頭の中で反芻される。

……理子は俺に脈アリ、ねえ。

実際、俺もそう思わなくもない。いや、自惚れとかじゃなくて。大体、告白してもOKもらえるかどうかの雰囲気は、俺だって何度か恋愛前線を潜り抜けて来たから何となく感じられる。それに、少なくとも嫌われてはないはず。……今はギクシャクしているが。

とにかく仮に理子が俺に好意を持っているんだとしても、だ。恋愛をする理由も利点も俺には思いつかないな。立倉みたいに肉欲で付き合うことなんて興味も出ないし。結局、理子とはこのままの関係が一番心地いいという結論になる。それが最近崩れかかっているとはいえ、俺はまた以前のような関係を望むだけ。理子が同じ考えであることを祈るだけだ。

だけど、もし理子が俺と男と女の間係を望んだら、俺は一体どうするだろう。突き放すのだろうか？　それが俺にとって最悪の結末

だとしても。それとも、そうなる前に自分から距離をとるのだろうか？　それが、理子にとって一番辛い応答だとしても。

……やめた。イフを考えたらキリがないし、第一ここまで来たら自意識過剰も甚だしい。恋愛関係はその時になって考えるのが健全だろう。でなきゃ妄想とか後ろ指さされかねん。

さて、思いもかけない邪魔が入ったがそれも撃退したことだし、当初の予定通り海沿いの公園を目指そうと移動を開始する。

駅ビルに設置された大型スクリーンは、昼時定番の情報番組を垂れ流していた。表示される時刻は一時半を少し過ぎたあたり。午後は丸々予定がない。何をして過ごそうかと考えながら広場を横切ろうとすると、見知った顔を視界の端に捉えた気がした。こういうのは一度気になるとどうしても確認したくなっちゃうのが難点。溜息をつきつつ振り返って見てみれば、ガス灯を模したデザインの街灯に背中を預け、じっと人の波を見つめる女が一人。

八代沙耶だった。

遠目からでもはつきりと分かる。これだけの美少女は蒼乃の街に二人としない。惜しむらくは愛想がないから偶像アイドルとしては祭り上げられそうにないことか。いや、俺からしたらそれは願ったり叶ったりではあるんだけど。

……何だろう。声をかけて欲しそうな寂寥感を醸し出しているようにも感じられるし、誰も近づくなつて言う冷然たる雰囲気を感じなくもない。空気を読み違えるなよ、俺。KYは流石に残念過ぎる。ということ、もう少し様子を見てみようと思う。

にしても、そんなことより俺には別のことが気にかかる。このクソ寒い中、沙耶は黒いタイツとミニスカートに薄手の上着、あとは柄物のストールを肩に掛けるだけという超薄着。女の服って解んねえな。あれで防寒出来てるんだろうか。

相変わらず、沙耶の表情からは何も窺い知ることは出来そうにない。無表情とはいえ、その良く出来た面はほとんど陶器人形を見ているようで目の保養にはなるが、同時に空恐ろしさもある。ほら、仏蘭西人形と違って綺麗ではあるけどちょっと不気味さもある、動かないと知っているが故に動いた時のことを想像して恐ろしくなる、あんな感じだ。沙耶の場合は逆の発想だけだ。

沙耶は一向に動かない。瞬きをしたり白い息を吐いたりするだけだった。誰かと待ち合わせでもしているんだろうか。だとしたら声をかけるのは野暮と言うヤツである。しかし、だからと言って知り合いをスルーっていう無礼千万は俺の精神衛生上良くない。またもがんじがらめになる俺。案外苦労性なのかもしれない。

……あー面倒くせえ。考えるのはもうやめだ。挨拶だけして、お邪魔だったらさっさと退散すればいいじゃねえか。

一人で勝手に納得して、俺は沙耶の近くに移動して声をかけた。

「よう、久しぶりだな」

俺に顔を向けた沙耶はやっぱり無愛想な表情。冷たい、と言うよりは凜とした雰囲気ではあるが、少しは驚くなり笑うなり感情を表面に出して欲しい。さっきの空恐ろしさじゃないが、マネキンに話しかけているみたいで現実感がまるで湧いてこない。

と思っていたら、俺を見てから沙耶の口元が微妙に上向きに変わったように見えた。ごくごく小さな変化、いや、俺の妄想か？ 判断するのは面倒なんで気にしないことにした。

「本当、久しぶりね、慶太」

「お、ちゃんと覚えていてくれたのか」

てつきり、一度会っただけじゃ俺のことなんてもう忘れているんじゃないかと思っていただけにちよつと感動である。

「忘れるわけないわ。初めてちゃんと話したこの街の人ですもの」

大袈裟なことを沙耶は言う。まあ言われて悪い気はしない。加えて、見た目が好みであるというだけに俺も人並みに嬉しさを感じた。

「今日は学校じゃないのか？」

「ええ。一般生徒は今日まで期末考査だけど、私は編入試験と一緒に学期末試験も受けたから免除されているの。そう言うあなたは？」

「こっちは一足早くテスト明けで休校。暇だからこの辺をブラブラしてたワケ」

そう、と今日一日の俺の行動にはこれ以上興味ないと言わんばかりに、沙耶は言葉を切り、口を閉ざす。

予想通りの反応ではある。だからこっちから話題を振ることにする。

「そうだ。この前はありがとうな。スゲー助かった」

「この前……ああ、縁切りの。余計なことを言ったんじゃないかって、少し心配していたんだけど」

「杞憂だな。お前のおかげで計画はつつがなく終わったよ」

まるっきり成功とも言い難いが及第点とは言える。第一、その原因は沙耶にはない。俺をその気にさせてくれただけでも十分だ。

そう、よかったと、沙耶は一言だけ発して、またも黙りこくってしまった。

……………。

……………。

……沈黙が重い。加えて、名前も顔も知らない他人の注目が背中にチクチクと刺さるようで気味が悪いったらありやしない。

ただでさえ沙耶の容姿は目立つ。そこら辺の道行くオヤジや男子学生の熱視線、女どもの羨望の眼差したるやすさまじい。その余波を受ける俺はまたも居たたまれない。自然、どうにかこの場から立ち去ろうと用意していた言葉を訥々と絞り出す。

「あー……お前、ここで誰かと待ち合わせとかしてるのか？ そうだったら俺はもう引き上げるわ、邪魔になるのもアレだし、うん」

というか何でもいいから、とにかくこの場からいち早く離脱したい。注目されるのは慣れていないし、変に緊張してしまうのだ。自分から声を掛けておいてどういう了見だと言われるのは百も承知だ

が、頼む、今すぐに俺を解放してくれ。

だがしかし、俺の淡い期待は脆くも崩れ去る。沙耶は緩慢な動作で首を横に振ったのだ。

「別に、誰も待っていないわ。ただ、ここで呆としていただけ」

途切れることのない人の往来を虚ろな眼で眺めながら、心ここにあらずと言った風に沙耶は言う。

……さて、どうしよう。予想に反して沙耶は誰とも待ち合わせをしていないらしい。どういう理由ならこの場を離れても不自然ではないだろう。

……いっそのこと、もう一度沙耶をあのか園に誘うというのはどうだろうか？ ……うん、名案かも。あーでも待てよ、知り合って日も浅いの、出会って早々っていうのは何だか馴れ馴れしいとか図々しいイメージが先行しないか？ まるで俺がデートに誘いたくて誘いたくて仕方がないみたいじゃねえか。別にこっちから願ひ下げだとか身の程を知らない発言をする気はまったくなく、むしろそうであれば今のところ一番いい。要は俺のどうでもいい面子の話である。出会って数分で女を人気のないところに誘う俺って、実は凄く警戒されるんじゃないだろうかという、ある種行きすぎた被害妄想が俺の行動にいちいちストップやノーを突きつけてきやがる。

煩悶して一人パニクる俺を尻目に、マイペースな沙耶は、一度ゆっくりと深呼吸なんかしていやがった。まるで、ここに存在していることを実感するかのような、深い生存行動。その、あまりの厳かな雰囲気は一瞬言葉を失ってしまった。ただ呼吸をするためだけに、ここまで真摯で丁寧な所作をする人間がいるとは驚くしかなかった

のだ。そんな行為、俺達一般人からしてみれば取るに足らない生理行動で、日常的であるが故に軽視されがちな行為だったから。日々の生活に埋没した、しかし大切なものをちゃんと認識している沙耶が不可思議な超常の存在のようにも、誰よりも人間らしい人間のような存在にも思えた。どちらにしろ、沙耶は他の人間とは決定的に異なるんだ、という漠然とした印象を、それが何であるかは今でも見当はつかないが、改めて思い知ることになった。

軽く閉じられていた瞼が、長い睫毛とともにゆっくりと引き上げられ、沙耶は俺に向き直る。

そして、いつか見た、作り物のような出来過ぎた微笑を浮かべ、眩くような声で静かにこう言った。

「————ねえ、もう一度、一緒にあの公園に行かない？ 話でもしましょう」

2. 崩された日常 / 12

という訳で、例の公園である。

行き交う人、公園の花壇、噴水なんかを見物しながらゆっくりとボードウォークを歩く沙耶の後ろについて、俺はその華奢な背中を見つめていた。

……これっていわゆる逆ナンなのか？ 沙耶から誘いを受けた当初はそんな馬鹿馬鹿しいことも考えたが、よくよく思えば沙耶にそんな面白い一面があるわけない。あれば立倉からナンパを受けた時、あんな鉄仮面であるはずないのだ。

ただ単に暇つぶしの相手に選ばただけだろう。でも、それって喜んでいいのか悲しんでいいのか、俺としては複雑な心境である。

しばらくの散歩と言うか物見遊山と言うか、そぞろ歩きを止めて、沙耶は海とボードウォークを隔てる洒落た柵から海を見始めた。そういうえば、沙耶って海を見るのが好きだよな。いや、これも単なる暇つぶしか。気にはなるが、ちんぷんかんぷんな回答もらっても気持ちが殺伐とするから今回は保留ということにしておく。沙耶なら平気でそういう回答しかねないから。

代わりに、当たり障りのない世間話でお茶を濁すことにした。

「ところで、蒼乃の街にはもう慣れたか？」

「どうかしら。まだ何とも言えないわね」

そりゃそうか。まだ一週間かそこらだし。

「まあ、先輩住民として言うておくのだな、沙耶も追々知っていくことだろうけどさ、この街は清濁併せ持った、そりゃあ凄まじい街なんだ」

まったく意味不明な形容に沙耶はノーリアクション。冷たい視線で俺を見るだけだった。おれもちよっと反省して説明し直す。

「悪い。噛み砕くとだな、お前、蒼乃はどういうところだって聞いて来た？」

「特に何も。評判とか風説は私のところまで届いてこなかったから」

おいおいビッグな冗談だ。何も知らずに蒼乃に越してきたのか。ある意味勇敢過ぎる。いや、無謀と言うべきか。でも、箱入り娘ならそういう処置をとられるのかもしれないな。「娘には余計な心配はかけさせたくないんです」みたいな。蒼乃じゃ無知ってのはマジ危険ですよ、お父さん。

何も知らないそうだから、かいつまんで蒼乃の諸事情を説明する。

「蒼乃市はな、今じゃ世間から最も恐れられる街なんだよ。今まで首都圏のニュースには数えるほどしか取り上げられなかったのに、ここ数年で一変した。キッズギャングが徒党を組んで一大勢力を築き、少年犯罪は凶悪化して一気に増加。そんでもってそれに對する『G件』犯の登場。あ、『G件』は知ってるか？」

「ええ、多少なら」

「ん、そか。ならいいや。で、そんな危険極まりない蒼乃の街は『地上に隆起した地獄』とまで言われたワケ」

ありゃどこの週刊誌だったか。過激な発言過ぎたから、雑誌の回収を巡って市と裁判沙汰になったんだよな。

「ま、これくらいは一応知っておいて損はないぞ。現代はとかく予断を許さないからな。用心するに越したことはない」

ちなみにこれは都瑚さんの口癖。

「それにさ、当たり前だけど、蒼乃は悪いところばかりでもない」

「でしようね。学校も街もいい人ばかりだし、生活は蒼乃の中で全部事足りるし」

そうなのだ。蒼乃は人口二十万に満たない小さな地方都市なのだが、そうであるが故に住民はまだまだ古き良きアットホームな雰囲気を残しているし、意外と商業施設とかは充実してる。デパート、服飾関係、サブカル、スポーツ、電化製品、外食、風俗その他諸々、ほとんどの生活は蒼乃市内でどうにかなるのだ。これに満足出来ないのは、妥協と充足感を知らない立倉達みたいなアヴァンギャルドな若人だけ。ちなみに俺は蒼乃から出ない派である。

「それだけ知ってれば十分だ。お前、この街でも腐らずに生きていけるよ」

蒼乃には不幸は多いけど、どこも程度の差があれそれは同じ。結局、人生なんて苦しいことの方が多いんだ。幸福はその絶対量において労苦に釣り合わない。そのことを弁えて、数少ない幸福を大切に

に抱えて生きていくことが自暴自棄にならない秘訣だな。

幸福を考えていたら、そう言えばささやかな楽しみをまだ味わっていないかったことを、右手の重みで思い出す。急に空腹感は強烈になり、俺はたまらず沙耶に提案していた。

「なあ、ちょっとランチタイムにしていいいか？　昼飯まだなんだ」

＊

二人並んで、いつかのベンチに腰かけていた。前みたいに、沙耶はただじっと海の彼方を見つめるだけだ。俺はさっき買ったハムサンドをちびちびかじりながら、沙耶に倣ってアテもなく海を眺める。丁度一つ目のハムサンドを胃に落とし終わった時、珍しく沙耶の方から口を開いた。

「本当、ここは静かね。蒼乃の中とは思えないくらい」

ここまでの移動で、沙耶の顔色は見違えるほど良くなっていた。桜色に上気した頬を見てちょっと安堵感を覚える俺。沙耶はやっぱり人間だったのだ。失礼な言い分だがそう思ってしまったわけではないな。

「まあ静かではあるんだが……今日は人通りが多いな。ちょっと落ち着かないかもしれないぞ」

平日だつていうのに、親子連れや老人、カップルやらがまちまちと見受けられる。親子連れと老人はさて置き、カップルはなんかウザったい。特に視界的に。往來の真中で理解に苦しむチークダンスを繰り広げている奴らもいれば、隣のベンチではお互い微妙な間隔

をあけて座る、もどかしくも奥ゆかしいカップルもいる。

沙耶も俺に倣い視線を向ける。そして冷静に一言。

「そんなことないわ。人が集まる場所って、嫌いじゃないもの」

ちょっとビックリ。でも、考えてみればさっきみたいに人混みで呆と出来るくらいだし、案外人だかりに耐性があるのかも。

「でも、騒がしいのはダメなんだろう？　人が多くなれば自然と雑音は多くなるもんだ。なら、それって何だか矛盾してないか？」

「……そうね。でも、矛盾していいの。私は、初めから矛盾を抱えているんだもの。あまり大勢の人と関わり合いたくはないけれど、人が周りにいないと死んでしまうから」

誇張か？　暗喩か？　変に意味合い含んだ予防線張らないでほしい。どう突っ込んでいいか分かんねえじゃねえか。

「……えーと、寂しがり屋さんなのか？」

「寂しい、とはちょっと違うと思う。私は人の中にいないと生きられない、存在出来ないと思うの。『私』という存在を彼らが認識していてくれないと、私はきつと消えてしまうのよ」

試練の時間が始まった。沙耶は毎度毎度こういうおかしなことを言う。俺、不思議系美少女っていうのには免疫ないんだけどな。それでも一応努力して話を合わせる俺は、俺にそんな自覚はないが、気に入られようとしているのが見え見えで滑稽かもしれないな。あんまり人がいなくて助かる。

「それってハブかれるってことか？ 不登校児が長く休んでいればいるほど、その存在をクラスメイトは忘れる、みたいな」

実際、それは俺も経験済み。勿論忘れる側だ。中学時代、数回しか登校してこなかったヤツのことなんぞ、今となっちゃクラスにいたことさえ事実かどうか疑わしく思っちまう。

「そうね、ニュアンスは近いかも。不特定多数の誰かが認めてくれて、私はやっとここに存在出来る。名前も知らない誰かに観測されることでどうにか『私』は維持される。気の合う人間にだけ認められてダメなの。それは、その道の人達にしか感知されない幽霊みたいなものだから」

幽霊、ね。確かに、特定の人間にしか姿を認めてもらえない存在は幽霊だ。いるかどうかはその特定の人間の主張で、他大多数が観測できないんじゃ「在る」とは言えない。宇宙人しかり、UMAしかり、現代社会は万人が見えるものしか信じてくれないんだし。

「だから私は他人との接点を求めるけど、彼らを好きにはなれないの。ただ自分が認められたいがために近づくだけだもの。相手のことを知りたいとか、理解したいとは思っていないのよ」

人はみんな、自分の存在を他の誰かに印象付けるために、名前も知らない大勢の人間と接点を持つってことか。知ってもらうために出会い、打ち解ける。でもお互い深くは知り合わない。何故なら出会いのほとんどが、ただ知ってもらうことを目的とするから。その中の一握りに、自分が知りたいと思う人間がいて、友情を育んだり、愛を語ったりするワケだ。

……自身の存在を定着させるための他者との邂逅、か。上っ面ば

かりで世界中の人間とお知り合いになれる現代社会は、ツールだけなら世界に開いているけど、それを扱う人間の心は逆に閉じていくばかりってことなのかな。

「人に言うのは初めてなの。すごく、自己中心的な考え方だと思うでしょう？」

沙耶は微笑みながらそう言う。それは完全な自嘲の笑み。あんまり好きになれない表情だった。だから反発しなくなった。

「いいんじゃないか？ 少なくとも、俺はそれでいいと思うけど。実を言うと、他人は好きになれないけど他人がいないと生きられないっていう考えには俺も同感なんだ。お前には初対面で看破されたけどな」

今にして思えば、あの時、沙耶が抱いた俺との類似性は、俺も沙耶に対して同じように持っていたんだ。

「前も言ったけどさ、俺は他人が嫌いだ。出来るなら、他人なんて消してやりたい」

他人なんか消してやりたい。いつだってそんな凶悪な感情が俺の中にはある。人の歴史を見ても、『恐怖』という感情が時とともに蓄積されて対象を否定する力となるんだから、それは自然なことだろう。

「でも、『俺』っていう『自分らしさ』は自分の中にはないと思うんだ。自分らしさを教えてくれるのは結局他人だ。連中との比較からしる評価からしる、他人の中にある自分の姿が積もり積もって自分は形作られる。人は一人では生きられないって、そういう意

味だと思う」

だから俺は、他人を消してしまうのではなく、自分から遠ざけることを、今でも選んでいる。『俺』が『俺』であるためには、他人の存在が必要だと肌で感じているから。

「そもそも他人がいなきゃ自分もない。人間は大勢の他人に囲まれることで自分が生きているって実感を得るはずだ。なら、他人の存在や意見に寄りかかって生きていくのは至極当然なことだろ？ それを、近頃は「自分らしく生きろ、他人を気にするな」なんて薄っぺらい美辞麗句で個性を自己完結させやがって。そうやって、いろんな誰かに護られて生きている事から眼を逸らせば、自然、他人の存在を軽視する。簡単に自分を押し付け、我を通そうとし、いがみ合う。気持ちちは一方通行で、永遠に交わらない。そして、最後には人は孤独になるんだ。社会的にじゃなく、精神的に心が孤独になっていく」

なんとまあ、説教臭いこと語っているなと自分でも思った。急に気恥ずかしくなって、俺はベンチから立ち上がった。

「長ったらしい話して悪いな。要するに、人間は他人無くして生きてはいけねえんだよ。表面上は自分は一人で生きているって思えても、内心では顔も知らない誰かに依存していなきゃ、生きていけねえんだ」

そう。それは『G件』で死んだ人間を自分達と比較して、安堵感や優越感を覚える学校のクラスメイトも、一人で社会の規範から外れることを恐れ、徒党を組んで主流文化に対抗しようとするキッズギャングも、他人からもたらされる恩恵と被害の内、被害の方にか眼を向けず、同じ苦痛を味わわせてやろうと考える『G件』犯も、

みんな同じだ。

「他人に寄りかかり過ぎてもダメだけどさ、気にしなさすぎるのもダメなんだ。月並みだけどな、結局は中庸が一番ってこと。自分は自ら生きてもいるし、他人に生かされているとも認めることが、一番大事なんだよ」

中庸が一番。そう言えば、これって昔、どっかのエラそうなおっさんが言ってたことなんだよな。きつと、昔から両極端は嫌われ者の筆頭ってことだろうな。

長広舌を終えて、手にしていたミルクティーを喉に流し込む。空気の乾燥も相まって喉がカラカラだった。

沙耶からは何のリアクションもなかった。気になって振り返れば、俺の方をじっと見つめて身動き一つしない。照れ臭いのですぐに視線を逸らし、雲ひとつない青空を理由もなく睨んでみる。

しばらくして、沙耶が小さく息を吐いた。

「――そう。だから、あなたは優しいのね。他人の存在に感謝しているから、いつだって誰かのために行動しようとする」

「ンな大層な考えじゃねえよ。俺はなし崩し的に人助けしてるだけだ。本心で動いてるワケじゃねえよ」

「否定したつもりかもしれないけど、むしろ無意識に誰かのために行動する方が根っからのお人好しね」

言い返せず、俺は閉口する。今日の沙耶は何だか手強い。しかも

よく笑う。歓迎すべきことだろうけど、あんまりにも出来過ぎた表情だからこっちとしては内心穏やかじゃない。これがオスの性ってヤツか。煩わしいことこの上ない。

「やっぱり、私とあなたは似た者同士なのね。お互い、人に馴染めないのに、人に近づくことでしか自分は維持されないと思ってる。矛盾を感じて生きている、同じ存在」

「かも、な。でも、お前は、この街の他人が嫌いじゃないだろ？」

「そう、ね。まだ好きになれないだけ。出来れば、好きになりたいわ。私も、もうこの街の住人だもの」

「だろうな。なら、お前と俺は違うよ。似て非なるものってヤツだ。お前は人を好きになろうとして、俺は人を好きになろうとも思わない。そんな些細な、けれど決定的な違いだ」

その言葉は、俺の心に深く刻み込まれている。昔から、何度も自分に言い聞かせてきた。好きになろうと思うことと、好きになろうとも思えないこと。それは、字面上は似ていても、まったく異なる他人への思い。

「理解したいって欲望が好きっていう感情とつながっているんだとしたら、俺には出来るはずもない。俺はいろいろなもんが恐ろしいんだ。人だけでなく、自然すら恐怖の対象になる時だってある」

その発想も、全てはこの両眼が捉えた映像に端を発す。シミを人の形相に見たり、雲の形を化け物の腕に見たりする映像は怖いとは思わなかった。けれども、不気味であるとはいっても思っていた。

「まだ分別もわきまえないガキの頃は、怖いものもなく、全ての大人や自然が自分を好きでいてくれるんだと思えるはずなんだ。好かれていると錯覚して、好きになろうと思う。近づいていく、理解したいと思う。ガキは他人から学んだ感情をマネして、感情を手に入れていくんだからな。」

でも、俺は昔から、全ての人も自然も、俺を無条件で好きだなんて思えなかった。俺以外の存在は怖いものだって、理論とか理屈じゃなくて、実感として痛感してた。だから、最初から何も好きになれなかった。俺はさ、物事を判断する基準は嫌いか嫌いじゃないかなんだ。

怖くて怖くて、近づきたくもないものを、理解しようだなんて、普通思わねえだろ」

沙耶と話す俺はいつだっておかしくなる。今まで他人に話さなかったことを簡単に打ち明ける。心情を吐露し、苦悩を暴露する。話したってどうにかなるものでもないのに、ただ吐き出し続ける。怖いはずの他人に、どうして怖いのか話すなんて、ホントどうかしてる。

「——ねえ、一つだけ聞いていい？ 慶太は、この街は嫌い？」

唐突に、沙耶は予想外の疑問を投げかける。即答は出来なかった。

「どう……だろうな。考えたこともない。でも、きっと嫌いじゃない」

いろいろと街に対して暴言も吐くし、不満もないことはないが、それでも十数年生きて来た、俺の街だ。それは親に抱く感情と同じような感覚。嫌いじゃないって感想は、俺だけでなく他の奴も抱くものじゃないかと思う。沙耶もそれくらいは予想してるだろう。

沙耶は無表情だったが、回答には満足したように俺には何となく感じられた。

「そう。でも、この街は、きっと慶太のことを好きだと思うわよ？」

何を言うかと思えば、発言がファンタジー過ぎる。街が俺のことを好き？ 事実なら一応喜んでいいんだろうが、存在が巨大過ぎて実感持てねえよ。

俺の表情はきっと心情を余すところなく正確に表現していただろう。予想通りなのか、俺の訝しげな視線に沙耶は顔色一つ変えずこう続けた。

「あなたは、好かれることも嫌いなのか？」

……返答の言葉は出てこなかった。でも、答えだけは明確に知っていた。

嫌いじゃない。俺は、他人が嫌いだけど、その嫌いな他人から好かれることは、嫌いだと断言出来なかった。

「嫌いじゃないでしょう？ なら、怖いものに、常にあなたから近づく必要もないと思うの。あなたは他人の存在を肯定しているんだから、他人から近づいてくることを待つことだって出来る。受身的かもしれないけど、それは悪いことじゃないもの。怖くて自分が近づけないなら、逆に近づいて来てもらえばいい。あなたにはそれが出来る。だって、好かれる心地よさは知っているんだから」

俺は何も言い返せない。否定も肯定も出来ず、ただ沙耶の一言一

言に、新たな矛盾を思い知らされて押し黙るだけだった。

「人は誰かに望まれて生きるわけじゃない。でも、誰だって他人から望まれて、自分が生きていていいんだということを保障されたがる。さっきの話と似たようなものだけれど。それが、他人から好かれたいという欲求につながる。それはどんな人も生まれた瞬間に知っていることだと思うの。記憶とは違う、もっと深くて大きなところに刻まれて、長い間受け継がれてきた感情。個人として生を受けた人間が、そうであるがために持たざるを得ない生存思考。私は、そう思うわ」

そうして沙耶は口をつぐんだ。俺も、一向に口をきけなかった。頭ん中はゴチャゴチャだ。俺は他人が怖いから嫌いなはずなのに、連中から好かれることは嫌いじゃないってことに気付いたんだから。

他人から存在を認められるだけじゃ飽き足らず、好かれないと思っている自分がいる。自分は他人が怖いから好きになれないのに、他人にはそれを望む自分がいる。今まで、他人との密接な関係を否定してきた俺は、ただ気付いていなかっただけなのかもしれない。心の奥底では、他人と深くつながっていたいという欲望が、俺にもあるって事実を。

「ごめんなさい。今度こそ余計なお世話ね。私が軽々しく口を挟めることでもないのに」

沙耶は申し訳なさ気に視線を落とす。俺は何とか思考を取り戻し、努めてふざけたようにベンチに座り直す。

「あー……何か、お前と一緒にいると変に語っちゃうな」

「そうね。でも、私はこういう会話、好きよ。大袈裟に言えば会話は、お互いがお互いの存在を認める儀式みたいなものでしょう？言葉をお互いに交わすことは対等であると認める行為だもの。こうやって多くのことを語る会話は、自分が自分であると再認識出来て、とても心地いいから」

再認識、ね。俺は新たな矛盾を見つけて少し混乱気味だ。でも、不思議と嫌な感じはしない。それは、俺にとって救いとなるかもしれない混乱だから。一般人と異なる、何か違うものを持ちこたえた俺が、それでも一般人と同じ世界が見られるのかもしれないっていう、淡い期待。

——まだ、俺のココロは壊れていないのかもしれない。そう仮定するので、今はまだ精一杯だった。

「寒くなって来たわね。そろそろ帰りましょうか」

静かに言って沙耶は徐に立ち上がり、もう一度、あの綺麗な深呼吸をした。俺はその姿を見終えるまで動かなかった。純粹に、ただ見ていたかったんだ。やっぱりその姿は、眼の前でとてつもない奇跡が起きているような錯覚を起こさせる。こういう錯覚ならいつでも大歓迎なんだけどな。

そうして俺はベンチから腰を上げ、隣のゴミ箱にコンビニの袋を投げ込んでから歩き出す。また、前をゆっくりと歩く華奢な背中を見つめながら、だ。

——今日改めて思い知ったこと。やっぱり、沙耶の前だと俺は俺でない気がする。いや、別に、こういうのは嫌いじゃないけどな。

*

2. 崩された日常 / 13

*

お互い無言のまま、公園と公道を隔てる境界をまたぐ。それから沙耶は足を止め、こちらにゆっくりと振り返った。

「今日はありがとう。話し相手になってくれて」

慇懃に頭を下げて、いつも通り無感情な声で謝辞を述べる。慣れればどうってことない違和感だった。上っ面だけの好印象よりはマシだとも思えるようになったぐらいだ。

「お互い様だ。こっちもいい暇つぶしになったし。また機会があったら誘ってくれ」

「ええ、そうするわ。きっと、また会える気がするから」

短い、簡単な別れだった。

沙耶は丁寧な動作で踵を返し、背筋を伸ばした気真面目な姿勢でゆっくりと遠のいて行く。

棗教諭や藤原とはまた印象の異なる几帳面さだった。前者二人は堅苦しい感が否めないが、沙耶の場合は一挙手一投足から育ちの良さが滲み出っていて、規律や自戒に拠って立つというより、そうであることが生まれてから当たり前だったとでもいうかのような自然な足取りなのだ。その姿があんまりにも優雅な印象を受けるもんだから、沙耶は一目で良家の子女と判断出来る訳でもある。

その良家の子女が生息する、いわゆる社交界では広く一般的なマナーなのか、沙耶はやっぱり別れの挨拶をしない。いやそれとも、沙耶には予知能力でもあって、また俺と出会うという未来が見えているから、あえて口にしないだけなのか。

……は、馬鹿馬鹿しいにも程がある。沙耶がいくらいろいろな人間離れた人間だからって、そう都合のいいデタラメな力を持つてるワケねえよ。

『G件』と付き合いが長いせいかな、不思議なことは何でも超能力だなんだ、安易に片付けちまいがちになる。厭^{いや}な後遺症、いや、慢性的な症状か。

この世には在るべくして在ることしかないのだ、ということを都瑚さんから聞いたことがある。だというのに、理解出来ないものを何でも不思議だ、奇妙だと決めつけて村八分にする俺達人間は、どれだけ傲慢で狭量な生き物なんだろうな、なんて自虐的なことを考えてみる。でも後悔は嫌いだから、反省だけしてとっととさっきの馬鹿げた空想は忘れることにした。

だが「在る、ない」という話を忘れた代わりに、今度は沙耶の「在る、ない」の言葉が思い出された。

観測されるまで、自分は確率的にしか存在出来ない。観測した時点で『個性』やら『自我』が確定される。つまり、『自分』は『他人』に観測されて初めて存在すると、沙耶は言っていた気がする。

よくよく考えれば、これって量子力学の不確定性原理の考え方と似たようなもんじゃないだろうか。観測する行為自体が観測対象に

影響を及ぼす。なら現実には、人間の知性によって覚醒している、ということになるのだろうか。人間本位過ぎて俺は戴けないが、沙耶は何だかそう信じざるを得ないとでもいう風だったのをまだ覚えていた。何か深い事情でもあるのだろうか、なんて柄にもない心配をしてしまう。いかんいかん、他人の心情に首を突っ込むのはご法度だよ。

携帯で時刻を確認すると二時二十分頃。まだまだスケジュール帳が真っ白な午後は長い。

「……なら俺も、ぼちぼち帰るかな」

やることもないのに街を逍遙するのは、いらぬ不幸や厄介事を抱え込む悲惨な結果になりかねない。災厄ってヤツは向こうからやってくるんじゃない、ほとんどの場合が自ら引き寄せるものなのだ。触らぬ神に祟りなし。おとなしく家路についてそういう類をやり過ぎそうと思う。

「その前に一つ聞きたいことが、たった今出来たんですけど」

駅の方角へ身体を振り向けるのと同時、どこからか治郎らしき気だるさ一杯の力ない声が聞こえた気がした。

立ち止まって恐る恐る後ろを振り返るも、件の声の主は影さえない。

「どこ見てるんですか。ここですよ、ここ」

さっきより大きく、そしてはつきりと聞き取れた声は、俺の横手にある公園の没个性的な噴水の方から飛んで来ている。視線を移せ

ば、人生すら億劫だとしても言いたげな表情が張り付いてとれなくな
つちまった治郎がこちらに歩いてきていた。

「どうも、社さん」

まるで気がない挨拶だった。俺はそれを無視して、大きく溜息を
ついた。

とことん面倒な奴と、とことん面倒くさい状況で出会ってしまった。
憂鬱を通り越して絶望感に打ちひしがれる俺。さっきのすがすがし
さは一転、この小生意気な後輩を恨めしく思う禍々しい気持ちに塗
り潰される。

「……お前、こんなところで何してんだ？」

眼光がレーザー兵器にでもなっていたら射殺すつもりで睨む俺。
そんな殺伐とした感情も治郎は見事に気にかけない。

「いやね、社さんに用があつて。駄菓子屋のバアちゃんから、こっ
ちの方向に社さんが歩いて行くのを見たって聞いて、それなら多分
ここにいるんじゃないか、と」

うっわ、これだからローカルネットワークは嫌になる。田舎って
のは界隈の住民がほとんど顔見知りだから、こういう人探しの方法
が可能になるのだ。……まったく、駄菓子屋のババアもいらん事だけ
はするずると覚えていやがるな。孫の名前は時々忘れるくせに。

「電話も出ないから仕方なしにここまで来たんですけど……いや、
意外な場所で意外なものを見てしまいました。で、あの美人さんは
誰なんですか？ 彼女ですか？」

口調はそうでもないが、スゲー楽しそうな治郎。付き合いが長いからこそ解る微妙なトーンの変化である。

「聞いてどうすんだよ」

「そりゃ勿論、スキャンダラスなことなら口外します」

ぶん殴りたい。だから嫌だったんだ、コイツに見つかるのは。

「彼女じゃねえよ。単なる知り合い。つい最近知り合ったんだ」

「へえ。最近出会ったくせに、もう二人きりでデートですか。社さんにしては手が早いですね」

「デートなんかしてねえよ、俺にそんな下心はない」

少なくとも心情的には。

「本当ですか？ あの人さん、社さんの好みそのままじゃないですか」

「知った風な口ききやがって……。大体だなあ、お前は俺の好みを正確に把握してるのか」

「してますよ。何なら教えましょうか。社さん、言うことは偏屈で根性ひん曲がってますけど、趣味嗜好については至って単純ですからね」

ムカつく。酷い言われようである。

「ああいう夢げでお淑やかな、深窓の麗人風の美人って社さんのど真ん中でしょ？」

否定出来ない俺。違う、と向きになって反論してもよかったが、事実を隠そうとする弁解は大体において空中瓦解する。それに、その手のごまかしは、この一見何も考えていなさそうな倦怠顔の後輩には通用しないのだ。つまり、変に勘が鋭いのである。特にこういった下世話な話題に対しては。

俺を追い詰めた自分の論法に満足したのか、治郎は沙耶の去っていった方に視線を移し、しばらく見つめる。そして、うーん、と低く唸った。

「……しかし、ありや真性の美人ですね。しかも良家の子女なんという、人生最初の賭けにも勝つとは末恐ろしい女だなあ。理子先輩も可哀想に。目の上のタンコブがここにも、か」

意味不明なことを口走る。何で沙耶が理子にとって目の上のタンコブなんだ。

「……その顔、何であの美人さんが理子先輩の目の上のタンコブになるのか、まったくもって分からねえってツラですね」

簡単にバレてた。おかしい、俺ってそういうことが表情に出やすかったりする損な人間なんだろうか。親が死んでも表情は崩さない、そんなポーカーフェイスを心掛けていたが、あの立倉みたいなバカにも看破されたことを考えると、案外無駄骨というか成果が出てないのかもしれないな。もう諦めるべきか一層精進するべきか。さて、どうしよう。

俺が今後の人生について深い考察を繰り広げている間に、今度は治郎が大きく溜息をついていた。そして呆れながら言葉が続ける。

「杜さん。男と女の関係において、無知ってのは許されざる蛮行ですけど、気付かぬ振りはそれ以上の悪行ですよ？」

もう何だか目付きは険しく、視線は非難するような刺々しさを孕んでいた。完全に俺は悪者扱い。まったくもって面白くない状況だった。

「言いたいことは解ってるつもりだけどな、だからって俺が配慮する必要ねえだろーが」

大体、黄色い視線を受けているかもしれないなんていう理由で、いちいち異性交友を配慮するヤツは自意識過剰過ぎて気持ち悪い。

「必要はないですけど推奨はしますよ。女が友達以上恋人未満の感情ぶついているのは明白なんだから、少しくらい自重するのが男の人情ってヤツでしょ」

「んな人情知るか。というかその講釈は立倉にこそぶってこい」

好かれているかも定かでないのに、好かれていた場合のことを考えるなんて馬鹿馬鹿しい。買う気もないのに「宝籤が当たったら何に使おうか」と考えるようなもんだ。不毛過ぎて笑い話にもならねえ。

それにしても、理子の名前が出た途端にどいつもこいつも恋愛だの付き合いだの、こっちがイライラする下卑た話題につなげやがっ

て。いつからだ？　こんなにも周囲の人間が余計なお節介をやくようになっちまったのは。お前からこそ少しは自重しやがれ。

「そんな話より、お前、俺に何か用があったんじゃないのか？」

「アンタ、今、ものすごい分かりやすく話を逸らしましたね……。でも、今日はその安易な術中にはまってあげますよ。忘れないうちに伝えておきたいし。歩きながら話しましょうか」

これ以上言っても無駄だと思ったのか、治郎はあっさりと話題を変えた。切り替えが早いのはいつも通り褒めてやるが、引き際もちゃんと弁えているんだ、とは思わない。コイツが腹黒くなければ、恋愛云々の話題そのものを振ってこないはずなのだ。全ては俺をイジるための行動で、満足したからあっさりと退けるに過ぎない。

「おい、こっちは駅と真逆だぞ」

「ちょっと用があるんで付き合って下さいよ」

もはや影さえ見えない沙耶の後を追うように歩く俺達。まさかコイツ、沙耶の自宅を見つけ出そうとでも言う気じゃねえだろうな。

「実は都瑚さんから伝言があったんです。今週は予定があるから、恒例の会議は中止だそうです」

「予定って……『G件』絡みの、か？」

「さあ？　詳しいことは何も。俺も都瑚さんから直接聞いたわけじゃないんで。ほら、あのロリータフェイスのメイドさん。あの人がついさっき電話くれたんですよ」

「ああ、あのどう見ても年下にしか見えない社会人か。確か名前は……鮎川だったっけ」

「鮎川歩あゆかわあゆむですよ。コイツがまた容姿に似合わず妖艶な声でしてね、電話を取った当初はそのギャップに内心驚きを隠せなかったんですけど」

都瑚さんの家のメイドさんは寡黙で、俺達は言葉らしい言葉を今まで聞いたことがなかったのだ。治郎の驚きは当然だと思う。あのメイドさんが口を開いたなんて俺もビックリだ。

だが寡黙、と言っても愛想が悪いというわけではなく、いつだって口元に柔らかい微笑を含んでいるような、一見すると優しい人だった。言語障害でも持っているのかな、なんて下衆な勘繰りをしていたが、どうやらただ単に話す必要がなかったら話さなかったらしい。

普段なら都瑚さん本人が俺達に連絡を寄越すのだが、今まで完全沈黙を貫いてきたメイドさんが口を開かなければならない程まで多忙を極めているんだろうか。

しかしそのことよりも俺が気になるのは、やっぱりメイドさんの生声ではある。

「いいなあ、俺もメイドさんの声聞きたかった。何でお前の所にしか連絡が来ないんだ。俺の方が一応年長者だぞ」

「……社さん、ちゃんとケータイ確認しました？ 多分、俺より先に連絡来てますよ、年長者なんだから。アンタが気付いてないだけで」

「……マジか」

ケータイを開くと、待ち受け画面に着信アリの文字が表示されていた。着信は二件、一つは治郎と、もう一つが都瑚さんの自宅の電話番号だった。きっとコレだな。ドライブモードにしてから気付かなかった。しかも俺のケータイって画面開かないと着信もメールの受信も確認出来ないんだよな。

「まったく、ダメ人間ですね。信頼度ゼロですよ。次からは真っ先に俺に連絡をしてくれるよう都瑚さんに言っておきましょうか」

何も言い返せない俺。軽蔑するかのような後輩の冷たい眼差しが突き刺さる。バイトとして雇われている身で連絡がつかないなんて致命的過ぎる。この件に関しては治郎が正論過ぎて俺は立つ瀬がない。

「むう……。そうだな、そうしてくれ。お前の方が確実だ」

コイツに負けを認めることは納得いかないが、円滑な情報交換のためにあえて目を瞑ろう。大人になれ慶太。俺の方が年長者なんだから。

「うっわー、先輩としてのプライドもねえな。社さん、アンタスゲー情けない」

地獄へ落ちろ、後輩。

「情けないついでにもう一つ伝言が。社さんの恥ずかしい症状のための薬は郵送するそうなのでご心配なく」

「お前……どんだけ俺を傷つけりゃ気が済むんだ？」

「こっちは、見た目貧弱そうな社さんのために敢えてやってるんですよ。男はちつとばかり傷がついていた方が強そうに見えるんだから」

外見の傷と内心の傷は別物だったの。

「もういい。お前に訊いた俺がバカだった」

どうせ理由らしい理由なんて最初っからないんだからな。治郎は本能レベルで俺が気に食わない。勿論、逆もまた然り。これはこれで清々しい程の対立だから良しとする。変に因縁持たれる方がかつたるい。

「相変わらず自分のことはよく解ってますね。で、バカさん。これから次の高校へ乗り込む算段が俺の方で出来てるんですけど、同行しません？」

「やめろ、その呼び方。いい加減ケリ入れるぞ」

「んなことより、行くんですか？ 行かないんですか？」

「……そりゃ行くけどさ、お前、こっちに首突っ込んでる余裕あるのか？」

「一応はありますよ。今日だけですけど。ローラー作戦も週末に予定されてるし、はっきり言って平日なのに休校なんて暇で暇で仕方ないんです」

お前は人生そのものが暇でしかないだろうが。

「そーかい。お前がいいなら俺は何も言わねえよ。で、どこの高校に行くんだ？」

「桜花学館です」

驚嘆が漏れた。その単語だけは治郎の口から発せられることはないだろうと確信していただけに、見事なまでの動揺っぷりである。

「何です、変な声出して……あ、ああ、あー、そういうことですか」

鬼の首を取ったように、ニヤリと不敵な笑みを浮かべる治郎。まずい、この笑みは俺の弱みを握っていびる気満々の表情である。

「あの美人さんの通う高校ですね」

「……まあ、そうらしいな」

「大丈夫ですよ。あの人、家に帰ったんでしょ？ ばったり出会でくわすことなんて、万が一にもありませんよ」

言葉は俺を励ましているが、表情は正反対である。ばったり出会でくわしてアタフタしやがれ、とでも言いたげなニヤニヤ顔だ。

もし実際に、沙耶と出会そうもんなら一大事である。コイツはその現場を目撃し、証拠写真を撮り、あることないこと突飛なことでは味付けして学校中に触れまわるに違いない。そして俺の評判はどんどん右肩下がり、悪評は天井知らず。藤原やら理子やらから罵詈雑

言を浴びせられる、凄惨な末路を迎えてしまう。考えられる可能性に内心穏やかじゃなかった。

沙耶は確かに帰りはしたが、その行き先が実家とは限らない。方向的には両方可能性がある訳で、無聊を慰めるために高校で自習をする、なんて真面目腐ったことを沙耶ならしかねない。

だから駅とは反対方向に歩いてきたのか。やられた。だが今さら断ることを、治郎は許さないだろう。何せ沙耶のことがバレてしまってる。コイツの性格からして、弱みを見せた獲物をみすみす見逃すワケもない。不幸だ。俺は不幸過ぎる。

「じゃ、行きましようか、社さん」

逃がさないとはかりに、俺の肩をガッチリと掴む。

「わあーた。行くよ、行けばいいんだろ。でも、どうして桜花学館なんだ？　そもそも俺達は入れないだろ。女子高だぞ」

「甘いですね、社さん。個人でどうにもならないのなら、集団の力を利用すればいいんです。

実はあっちの生徒会とウチの生徒会が共同で町興しプロジェクトを計画してまして。今月の二十五日のクリスマスに、大規模なイベントを開催するらしいんです。で、その打ち合わせやら会議やらのために、宝裏高校生徒会メンバーは桜花学館に立ち入ることが特別に許可されているんですよ」

「俺もお前も生徒会メンバーじゃねえだろ」

「ご心配なく。知り合いから入校許可証と生徒会の腕章、あと委任

状も二セットパクってきました」

抜かりないヤツ。ここまでされるとパクってきたことを咎めるより、むしろここまでやったのかと褒めたくなる。ていうか各々二個ずつ手に入れてくるとは、コイツ、最初っから俺を巻き込む腹積もりだったらしい。ホント、抜かりねえ。

「さて、事情も説明し終えたことだし、これで心置きなく潜入出来ますね。あれ？ 足取りが重いですよ、社さん。さっきの女と歩いていた時みたいにキビキビお願いしますよ」

……神よ。生まれて初めて、あなたに祈ります。

このムカつく後輩に天誅を。

2. 崩された日常 / 14

＊

応接間の重厚なドアを力なく押し開けた都瑚の眼に最初に映ってきたのは、行儀よくソファ―に腰掛けて優雅に紅茶を愉しむローデリックの姿だった。

「おはよう、都瑚。いや、もうこんにちは、と言うべきか。ああ、安眠を妨げるのも無粋だと思ってね、勝手にお茶は用意させてもらったよ」

ローデリックは眼の前のテーブルに広げられたティーセット一式に視線を落としながら、相も変わらず真面目腐った声調でそう言った。

薄い色のネグリジエにワインレッドのカーディガンを羽織っただけという無防備な姿で都瑚は緩慢に応接間の中を移動し、ローデリックの向かいのソファ―に静かに腰を下ろした。そして、長く、艶のある黒髪をソファ―に垂らすように頭を抱えた。

「……私、あれから眠ってしまったのね」

自身への非難や侮蔑の意を込めて、都瑚は低い声で呻く。普段、活き活きと輝く表情は生色がまるで失われており、精神的な疲労から憔悴しているのは誰の眼にも明白だった。ローデリックは手にしていたカップをソーサーにおいてから、やんわりとした声調で自責する彼女を慰める。

「無理もない。緊張が過ぎたのだろう。戦いのさきぞなえとなる騎士の私でさえ目を覚ましたのはつい今し方だ、自分を卑下する必要はないぞ」

ローデリックはティーポットから透き通るような色の紅茶を注ぎ、都瑚に差し出す。

実際のところ、ローデリックは昨晚から一睡もしていなかった。銀色の髪少女との交戦は、彼を本来の『騎士』という戦闘のプロたる意識に回帰させるに余りある出来事だったのだ。何週間かぶりの殺伐とした思考、敵に対する疑問や憶測が彼の脳内に巢を張り、睡魔も疲労も感じる余裕はなかった。集中力と緊張感で支配されたローデリックが、紅茶を飲んで休憩しよう、というささやかな日常への帰還を思いつくことが出来たのはついさっきのことである。

まだ意識がはっきりしていないのか、都瑚は躊躇いがちにカップを受け取って、揺曳する湯気に視線を落としながら、嘘ばかり、と拗ねるように呟いた。長い交友の賜物か、それとも持ち前の勘の鋭さなのか、都瑚はローデリックの嘘を正確に看破していた。

「そうだ。あの女中——確かアユカワと言ったか、彼女から伝言があった。いつもの二人にはこちらから申しておいた、と」

「——ああ、そう言えばあゆちゃん、今日お母さんのお見舞いに行くって言っていたのよね。伝言はそれだけ？」

「ああ、これだけ伝えれば都瑚には通じるはずだ、と」

「そう、ありがとう。……そっか、昨日そんなこと言っていたのよね。無意識に、こんなみつともない状態を、あの子達には見せられ

ないと思ったからか」

「ほう。君は、少年達の前では聖母のように、常にその面貌に微笑をたたえているのか？」

「意地悪な言い方ね」

都瑚は恨めしそうな視線をローデリックに向ける。

「彼らの前では毅然と振る舞うべきでしょう。それが雇い主として、大人としての最低限のマナーよ。わたし、ちよっと自信なくしているわ」

「何度も言っているだろう。アレは人ならざる存在。生き延びただけでも称賛に値する。君がそうやって気に病む必要はない」

「でも、私ったら何も出来なかったのに、あなたの足ばかり引っ張って、しかもこの体たらく。最低よ」

「ふむ……」

こうまで後ろ向きで、未練がましい都瑚を見るのはこれが何回目かになる。ローデリックは、彼女とともに過ごした四年間の学院生活の思い出を反芻していた。

それまでの経験から、ローデリックは何も言わずに少し様子を見ることにした。下手な励ましや慰めは一層彼女の自己嫌悪に拍車をかけてしまうのだ。彼女が自分からアクションを起こすのを待って、こちらは真摯に対応していけば自ずと彼女は自力で立ち直るはず。ローデリックはそう確信していた。

手持無沙汰な彼は、アテもなく応接間を眺め始める。

広さはそれ程でもない応接間。しかしテーブルやソファア、大時計にグランドピアノといった家具や調度品は、使い込まれているせいか微妙な色合いを呈しており、どっしりとした高級感を漂わせる。深紅色の絨毯は歩く度、気持ちのいい具合に沈み込み、正常な人間の平衡感覚を狂わせるかねないほどの質感だった。

その中で一際異質さを醸し出しているのが、見事な装飾の壁面、その少し高い位置に備え付けられている、おもちゃの様な鳩時計だった。お世辞にも技巧に凝った、とは表現出来ず、どこぞの駆け出しの芸術家が戯れに作った代物ではないのかと思えるほど、酷く安っぽい見た目を呈していた。

いつかの少年がそうであったように、ローデリックもまた、この壮麗にして格式ある小部屋に似つかわしくない鳩時計に目をやって眉を顰めた。

——これは、都瑚の趣味なのだろうか。

そんな疑問が彼の脳裏をよぎった。

確かに都瑚は個性的な人間ではあるが、奇抜とまでは言えず、ある程度常識に沿った考えの持ち主である。そんな彼女が、外見だけでこの毒々しい色遣いの鳩時計を購入したとは考えにくかった。何か魔術的效果を持った典てんれいぎそう礼儀装なのか。ローデリックはそう考えて意識を集中し、鳩時計に宿る魔力を透視しようと試みたが、魔力はおろか何の魔術的痕跡も発見出来ない。ローデリックは当てが外れて、慥然とした表情を浮かべる。

「――ねえ、ローデリック。ちょっと聞いてもいい？」

難問に突き当たった科学者の様に悩むローデリックに、都瑚は控えめな声で訊いてくる。

「何だ？」

「あの子……あの銀髪の女の子は、結局何者だったと思う？　あなたの意見を聞きたいわ」

先程よりは少し覇気のある声だった。とろんと閉じかけていた瞼も少し持ち直し、徐々に意識が覚醒しているようだった。ローデリックは少し考える素振りを見せたが、会話することで思考も本調子を取り戻すだろうと踏んで問いに答えることにした。

「……そうだな。どう説明しようか」

ローデリックは時計に向いていた身体を都瑚に向け直し、一口紅茶を口に含んでから話し出す。

「何度も言うが、あの少女は間違いなく人間ではない。あれだけのマナを肉体に取り込めることが可能なのはヒトの器以上の存在者だけだ」

魔術師が自らの生命力から生成する魔力がオドであり、それとは別に大気中に含まれる魔力をマナと呼称する。マナは言うなれば自然界の膨大な生命力から生成される魔力であり、人間がこれを肉体に過剰に取り込むことは、生物としての機能や感覚を塗り潰されることに他ならない。故にマナで肉体を満たすことが可能なのは、よ

り自然に近い上位存在——精霊種や霊体といったヒトならざる者だけである。

「だが精霊種の類にしては迂遠^{うえん}な行動をとる。彼らならマナを魔力に変換する工程も、魔術などといった自然干渉法を経ることもなしに物理法則に介入出来るはず」

人間ならばマナの魔力それそのものをそのまま術式に転用することとは出来ない。一度、自身の体内で『自らが使用出来る魔力』へと変換する工程を必要とする。だが、自然により近い精霊種はその限りでないし、魔術にしても、自然へ干渉する術を持たない人間が編み出した、魔力を介して実行されるプログラムこそが魔術であるため、精霊種がマナを魔力に変換する必要はないし、魔術を使用するのは不自然でしかなかった。

「故に、あの者が精霊種ではないことは見当がついていたし、その前の魔術を眼にして確信もした。世界にはヒト以上の存在など枚挙^{まいきょ}に暇^{いとま}がないが、魔術などというヒトだけが行使する術を弄する、ヒト以上の存在はかなり絞られる。つまり、かつてヒトだったもの、だ」

ローデリックはもう一度ティーカップを手に取り、残った紅茶を飲み干す。都瑚は、ただじっとローデリックの言葉に耳を傾けていた。

「それが霊体なのか、深奥を究めた魔術師なのか、はたまた我々がまだ見ぬ何かなのかは皆目見当がつかないが、あの者は『主』や『神』といった単語を口にしていた。ということは、どうやら十字架を信仰しているらしい。それに、あの女が羽織っていた深紅のローブには見覚えがある。あれは『教会堂』の『ピエラの人骸布^{じんがいふ}』。信

仰を武器とし、異端や怪異を駆逐して果てた殉教徒の亡骸を包む典んれいぎそう礼儀装だ」

十字教信仰者の共同体たる『教会堂』。その言葉に、都瑚は苦り切った表情を浮かべた。

「あなたのお目付け役で派遣された『国教会』の秘蔵ツ子……なんという可能性はないわよね？」

「断言は出来ないが恐らく。君は気が付かなかったか？ あの者の詠唱は仏蘭西語で構成されていた。『国教会』に属する者が、敢えて外国語を詠唱に用いるのは不自然だ。それに、少女が羽織っていた人骸布は伝統的な旧教デザインだった。『国教会』が信義を曲げず、非合法な盟約や密約を結んでいなければ、あの者が『国教会』メンバーであることは、まずないだろう」

「魔術の媒介となる典礼儀装を持ち、魔術を扱いながら魔術師ではない。で、あなたの『国教会』とは何ら関係がない。……それって、もう答えは一つしかないじゃない。まったく、まずいことになったわね」

都瑚は再度頭を抱える。ローデリックも、自分達の置かれた状況の悪質さに大きな溜息を吐いた。

「……まったく。まさか『十字協じゅうじきょうかい会』が介入してくるとは私も夢にも思わなかった」

その昔、『教会堂』が保有していた異端審問権を譲渡・一任され結成された、公式には存在しないとされる独立した機関群を『十字協会』と呼称する。悪魔祓い、全ての異端・異教徒を排斥し、人の

手に余る神秘を正しく管理するために設置された、人類社会の影の守護者を自称する組織である。

「奴ら是我々『国教会』とはまるで性格が異なる。彼らにしてみれば、人に仇なす異能力者や魔術師全てが問答無用に排除対象だ。示談や和解など望むべくもない。出会えば殺し合いになるのは必定だ」

『十字協会』の母体たる『教会堂』と『国教会』は明確に区分される。政治的理由から分離・独立した『国教会』ではあるが、教義の違いとして旧教・新教の別もあるし、その規模も圧倒的に『教会堂』の方が巨大で比にはならない。世間に知られることのない裏の顔、異端や怪異に対する立場としても、『国教会』がハト派とするならば『教会堂』はタカ派であった。双方とも表面上友好関係を保っているが、魔術に通じる『神僕騎士^{しんぼく}』を有する『国教会』を、本的には魔術の存在を否定する『教会堂』が快くは思っておらず、水面下では泥沼の抗争や殺し合いが行われることもしばしばあった。

「そうね。あの少女自身、そう言っていたもの。けれど、彼女は私達を見逃したわ。ということは、狂氣的な信仰心を持っている訳ではないよね。信仰そのものが目的となっていないのは不幸中の幸いかしら」

「だが、だからといって友好や協力といった希望的観測は持てない。身を以って痛感したが、あれだけの力だ。『十字協会』としては是が非でも自分達の思惑に利用したいところだろう。故に……」

「見えざる者の力が、彼女を縛っている訳、ね」

ローデリックは小さく首肯した。

「だからこそ、あの者は明確に敵対する由もなく我々と剣を交えたのだろう。だがその束縛と言うか監視は穴だらけらしい。一度でも交戦すれば、対象が死んだかどうかに関わらず束縛が緩む様だったからな」

「つまり、あの攻撃は監視者なり束縛なりを欺くためのもので、私達を害する意図のものではなかった、ってこと？」

「まあ、それはこちら側の一方的な願望でもあるが、その可能性は小さくないだろう。」

整理すると、だ。あの銀髪の少女は『十字協会』に所属する人外
の存在であり、思想は狂信的ではないが行動は協会側に支配されて
いる。目的は未だ定かではないものの、明らかに敵であるというわ
けでもない。出来れば共闘したいがそれは叶わない望みだろう、と
いうのが現時点での少女に対する私の見識だ」

ローデリックは一息ついて、カップに紅茶を注ぎ直す。

「『十字協会』がこの街に関心を持ったとすれば、それは、とめど
なく誕生する異能力者の駆逐に他ならないだろう。この街の異変は、
もはや外界に認識され始めてしまったのかもしれない」

ローデリックの言葉に、都瑚は表情を強張らせた。

「だが、それも関与が事実であればの話だ。どうも『十字協会』関
与説には腑に落ちないこともいくつかある。あれから調べてみたが
協会からの派遣はどうやらあの少女一人らしい。街レベルの異変に
対しての手段としては理解に苦しむと言わざるを得ない。いかに派
遣人が強大な力を持つ者とはいえ非効率極まりない。」

それに、あの少女は目的を明確に理解していなかった。私も十字教徒だからね、神の存在を否定するわけではないが、神託が下るのを待つとは実に迂遠で時代錯誤なことだ。『十字協会』側は強制的に、力である少女を従わせているらしいことを鑑みるに、もしかしたら『十字協会』はこの一件に何ら関与していないのかもしれないという推察も可能だ」

「つまり、あの少女の私的な行動だと？」

「憶測の域は出ないがね。大体において神託と現在を生きる人間との思惑は一致しない。彼女が教義や協会の理念より神の存在に依存しているとすれば、協会の命令を反故にして個人的な行動に走るのは至極自然なことだ。私としてはそちらの方が、現在の状況から察するにじっくりくるよ」

「そうであることを祈るばかりね。祈ることしか出来ない自分の無力さにうんざりするけれど」

自分自身に対する皮肉を、都瑚はそれまでと打って変わって微笑交じりに言えるまでになっていた。ローデリックは見慣れた旧友の姿がやっと復活したことに安堵しつつ、長広舌を終えての息抜きか、姿勢を崩してソファーにもたれた。

「ねえ、またちょっと気になったことがあるんだけど、聞いてもいいかしら？」

「『ピエラの人骸布』とはどういった典礼儀装なのか、かな？」

都瑚は目を丸くした。それから口を尖らせて拗ねるように言う。

「私のことは何でもお見通しなのね」

「未知の魔術媒介品について関心を持つのは、魔術師として自然な反応だ。だから私でも忖度出来たんだよ。別に君の内心を全て見通せる慧眼けいがんを持っているわけではないさ」

ローデリックの言い回しに都瑚は苦笑した。本人は謙遜の意味で言ったのだろうが、やんわりと、深い仲になることに対して予防線を張られた気がして、別に恋愛感情がある訳でもないが、一女性として自信を挫かれるような思いをしたからだった。

都瑚の複雑な思いをまったく意に介さず、ローデリックは話を続ける。その無邪気な姿に、都瑚は首をすくめた。やはり悪気はなかったらしいことに、もう一度苦笑せざるを得なかった。

「で、『ピエラの人骸布』についてだが、これは単純に死した殉教徒の穢れ——その者が受けた呪術や魔術の残滓を払い除けるだけの典礼儀装だ。教徒の純潔な心性を護るためだけの儀装で、あまり実用的ではないし、教会堂でも形式的な存在に過ぎない。特に気に留める必要のないものさ」

「じゃあ、あの子が羽織っていてもあまり意味はないってこと？」

「まったくないわけではないさ。多少の魔術ならその力を軽減することは出来る。だが『ピエラの人骸布』が予定しているのは死者の穢れを祓うことだからね、防御儀装としては三流なんだ。アレは呪いが体内に巣食った時点で、その呪いを一網打尽にする。つまり身に付けた者が死んでから本領が発揮される典礼儀装だ。生者が身につけるメリットは、せいぜい十字教に対する自己陶醉感を肥大化させるか、権威の象徴としてその威を示すくらいしかないだろうな」

「そう。なら確かに考慮しないでいいみたいね。まあ、私が理解出来ていても、実際に先陣を切るあなたの足を引っ張っちゃったら本末転倒なんだけど」

「都瑚、気にするなと言っているだろう。実を言うとな、私はあれでよかったと思っているんだ。戦うとなれば君の恐ろしい一面を垣間見てしまうからね」

その一言に、都瑚は不機嫌さを隠しもしなかった。しかし、彼女を立腹させたのは銃後の守りを勧められたことではなく、恐ろしい一面という文字通りその一言にであった。

「そんな言い方しないで欲しいわ。仕方ないのよ、誰かと争うって性に合わないんだもの。自分で自分を変えるしかないでしょう」

そう、都瑚は戦闘に向かない。だがそれは能力云々の問題ではなく、彼女の心柄上の問題である。その解決策として、都瑚は闘争心に欠ける自我から好戦的な自我へ肉体の主導権を移譲することを可能としている。人為的に作り出された第二の都瑚は、その想像や期待大きく、かなり偏見的な人格を持つ。ローデリックが畏怖するのはこの都瑚の方で、その傍若無人な人柄と梟雄きょうゆうと言うにふさわしい冷酷さに、相見えては常に辟易しているのだった。出来ることならば都瑚のためにも自分のためにも、彼女に戦闘を任せたくない、そう切に思うローデリックだった。

「でも、思えば私がこうして紅茶を愉しめるのもローデリックのおかげよ。あの大典儀……『王名結界』カルトウーシュだったかしら。貴重な典礼儀装を使わせちゃって、本当、申し訳ないわね」

「なに、あれはレプリカだ。まだいくらか残っているし、必要に迫られればまた手に入れるさ。君にだけは話すが、あのイシエドの葉はエジプトを旅行した際に、ファラオの末裔を称するご老人から購入したものでね。典礼儀装がこんなにも簡単に売買されているとは何とも情けなかったが、なるほど、やはりかの地は侮り難い。レプリカでさえあの力。正統な典礼儀装については想像したくもないな」

ローデリックは肩をすくめた。彼にしては珍しいおどけた仕草に、都瑚は笑いをこらえきれなかった。何が面白いのかと大真面目に訊きたそうな表情で、ローデリックは呆然と笑いの止まらない都瑚を見つめていた。

「ごめんなさい。あまりも可笑しくて、つい……ふふふ。なんだか元氣が出て来たわ。そうよ、やらなければならないことはいくらでもあるじゃない。いつまでもいじけているわけにもいかないわね。さ、ローデリック、今後の方針を話しましょう。さしあたっては異能力者の牽制と屍食鬼の退治ね」

途端に元氣を取り戻した都瑚に、啞然として硬直していたローデリックだったが、待ちに待った旧友の立ち直りにやんわりと表情をほころばせる。彼は都瑚とは対照的に、表面上冷静であったが、都瑚の心底楽しそうな表情に、内心歓喜するかのような興奮を覚えていた。

——やはり、自分は都瑚の笑顔が好きなのだな。

いつからか、そしていつの間にか知り得ていた自分の感情を再認識しながら、彼女の笑顔のために努力しようと、ローデリックも心機一転、姿勢を正して話し合いに臨むのだった。

2. 崩された日常 / 15

*

桜花学館への聞き込みを終えた頃には、時刻はとうに夜七時を回っていた。駅まで戻って来たところで空腹に耐えきれなくなって、治郎と一緒に行きつけの牛井チェーン店で夕飯を摂ることに。思えば最近はずしげく通っているので、シフトを大量に入れ込んで、もはや顔なじみと言っていいバイトのお姉さんにニコニコされるのが少し面倒だったりする。

「しかし、桜花学館も収穫なしでしたね」

プレーンな牛丼大盛りを軽く平らげた治郎がぼやいた。

「そう簡単に関係者に行き当たる訳ねえだろ。聞き込み舐めんな」

「そうじゃなくて。社さんをゆするネタが一つも手に入れられなかったことに対して俺は意気消沈してるんです」

「余計言いたい。バイト舐めんな」

豚汁を胃に落として一息つく、今日の自分のラッキーに再び安堵感を覚えずにはいられなかった。

不幸中の幸いだった。治郎の嫌がらせで桜花学館を意味なく隈なく歩かされたが、沙耶と出会すという最悪の事態は終始訪れることはなかったのだ。日頃の行いが善いからであるに違いない。いや、沙耶の気分に依存している時点で他力本願。俺の善行云々は関係な

いのか。

結局、桜花学館にも目ぼしい情報は転がっていなかったし、怪しい人物もいなかった。想定内の結果ではある。桜花学館が事件に絡んでいたら、もうどんな人間も信じる気にはなくなる。潔癖や徳義を忘却した現代の若者の中で、常にそれら美德を心がけ、加えて礼節と品格を重んじるよう教育された純粹培養の子どもを排出する名門学院、それが桜花学館。この蒼乃市にあって唯一、高いモラルと倫理観を教育されているはずなのである。その建前は今のところきちんと浸透しているらしい。

だがそんなことより、俺が衝撃を受けたのは桜花学館のもう一つの顔である。お嬢様学校とは誇張であっても虚構にあらず。すれ違う女生徒達の違和感たるや筆舌に尽くしがたい。俗世から完全に切り離された箱庭で育つ彼女達は、俺が今まで見てきた女どもとは一線を描く。汚い言葉は使わないし、声も荒げない。話題もミーハーで下世話なものじゃなく、輸入物の紅茶がどうのアンティークの家具がどうのと、凡そ俺達一般庶民が口の端に上せることもない、上品というかマニアックな会話を繰り返してやがる。同じ人間でも、環境が環境ならここまで違うのかと、改めて強烈に実感した一日である。

「あ、バイトって言えば、明日って土曜じゃないですか。社さん、理子先輩のバイト先、覗いて来たらどうです？」

「明日も気温一ケタ予報だぞ。クソ寒い中、用もないのに外に出るか」

「歩み寄りってヤツですよ。アンタから関係修復していかなくてどうするんですか」

「チッ。何で俺がわざわざアイツのご機嫌取りに出なきゃならん」

「今こそ男の甲斐性見せつける時なんですよ。言うなればこれは男のマナーです、マナー。男はいつだって影に日陰に、三步下がって影踏まず。女に華を持たせることが肝要なんですよ」

「お前……歳の割に達観してるな。かかあ天下容認してるのか」

「いえ、俺は古き良き日本の亭主関白信奉者なんで。同棲相手が夕食にカップラーメンでも出そうものなら卓袱台ひっくり返して罵詈雑言浴びせかけますし、結婚したら一升瓶片手に理不尽な暴言で嫁を虐げる亭主が目標なんです」

「予想以上にお前の腹ン中って真っ黒だったのな」

末恐ろしいガキである。

「ンなことより、早く理子先輩と仲直りして下さい。社さんの女遊びのご乱行ぶりをチクるにしても、理子先輩と疎遠じゃ面白くないんで」

「お前最悪。つか遊んでねえんだよ。話をややこしくさせんな」

「いいからいいから。頼みましたよ?」

言って、治郎は立ち上がり、スタスタと店を出て行く。

なんてマイペースなヤツだ。こっちの答えは聞く気もないのか。俺がしぶりながらも理子に会いに行くのを予期でもしてやがるのか、

だったらスゲー腹立つ。

……いや、でもまあ、真面目な話、それは治郎に言われるまでもない。どこかで妥協しなきゃならない時が来るだろうことは何となく分かっていた訳だし、今回は俺の方にも非があるとも言える。気が向いたら様子ぐらいいは見て来てやろうと思っていたところだ。罪悪感云々より、あの騒がしさが途端に消えてなくなると妙に物足りないのだ。救い難いほど無いものねだりだと自己嫌悪せざるを得ない。

治郎の後を追って店を出ると、外気の冷たさに身震いしてしまう。天を仰げば、昼間の快晴とは打って変わって雪でも降りそうな空色だった。

「人が多くなってきましたね」

行き交う大量の人間に、目障りだとしても言いたげな視線を向けながら、治郎はボソリと呟いた。

「クリスマスが近いからだろ」

「それもあるでしょうけど、それより何より『G件』犯の小休止が要因でしょ。昨日まで四日間も殺人が起きてないんですからね。この連中も目ざといというか姑息というか」

「そういや、まだそのインターバルの謎が解けてなかったな。まあ、殺人鬼の思考なんて、そうでない俺達が辿るのは不可能なんだけだな。推測くらい立てたい」

「根拠も自信もないですけど、社さんの仮説に乗っかれば予想くら

「立てられますよ」

「へえ、何だよ？ それ」

「十二月って師走とも言わないですか。つまり教師が忙しくなる月な訳で。加えて、今週は蒼乃市のほとんどの高校が期末考査期間。雑務に追われて『G件』犯も凶刃を揮う時間が確保出来なかったんじゃないか、と考えられる訳ですよ」

「奴さん、日常に埋没してるってのか？ じゃあそれってつまり、『肉体強盗』は殺人が目的じゃないってことだよな」

「そういうことになりますね。殺人行為以上に優先すべき何か目的がある、だからまだ日常から完全に切り離されないよう、しぶとくしがみついていると考えるのが自然ですね。まあ、単なる推測ではないですけど」

「殺人より優先すべきこと……か」

治郎の言うことが正しいとすれば、『肉体強盗』にとって殺人は目的ではなく手段である。キッズ・ギャングを殺し続けることによって得られる何かが、このふざけた異常殺人者の本当の目的。それが一体何なのか。

「社さん、今ここで悩んだところで進展はないと思いますよ。何せ情報が少なすぎる。俺も仮説も念頭に入れて調査するんで今日のところは保留にしましょうよ」

治郎にしては建設的な意見に、俺は訝しげな視線を送らざるを得ない。はつきりいって不気味である。

「言いたいことは解りますよ。どうせ、俺にしては珍しい発言だと思ってるんでしょ？」

無言で首を縦に振る。治郎は無然とした表情でこちらを見据える。

「アンタの言いようは甚だ心外ですけど、今日は見逃してあげますよ。それよりクソ寒いんで早く移動しましょう」

どうやらそれが本音だったらしい。納得というか、言いようのない空恐ろしさを払拭出来たことに安堵しながら駅の方へ歩き始めようとすると、周囲の通行人の表情が妙に気にかかった。誰も彼も珍しいものでも見るかのような好奇の眼差しを俺達の後方に向けていたのだ。

はて、何かあるのかと振り返ってみれば、どうやら今から何かのデモ行進があるらしい。徐々に聞こえてくる声は、内容こそはつきりと聞き取れなかったが、視界に捉えた行列はこの世のものとは思えない様相だった。

不気味、と言うほか表現出来ない。まるで百鬼夜行である。数えるのも馬鹿らしい数の人間がゾンビのような表情と足取りで往来を整然と行進する。プラカードやら旗やらを掲げ、一様に『蒼民そうみんの加護を、蒼民の慈悲を』と呼びかけている。文字にしる斉唱にしる気味が悪いにも程がある。意味に関してもまったく訳が分からなかった。

「なんだ、ありゃ？」

俺の呟きに、治郎は心底驚いたような声を上げる。

「うっわ。社さん、知らないんですか？ アレ、最近巷で流行ってる『蒼民教』そうみんきょうって新興宗教ですよ」

「……聞いたこともねえな」

「世情に疎いですね、新聞くらい読めよな」

後輩からの軽蔑の眼差しが痛い。溜息を吐きながら、治郎は携帯に文字を打って見せてきた。

「そうは蒼乃の蒼、みんな公民の民、んで蒼民教。何でもこの蒼民っていうのは、遠い昔にこの蒼乃市に住んでいた『鬼』の一族の別名だそうで」

「『鬼』……ねえ」

どんな人里にも共通することだが、この蒼乃市にも、古くから伝わる伝説がある。それが『鬼』伝説。桃太郎や大江山の酒吞童子なんかで有名な、あの『鬼』だ。

昔、この蒼乃市を支配していたのが、『鬼』と呼ばれる種族だったそうで、蒼乃の人間は連中に怖れおののきながら生活していたらしい。その後、中央から派遣された武士だか陰陽師だかに退治されて、『鬼』はそのほとんどが封印されたり、殺されたりした。幸い外見は人間と変わらなかったから、残った『鬼』は人と交わり、その後何百年かは密かに『鬼』の血が生き続けたが、世代を重ねる度にその存在は薄くなり、今日では『鬼』の面影などどこにもない。確か伝承はそんな感じだった。

「で、何でその『鬼』が宗教の名前に関係してるんだ？ 日本じゃ『鬼』って悪の代名詞じゃねえか」

蒼乃の伝説でも例外なく人間の敵である。

「それが馬鹿馬鹿しいことこの上ないんですけど、何でも蒼民教に皈依すれば『G件』犯やキッズギャングの魔の手から蒼民、つまり『鬼』が皈依者の命を護ってくれるらしいんですよ。悪の代名詞でも自分達を護ってくれるなら護り神ってことです。日本人の考えそんなことですよ」

「で、アイツら、それを本気で信じてるのか？」

「どうでしょうね。まあ少なくとも、こうして大々的に街を闊歩出来るまで、真性だろうが、にわかだろうが信者を増やしているのは事実です。」

あと、これはまだ噂ですけど、蒼乃の金持ちや代議士が、大金はたいて何人か皈依しているらしいですよ。勿論、そういう連中は、腹立たしいことに命の危険どころか我が世の春を謳歌している。そういう口コミもあって、こりゃ本当に御利益があるに違いないと、どんどん信者を増やしているそうです」

「どいつもこいつも狂ってるな。祈って命が救われるなら警察はいらねえよ」

この異常な日常の中で、何かにすがりたい気持ちは解るがね。

にしても、『蒼民教』とは、またえらく面倒な団体が台頭してきたな。

末世的で世紀末的な社会に救世主の登場を求める連中の集団妄想が、この宗教勃興の背景にある。たまたまこの土地固有の『鬼』伝説からキャラを拝借しただけで、『鬼』そのものに深い意味はないだろうな。要は敵を駆逐する程の力を持つ、イコール人間以上であればいいんだから。

超能力者に対抗するのは超常の存在、ね。解りやす過ぎて逆に面白くない。

キッズ・ギャングに『G件』犯、そして『蒼民教』。三つ巴の争いがどんな結末を引き寄せるやら。互いに牽制し合って何事も起らないことを祈るばかりである。

＊

見つからない。

探し人は、一向に見つからなかった。

募るのは、私の心に大きな穴を穿つ喪失感と、それを埋め合わせるように肥大した憎しみと、堆く積まれた塵屑^{したい}の山。

今日は四人。

予備校帰りの少女を手始めに、路地裏で出会った三人の男を、この手で殺してやった。

そう。これは殺人だ。殺戮ではない。

私には、明確な殺意がある。

決して、享樂や頹廢のためにこんな蛮行を為すわけではないのだ。今はもう、人の世の暗い鉄檻に囚われた『G件』犯のような異端者と、私はまったく別物だ。

人の理を超えた超越者の私は、それでも人間なのだ。感情の発露が他人との不和を生み、争い、力の勝る私が生き残ったという、簡単な日常。私の場合、強大過ぎる自己主張が、相手を死に至らしめてしまうだけというだけ。

そう。私は人間なのだ。

いや、人間でなければならぬ。

人を愛した私は、人であろうと努力しなければならないのだ。

人に恋した人外存在は、その悉くが人に擬態し、社会に溶け込まなければ、愛した者と同じ世界に生きられないのだから。

今日も私は、人の体だったものを貰い受ける。右腕と右足、左腕と左足を一つずつ、脇に抱えて現場を立ち去る。

何の気なしに雲一つない上空を仰ぎ見れば、今日も目玉のような月が私を見下ろしている。

今月に入って何度目に見る満月だろう。そんな些細な疑問が、ふと脳裏によぎった。思えば何度も顔を合わせているような違和感があった。

しかし、すぐにどうでもよくなった。

何故なら、月は異界の門なのだから。あれが眼を見開き、地上を蒼白い視線で見つめる時、門が開き、地上はなだれ込んだ魑魅魍魎が跳梁跋扈するのだ。

まるで、解き放たれた怪異に怖れ慄く人間達を、余りなく楽しげに俯瞰するかのように空高く鎮座する一つの眼に、私は憧憬の念を感じずにはいられなかった。

——私にも、地上を俯瞰する『眼』があれば。

そうであるなら、探し人なんて簡単に見つけられるだろう。

早く見つけ出さねばならない。金色の髪の少女を。

そして、消してしまわねばならない。私からあの人を奪った、憎らしい女を。

*

2. 崩された日常 / 16

「……やっべ」

ベッドの上から何の面白みもないシンプルな壁掛け時計に眼をや
って、思わずそんな声が漏れた。

時刻は五時二十分。ただし午後の、である。そして日付は十二月
十六日の日曜日。今日の深夜零時からだから、十七時間は熟睡して
いた計算になる。なんて勿体ないことを。せっかくの休日を睡眠だ
けで過ごしてしまうとは。

とてつもない後悔の念に打ちひしがれる俺。しかし、よくよく考
えればこの責任の所在は俺だけにあるのではない。いや、むしろ、
俺は被害者の方ではないか。

全ては昨日——十五日の土曜日の番狂わせが全ての発端。そして
その口火を切った憎き悪者は、あの仕事バカこと生徒会長、藤原梢
じゃないか。

うん、そうだ。全部藤原のせいである。緊急の用事だからと電話
を受けて、バカ正直に登校した俺も相当なマヌケだったが、それに
したって藤原の横暴は目に余るものがある。例の桜花学館との共同
プロジェクトで事務作業が滞っているからと言ってこの俺をパシリ
にするとは……。あの女、次会った時は陰湿な嫌がらせで意趣返し
してくれる。

遠慮会釈のない召集、軟禁、強制労働のおかげで土曜日の午前、
午後はまるまるパー。気が向いたら理子のバイト先に行ってやるつ

もりだったが、勿論そんな余力は残っているはずもなく、長時間のパソコン操作の疲労からか、我が家に着くなりバタンキュー。事ここに至る訳である。

ああ、思い出すだけでも腹立たしい。俺の貴重な一日をなんだと思っ
てやがるんだ、あのアマ。俺を都合のいい小間使いとでも思っ
てやがるのか。ちくしょー、ムカつく。

怒りのボルテージが最高潮に達して、もう自暴自棄気味に布団から飛び出すと、ベッドから変な鳴き声が聞こえて来た。無造作に折りたたまれた布団の中からニャーニャーと、助けを求めるかのように必死に声を発する生き物。無視することも出来なくて、仕方なく溜息を吐きながら布団を元通りにしてやると、あの銀色の猫が平和ボケしたツラで俺を見上げてきた。そしてニャーと一言。

居候の惚けた態度にペースを狂わされる。行き場のないこの怒りをコイツにぶつけてやろうかと考え、綺麗な緑の眼を睨み続けること数十秒。でもダメだった。いつの間にか怒りは呆れに取って代わり、俺は平常心を取り戻していた。ペット効果恐るべし。

俺はもう一度溜息を吐いて、机の一番下の引き出しから買いだめしておいた猫缶をとって封を切る。常備してある皿にあげて差し出すと、銀猫は優雅な足取りで近づいてゆっくりと口をつけ始めた。

……何やってんだ、俺。

何度同じ自問自答を繰り返したか分からない。我ながらお人好しに過ぎるな。無断で居座る居候を養ってやるとは。

一昨日の事だったろうか。気付けばベッドの上で丸くなっていた

猫を見つけた。それが、数日前に突然夜の街に飛び出して行った、あの銀猫だと気付くのは一瞬だった。何か、予感めいたものもあったのだ。あのクソ猫はまた戻ってくる、そういう嫌な予感が。

まあ、例によって例のごとく、根が優しい社慶太は銀猫を追いつくことも出来ず、今度は前より長く居座りやがるもんだから、仕方なしにスーパーのペットフードコーナーをうろつく羽目になったわけだ。

『超絶猫缶プレミアム』一缶なんと四六〇円。相場の約三倍である。これくらい高いものじゃないと口をつけないんじゃないかという不安もあって買ってしまった超高級猫缶だが、考えれば俺が心配してやる必要ってない気がする。こっちは寢床まで提供してやっているのだから、むしろこの銀猫が遠慮すべきだろう。

「相手が人間なら駆け引きも出来るんだけどな……」

相手の遠慮とこっちの世間体の最小公約数を談話で引き出す。それが金のない人間の賢い接客術なのに、相手が言葉の通じない猫じや俺は不幸過ぎる。

「なあ、いつまでここに居座る気なんだ、お前」

銀猫は無邪気な表情で俺を見上げる。だがすぐに興味を失って猫缶に視線を落としやがった。

「……飼い主探すにしても面倒だしなあ。どうにか自主的に出て行ってくれと助かるんだが、どうよ？」

限りなく譲歩した俺の提案に、今度は顔すら上げなかった。完全

にシカトである。何だか意図的に無視されている気がして妙に腹が立った。

動物に手をあげたとあっちゃご近所さんからの非難は避けられない。村八分なんて処罰はまっぴらごめんなんで、こっちから引き下がることにした。

……この時間じゃやることも限られている。気は乗らないが、外野がうるせえから理子の様子を見に行ってみようと思う。俺って結構マメだよな。いや、義理堅いと言わべきか。

コートを羽織りつつ、電源を入れたままだったデスクトップパソコンでオンラインニュースを確認すると、今日もまた『肉体強盗』による死人が出たらしい。これで死者は二桁越え。持ち帰った手足はどこで保存するんだ、なんてズレた心配をしてしまう。

今回も殺されたのはキッズ・ギャング。でも一般人も混ざっているところを見ると、『肉体強盗』の目的が連中への復讐かどうかは疑わしい。何だか恣意的に殺人を犯しているように思えるのは俺だけだろうか。場数を踏む度、人間らしい感情が欠落ないしは乖離している気がしてならない。

異常性というものは正常性を凌駕するものではなく駆逐するものだ。異常な力は自我の中から正常な部分を追い出してしまう。この犯人も、もう人間という器には戻らないだろうな。

例えば犯人が世間に未練を残していようと、もうコイツは終わってる。治郎の推論は気にはなるが、二日前の四人を殺害した一件から信憑性は一気に落ちていく。

……犯人は解っているんだろうか。人を殺すことそれ自体が、人間から遠ざかる行為であることを。

他者に認められて生きていくはずの個人が、他者を消してしまうことは自殺行為だ。婉曲的に自分を殺すことに他ならない。

一体、いつになったら気付くんだろうか。やっぱり、自分に近い人間を殺さなければ解らないのだろうか。その時初めて、自分を認めてくれる他者の存在を認識出来るのだろうか。

いや、これ以上の想像はお節介か。いくら俺が義理堅いからといって、赤の他人行く末を心配してやるのはおこがましいってヤツだ。

結局、いつかは気付くんのだ。それが生きている間であろうが死んだ後であろうが、他人は自分にとって『生きること』そのものの究極的な幸福の源でもあり、同時に究極的な不幸であるということ。

世界はそういった種類の矛盾で成り立っている。受け入れなければ、苦悩を知らず、一つの意味しか持たない完成されてしまった『概念』となるだけ。完成っていうのは「死」と同義だ。

俺達は人生を完成させるために生まれ、だが完成を回避しようと生き続ける。矛盾なんて、この世に誕生した瞬間から背負ってるということになるわけだが。

この世のどうしようもなさにな少しブルー入りながら、行きたくもないが行かなければ気が済まないというもう一つの矛盾を抱えて、俺は緩慢に部屋を出る。

ドアを閉める寸前、銀猫が小さく鳴き声を上げた。振り返って見

てみれば、まだ食事を終えていないにもかかわらず、俺を見送るように行儀よくこちらを見据えている。

この銀猫はやっぱり勘が鋭いんだろうか。さっきのシカトといい、まるでちよつと天然入った人間を相手にしているようだ。俺、天然系キャラって好きじゃねえんだよな。

イマイチ真意を掴みかねるんで何の返事もせずに部屋を後にして、玄関まで階段を下りる。

上がり框に腰かけながらブーツの紐を結んでいると、不意に背後から敵意を感じて振り返る。視界には居丈高に仁王立ちする母親の姿があった。

見上げる体勢になっているからだろうか、小柄な母親の身体がやけに大きく見えて違和感バリバリだった。

「慶太、出掛けるの？ だったら夕飯までには帰ってきなさいよ？ こっちだって計算して分量決めてるんだから」

無愛想に言い放つ。我が母親ながら可愛げも何もあったもんじゃない。いや、あったらあったで気味悪すぎるが。

「へいへい、解りましたよ。……ちなみに、今日の夕飯って？」

「白米に納豆」

「ふざけんなよ秋穂ちゃん。そんな貧相な献立で食べ盛りの高校生の胃袋を満足させられると思うのか？」

「母親を名前で呼ぶな。まったく、食わせてもらっている立場でおこがましいわね。むしろ頭を垂れて涙ながらに感謝してほしいくらいよ」

「するかバカ」

やっと靴紐も結べたんで腰を上げると、丁度玄関がゆっくりと開いて親父が帰って来た。

「あ、慶太君、お出掛けですか？」

人の良さそうな笑顔で母親と同じようなことを聞いてくる。ただし、その聞き方は母親と比べてかなり丁寧。というか対照的と言える。家族にまで丁寧語だなんてどこの良家出身だと問いかけたくなるが、親父は何の変哲もない一般家庭出身だったりする。要は性格上の問題というヤツだ。極端に気が弱いというのは親父の勤める小学校関係者の連中に聞いたことがあるが、叱る時でさえ丁寧語だという話は流石に耳を疑ったものである。

「もうすぐ夕飯だから、早く帰って来てください」

「父さん、いっそのこと、こんな時間に出歩くような奴はもう家に帰ってくるな、ぐらいのこと言っているのよ。まったく、協調性のないヤツだわ」

「うるさいぞ更年期、イライラしてるからって八つ当たりするな」

「慶太、言っているいいことと悪いことがあるわよ。それって冗談にならないんだからね」

「いや、至って真面目だ」

「尚更悪い。ふん、お前なんて不良に絡まれてカツアゲでもされればいいんだ」

「おいコラ、母親失格な発言を堂々と子どもの前でしやがって……」

俺と母親の心温まるやりとりを、親父はニコニコしながら眺めていた。その温度差に気付いて、俺と母親は一時休戦。いつもの結末ではある。この人畜無害を絵に描いたような何の変哲もない親父の存在が、社家の崩壊を水際で食い止めているとは、案外、正義の味方なんてどこの家庭にでもいるのかもな。

「……んじゃまあ行ってくるわ。一時間くらいで帰ってくるよ」

一度鎮静化した言い争いの口火をもう一度切るほど暇でもない。いつてらっしゃいという母親の無気力全開な台詞を背中を受けて、俺は夜の住宅街へと出た。

吐く息はいつも以上にはっきりと白い。風が少し強く、吹き付ける度に身体感覚を奪っていくようだ。指先は既に使い物にならなかった。

もともと残りわずかだったヤル気がさらに削がれたが、両手を擦り合わせながら市街地へ向かって歩き出した。

＊

理子のバイト先であるフラワーショップ『あい』は、市街地にいくつもある同業店の中で一、二を争う人気店だ。何故、蒼青市に花

屋が多いのかというと、別に花を愛でる心優しい人間が多いというメルヘンな理由ではなく、キャバクラやホストクラブといった花を多用する店が多いことと、あとは人死にが続くから葬式も比例して多いことだろう。最近じゃ『G件』のせいでさらに増えたらしい。まったく、商魂たくましくて感服してしまう。

イルミネーションで小綺麗に装飾された外観を遠目で眺めて見た。年末も近いこの時期は言うまでもなく多忙を極めるはずなんだが、今日は客の出入りは少ないしかった。好都合とばかりに店内に入ってはみたものの、生憎と理子の姿は見受けられない。奥に引っ込んでいるのか、それとも配達で出払っているのか。考えている内に、小柄な壮年の男がひょっこり店先から戻って来た。

「あ、いらっしやいませ」

丁寧にお辞儀をしつつ、寒気がするような商売笑顔を見せてきやがる。この人が店長だろうか。温和な顔立ち、といっても作られた感が否めない。本性はもっと別であるということは何となく感じさせる胡散臭さを持っている。また、少し老けた顔に分厚い丸眼鏡が恐ろしく似合っていないくて、わざとやっているんじゃないだろうか。とさらに猜疑心をあおる。俺としては全く信用出来ない部類の人間である。

「どんな花をお探しですか？」

この手の人間と会話などしたくはないが、理子の居場所がまったく分からない以上、情報は手に入れなければならない。意を決して訊いてみることにした。

「あの、ここで働いている仲原理子さんって、今どこにいるか教え

てもらえませんか？」

理子の名前を出した途端、満面の笑顔だった男の表情が見る見るうちに陰しさを増していった。眼鏡の奥でギロリと俺を見つめる眼は、明らかに不審者を見るそれだった。

「……君、理子ちゃんの友達かな？」

「え、ええ、そうです。同じ高校の同級生で」

「理子ちゃんに何の用かな？」

何でそんなこと言わなきゃならん。まるで尋問されている気分だ。俺が理子に何か良からぬことをしようと企んでいる悪漢に見えるってのか。

……なんて言葉が喉まで出かかったが、なんとか空気と一緒に飲み込めた。『G件』のこともあってみんな疑心暗鬼になっているのは仕方ないことだ。この人の対応も不自然の内には入らない。というか、素性も明かさず理子の居場所を詮索する俺が不審だったのは否定出来ないし。

「あ、借りていたノートを返そうと思って。明日授業で使うだろうから、今日の内に返さないと予習出来ないだろうし」

勿論、全部嘘っぱち。俺はノートなんかを理子から借りる程抜けてないし、理子がいちいち授業の予習なんてする訳もない。

男の訝しげな視線は未だ俺に突き刺さりつつあったが、少しは信用してくれたらしく、理子は配達に出払っていることを教えてくれ

た。だがその行き先までは教えてくれないところを見ると、まだまだ警戒心は高いらしい。要領を得ないんで自分で探すことにした。

アテもなく、駅に向かって市街地を歩く。日曜の夜は嫌いだった。いつも以上に人が多く、騒がしいことこの上ないからだ。どいつもコイツも暇だな、なんて悪態をついてみる。ささやかな反抗も、心の中でしか叫べないことにうんざりするだけだった。

さて、どうでもいい連中のことでなければしの神経すり減らすより、真剣に理子の居場所を探ろうと思う。しかし、あの店長が快く教えてくれれば、何もここまで俺が苦勞することないんだが。

いつそのこともう一度店長に訊いてみようか、なんて現実味のないう案が脳内に浮かんだが、すぐさま却下する。どういう手を駆使しよう、あの店長の信用はもぎ取れない気がする。何となく、勘ではないが、それだけの警戒心が店長から感じ取られたのである。ありゃ俺の不審さに対してだけでなく、個人的な理子に対する感情もあるな。どこまで厚遇されてんだ、あの女。

そういや、一番面倒な配達なんかほとんど店長が担当して、理子はかなり近場の、しかもかなり軽い依頼品を配達しているところしか見たことないし、五時間労働で休憩一時間半、時給は千円近いという、この国の企業戦士が聞いたら卒倒する驚愕の雇用状況を聞いたこともある。娘を溺愛する親父か、あの店長は。まあ、歳が歳そうだから、理子くらいの娘がいても不思議ではないが。

煉瓦張りの道に視線を落としながら歩いていたら、突然視界に綺麗に包装された一輪の小さな薔薇が落ちて来た。何とも珍しい青い薔薇だった。見るのは初めてだ。どうやら対面の誰かが落としたらしい。拾って持ち主に返そうと思ったら、眼の前には驚いた表情の

理子が立ち尽くしていた。

俺も言葉が出ず、お互い沈黙し動けなかった。こんなご都合主義な展開って現実にあるんだ。何とか対応しようと試みるものの、あまりにも唐突なことなんで思考がうまく働かない。なんて声をかけたらいいのかわからず、俺は閉口したままだった。

「や、偶然。ていうか久し振りだね」

そんな俺とは対照的に、理子はコロリと表情を変え、ニコニコしながらいつもみたいに陽気に声をかけて来る。俺はますます混乱した。

「お、おう。久し振りだな、元気だったか？」

我ながら馬鹿馬鹿しい事を訊く。元気かどうかなんて理子の姿を見れば一目瞭然である。

「まあこの通り元気だよ。ケイちゃんはお買いものでもしてるの？」

「いや、何ていうか……ちょっと散歩を、な」

「人混みが嫌いなケイちゃんが市街地を散歩？　ありえないよ、うん」

まったくその通りである。動揺してるからってその弁解はないと自分でも思う。

「例のバイト？　それともその帰りかな？」

「あ、いや、そのな……」

「あ、ここじゃ通行の邪魔になっちゃうね。ちょっと場所を変えようよ。久し振りに会ったんだし、何かおしゃべりしたいな、私」

「前に行った喫茶店でいいかな？　なんて訊いてくる理子。目まぐるしい状況の変化について行けず、俺はただ頷くだけだった。」

＊

2. 崩された日常 / 17

「――いや、ちょっと待て」

茫然自失とする事数十秒。やっとのことで意識を取り戻し、踵を返して歩き出そうとする理子呼び止めた。

「え、何か言った？」

振り返った理子の無邪気な表情をまじまじと注視してしまい、視線はあらぬ方へ飛ばされて俺はまた言葉を失った。

「あーいや、……その………何て言うか、お前、おかしい」

理子は唇を尖らせた。

「何それ。相変わらずケイちゃんは酷いなー」

「いや、悪い、言葉が足りなかった。俺はそういうことを言いたいんじゃないくてだな、だからつまり……」

何とも歯痒い時間だった。どうしたってしどろもどろになってしまいう自分が情けなくもあった。ただ一言、一週間前のことを詫びればいいだけなのに、その話題へつなげるための突破口となる言葉が俺の脳内では見つからなかったのだ。

「もう、もどかしいな。何が言いたいの？ ほら、はっきり言ってごらん？」

こういう優し気な口調で問われていると、粗相をしでかして口を噤んだガキの頃を思い出す。それってかなりカッコ悪いし、みつともない。とてつもない羞恥心が、迷走していた思考を凍てつかせ、テンパっていた心持は見る見るうちに冷めていった。

「あ、もしかして喫茶店行くお金がないとか？」

理子は好き勝手なことを言いやる。一際強い風が吹いて寒気がしてくると、いよいよもって冷静さに拍車がかかる。さっきの動揺振りが嘘のようだ。心底無愛想に言葉を紡ぐ。

「いや、金ならある。ただ時間がねえんだ。だから話すんなら駅前広場にしようぜ」

相も変わらず駅前広場は賑やかである。公共精神など欠片も持ち合わせない喧しいのが雁首揃えているが、もう気にすることすら面倒だった。俺と理子は大通りにほど近いベンチに腰を下ろした。

「うう、寒い」

小さく体を震わせ、理子は恨めしそうに呟く。

「何だ、俺に文句言ってるのか」

「違うよ、お空に文句言ってるの」

言いながら灰暗い空を仰ぎ、ジイーという擬音語を発しながら睨みつける。

「……ほんと、お前脳ミソぶっ飛んでるな」

「あ、ケイちゃん、今私の事バカにしたな？」

今の言葉をそれ以外にどう受け取れるんだってんだ。いちいち突っ込むのも面倒だから無視することにした。無駄話はやめてさっさと本題に入ろうと思う。

「——んなことより、まあ……なんだ、アレだ。悪かったな」

「え、アレって、何？」

勘の悪い女だ。少しくらい察してくれてもいいだろうに、なんて理不尽な苛つきが募る。

「だから……その、この前の喫茶店だよ、喫茶店。別にお前を困らせようと思った訳じゃなくてだな……つまり、ありや不可抗力だったんだが、こっちにも非がないとも言い切れないから、つまり……これでチャラな！」

自然、口調は投げやりになる。頭は下げていたがもう何だか逆ギレ状態だった。

しばらく呆気にとられていた理子は、大きく溜息を吐いた。

「——何だ、そんなことか」

そして面白くなさそうにそう一言。

「そ、そんなことって……お前なあ、あんなだけ泣いたクセに『そん

なこと』で済ませられることなのかよ」

「ごめんごめん、そういうことじゃなくてさ。何ていうか、期待が外れちゃったっていうか……。うん、確かにあの涙は本物だし、一応、並々ならない事情はあるんだけど、でもそれは、別にケイちゃんのせいじゃないんだ。私が勢い余って泣いちゃっただけ。ほんとごめんね、心配させちゃって」

よく分からない弁解を捲し立てるように一気呵成した理子だったが、どうやらあの一件について俺が気にかけていることはないらしいってことだけは悟ることが出来た。虚勢かどうかなんていうのは俺にとっては些事であって、内に秘めた思いを制御するという虚勢を張れるだけの最後の自己防衛力が理子に存在している事を確認できただけで、何だか安心する。鼓動の早くなっていた心臓が急速に鎮静化していくのを感じた。

「あ、でもケイちゃんにしてはよく謝ったよ、うん。えらいえらい」

何故か褒められ、項垂れていた頭を撫でられる。ムカついたので理子を睨みつけた。

「あ、そういう顔は可愛くない」

「うるせ、とにかく俺は謝ったからな。いつまでも小さい事を引き摺るなよ」

理子の手を振りほどいて、俺は勢いのまま立ち上がった。

「……あのさ、私、最初から一週間前のことなんて引き摺ってなんかないんだけど」

「あーつべこべ言うな。もうこの話は終了。俺は帰る」

いろいろ気恥ずかしくて居たたまれないので、一刻も早くこの場から立ち去ろうと思った。理子の前で、というより他人の前でこんな風に取り乱してしまったのは久し振りのことだったのだ。他人の感情に振り回されることが嫌だから、それまで深く関わり合いを持つとうとしなかったというのに、いつの間にか重荷を背負い込んでいてこの通りだ。やっぱりロクなもんじゃねえ。

「待ってよ、ケイちゃん」

歩き出そうとすると、コートの袖を強めに引っ張られた。俺はたたらを踏む。

「何だよ、時間がないって言ってるだろ。話なら明日にしてくれ」

「もしかして、今日ってわざわざ私に会いに来てくれた？」

理子は真顔でそんな恥ずかしいことを訊いてくる。

「は？ おいおい、自惚れるなよ高慢ちき。夕食の買い出しのついでにお前のバイト先の様子を見に行っただけだ」

「『あい』にまで行ったの？」

しまった。言わなくていい事まで言ってしまった。

「……いや、たまたま通りかかったもんでな、どんな店なんだろうと好奇心が湧いただけだ。うん、なかなかいい花屋だったな、店長

はちよつとムカついたけど」

何だかさらに言わなくていいことを口走っている気がする。人は嘘を吐く時饒舌になるらしい。俺ってば典型的な嘔吐きなんだろうか。

「――で、これから買い出しに行くの？」

「あ？ ああ、そうだ。これからカレーの材料を買いに行くんだよ。えーと……牛肉にジャガイモにニンジン、玉ねぎ、マッシュルーム、あとあれはブロッコリーだったかな」

「へえ、ケイちゃんの家って変わってるんだね、カレーにブロッコリー入れるんだ？」

身から出た錆とはこのことか。慣れていない料理の話題に触れるんじゃないかった。予想外の指摘に俺はまたも少し逆ギレ気味になる。ちなみに、俺が列举した食材はカレーではなくビーフシチューの食材であることが後に判明する。

「と、とにかく俺は忙しいんだ。『G件』犯の搜索やら何やらで猫の手も借りたいぐらいだ」

ちなみに、我が家の居候の猫は労働を増やしているだけだけなんだけど、なんて皮肉が脳裡を掠めた。

「本当はお前みたいなバカに付き合っている暇はないんだ。わかったか？」

「――うん、ありがとう」

小馬鹿にされているっていうのに、何故か理子は幸せそうに微笑んで礼を言う。……コイツ、とうとうおかしくなったか？

「……理子、大丈夫か？」

「え、大丈夫だよ？」

心配されている理由が分からないと言う風に、眼を瞬かせる。

「いや、大丈夫じゃねえって。情緒不安定になっているんじゃないか？ 一度真剣に診てもらった方がいいぞ」

「ねえ、そんなことより、ケイちゃんにコレ、プレゼントしちゃおうかな」

俺の心配を足蹴にして、理子は意気揚々と、小振りの一輪の青い薔薇を俺に差し出す。

「プレゼントって……お前、コレ、売れ残った処分品だろ」

「違うよー。届け先の社長さんが可愛い私にしてくれたの」

「ムカつく経緯だな。どちらにしろ体のいい厄介払いだろうが、いらねえよ」

「ほら、いいから受け取ってよ。珍しいでしょ、青い薔薇なんて」

理子は俺に無理やり青い薔薇を押し付ける。その強引さに、俺は渋々受け取るより他なかった。

「いや、まあ確かに珍しいけどなあ……」

仮にも俺は思春期真っ只中の男子高校生。一輪の抜き身の花を携えて繁華街を闊歩するのはどうにも気が進まない。

つい一ヶ月ほど前から売り始められるようになった貴重な薔薇だと言う事は知ってはいるが、別に花を愛でる趣味はないので処遇にも困る。理子は何故、この薔薇を俺に渡したがるのか、まるで訳がわからなかった。

「青い薔薇の花言葉はね、『奇跡』なんだ。今まで不可能とされてきた理想を実現させた薔薇なんだよ」

「へえ、さすが消息筋。よく知っていらっしゃる」

「そりゃあ一年近くバイトしてるからね。私、この薔薇が生まれた事を知ってすぐ勇気づけられたんだ。やっぱ人はさ、不可能な事でも乗り越えられるんだよ。この子達みたいに、小さな奇跡を幾重にも積み重ねて、やがて大きな不可能を克服していくんだって、そう思った。奇跡を望む心がある限り、きっとそれは永遠に続いていくんだろうなって」

含みのある言い方だった。それは、理子が望んだように、総ての人が分かり合えるということを言いたいのだろうか。五千年以上の遙か昔から、すれ違い、誤解し、争う事を続けている人間が分かり合えるなんていう、不可能だとは思えないことを。

「——ねえ、ケイちゃんは、そう思わない？」

「……どうだろうな。お前には悪いけど、理想が現実引き落とされた時点で、もうそれ以前に持っていた情熱とか敬意とか、そういうかけがいのないものは失われる。尊いものじゃなくて、ただの手に入りにくいものになっちゃうんだよ。やっぱり、人は手に入らない理想を追い求めて、人間らしく生きる事の方が幸せだと思う。何でもかんでも手に入ることは、恐ろしいじゃないか」

——いや、違うな。

それはきつと、俺が弱いからなんだ。手に入れたかけがいのないものを、大切に守っていける自信がないから、手に入らない事を望む臆病者。手に入らないが故に、それを手に入れようと人は努力する。努力の結果、分かり合えた事を錯覚するのだ。口にしてから、自分が酷く情けない事を言っていることに気付いて、俺は顔を背けた。

「——そう言うと思った」

否定されることを覚悟していたが、思いがけず理子はすがすがしい微笑みを浮かべて俺の言葉を受け入れた。

「だからさ、ケイちゃんにこの ブルーロゼット 小さな青い薔薇をもらって欲しいんだよ。奇跡が溢れ返ってしまっても、かけがいのないものであるように守ってあげてね」

意味が分からなかった。

「おい、大宇宙の電波を受信するな。俺にはさっぱりだぞ」

「いいからいいから。今日はその薔薇を持ち帰ってくれればいいか

ら」

理子は慌てて取り繕うように捲し立てる。その見慣れぬ奇態な言動には言及することさえも憚られた。それだけ不自然というか、不気味だった。

「それでね、もし、その青い薔薇が——ううん、これもまだ早いよね。やっぱり何でもない」

「何だよ、気になるだろうが」

「これが男の子を惑わすテクニックその一なんだよ」

うそぶいてはいるが、それを計算ずくでやれるほど理子は賢くない。解っているようで解っていない、その致命的な欠陥にどれだけのオス共が煮え湯を飲まされているやら。理子の無邪気な笑顔に俺はうんざりした。

「じゃ、ケイちゃんも忙しいみたいだし、私は帰るね。仲直りの記念に、明日は理子ちゃんの愛情たっぷり特製お弁当を持ってきてあげるよ」

「いらねえよ、余計なこととして無駄な体力使うな」

「今のは、『無理してお弁当なんか作らなくていいよ、理子ちゃんの健康の方がよっぽど重要なんだから』っていうのを照れ隠しにいたんだよね。ありがと、心配してくれて」

「都合のいいように解釈すんな」

「照れない照れない。じゃ、また明日」

足早に大通りの人波に紛れていく理子。奇怪な言動はいつものことだが、今日のアイツの態度は何だか毛色が違った。何がどう違うのか、ということは言い表せないがとにかくおかしい。そういう気懸りはあったが、何にせよ理子の能天気な笑顔を見る事が出来て安堵の溜息が洩れる。やっぱりあの女は涙がとことん似合わない。バカみたいにへらへら笑っている方が俺は好きだ。

……こんなことを言うと言子は勘違いして茶化してくるだろうな。絶対口外しまいと心に誓う。

目的も達したので家路に就こうと思ったが、その前に理子の置き土産のことが気になった。

裸のまま持ち帰るのは花の生命力にもよくないだろうし、何より気恥ずかしい。だがこのままアスファルトの上に捨てるというのはどうしても気が乗らなかった。沈黙思考していると丁度よくティッシュペーパーが配られた。こんなもんでどうにかなるだろうかなんて多少の不安はあったが、何枚かのティッシュで薔薇を保護しながらコートに隠しにしまい込み、駅前公園を後にした。

＊

「棗先生、ちょっといいですか？」

月曜日の昼休み。仕事熱心にもデスクで書類に眼を通していた棗教諭に声をかけると、慣れた手つきで回転椅子を器用に操り、俺の対面に身体を向けた。

「早速テストの異議申し立てかしら……あら、君は確か先週、藤原

さんと一緒にいた——」

「どうやら俺の顔を覚えていたらしい。その記憶力には敬服する。担当学年でもない生徒を初対面で記憶しているなんて、物覚えの悪い俺のポンコツお頭と交換して欲しいぐらいだ。」

「覚えてくれていたんですか。よかった。俄然、話がしやすくなりますよ」

「テスト関連……じゃないわよね？ 学習上の相談かしら？」

「いや、今回は先生のプライベートについてなんですが」

「私の？」

棗教諭は苦笑する。そりゃそうだろう。こういう大人の女からしてみれば、小便臭い高校生のガキが何をませた事と思うのは当たり前だが、早とちりで勝手に哀れみやら不快感やらを抱かれても困る。俺は間髪入れず補足した。

「あ、心配しないで下さい。コレ、生徒会の年末特別企画の一環でして。題して『宝裏高校の今時』。ほら、クリスマスの日にイベントを予定しているでしょ、あの余興です」

「あ、そうだったの。ごめんなさい、私ったら独り合点しちゃったわ。でも、君は生徒会メンバーだったかしら？ 集会でも見かけたことはないけど」

「準レギュラーなんです。不定期に駆り出されるいわゆる予備役でしてね。二校合同の一大企画なんでこうして甲斐甲斐しく働いてい

るんです」

「おもしろいわね、君。そういう事だったらどうぞ何でも聞いて。あんまり時間は取れないけど」

快い返事はしつつも、まだまだ棗教諭には俺を訝しく思う態度が見え隠れする。まあこのくらいの警戒は仕方ない。手近な椅子に腰かけてメモ帳を開き、ボールペンをカチカチ鳴らす。

「じゃ、お言葉に甘えて早速。

——先生は、最近の時事問題で特にどんなものに興味がありますか？」

少し当惑したらしい。微妙な無言の間があった。

「余興という割には、結構真面目なのね」

「世相を反映しているというか、今年度は社会の動向に対して目を光らせる風潮が強いんですよ」

「ギスギスした世の中になっちゃったものね。私も、恐らく大部分の人がそうであるように『G件』についての関心が高いわね」

「それは何故？」

「何故って、この街で実際起きている事件だし、何より君達生徒の安全が脅かされているんですもの。当然でしょ？」

「自分の身の安全は心配にならないんですか？」

教諭は目を丸くしてから、控えめな笑いを零した。

「心配してくれるのは嬉しいけど、それは君がしなければならぬものじゃないわね。私は大丈夫だなんて高を括るつもりはないけど、生徒を守って被害に遭うなら別に後悔はないわ」

清々しい程の笑顔で、言っちゃ悪いが綺麗事を大言壮語、か。やっぱり藤原と同じ種の人間、根っからの正義の人らしい。

「棗先生は真面目ですね。それじゃ、次の質問ですけど、今回の『G件』ではキッズギャングが数多く襲撃されています。巷じゃ当然の報いなんて風潮が強いですけど、その点、先生はどう感じています？」

「悪人を裁くなんて大義でも、そういうやり方は褒められたものじゃないのは確かね。でも、だからといってどちらか一方を擁護する気にはなれないわ。結局、悪人は悪人でしかないもの。比較してどちらがより悪いだなんて論じられない。そういう絶対的平等があると思うの、私はね」

些か強迫的というか、極端な考えではある。悪事を為せばその人間はもう悪以外の何者でもなく、情状酌量の余地などない、棗教諭はそういう考えらしい。典型的な融通の利かない人間だ。今回の『G件』を起こしそうな性格ではあるが、そんな事を言ったら正義の人はほとんどが容疑者になってしまう。あの藤原でさえ同じような思考回路なんだし。一応、用心する人間のリストには加えておくでしょう。

「ねえ、そういえば君、名前は何ていうの？」

「え、あ、あの――社です。社慶太」

偽名を使おうとも思ったが、同じ校内じゃいつばったり出会すとも限らない。どちらにしてもリスクがあるから、なるべく言い逃れの余地がある実名の方を名乗ることにした。

「あら、君が社君なの。藤原さんがよく話してくれたわよ。とんでもない問題児らしいわね」

弊害その一。俺ってば有名人だったのか。この場合は汚名だが。棗教諭は怒っている訳ではない。意地悪い笑みを浮かべて、何やらちよつと虐めてやろうといった風だ。サディスト気質か、この教師は。

「謂われのない流言飛語ですよ。あの生徒会長はどうも俺が気に食わないらしいんで、何かと突っかかってくるんです」

「ふふふ、いいわね、まさに青春って感じがして」

「……は？」

棗教諭は小さく笑い続ける。意外と笑い上戸なんだろうか。だが、何がそんなに面白いのか、俺にはよく解らない。

「――あ、ごめんなさい社君。私、これから次の授業の準備があるの。続きはまた今度にしてもらえるかしら」

徐に立ち上がる棗教諭。まだ昼休みは二十分近く残っているんだが、この人は自分から忙殺されに行く人間なのだろう。同類が近くにいると解りやすい。

さて、いずれこのふざけた企画が嘘だとバレるのは時間の問題だ。真面目に答えてくれるのはこれが最後のチャンスだろう。これだけは訊いておかなければ。

「あ、じゃあ最後に一つだけ。

——先生は、人を殺したいと思ったことがありますか？」

流石に面喰らったらしい。大きな虹彩に囲まれた瞳を見開いて硬直していた棗教諭は、微笑を浮かべつつ、真面目腐った顔でこう言った。

「女だったら、ないとは言いい切れないんじゃないかしら。これは主観論だけどね」

＊

2. 崩された日常 / 18

俺は落胆した。

棗教諭に関して怪しい所は、ないとは言いきれない。俺の思い描く『肉体強盗』の犯人像と一致する内面的な部分が多い。しかし、そういうリスクというか個性は、本来、誰でも持ち得るものだ。これといって確固たる違和感はなかった。だから、棗教諭みたいな美人が殺人鬼であるという決定的な証拠が見つかって気を落としている訳ではない。

俺を何より落胆させたのは、棗教諭が俺の苦手な種の人間だという事だ。こうと決めたら猪突猛進、周囲の言葉は耳に入らない、そういう一步間違えたらおかかない事をしでかす性格なのだ。第一印象ではちよっと話の解る人かとも希望を持ったものだが、見事裏切られた。ありゃ付き合ったら面倒臭いことになる性質の女だな。今時流行りの『ヤンデレ』予備軍。男が浮気しようものなら尋問より先に愛人をナイフで刺しかねない。最後の発言から察するに荒唐無稽ってわけでもないと思う。

しかし、女なら誰でも殺意を持っている発言とは、流石の俺も空恐ろしくなってしまう。そりゃ、人間同士である以上、不和や不仲は付き物だが、とはいえ殺意にまで発展する感情の高ぶりが早々大多数に萌すだろうか。大人の女としての自虐、いや性に対する自虐なのか、或いは俺が単に女という生物を正確に知らないだけなのか。益々人間不信に陥りそうで、考えるだけで気が重かった。

治郎からもらったリストによれば、該当教員は残り三名。言うまでもなくいずれも女教師なのでテンションはガタ落ち。聞かなきゃ

よかったと後悔するばかりだ。ほうほうのていで職員室を出て廊下をとぼとぼと歩く。

「あ、やっと見つけた！」

背後から聞こえて来たのは理子の声だった。徐に振り返ると、ぴったりと俺の背中に張り付いた理子が慥然と突っ立っていた。

「ケイちゃん、お昼御飯一緒に食べようって約束したでしょーが。どこ行ってたの？」

「あー悪い悪い。ちよっと職員室に用があつてさ」

「へえ、珍しいね。ケイちゃんが職員室に行くなんて。すごく似合わない」

「お前、さらりと失礼なこと言うのな」

「うーん、譬えるなら路地裏に住み着くシャムネコかなー」

「訊いてねえから。余計分かりにくくなってるし、その譬え^{たと}」

「いいから早く屋上行こ。せっかく作って来たんだから」

弁当の包みだろうか。ファンシーな柄の中着袋を両手で大事そうに抱えながら、さつきとは打って変わって上機嫌な理子は足取り軽く歩み出す。コロコロ機嫌の変わる女だ。その気まぐれに振り回される俺はさらに一日を乗り切るための氣力を奪われる。

「あ、そうだ。治郎君は？」

「ああ、アイツ、四時間目が終わってすぐに早退した」

「え、具合でも悪いの？」

「いんや、仮病」

「うーん、秘密のバイトでもあるのかな」

「いや……」

つい十分ほど前の治郎との会話を反芻して、俺は腸が煮えくり返るかのような思いを再度感じていた。

確かに今日はキッズギャング連合のローラー作戦が、何を勘違いしているのか真っ昼間から予定されていたもんだから、治郎が早退するのは予定通りの行動ではある。だが問題はその時間である。野郎、昼休みを学校で過ごしても時間には十分間に合うっていうのにわざわざ昼休み開始と同時にバックレやがった。去り際に言い残した一言で俺は全てを悟った。

「仲直りおめでとうーございまーす。別居生活解消後の初日はご夫婦だけの方が何かといいでしょ。じゃ、そーゆーことで」

ムカつく。未だに俺と理子の仲を変に勘繰っている点もそうだが、余計な気を回された点も実に腹立たしい。

「あんの野郎には一度、きついお灸を据えねえとロクな大人にならねえな」

「こおら、後輩を虐めちゃダメだぞー」

言いながら、俺の頬をつねりやがる理子。その顔が余程つぼにはまったのか、吹き出し笑いやがる。

いつもなら間髪入れずに制裁を加えているところだが、何だかこの平穏さがかなり懐かしく感じられて、俺は惚けてしまっていた。思えばこうして理子とバカやり合うのは一週間振りだ。大袈裟ではあるが、この奇妙な懐古もそんなに悪いものじゃなかった。学校の外の世界では未だに恐怖と悲鳴が止む事のない混沌とした状況が続いているが、学校の中での俺達の日常は変わらない。殺人とか超能力とか、そういう物騒なものとは縁遠い、ただただ平和で呑気な時間の連続。そう考えると、今ここにある理子の笑顔が無性にかげいのないもののように思えてしまった。今日ぐらい、多少の無礼は許してやろうか、なんていう寛大な心持が俺の内心に芽生え始めていた。

「……は！ ケイちゃんが笑ってる。い、一体どうしたの？ まさかケイちゃんも病気なの？」

しかし、いくらなんでもコイツは失敬過ぎる。加減しながら理子の小さな頭を叩いた。

「あー、いつもより若干強めに叩いたー」

「当然の報いだ。さっさと行くぞ、俺は腹が減って死にそうだ」

「あ、今日はね今日はね、昨日作った唐揚げを入れて来たんだ。この唐揚げが結構厄介でさあ——」

俺達の日常は変わらない。変わらないはずなんだ。そう思うと、今まで感じていた脱力感も気にならなくなった。むしろ、未来への展望に想いを馳せるような活力が湧いてくるようだった。『G件』のことだって、そんなに気負う必要はないんじゃないかと思うほどに、前向きな思考を持てるようだった。

学校という一つの異世界では、外界にある不安も、憎しみも、血の気も、少し目を逸らしてしまえば無いに等しい。女の潜在的な恐ろしさだって、見ようとしなければ見える事はない。特に理子はそういう殺伐とした感情とは無縁な、言意味で馬鹿女だからだ。コイツに対して恐れを抱こうと、大抵の事は杞憂に終わる。気持ちばかり楽だった。

この繰り返される円環のような居心地の良い日常は俺の意思とは無関係に続く。

——いや、俺は願っているのか。この円環のような居心地の良い日常が続く事を。

いつの間にか俺は、この時間を——。

*

そうして、十二月の三週目は穏やかな日々が過ぎた。

当時の俺の心配事は期末考査の点数とか、再試験の有無とか、二十五日の理子との約束をどう回避するかとか、今思えば取り留めのない事柄ばかり。『G件』はまたも鳴りを潜め、人々の記憶から一時的に忘れ去られた。俺だって例外じゃない。『G件』犯のアテが外れたもんだから、心機一転とばかりに気の早い休養に入り、日常

に埋没してしまった。

その時の俺は幸福に恵まれ過ぎて、すっかり失念していたんだ。世界とは、俺達が生活するこの場所だけではないという事を。人とは、分かり合える者同士だけではないという事を。

もって考える事があった。

もって出来る事があった。

もってすべき事があった。

もって言いたい事があった。

募るのは後悔だけ。思い出すのは金髪の同級生の表情に張り付いた、永遠の笑顔。涙は出ないけれど、ただただ、遣る瀬無さだけが心を支配していつて、俺は次第に無気力になった。

あの日から考え続けている。俺は類稀な天資に恵まれているわけじゃない。だから世の事に絶望して、懊悩した果てに自殺した偉人や天才達の壮絶な葛藤の、ほんの一握りしか垣間見ていないはずだ。彼らより知らないが故に果報者であるはずなんだ。

けれども、採るに足らない凡才であるこの俺如きでもこうまで多くの苦悩を抱いて、このどうしようもない世の中を倦み続けている。一体、世の中にはびこる生き地獄というものはどれだけ深く、また大きいものなんだろう。

こんなくだらない、どうしようもない世界で、俺はまた、あの時みたいに笑って生きていけるだろうか。あの心の平静を取り戻せる

だろうか。憎まれ口を叩ける相手が現れるだろうか。

そもそも俺は、何故、のうのうと生き残ってしまっているんだろう。

＊

十二月二十日。正課は今日で一区切りという事で、全校集会を終えてから普段より長いLHRの時間が設けられていた。

冊子を手にした無気力そうな中堅担任の尾賀^{おが}が、冬期休暇の過ごし方についての諸注意なんかを淡々と読み上げている。

特別進学クラスはこれから一週間補講があります、なんてこっちの士気を一気に下げる発言から開始。それから原付の免許取得は御法度だとか、深夜徘徊は厳禁だとか、まあ俺にはあんまり関係ないようだから聞き流す。というか期間の短過ぎる冬休みなんてものに非行奇行なんてあったもんじゃない。

放課になると、諸々の柵から解放された少年少女は足早に下校していった。何に期待するのかクリスマスを心待ちにしたり、妙に所帯じみて年末の忙しさに嘆いたり、季節の行事には無関心だとも言わんばかりの普段と変わらない連中が三者三様の面持ちで家路を急ぐ。

かく言う俺はそのどれにも属さない、心底不機嫌な面持ちで教室に居残っていた。まだ何人かのクライスマートが各々雑談に花を咲かせていたが、俺は一人孤高を貫き、窓際の自席から女子テニス部の練習風景を何気なく眺めていた。

「お客さん、好みの子は見つかりました？」

「そうだな、手前のコートの、今打球を打ち返したショートカットの子、可愛らしいな」

「あ、あのちよっと背の小さい子ね。確かにカワイイ。ケイちゃんって実はそっちの気があるのかな」

「登場早々に失礼なことを言うな」

視線を右に映すと、俺の前の席にいつの間にか能天気な笑顔で理子が座っていた。

「つてか遅い。どんだけ待ったと思ってるんだ」

「いいじゃん、待ってる時間もデートの内だよ」

「……ほう、なら喫茶店でコーヒーでも奢ってくれるのか。いやあ。甲斐甲斐しい彼女だなあ」

「私はお金じゃ買えない時間をあなたにあげるわ。さあ、この愛情をどうぞ受け取って」

「ノーサンキュー。俺は実益のあるものしか興味ないから」

「あ、ケイちゃん、それはサイテー発言だよ？」

「余計なお世話だ。というか、馬鹿やってないでとっとと帰るぞ」

「うん」

連れ立って教室を出る。半日授業でまだ日が高いためか、寒いはずの廊下も窓から差し込む陽光を照り返してぼんやりと暖かい。

「――あ、ケイちゃん、この歌……」

理子が足を止め、下り階段近くの音楽室に視線を留める。吹奏楽部の練習だろう、ピアノの音色によって紡ぎだされた、聞き覚えのあるメロディが漏れ聞こえてきていた。

「これって曲名、何て言ったっけ」

「チャイコフスキーの『四季』のクリスマスだろ」

「それだ！　クリスマスイベントの催しで演奏するのかな」

「だろうな。だから年末だったのに気真面目にこうやって練習してるんだろ。そういや藤原がピアノのソロ演奏がどうのとか言ってたな。まさかこれのことか」

「きっとそうだよ。ソロなら多分牧野先輩だね、去年のイベントでもあの人だったし。ふふ、こういう軽快な曲ならクリスマスに彼女がいない人もブルーにならないね」

「……俺に喧嘩売ってんのか」

「違うよー、他意はありません。もう、自意識過剰なんだから。あー、一体どんなイベントになるのかなあ。楽しみだなー」

理子は一向に歩き出そうとしない。どうやら演奏を最後まで聞い

ていく気らしい。俺は溜息をついて、壁に備え付けられたベンチに腰を下ろす。

しばらくそうして無言の内に無為に時を過ごした。雑音はない。残っている生徒などほとんどいないのだろう。眼を閉じれば、危うい程の安らぎの中に溺れてしまいそうな感覚に襲われる。自分が消えてしまいそうな不安に取り巻かれながらも、何故か心地よい不思議な感情。抗うことなく、碧瑠璃の海中でたゆたうイメージが頭に浮かぶ。まるで旋律に似つかわしくないと、我ながら可笑しくなってしまう。

視界を日の光が反射して耀くりノリウムの廊下に戻す。相変わらず何の変哲もなく面白みがない。理子の姿を一瞥すれば、楽しそうに顔をほころばせて吹奏楽部の演奏に聞き入っている。その姿があまりにも幸福そうで、溜息が洩れた。

「ケイちゃん、さっきから溜息ばかりついて、何か悩み事でもあるの？」

「別にねえよ。呑気なお前の姿に感心してただけだ」

そうなのだ。この現実の、どうしようもなく不如意に満ちた世界で、見ているこっちが恥ずかしくなるほど楽しそうに過ごしている理子に、何だか羨望にも似た思いを持った。

「どうしてお前は、いつだって楽しそうなんだろうなあ」

独白とも問いかけてもつかない曖昧な言葉に、理子は苦笑を浮かべる。

「何それ。褒められてるのかなあ」

「褒めてはいるんだぞ」

「あやしー。ケイちゃんはいつだって捻くれたことしか言わないから」

「真実と幸福が同一でないように、考えと行動が一致しないんだよ、俺は」

「あ、それカッコいいね。真実と幸福は同一じゃない……か。やっぱり、知りたがる事はいけないことなのかな」

「あん？」

「——ううん、何でもない。どれだけ不幸になっても、私はケイちゃんのことを知っていききたいから」

「何言ってるんだ、お前」

「何でもなーい。ね、ケイちゃんは夏と冬、どっちが好き？」

「藪から棒になんだよ。つーか、そんなもん知りたいのか」

「いーからいーから。夏と冬、どっちのが好きなの？」

妙に執着するので渋々答える。

「そうだな……。冬の方がまだマシだ。夏って日焼けするのがちよつとなあ」

「なんか女の子みたいな理由だね」

「チッ。こつちを苛立たせることしか言わない女だな」

「怒っちゃやーよ」

張り倒したい。

「じゃあ次はねえ……。ん、そういえば私ってケイちゃんの誕生日知らないや。ねえ、いつ？」

「十月一日」

「ふむふむ、プラスマイナスの日だね」

「おーいコラ妙な名前を付けるな。途端に十月一日からコミカル臭が漂うだろ」

「覚えやすいからいいじゃん。私、たぶんきつと絶対忘れないよ」

ダメだコイツ。ぜってえ忘れる。それはそれで都合はいいけど。

「あ、ちなみに私の誕生日は八月三十日だから」

「それは耳にタコが出来る程聞いた」

「ケイちゃんがくれるなら、プレゼントは何でもいいからね」

「もらうの前提なのか、図々しい女だな」

「うーんとねえ、次は……」

「おーいもういいだろ。しつこい」

唐突に、うなじの辺りがシンと強張る違和感があった。次いで背中を蛆虫が這うかのような悪寒に襲われる。俺の様子に気付いて理子が怪訝な表情を向けて来るが、俺は構わず慌てて立ち上がり、辺りを見渡した。

誰も、いない。

しかし俺の脳には明確なビジョンがフラッシュバックする。それは人間の眼差し。こちらを注視する人形のような眼球。気味の悪い映像に立ちくらみがした。

「ちょっと、大丈夫？」

俺の身体を支えるために駆け寄る理子。香水かシャンプーの匂いか、甘く、心地良い香りに俺は救われる。眼と鼻の先にある理子の金髪が、俺を彼岸から引き戻す日常となった。そして、俺の顔を覗き込む理子の端正な顔立ちもまた、眼と鼻の先にある。急に恥ずかしくなって俺は顔を背け、理子から離れる。

「大丈夫だ、心配するな。急に立ち上がったから立ちくらみがしただけだ」

俺は努めて平静を装う。だが、内心はさっきの不可思議な感覚に恐怖や不安が入り混じって混沌とした感情に支配されていた。今日は薬は飲んだだろうか。……うん、そうだ、ついさっき昼食後に飲

んじゃないか。問題ない。

「そう、ならいいんだけど。――でも、もう帰ろう」

「だから、別に俺は平気……」

「私が平気じゃないの。二十五日は何が何でもケイちゃんにケーキを奢ってもらうんだから。病気とか怪我とか絶対して欲しくないもん。今日は早めに寝て、明日も体調が悪かったらちゃんと病院に行つてよね。一人じゃ心細かったら、私もついて行ってあげるから」

俺を馬鹿にするような内容ではあるが、その口調と表情は真剣そのものだった。本当に心配しているらしい。

「……わかったよ」

理由が理由ではあり、いろいろと突っ込みたい部分も多いが、曲がりなりにもこちらを氣遣つての言動だし、俺はおとなしく従うことにした。

理子の表情は未だにかたく、陰を帯びる。大袈裟な、なんて思いつながらも、その事に関して軽口はたたかない。いや、たたけなかった。どんなに大袈裟だと思っても、揶揄の気持ちは湧いてこない。募るのは得体の知れない感情ばかり。

……俺は嬉しかったのだろうか。誰かから心配されるという、ただそれだけのことが。

「ちょっと、そこのお二人さん」

背後の声に振り返れば、紙の束を抱えた棗教諭が近づいてくる。

「ちょっといいかしら。私のお願い、訊いてくれない？」

＊

2. 崩された日常 / 19

ヒールの音を甲高く響かせて近づいてくる棗葉月教諭。まさか、あの「眼」の正体は彼女だろうか。

「ん、どうかした？ 社君」

訝しげに眉を顰める先生。しまった。不用意に注視し過ぎてしまった。

「いえ、何でも……」

歯切れ悪くお茶を濁す。

疑念は拭い去れないが確固たる証拠もないので、俺は別のことを考えることにした。というか、そうせざるを得なかった。そう、今まさに俺が直面するであろう、切実な懸案事項を、だ。

何故、棗教諭がこんなところにいるんだ。かなりばつが悪かった。勿論、言うまでもなく先日の後ろめたい事があるからなのだが、どうやら本人はあの話がでっ上げ企画であることはまだ知らないらしい。ホッと胸を撫で下ろすが予断は許されない。単に忘れていただけとか、知らない振りをしているだけとか色々可能性はあるのだ。後者はサディスト疑惑のある棗教諭ならではの、である。

「で、先生。何です？ 私達にお願いって」

理子は愛想よく尋ねる。呼応するかのように、棗教諭は、はにかみながら紙束からプリントを二枚引き抜こうとする。

「今ね、学校側で生徒のアルバイト事情を調査してるんだけど、ちよっと協力して欲しいなって――あっ、しまった」

棗教諭は紙束を廊下にばら撒いてしまった。ピシッと背筋の伸びた出で立ちからは想像出来ないが意外におっちょこちょいなのだろうか。俺と理子は散らばったプリントを集める手伝いをする。

「あ、ごめんね。私ってけっこうそっかしくて」

「いいですよ、これくらい」

「ケイちゃんの口からそんな言葉が出てくるなんて……。いいなあ、先生」

「馬鹿言っってねえで早く手を動かせ」

「ふふ、仲がいいわね」

「冗談――」

集め終えたプリントの束を綺麗に揃えてから、俺は教諭に手渡した。理子もほぼ同時に、プリントの束を渡す。

「ありがとう、二人とも。それで、お願いって言うのがね、さっきも言った通り、今、生徒のアルバイト状況を調査しているの。このプリントに必要な事項を記入するだけの簡単なものだから、この場で答えてくれないかしら」

俺と理子は棗教諭から件のプリントを受け取る。記入項目は学年

と氏名、そして今現在行っているアルバイトの業種と就業日数だけだった。確かに簡単なアンケートだ。これくらいの情報だったら協力してもいいと思った。

だが、一抹の疑念がまた俺の脳裡にちらつく。まず、この年末の時期にこのようなアンケートを行う理由が推し量れない。そして回答者の選出方法。HRで全校生徒から回答を得るならともかくとして、このような行き当たりばったりで回答者を選出して、正しいアンケート結果に要求される有効回答が得られるのかどうか。俺は統計学に明るいわけでもないからよくは解らないが、得心の行かないやり方ではあった。

そもそも……。

「あの、一つ訊いていいですか？」

「ええ、勿論」

「何故、棗先生がこんな事をしているんです？ 先生って生活指導担当でしたっけ」

「あ、これは生活指導とは一切関係ないの。ただ、教員の間で学生の日常生活の把握がしたいという要望があってね、正式な調査は新年度に予定されているんだけど、その前にいろいろな調査方法を試験的に実践しているの。このアンケートもその一環。どういう方法がプライバシーを尊重し、こちらの目的を達成できるか、私達も模索中でね」

「そう……ですか」

捲し立てるように滔々と説明され、何となく納得してしまう。しかし、内心の奥底では、拭い去れない疑念と不安がとぐろを巻いていた。あまりに大雑把過ぎる。学生のアルバイト状況を調査する事だけでは、学生生活の多くを推察する材料とはなり得ない。胡散臭さは増すばかりだった。

「はい、先生、書き終わりました」

早っ。能天気で考えなしのカボチャ頭こと仲原理子は、いつの間に記入したのか、丸文字でプリントの欄を埋めて棗教諭に差し出していた。

「お前なあ、ちよつとは慎重に事を……」

「ほら、ケイちゃんも早く書きちゃいなよ。でなきゃ早く帰れないよ？」

ダメだコイツ。頭ン中は下校することで一杯らしい。人には言えないバイトをしている俺としては最初から正直に質問に答える気もないから情報漏えいの心配はしていない。どっちかというところ、この平和ボケしたバカ正直者の理子の身を不本意ながら案じていたっていうのに本人がこの始末。俺は途端に自分が馬鹿らしく思えて、適当に字面を重ねて棗教諭にプリントを渡す。

「ありがとう、二人とも。ちなみに、これは余計な事だけど、あなた達はこれからデートにでも行くのかしら？」

「いえ、今日は真っ直ぐ帰るんですけど、クリスマスに……」

「おい、理子。ンなことより早く帰るぞ。俺、頭がガンガンする」

「え、嘘、本当に？　じゃ、じゃあ先生、ケイ……社君が具合が悪いそうなので、失礼します」

俺は理子の手を引いて足早に階段を下る。棗教諭は無言のまま、満面の笑顔で俺達を見送っていた。

だが、気のせいだろうか。一瞬、ほんの一瞬であったが、棗教諭の笑顔が引き攣ったかのような面妖な表情に見えた気がした。

＊

下駄箱まで理子を引き摺ってくる。

「ねえ、大丈夫？　痛いって、頭だけ？」

「――嘘だよ」

「え？　何が？」

「だから、頭が痛いなんて嘘。冗談。ちょっとお茶目なパーティジョーク」

事情が呑み込めなかったのか、しばらく唾然としていた理子だったが、例の如くコミカルな膨れっ面を披露する。

「もう、そういう冗談はよくないよ。私、本気で心配したのに」

「あーわかってるって。今回ばかりは悪かったと思ってるよ。すまん」

「……まあ、妙にしおらしいケイちゃんに免じて今回は許してあげるけど、何であんな嘘ついたの？」

予防線。とかくこの世、この街は予断を許さない。一寸先は闇。誰が敵か分からない。相手が顔なじみの教師だからといっても用心するに越したことはないから、こちらの情報を軽々しく他人には打ち明けられないんだよ。

……とは言えないので。

「えーと、アレだ。お前と一緒に帰るのが嬉しくて嬉しくて仕方なかったんだ。で、浮き足だってこういう状況に……」

「ない、それは絶対ない」

即答。ってか少しは赤面するなり動揺するなり絶句するなりしろクソアマ。可愛げねえなホント。

「ケイちゃんは死んでもそういうデレっとした一面は見せない正真正銘『ツネツン』男子だからね。私はケイちゃんの『ツン』の部分に隠された『デレ』を見抜かなきゃならないんだ。そんな見え透いた嘘の愛情表現には騙されません」

「人を勝手に類型化するな。そもそも俺は『ツネツン』なんぞという訳のわからない性癖は持ち合わせちゃいねえ。ごくごく一般的な愛情表現を有する青春真っ盛りの普通男子で……あれ？」

革靴に履き替え終わった俺は、当然眼の前に居るであろう能天気女の姿がないことを不審に思っ振返る。

視線の先には、外履きを取り出そうと自分の下駄箱に扉を開けて、何やら動きを止めていた理子の姿があった。

「おい、どうかしたか？」

「な、何でもない！」

慌てて下駄箱を閉じる理子。

「ラブレターか？」

「そ、そう！ 理子ちゃんはモテるからなあ。ジェラシー感じちゃダメだぞー、これくらい許容してくれなきゃ理子ちゃんの彼氏は務まらないんだから」

「誰が彼氏だ、勝手に俺をお前の従僕兼財布代わりに仕立て上げるな」

会話の内容としては普段と変わらない。だが、理子の挙動は自然極まりない。下駄箱の中の何かを隠しているのは明白だ。俺はその何かが無性に気になった。

「――なあ、ちょっとトイレ行ってきていいか？ よく考えたら家に着くまで持ちこたえられそうにない」

「あ、じゃあ私、校門のところで待ってるね」

「おう、そうしてくれ」

トイレへのトンボ帰りの旅を終え、足音を殺して再度下駄箱に到着。周囲を警戒しつつ、理子が立ち去ったかどうかを下駄箱の陰から確認する。どうやら都合よく校門に向かったらしい。俺は理子の下駄箱を探し、その扉に手をかける。

中には何の不審物も見当たらない。あるのは中央の仕切り板と学校指定の中履きのみ。よく見る、というか当たり前の光景だ。

だが、理子の動揺の元凶はその奥にあった。

『理子ちゃん、またあの男にお弁当を作っていくんだね　僕は悲しい』

下駄箱の奥に張り付けられた便箋には、まるで何かに取りつかれたかのように書く殴った筆跡の字で、そんなことが書かれていた。

その便箋だけで俺は全てを悟った。これは強迫でもなければ嫌がらせでもない。いわゆるピントのずれた歪んだ愛情表現。どうやら物好きな理子のストーカーはまだまだ余喘を保っていたらしい。あれだけの事があったっていうのに懲りない野郎だ。

イラつきが募る。だがこれは件のストーカーに対してではなかった。この事実を隠そうとしたあのバカ女に対して感じる憤りだ。

文面から見て、今日がストーキング再開の第一日目としては考えにくい。だが今に至るまで理子の口からはストーカーのスの字も話題に上ったことはなく、今日まで俺は平穏な毎日だと勘違いして日々をのうのうと過ごしてしまった訳だ。とんだ道化。事情を知っている奴が見ればいい笑い者である。

「バカが……」

閉じた下駄箱の扉に拳をぶち当て、行き場のない憤慨をほんの少し発散させてから、俺は校門に向かって駆け出し始めていた。

＊

「失踪!？」

昼下がりの閑静な住宅街に、俺の声は一際響いた気がした。

理子と別れた俺は、かつて理子をストーキングしていた同級生、池上大樹の自宅を訪れていた。目的は単純明快、今回の再びのストーキング行為が奴の仕業かどうかを確認するためと、そうであったのなら今後のストーキング行為を即時に中断させるための手段を講じるため、である。しかし、応対に出た池田大樹の母親は予想外の台詞を、かなり動転しながらインターフォン越しに告げて来る。

「そうなんです! ああ、どうしてこんなことにいイ……。うう、大樹ちゃん、ついさっき顔色を変えて飛び出して行っちゃったんです! 学校にも行かないでずっと家にいたのに、突然何を言わずに……。それに泣いてた! あの子が泣いてたんですよ! よっぼどの事があったに違いないのよ! あ、あなた、大樹ちゃんのお友達なのよね、何か知っているんじゃないの? ねえ、あの子がどこに行ったか心当たりない? ねえ、お願い。教えてちょうだい。危険な目に遭ってからじゃ遅いのよ! ねえ!」

もはや錯乱状態。早口過ぎて何を言っているのか聞き取れない。早々に会話を打ち切って俺はもと来た道を駆け足で戻りながら理子

の携帯を呼び出す。が、電源を切っているようで電波は通じない。俺は舌打ちをした。

ついさっき血相を変えて家を飛び出した池上大樹。理子の元ストーカーで今回のストーキング行為の容疑者。理子から拒絶されたショックか、世間に対する後ろめたさからか、はたまた過保護な母親の期待を裏切った後悔か、あの優等生面したバカの引きこもりの理由なんてそれこそ簡単だが、この失踪だけは何一つ理解が及ばない。

故に危険だ。常人には計り知れない境地に辿りついてしまったのなら何をしでかすか分からない。

厭な予感ばかりが脳内に溜まり込み、俺の鼓動を激しく加速させる。

『理子ちゃん、またあの男にお弁当を作っていくんだね 僕は悲しい』

——理子が危ないのではないか。

酸素の切れかかった脳ミソでそのことばかりに気を取られていると、道路を横切る自動車に危うくはねられそうになる。運転手の罵声を背中に浴びながら、俺は一度立ち止まって深呼吸する。

はは、俺、おかしいな。自分の身の安全はしないのか。考えれば俺だって危害を加えられる可能性が高いっていうのに。いつから俺は、自分より他人の身の安全を優先するようになったんだ。

この自問に答えられるはずもない。何せ脳ミソは酸素欠乏、運動不足の身体は無理なマラソンでガタガタ。正常な思考なんて望むべ

くもない。いや、冷静になって考えてみたって答えられるはずがない。

理屈じゃない。俺より危険なのは理子の方だという根拠のない自信が意識の奥底に沸々と湧き出る。

義理のようなものなんだと思う。知っている人間の危機を見て見ぬふりを出来るほど、俺は冷血人間として完成していないし、メンタルが頑健ではない。だから知人の危機は自分のその何倍以上にも感じる錯覚に陥る。そうだ、これも例の病気の一種かも。誇大妄想というか何というか、要するに大袈裟なんだろうな、俺って。

しかし、義理で命を危険にさらす、か。酔狂にも程がある。アニメじゃあるまいし、こういうことは死んでも死なない主人公特性を持った一握りの人間だけがしている暴挙だね。俺は夜道にさえ恐怖心全開の小心者で、自分以外の他人はすべて敵だと信じて止まない厭世家なのに、我ながら背伸びし過ぎだよ。

ああ、それでも――。

知ってしまえば放ってはおけない。それはやっぱり俺が義理堅いからなんだと思う。それに乗り掛かった船である。最後までとことん付き合ってやる。死なば諸共、毒を食らわば皿まで。俺の座右の銘なんてそんな捨て鉢感たっぷりのヤケクソ格言辺りが似つかわしいじゃないか。

悲鳴を上げる体に鞭打ってもう一度加速する。目指すは蒼青駅前。理子はまだ、そこにいるはずだと思った。

＊

「あれ、ケイちゃんだったらどうしたの、この真冬にスゴイ汗だよ？」

『あい』の軒先で作業をしていたエプロン姿の理子は、俺の疲労困憊した姿を見るなり驚き近寄ってくる。

「無事だったか、理子」

「無事って———あ」

ばつが悪そうに俯く理子。

「あ、じゃねえだろ。お前、状況を本当に理解してるのかよ。こっちの忠告を無視して、あの野郎がまたお前にちよっかい出して来たって事は世間体も何もかも捨てたってことと同じ事なんだぞ。運が悪けりゃ殺されてもおかしくないんだ」

「わかった、わかったよ。わかったから、大声出さないで。ほら、みんなこっち見てるから」

気がつけば、いつも無関心に通り過ぎるだけの無像無像の連中が、何事かと足を止めて俺と理子に視線を向け始めていた。

俺はひとまず冷静さを取り戻そうと大きく息を吐く。眼の前に申し訳なさそうに項垂れる理子に向かって俺は言った。

「今日はもう帰れ。頼むから」

肯定も否定もない。理子は無言のまま店内の奥へと移動していった。俺はその姿を見送ってから、駅に向かってゆっくりと歩き始め

た。

俺は事の重大さと、俺の行動の正しさを実感していた。

どこからとは判断がつかなかったが、ここにきて絶えず誰かの粘りつくが如く執拗な視線を全身で感じていた。監視か、それとも様子見なのか。どちらにしろ気持ちのいいものではない。俺に向けられる視線という事は、相手方ももはや実力行使に訴えかける心境に至っているという事。すなわちそれは邪魔者の排除か妨害。これが高じて敬愛対象への愛情の裏返しとして危害が加えられる、というのがこの手の最悪なケースだ。クリスマス前だったのに、今年はおちおち年末を気楽には過ごせそうにないな。

改札前の広いスペースで銅像よろしく突っ立っていると、帰り支度を整えた理子がおどおどと近づいてきた。

「店長に許可とってきた。ケイちゃんの言う通り、おとなしく帰るよ」

理子は叱られた子どもの様にしゅんとして、俺を上目遣いに何度も一瞥する。

「明日は様子見だ。学校は休め。何かあったらすぐに俺に連絡しろ。いいな？」

理子は小さく首肯する。言うべき事だけ言って、俺はその場を離れようとする。

「待ってよケイちゃん。怒ってる？」

「怒ってねえよ」

「嘘だ。だっていつにも増して不機嫌だもん」

「汗が気持ち悪いから苛立ってるだけだ」

「それも嘘」

数歩の距離を置いて背後から追いつがって来る理子に、俺は降参の意思表示として大きく溜息をつく。それから振り返り、何故か困惑している理子を真っ直ぐに見据える。

「――お前ってさ、ピンチな状況でも自分一人で頑張ってるやろうっていう、バカな信条の持主だよな」

「……バカっていうのは酷いと思う」

恨みがましそうに呟く。

「いや、バカだ。大バカだ。無理して気張るお前を見て、やきもきしたり心配したりする奴のことが眼に入らないんだからな」

こっ恥ずかしい台詞であることは承知していたものの、いざ口に出すとさらに赤っ恥だ。俺は理子と視線を合わさないようにあらぬ方へ向けながら咳払いをする。

「……ケイちゃんも、その内の一人？」

おっかなびっくり訊いてくる。いつもの姦しさと根拠のない自信

はどこに行ったのか、ほとんど詐欺のような変貌ぶりには毎度のことながら驚かされる。

「それを決めるのはお前自身だな。つーか、他人がどうこう言ったところで、心配されているって言う実感がなきゃお前にとって真実にはならない。そういうもんだろ」

「――そっか。そうだね。恋愛と同じだ。自分で感じるものなんだよね」

「話が飛躍し過ぎだが、まあ、そういうことだ。ほら、とっとと帰れ。いいか、明日は休めよ」

理子は少し笑った。本心三割、空元気七割の、ぎこちない笑みだった。

「うん。わかった。ありがとうね」

踵を返して、理子の小さな背中中はゆっくりと遠ざかり、改札に向かう人だかりの中に消えていった。日常の能天気さこそ抑えられてしまっただけのもの、こっちが恥をかいた分、笑顔が少し戻ったんで良しとしよう。しかし、こっちの不満や不利益を糧にして元氣を取り戻すとは、アイツは本当の悪魔だな。くわばらくわばら。

その悪魔を助けようとしている俺は相当な物好きなんだろうか。いや、そもそも他人を助けようなんていう氣を起している事こそが物好きだろうな。

俺は他人が嫌いだ。だから他人がどうなったってかまわない。他人の方も、俺がどうにかなったところで関心なんてないはず。それ

でいい。お互い干渉しないで平和という均衡が保たれればそれでいいのだ。

けれども知り合ってしまったえば話は別。何とはなしに、気になってしまふ。知っているが故に、その人間が被るであろう悲しみや苦しみが忖度出来て、自分にも伝染してくるような気分になる。だから助けたいと思う。それはイコール自分の救済にもつながる訳だから。

この感情は不特定多数にとって薄情だろうか。周囲の人間は俺よりその射程が広いから、他人とも仲良くできるのだろうか。いつも思う。他人が嫌いなくせに、特定の他人だけは助けようとする。それは功利主義的な考えからの行動だと常に自分を納得させはしているものの、それでも疑念は拭い去れない。

嫌いなら近づくべきじゃない。何があつたって見向きするべきじゃない。でなければ自分という存在が塗り潰されるだけ。あの少女のように。

でも俺は、理子の事を放っておけない。理子の存在をかなぐり捨てる事が出来ない。何故？

——それはきっと、他人から好かれる事までは嫌いじゃないから。

他人は嫌いなのに、恐ろしいのに、好かれないと願う無意識が俺の心の中にある。煩わしい以外の何物でもない。そんな道理に合わないものは見たくない。

俺はまた眼を逸らす。沙耶に諭された日から

続けている、終りのない逃避行。見たくないものを直視して生きていける程、人間誰もが強い訳じゃない。だってそうじゃないか。地

球の裏側で飢えに苦しむ子ども達を思って、今日の夕食を楽しく囲めるはずもない。人間なんてそんなものだ。見たいことしか見えない。昔、どこかの偉い将軍も似たような事を言っていた。だから、そういうことなのだ。

まるで靄がかかったかのような鬱屈とした心持のまま、俺は家路に就いた。俺を見張る誰かの視線は、市街の大通りに戻るといつの間にか感じなくなっていた。

＊

鳥の群れが鏝の形で、橙色の空を横切っていた。宝裏高等学校の職員室も、まるで模様替えでもしたのかと絶句する程に見事に染まっていた。

教職員は一人を残して誰もいない。皆、部活の指導にあたっていたり、委員会の仕事に従事していたり、塾関係者や大学関係者との折衝で出払っている。開け放たれた窓からは、生徒達の気持ちのいい掛け声やボールがバットやラケットに弾かれる音が聞こえていた。

その窓際の、書類や資料が山積みになされた周囲とは隔絶されているかのように、綺麗に整理整頓されたデスクに一人の女が頭を抱えて座っていた。棗葉月である。彼女はある書類に眼を通していた。

「……………やっと、やっと見つけた。ふふ、フッフ」

口の端だけを吊り上げて、小さく笑う。その艶めかしささえ感じさせる声は、誰もいない職員室に不気味に響く。

棗葉月はただ笑い続ける。まるで笑う事以外の感情表現をすべて

忘れてしまったかのように、一心不乱に。

控えめだった笑い声は徐々に熱を帯びて、それから気が狂ったかのような嬌声を上げ始める。

喜びと快楽に支配され、呼吸もままならない。棗葉月は荒々しく肩で呼吸をしながら、前髪をかき上げる。

「もうすぐだよ、明宏。^{あきひろ}もうすぐ、あなたは私のところに戻って来る」

2. 崩された日常 / 20

＊

十二月二十二日の土曜日。

一日の補講を消化して放課となった。明日から連休に突入という事あって、補講を終えたクラスメイト達の表情はいつもの三割増しで晴れやかだ。俺はというと、一昨日の池上大樹の暴走以来、大きな事件が起こりはしないかと気が気でなかった。自然、気は重く体はだるかった。

今日は治郎と久々に正式な情報交換を行う日だった。冬休みで生徒の大半が登校していないとていうのに営業する勤勉な購買部で、BLTサンドとミルクティーを調達してから、俺は屋上へと続く階段を緩慢に上る。相変わらず錆びた鉄製のドアノブは、軽くまわすだけでギギギ、と可愛げのない音を出す。扉を静かに開け放つと、視界に妙なモノがいきなり飛び込んできた。

奇怪な人型オブジェが何故こんなところにあるのだろう。美術部の作業か何かかとも思ったが、このクソ寒い屋上で行う必然性が無い。屋外なら現在だっ広いグラウンドが使い放題である。

……。

……ああ、判った。

屋上のだ真ん中で、男女がいちゃついていた。

しかも男の方には見覚えがある。というか治郎だった。

奴も俺に気づいたらしい。眼を皿にしてこちらを注視する。女の方は丁度俺の方向に背を向けているのでまだまだ二人だけの世界に没頭中。

女生徒の長い黒髪が滴る肩口から顔を垣間見せる治郎は、あからさまな非難の眼差しを俺に向けてきた。

……俺が何か悪いことをしているのか、と切に訴えかけたい。この状況が無作為抽出した街の老若男女百人に問えば、全員が口を揃えて俺の正当性を証言する。絶対する。

勧告を無視して居座っていると、治郎の眼つきがさらに陰しくなる。それは明確に『気を遣え』と命令していた。

奴らの死角になりそうなところでもないものか、と辺りを見回したが生憎とそういう障害物に致命的に欠ける場所だ。隠れられるとしたら花壇の後ろくらいなものだが、それ程俺は小柄でもない。

結局アイコンタクトで不満の意を返して、一度出直すことにした。

……しかしあいつ等、よく寒くないな。

ああいや、だから抱き合っていたのか。

数分後。屋上の扉の前の階段に腰を据えてミルクティーに口をつけていたら、ドアが徐に開いて女生徒が一人横を通り過ぎる。横目に俺を見る表情は明らかに不審者を見るそれだったが、まあ知らない女だったし、これからも知ることはないだろうからどうでもよか

った。

同じ轍を踏まないよう、今度は注意深くドアを細目に開けて屋上の状況を観察する。

「杜さん、そのネタはつまんないです。早く来て下さいよ」

治郎はジョークと受け取ったらしい。しかも辛辣な評価。とんだとぼっちりである。

「おいコラ、誰のせいだと思ってるんだ、俺にこんな事をさせる気を起させやがって」

「ドアを開ける時はノックをしろって、ご両親から習わなかったんですか？」

「お前は屋上に通じるドアにもご丁寧にもノックしてから入るのか」

「当たり前でしょう。俺は倉庫の扉も、掃除用具入れの扉にも、果ては下駄箱の扉にだってノックします」

断言する。コイツスゲーおかしい奴だ。

「……まあ、冗談ですよ」

「だろうな」

言葉とは裏腹に俺は胸を撫で下ろす。真実だったらこれからどう付き合っていけばいいのか、まさに人生の袋小路に迷い込んでしまっていたところである。

「で、さっきのは彼女か？」

「……そう思います？」

治郎は意地の悪い笑みを浮かべる。これは勝ち誇った漁色家の笑みか、それとも俺をおちよくる悪魔の笑みか。どちらにしてもコイツの人間性は光の速さで地上に落下する。そもそもそれほど高い位置になかったが。

「なかなかの美人だったでしょう？ 後輩ですけどね、名前は白川かわまりこ麻理子っていうんですけど、知ってます？」

「女子の後輩でしかも美人なんて知り合い、この俺にいる訳ないだろうが」

言いながら俺は得心していた。なるほど、だから見覚えのない生徒だった訳か。交友関係が同学年の、しかも同じクラス以外にはほとんどないという内気な俺としては、やはりこれからの付き合いも心配しなくていい種類の人間だ。その素性も治郎との関係性も、まったく興味が湧かなかった。

「変な勘繰りされても迷惑なだけなので白状しますけど、あの女、実は『肉体強盗』の目撃者でしてね」

俺は息を呑んだ。

「あ、期待を裏切りますけど自称です。俺も確認しましたけど何の信憑性ありません。警察もデマとして処理していますし。ただ……」

「ただ、何だよ？」

「その目撃情報とは別に気になる事を聞いたんですよ。知りたいですか？」

「勿体振らずに早く言いやがれ」

治郎は不気味に口元を吊り上げる。

「最初に断わっておきますけど、かなり下世話な風聞だってことだけは念頭に置いておいてください。それと、裏付けは採っていないので、あくまで噂です」

「それならあんまり聞きたかないんだけど」

俺の意見を胃にも介さず治郎は続ける。

「棗教諭、覚えてますか？」

「あん？」

思わず訊き返してしまった。あまりに予想外の人物の名前が挙がったからだ。治郎は呆れたように繰り返す。

「だから、棗葉月ですよ。藤原先輩とだべってたときにやってきた教師です」

「あ、ああ、覚えているとも。んで、その棗教諭が何だ？」

「何でも、棗教諭が壮年の男と繁華街を歩き、自宅のマンションと一緒に入っていったのを目撃した、と」

「ほんつとに下世話だな。というか、よくあるどうでもいい噂じゃねえか。あーあ、聞いて損した」

棗教諭に憧れを抱く生徒なら失望に打ちのめされでもするんだろうが、俺は信者でもなんでもない。棗教諭がどんな男と付き合おうが知ったこっちゃない。

「まあ、そう結論を急がずに。この話にはまだ続きがあるんです」

「それって俺に関係のある話なのか？」

「棗教諭の相手の男っていうのが、実は理子先輩の働く花屋の店長だとしたら、どうです？」

なんと。あの冴えないおっさんが棗教諭の恋人だと？ 俺は開いた口が塞がらなかった。

「……それって、事実確認は出来てないんだよね？」

恐る恐る治郎に訊いてみる。

「まあその通りなんですけど、調べたら他にも目撃情報はかなりありましてね、ほとんど生徒間では通説というか」

「あ、ありえねえ……。いや、失礼な物言いだったのは百も承知だがまったくもって信じられない」

「俺はその店長とやらを見た事がないんですけど、そんなに冴えない男なんですか？」

「少なくとも、傍目から見たらベストカップルとは到底言えないだろうな」

蓼食う虫も好き好き。世界にはまだまだ謎多き縁というものが満ち満ちている事を再確認する俺であった。

「そりゃ、どんな男か一見の価値はありますね」

治郎は人を小馬鹿にするような薄笑いを浮かべる。

「人の恋路を邪魔する奴はロクな眼に遭わねえぞ？ ほら、馬に蹴られてなんとやらって」

「棗教諭を庇う振りして、自分に予防線張ってるんですか？ 安心して下さい。社さんの阿房宮あぼうきゆうには手を出しませんよ」

「三千人も囲ってねえし。そもそも誰一人囲った覚えはない」

「そうでした。社さんの場合は自覚なき花園でしたね」

言っている意味が良く解らないのでイライラする。ただからかわれている事だけは直感で感じ取ったので、これ以上心の平穏を乱されないためにもすぐさま話題を変えようと思った。

「ンな話より、『肉体強盗』については何か目ぼしい情報は仕入れてないのかよ」

「残念ですが、からきしですね。ここ二、三日はまた鳴りを潜めますし。何だか不気味じゃないですか？」

「インターバルなら前にも一度あっただろ」

「いや、何となくですけど、今回は前回と毛色が違うと思うんですよね。嵐の前の静けさというか、何か悪い兆候を感じるんですよ」

治郎は柄にもなく悲観的なことを言う。

「己は予言者か」

「ノストラダムスのように大誤算することを祈るばかりですよ」

「まったくだな————っと」

ズボンのポケットに忍ばせていた携帯電話が小さく律動する。画面を開けば「都瑚さん」の文字。あちらかからかけてくるなんて意外過ぎて、しかもお久しぶり過ぎて俺はしばらく固まってしまった。どうかしました？　なんていう治郎の声で我に返り、慌てて通話ボタンを押した。

「あ、よかった、留守電になったらどうしようかと思ったわ。慶太君、元気？」

長らく聞かなかった都瑚さんの声は、相も変わらず心地の良い明朗さを感じさせる。

「まあ元気ですよ。都瑚さん、今まで一体何してたんですか？　全然連絡つかなかったじゃないですか」

「ごめんごめん。いろいろ立て込んでいたのよ。最近は昼夜逆転生活にも拍車がかかっちゃってさ、慶太君達と予定が合わないのよ。それで、まだまだ仕事は続きそうだからってという連絡をしておこうと思って」

「そう、ですか」

都瑚さんの指示が仰げない以上、もうしばらく俺達で調査をしなければならぬ。いや、むしろ俺達が犯人を突き止めなければならぬ。事態はそれほどまでに切迫している。

「少し心配なんだけど、『肉体強盗』のこと、慶太君達はまだ追う気？」

「そりゃ勿論。ここまで来たのに、途中で投げ出せませんよ。それに、都瑚さんが手一杯だって言うなら、俺達がやらなきゃならないでしょ」

都瑚さんは溜息を吐いた。どうせ危険だから降りていい、何て言う気だったんだろう。だが機先を制されて言葉にする気も無くしたらしい。

「……わかったわ。でも、本当に無茶しちゃダメよ？ 相手は異常者なんだから。見当が付いたら私に必ず連絡するのよ？ 間違っても、自分達で捕まえようなんて早まったマネはしない事」

「了解です。俺達だって命は惜しいですから」

「治郎君にもよろしく伝えておいてね。あ、あと薬の方は引き続き

慶太君の家の方に届けるから、心配しないでね」

簡単な謝辞を述べつつ通話を切る。

「都瑚さんからですね。何か言っていました？」

「まだまだ俺達とは合流できないそうだ」

「理由は？」

「いや、そこまでは聞いてないが」

治郎は眉を顰める。

「……一体、都瑚さんは何に忙殺されているんですかね」

「皆目見当もつかないな」

そもそもからして不可思議な人なのだ。その行動や思考が一般人の延長程度の俺達では推し量れないだろう。

お互い無言でそれぞれに思いを巡らせていると、屋上のドアが勢い良く開いた。シリアスな場の雰囲気似つかわしくない声を張り上げながら、手提げ袋を持った理子がスタスタと近づいてくる。

「さあ二人とも、ご飯食べよう」

満面の笑み。なんて、呑気者。

一日授業を休んで池上大樹の出方を窺った訳だが、結局奴は学校

には現れなかった。理子の自宅の方には立倉はじめ数人のキッズ・ギャングを用心棒代わりに雇って警備させたがやはり空振り。自室に缶詰にされた理子はすることもなく非間に耐えかねて一日で音を上げ、こうして登校するに至っている。俺の心労は募るばかりであるのは言うまでもない。

「お前なあ、自分が危険な立場にいるって自覚、ちゃんとあるのか？」

馬鹿にされたと受け取ったのか、理子は唇を尖らせる。

「勿論あるよ。でもさ、怖がってびくびくしていても普段通りの生活していても、襲われる時は襲われるんだし、だったら気負うことなく生活したいじゃない」

「社さん、アンタの負けですね。理子先輩の意見は至極もつともです」

治郎はしてやったり顔。理子は右手でピースを作り、得意気に見せつけて来る。一体俺は何を争って何に負けたんだ。

まあしかし、考えようによつてはこちらの方が都合は良いのかも。池上大樹にとって諸悪の根源たる俺と、崇拜の対象たる理子が一緒に行動していれば、腸煮えくり返って考えなしに突っ込んでくるかもしれない。そうなれば飛んで火に入る夏の虫、あとは猪突猛進してきた池上大樹を何とか抑えつけて官憲に引き渡せば一件落着である。うん、攻撃こそ最大の防御である。ここは理子を最大限囚として活用し、早期解決をはかるのも一つの手だ。

「おーい、ケイちゃん。準備出来たよ、早くこっちおいで」

いつの間にか屋上の一隅に青いレジャーシートが設置されて、理子はその上で三人分の弁当を広げていた。荷物が妙に多いのはそのためだったらしい。治郎はいそいそとレジャーシートに座りこみ、素早い事に弁当の一つに手をつけ始めやがった。理子が嬉しそうに弁当の中身の解説を繰り返している。

つくづく呑気な連中だと思った。

＊

「ねえねえ、今日のお弁当も美味しかったでしょ？」

「あー、おいしかったおいしかった」

「何だか投げやり……。もっと真面目に答えてよね」

「真面目に答えたら答えたで不満タラタラだろうが。俺には正解の道がないんだよ、投げやりにもなるわ」

「理子先輩、社さんの照れ隠しなんで大目に見てやってください」

「ふざけんな」

取り留めもないやり取りをしながら屋上へ通じる階段を三人で下る。普段なら周囲の雑多な音にかき消されるその話し声も、今は寂し気に反響していた。授業の終わりからかれこれ一時間は経っただろうか。校内に残っている人間は少ないのだ。賑やかさは全くと言っていい程失われ、静けさが辺り一面に不気味に漂っていた。

そう、不気味なほど、静かすぎたのだ。

まるで、通り魔や殺人事件にはもってこいのような、目撃者を望むべくもない絶好の現場。その不自然さのせいだろうか、俺の感覚は鋭敏に研ぎ澄まされていた。ごく小さな異変も見逃さないよう、聞き逃さないようにと、脳ではなく身体が警戒を強めていた。動悸は激しく、手足は小刻みに震えだしていたのを実感したのはいくら経ってからのことだ。

諸々の異変は、俺を階段の踊り場で立ち止らせた。そして気付かせた。学校という平和な箱庭に似つかわしくない奇怪な音を。

獲物を狙う肉食獣の息遣い。粘つく殺気と緊張が空気を介して伝わってくる。獰猛で狡猾なハイエナが脳裡に浮かんた。

「ケイちゃん、どうしたの？」

理子が不思議そうに顔を覗き込んできく。金色の髪の間から、項垂れたまま歩く人らしきシルエットが見え隠れする。それは一瞬の事だった。けれども俺は全てを悟った。気付かないはずがない。その、全身から滲み出るかのような嫉妬、憎悪、絶望は以前にも感じた事があるのだ。あの日、理子が柄にもなく感情を爆発させた同級生。彼だけが、この世の終わりを痛感していたかのような、挫折に打ちひしがれ青ざめた表情。あの日のままの姿と表情が、今再び俺の目の前に、ぬらりと這い出て来たのだ。

池上、大樹。

ゆっくりと顔を上げ、奴は目前の俺達を認識すると、痙攣したかのように全身を震わせ、奇声を上げながら突進してくる。

血走り、焦点の合わない眼。青白く痩せこけた顔。おぞましさと不気味さに彩られたかつての同級生は、今、果物ナイフという牙をむいて俺達を仕留めんと距離を詰める。

理子が声にならない悲鳴を上げる。俺と治郎はすかさず理子の前に出た。

鬼気迫る池上大樹の表情に、得も言われぬ恐怖を禁じ得なかった。持ち主とは対照的な、両手で構えられたナイフの美しさに目が眩む。あの刀身が、肉を、内臓を、神経をえぐるイメージが脳内を駆け回り、卒倒してしまいそうだった。だが一方、池上大樹の運動能力の低さを根拠にして、突進してくる奴がそれ程の脅威でない事を、妙に冷静に分析する自分に気付く。

それが契機だったのだろうか。いつの間にか、俺は池上大樹の初撃を難なくかわし、理子を引き連れて見晴らしのいい教室の前まで移動していた。清々しい程に、頭の中は鮮明だった。今何をすべきか、無駄な感情というものに邪魔されず、ただ機械のように問題を設定し、処理方法を演算し、身体は脳の命令に忠実だった。

——これが、生命衝動。

死の脅威を目の前にして、何か見えない力が外部から働き、脳も、身体も、心の動きさえ統制しているかのようだ。前に一度、都瑚さんから聞いたことがある。人間は生存思考と生命衝動を持っている、と。

死に際して、もっと生き続けたいと願う一方、俺達人は死を「否定」しようとあらゆる文化を駆使して自分を最後まで「人間」たらし

しめようとする。人間と動物を分かつメルクマール、それが「否定」すること。人間は現実的な死の回避策を考案する事をおろそかにしてまで、しぶとく「人間」であろうとする一連の活動を生存思考と呼ぶ。

対して生命衝動は、生物の根源的な欲求に従って作用する。個人の内面を度外視した、「生命」として生き続けるための外部的な圧力。その衝動の前では、人の人たるための不必要な感情など意識の隅に押しやられて、ただただ生き残るためのだけの思考、行動、心理が、「自分」に取って代わられたように身体を支配する。

ついこの前の、大窪華絵に引導を渡されかけたあの時は感じなかった心境。一体、何が違うのか。死への恐怖、生き残りたいという欲求の程度が、あの時と現在では異なるのだろうか。それは何故？

ますます激しくなる鼓動を痛感しながら、俺は至極冷静に、そんな自問自答を繰り返していた。

2. 崩された日常 / 21

思考に埋没していた俺の意識は、力強くブレザーの裾を掴まれる違和感で唐突に引き戻される。傍らには全身を強張らせて怯え、縋り寄って来る理子がいいて、少し離れた前方で、両足を小さく震わせながら治郎が警戒にあたっている。

理子の引き攣った泣き声が聞こえる。いや、それしか聞こえない。俺は理子の手を取る右手に、心配ないという励ましも力とともに込めて強く握り返す。

――何が違うだって？ それは勿論――。

そこまで思考を進めて、俺は頭を振った。認めたくなかったのだ。俺は、女のために命を懸けようとか、女のために命を引き換え護りたいとか、女のために命を惜しむとか、そんな青臭い感情が俺の心の奥底に眠っている事を「否定」したかった。

池上大樹は相も変わらず緩慢に階段を下り、カメレオンのような動作と眼球運動で俺達を見据える。

唐突に、俺の身体と思考は射竦められてしまった。いや、違う。余計な事を考えるべきでなかった。脳内麻薬のように俺を異常に適応する異常に仕立て上げていた衝動が跡形もなく消え去っていた。

視界が霞む。飴細工のように変形する。気味が悪かった。

憎い。イラつく。誰に対してかは分からない。情けなく震える自分かもしれないし、ゆっくりと近寄って来る池上大樹にかもしれない。

いし、もしかしたら他の――。とにかく、思いがけず唇を噛んでいた。鉄臭い血の味が口の中にゆっくりと広がる。

……オレは、こんなにも弱弱しく、臆病だったわけではない。オレが、あの程度の脅威に怖れをなすわけがないのだ。

いつだってオレは一人で生きて来た。生きてこられた。周りは全て敵ばかり。アイツらの方から、オレを遠ざけ、追いやって来たんじゃないか。だというのに何故、そんな連中のために、オレが心乱され、こうまで無様な醜態をさらさなければならぬんだ。

泣きはらす理子が見える。治郎の後ろ姿が見える。

――ああ、これはきつと、アイツらの作戦なのだ。言葉巧みにオレに近寄り、オレを感情面から弱めようという魂胆に違いない。小賢しい。そんな小細工で、このオレを害せると思うなど、調子に乗るな。お望みなら、いつそオレが――。

「杜さん！」

治郎の呼び掛けに、俺は我に返る。何を考えていたのか、何をしようとしていたのか、まったく思い出せなかった。ただ、もう目の前にまで迫る池上大樹の存在が、無為な時間を過ごさせていたという実感と後悔だけを突きつけて来る。

「残念ですけど、アレ、使います」

引き攣った笑みを浮かべながら、治郎は池上大樹に向かって走り出す。奴も応戦しようと、もはやノイズのような音を発してナイフを構える。

「バカ、それは――」

今まさに激突するかと思われた瞬間、第三者の叫び声が治郎と池上大樹を制止させた。間髪入れず、走り寄る靴音が荒々しく響いてくる。

やってくるのは、棗葉月だった。

池上大樹は彼女を見咎めると、怯えたように後ずさりし出し、治郎を突き飛ばして俺の目の前を走り抜けて行った。

……どうやら逃げたらしい。奴もまだ人としての理性が残っているのか、はたまた残っていたのは生来の憶病か、何にせよ目撃者全てを殺すなんて大仰な真似には出られなかったようだ。

拍子抜けしたように、俺と治郎は立ち尽くしていた。緊張の糸が解けたのか、理子はへたりと地面に座り込んでしまう。

「あなた達、怪我はない？」

棗教諭は案外落ち着いていた。俺達三人をそれぞれ見やり、様子を確認する。

「だ、大丈夫です、何ともありませんよ」

「そう、間に合ってよかったわ。さっきの子、内の学校の生徒よね？」

「池上大樹。女に振られた腹いせに襲って来たんです」

治郎の返答に、すかさず棗教諭は理子に視線を移した。

「……わかった。詳しい事情は後で聞いわ。今は彼女を休ませてあげましょう」

「俺が介抱します。それで、あの、池上大樹の方は――」

「心配しないで。警察と警備会社に連絡して行方を追ってもらいわ。あなた達は保健室で待機していてちょうだい」

＊

「アンタ……。また余計なことしでかしてくれたわね」

電波の向こうの肉親は極めて薄情だ。

「おい母親。それが命の危機を何とか逃れた息子に言う台詞か」

「うるさい。私に迷惑かけておいて口答えるな」

む、ムカつく。

「ま、アンタが無事なら私の監督不行き届きまでは槍玉に挙げられないか。その点だけは不幸中の幸いかな」

「おいコラ、息子の安否を最優先に心配しろ」

「生きてるならそれでいいじゃない」

しれっと言う辺り、冗談とかでなく本心なんだろう事が忖度出来てこっちは閉口するより他にない。

「……もういい。聴取も終わったし、これから家に帰るぞ」

「あ、私も父さんも今日は帰れないから、夕飯は自分で何とかしてね。明日の夜までには一度帰ってこられると思う」

「そっちも事情聴取とかあるのか？」

「そうじゃなくて、例の事件を起こした子ね、父さんのとこの小学校卒で、しかも私のとこの中学校の卒業生だったのよ。その関係で缶詰めになる訳」

「缶詰めになって何するんだ？」

「何も。ただ居るだけよ。警察からの連絡を待ったり、保護者からの問い合わせに應對したりするだけ。じゃあ、アンタは早く帰りなさいよ？ これ以上面倒な事を起こさないように」

通話は一方的に切れた。散々な言われようだが、今回の騒ぎは俺から起こした訳じゃないと声を大にして言いたい。巻き込まれたこっちの身にもなって欲しい。

教師達にわかに集まり、騒がしくなっていた廊下から保健室に戻ろうとすると、さっきまで事情聴取に立ち会っていた棗教諭とドアで出会う。どうやら職員室にでも戻るようだ。

「あ、杜君、丁度よかった。あなた達に帰宅の許可が下りたわ。それでお願いなんだけど、仲原さんを自宅まで送ってあげてくれる？」

親御さんに連絡したんだけど、蒼乃から離れていて迎えに来る事が出来ないらしいの。夜には帰ってくるそうだから」

「分かりました。あの、今日はありがとうございました。おかげで助かりました」

「何言ってるの、当然のことよ。それじゃ、今日はゆっくり休みなさい」

この人はやはり胡散臭い事を堂々と言う。棗教諭は一度優しげな笑みを浮かべてから歩き出した。その後ろ姿を怪訝な思いとともに見送ってから、俺は保健室に足を踏み入れる。

消毒液のにおいが充満する部屋の隅では、治郎が壁にもたれかかりながら腕を組んで何やら思案顔を浮かべている。理子は疲労困憊といった表情のままベッドに腰掛けていた。

「理子、送って行くから帰ろう。支度が出来たら声をかけてくれ」
力なく頷き、届けられた荷物をまとめ始める。その間に俺は治郎に近づいて、理子に聞えないよう細心の注意を払いながら小声で話す。

「――池上大樹の行方、分かったか？」

「いや、まだです。街中のキッズ・ギャングに知らせてますけど、池上大樹もバカではないでしょうから、そう簡単に姿を現す事もないでしょう」

「だよ、な。そっちはまかせたぞ。俺は理子を送って行く。それと

……ついさっきのことだけどな、あんまり死に急ぐなよバカ」

「縁起の悪い事を言いますね。都瑚さんにも数回程度なら腕が壊れるだけで命には別条ないだろうって言われてますから、あの判断は間違っではいませんよ」

「かもしれないけどな、池上大樹なんぞに使うのは勿体ない。俺の目の前で使って泣き叫ぶのだけはやめてくれよな」

「泣きませんよ、アンタじゃあるまいし」

「はいはい。んじゃ俺は帰る。もう一度襲ってくる可能性は十分あるからな、立倉達にも連絡しておいてくれ」

「警察が警備の人員を割いてくれるんじゃないんですか？」

「『G件』犯にキッズ・ギャング、自警団気取りの連中を相手にする警察に、そんな余力があるとは思えないな。期待はしない方がいい」

「なら、いつそのこと社さんの家に泊めてあげたらどうです？ 狙われている者どうし、固まっていってくれた方が危機に対処しやすいですし」

ふざけんな、と言ってやりたがったが、治郎の眼差しは真剣そのものだった。おちよくる意図の提案ではない。それ故に性質が悪い。同級生の女と一つ屋根の下で一夜を過ごせるかっての。

「……ま、それも一つの選択肢として考えとく」

そう言葉を濁すしかない。治郎は大きく溜息をつき、肩をすくめて保健室を出て行った。何なんだ、一体。

「ケイちゃん、用意出来たよ」

「お、おう。じゃ、とつとと帰ろうぜ」

既に時刻は四時近く。夕日が赤々と耀いて町を染め上げている。お互い無言のまま、駅前の大通りを歩き、住宅街を通り過ぎる。声を懸けようかとも思ったが、やつれた印象を受ける理子が無理に空気を装うのを見るのは嫌だった。今は、取り繕う事をさせずに、ただ休ませてやりたい。

そうして一言も言葉を交わさないうまま、理子の家に到着する。理子は自分の家を前にして立ち尽くしていた。

「――おい、理子。着いたぞ？」

見るに見かねて声をかけるが返答はない。どうしたものかと途方に暮れていると、不意に理子が口を開いた。が、聞き取れない。

「何か言ったか？」

「……やだ」

理子は苦悶の表情を俺に向けて来る。眼には大粒の涙を溜め、今にも零れ落ちそうだ。

「な、何が嫌なんだよ」

「一人になるには、やだ」

「だ、大丈夫だって。立倉達をボディガードとして一日張り込ませるから、心配するな」

「やだ……。やだ、やだ、やだ——」

理子は何度も頭を振り、駄々っ子のように、やだと繰り返すだけだった。

「なら、お前はどうしたいんだ？」

理子は何も答えない。俺は頭を抱えるしかない。一体どうしたらいいのか、と。なまじ理子が精神的なダメージを受けているために強気に問いただすわけにいかないのだ。

ふと、治郎の提案が脳裡を掠める。

「——いや、ダメだろ」

思わず声に出してしまう。それ程俺の道徳律にとってあってはならない蛮行なのだ。世の高校生がどうかは知らないし知りたくもないが、男女二人きりで一夜を過ごすなど考えられん。潔癖症だなんだ言われても首肯する気には決してなれなかった。

お互い無言のまま、無為に時だけが過ぎる。もうすぐ日も完全に落ちる。その前に例の薬を服用しなければならぬという危機感もあって、俺は何とか理子をこの場から移動させようとあれこれ考え

を巡らせていた。

「……じゃあこうしないか。お前のとこの親が返って来るまで俺の家にいよう。それなら一人じゃないだろう？」

俺の最大限の譲歩による妥協案を、理子はしぶしぶ了承した。こういう時、普段の理子ならやはりたいそう喜んだのだろうか。そう思うと、今の、存在そのものに影が落ちるような理子の姿が痛ましく、不憫のように思えてならない。シリアスもトラジエディも理子には似つかわしくない。

だから、早く笑って欲しいと、本心から思った。

＊

自宅のドアを開けると、あろうことか居候が行儀よく出迎えた。

思わぬ出迎えに絶句する俺と理子。人間達的心情を知ってか知らずか、銀猫は呑気な鳴き声を上げやる。

「……ケイちゃんの家って、猫飼ってたんだ」

「いや、単なる不法侵入常習犯。断じてこの家の一員じゃない」

理子は慣れた手つきで銀猫を抱きあげる。

「あはは、そうだね。なんか私、今すごくバカな事考えてた」

「お前を喜ばせるために俺が猫を飼い始めた、とかか？」

「うん、そう」

照れ笑いを交えながら即答。俺は動揺して上がり框で靴を脱ごうとしてよろけてしまう。冗談で言ったっていうのに、心臓に悪いことこの上ない女だ。

銀猫とじゃれ続ける理子をリビングに通して、ソファに座らせる。表情は一転して晴れやかだ。穀潰しの居候猫にもたった一つ取り柄があったわけだ。俺一人の力では理子を元気づける自信がなかったので大いに助かった。可愛いっていうのは偉大だな、こうして気の沈んだ女を慰める事もある。反面、偉大すぎて自然界ではもはや権力になっていることもある。愛らしいから殺しちゃいけないなんて、人間の極端なエゴには恐れ入るよ、まったく。

友人を自宅に呼んだこともないので、どういふもてなしをすればいいか皆目見当がつかなかった。とりあえず、甘党の理子にはココアを作ってやり、俺はコーヒーを持って理子の対面に座る。

相変わらず猫とじゃれ合う理子を横目に、幻覚抑制の丸薬を服用。リビングには絶えず笑い声と、喜怒哀楽の判別が難しい鳴き声が響き続けていた。

「……お前、楽しいか？」

「うん、楽しい」

現金な奴。

何をするでもなく時は過ぎ、日は完全に地平線へ沈んでいた。

腹は減るし、瞼も重い。ソファに投げ出した身体は鏝一も動きそうにない。満身創痍だ。何をするのも億劫だった。

腹の虫が大きく一声鳴く。飽きることなく猫とじゃれ合っていた理子が耳聡く聞きつけて、不思議そうな眼差しを向けて来る。

「ケイちゃん、お腹すいてるの？ まだ六時にもなってないよ」

「うるせー。今日は色々あったから体力使い果たしてるんだ」

「そっか。じゃあご飯作ってあげようか？」

「ありがたい話だが、そもそも料理に使う食材は何もない」

未だかつてこの家の冷蔵庫に食材が豊富に収蔵されていた事は一度としてない。毎日どうやって食卓の料理が調理されているのか、ほとんど怪談である。子どもの頃は電子レンジのことを瞬間料理転送機だと教えられていたから、冷蔵庫の貧困さに懐疑の念を抱かなかったが、真実を知ってからというもの、俺を惑わせた母親への憎悪と恐怖はかなり根深い。

「そんなこともないでしょ。ちょっと冷蔵庫開けてみていい？」

「ご自由に」

パタパタとスリッパの音を響かせて、理子はキッチンの方へと移動する。夢にも思わなかった冷蔵庫内のさもしさに言葉を失う理子の姿が目に見えぬ。別に俺が罪悪感を持つ謂れもないのだが、建設

的な提案をしてくれた手前、なんとなく申し訳ない気持ちになった。

だが、どうやら今日は「非日常」がテーマらしい。

「ほら、やっぱり嘘だ。いっぱいあるじゃない」

理子が呆れた口調でそう知らせて来たのだ。

「そんなバカな……」

思わず、世界の終りに直面したかのような驚愕が口をついて出てしまっていた。

ことごとく今日は日常に裏切られる不幸な一日であるらしい。

2. 崩された日常 / 22

「——おいコラ、ちょっと待て。お前、今何て言った？」

理子の得意料理というカルボナーラを平らげてようやく空腹を満たした矢先、聞き流していた理子の無駄話からまたもや面倒事を敏感に察知して、俺はそう訊き返していた。

「え、明日はクリスマス・イヴだから町も賑やかになるねって言った」

「その世間話の前だ。お前、俺の家に泊まるみたいなこと言わなかったか？」

「みたいな、じゃなくて泊まるって言ったんだよ」

さも事も無げに理子は言い放った。この女は頭がおかしい。

「バカ言うな、バカ。そんな暴挙が許される訳ねえだろ。第一、お前の親も心配してるんだからとっとと帰れ」

「それがさ、渋滞につかまっちゃったらしくて帰りは深夜になるんだって。ほら、さっきメールが来たんだ」

言いながら、コテコテにデコレーションされた携帯電話を俺に渡してくる。表示された画面には、確かにそのような旨の文章が友達同士のような文体で羅列してある。コイツの親も訳わかんねえ種類の人間らしい、あまりお付き合いはしないでおこうと心に決めた。

「でも、どうしてこれがイコール俺の家に泊まるってことになるんだ――いや、大体予想できた。アレか、一人で深夜まで留守番するのは怖いから俺の家に留まろうって魂胆か」

「違うよ、お風呂沸かしたり戸締り確認したりするのが面倒だから」
「今すぐ帰れ」

真面目に心配した俺がバカだった。

「冗談だよ、冗談」

「嘘つけ」

「んー、まあ、嘘ではないんだけどさ、それが主たる理由じゃないっていうか……。実際、一人じゃ心細いっていうのもあるし、ケイちゃん家が居心地いいからっていうのもある。いろいろなんだよ、いろいろ」

いろいろの部分強調する理子。まったくもって理解出来ない。

「だから、お願い。ね？」

「何が、ね、だ。脈絡がないにもほどがあるぞ。お前は家に戻る前に人生やり戻せ」

「リクエスト通り明日からやり戻るからさ、今日は泊めてよ。普通
のお願い」

「そこは一生のお願いと言え」

「一生のお願いなら聞いてくれるの？」

「ふざけんな、世の中そんなに甘くない」

むう、と不貞腐れる理子。

「今日一日だけだよ、ほんと。怖いんだもん、ケイちゃんは忘れてるかもしれないけどさ、一応、私だってか弱い女の子なんだからね」

そんなことは改めて言われずとも百も承知である。そして、この女がかなりの頑固者であることも重々承知だ。いくら諭そうとも、こうなってしまうたら理子は引き下がらない。泣く泣く俺は腹を括ることにした。

「――本当に、明日朝一で実家に戻るんだろうな」

理子は目を白黒させた。予想外の返答だったらしい。

「う、うん。約束するよ。ってことは、泊まっていいいの？」

「よくはねえけど仕方ねえっていうか、状況の為せる業というか……あー、もう自分でも何言ってるか分からねえけど、今日はこれ以上面倒事に巻き込まれたくない。それに悩みたくない。お前の好きなようにしろ」

ついさっきこそ道徳律がどうの倫理観がどうのと、俺の理性の最終防壁が警鐘を鳴らしていたものの、もはや状況を精査し、吟味する余力もない。一日くらい別にいいか、なんて寛大というか投げ遣りな意見に落ちついてしまっていた。

でもそれは、学校での理子の痛々しい姿に心を打たれたからでは決してない。あくまで、俺自身が弱っているからこそ、我が身を思えばこそその決断である。そう思うと、別に同級生の女を一日くらい同じ家に泊めることもそんなに苦ではない。

……俺もとことん面倒くさい男だな。こうして自分を納得させなきゃ行動出来ないなんて。自嘲じみた笑いが思わず漏れてしまった。

「……ケイちゃん、すごく不気味」

またこの女はいらない一言を。

「でも、ありがと。ケイちゃんなら、許してくれるって信じてた」

……嫌な女だ。そんな幸せそうな表情されたら何も言い返せないじゃないか。

＊

「――もしもし、今大丈夫か？」

「ええ、どうかしたんですか？」

電波越しに聞こえる治郎の抑揚のない声は、雑多な音に邪魔されて少し聞き取り辛かった。どうやら市街地にいららしい。絶え間なく言葉の断片や機械音が静かな自室に侵入してくる。

「言い忘れていたことがあった。例の棗葉月な、あの女の事、少し調べておいてくれないか」

「……何か怪しいですか？」

「このご時世に怪しくない人間なんていねえだろ。ただ、あの女の場合は少し毛色が違う気がしてならねえんだ。どうも胡散臭い、言う事も信念も行動も、な。今日の闖入はダメ押し、かな」

「確かに、タイミングは良すぎましたね。まあ信じる者は裏切られる世の中ですし、疑ってかかるのは悲しいかな、賢明な判断でしょう。わかりました、俺も何となく違和感がありましたし、それに――」

治郎は意味深にしばらくの間を空けた。

「あの人の男性遍歴は一度調べてみたかったんで、いい機会です」

ああ、そう言えば、棗葉月の彼氏である冴えないおっさんに興味津々だったな、コイツ。

「まあ、動機は何であれ、取り掛かってくれるならありがたい。少しでも何か分かったら連絡してくれ。じゃあな」

「あ、ちょっと待って下さい。社さん、今、理子先輩と一緒にいるんですか？」

「ああ、いるぞ」

「社さんの家に？」

「そ、それがどうした？」

またもや意味深に間を空ける治郎。こそばゆいことこの上ない。

「……いや、何でもないです。見張りを定期的に社さんの自宅周辺でウロウロさせときますから安心して下さい。では、ごゆっくり」

気味悪い一言を残して通話は切れた。俺は怪訝な眼差しを携帯電話に向けざるを得ない。何なんだ、一体。

やり切れない思いを遠心力に込めて、携帯電話をベッドに投げ捨てる。同時に、自室の部屋が勢いよく開かれる。

「ねえケイちゃん、猫ちゃんいなくなっちゃった」

シャワーを浴び終えた理子は何とも悲しげな表情で呟いた。貸してやったジャージは半端に着崩れていて、髪も乾かさないまま。どうやら慌ててやって来たらしい。

「ああ、気にするな。アイツは每晚散歩に出かける習性があるんだ」

「えー、せっかくもう一度遊ぼうと思ったのに」

「いや、どうでもいいから、早く脱衣所へ戻れ」

努めて理子に視線を向けずに言葉を紡ぐ。

「え？ あ、そっか。髪、まだ乾かしてなかったんだ」

惚けた様子でゆっくりと階段を下っていくらしい音が聞こえる。しばらく周囲を警戒してから何の音沙汰もないことを確認して、俺

は溜めこんでいた空気を一斉に吐きだした。

上気した頬や初めて見る理子のラフな格好に恥ずかしながら緊張してしまった。いや、しかし仕方ないことだとも思う。あれは去年の夏の講座合宿のことだったか、風呂上がりークラスの女子が妙に艶めかしく感じてしまったものだ。濡れた髪、シャンプーと石鹸の匂い、そして露出度の高いルームウェア。健全な男子高校生には目に毒である。そのエロさを悪だと罵られるなら、この世はとつくに滅んでいるだろうな。女の風呂上がりの姿ですら興奮出来る俺達人類社会を人知れず救っている。

……なんて、しょうもない自己弁護をすればするほど惨めな気持ちになる。こんなことはフィクションの中だけのことだと思っていたが、いや、実際にこんなこと俺にも出来るんだな、我を忘れ、頭を抱えてしばらく立ち尽くしてしまったのだった。

風呂から上がって平板なニュースを垂れ流しながら時間を潰すことと十分弱。飽きることなくどうでもいい話をしゃべり続けていた理子が大きな欠伸をし始めた。

「何だかすごく眠いや。私、眠っていい？」

ベッドの上に腰かけて目を擦る理子は何だか妙に女の子らしい。

「あ？ ああ、寝ろ寝ろ、そっちの方が喧しくない」

「可愛くないなあ」

「可愛いコンセプトで売れようと思ってないからな」

言いながら自室を出ようとする、理子の慌てた声に引き留められる。

「どこ行くの？」

「どこって……俺、一階で寝るから。お前はそのベッド使っているぞ」

「ここに布団敷いて眠ればいいじゃん」

「嫌。お前、寝相が悪そうだから」

「……ははぁーん、さてはケイちゃん、私に欲情するのが怖いんだな？」

「言ってる、バカ」

「わぁー！ ごめん、ごめん。謝ります、ごめんなさい。だからここにいてよ、お願い」

「……あのなあ、いい加減、怖がりすぎだぞ。電気消したら眠れないガキじゃねえんだから」

呆れながら理子を見やれば、まるで天に祈るかのように両手を組んで哀願するかのような眼差しを向けて来る。

「お願いお願いお願いお願いお願いお願いお願いお願い——」

「わあーたよ！ わかったからその不気味な呪文をやめてくれ。トラウマになりかねねぞ」

＊

「……ねえ、ケイちゃん、寝た？」

修学旅行の夜ならお決まりのセリフが背中越しに聞こえてくる。眠いとかほざきやがったくせにまったく眠る気ねえな、コイツ。

「おーい、起きてる？」

しつこい。少しイライラした。

「うるせえな、起きてるよ。何か用か？」

自然、語調は尖って来る。

「用っていうか……ちよっとお話しようよ」

「話ならさっきしこたましたばかりだろうが」

「分かってないなあ、誰が好きとか付き合いたいとかいう話は、この真っ暗闇の中ですから興奮するんだよ」

「中学生か、お前は」

「うーん、身体だけは大学生に匹敵するかも」

「あー、そういう下ネタはいいから。もう寝かしてくれ」

「寝かさない。というか、ナイトのケイちゃんが私より先に寝ちゃったらダメでしょうが。お姫様を守る役目を忘れたの？」

「夜だけにナイトをかけてきたか、全然面白くないぞ」

「うっわ、ケイちゃんこそ、そんなオヤジギャグ考えたなんて……。センスないよ？」

おふざけでなく、妙に神妙な声のトーンが余計腹立った。

「ンなことより、さっさと本題に入ってパパッと切り上げてくれ。こっちだって疲れてるんだ」

「あ、付き合ってくれるんだ？　じゃあね……。ケイちゃんはさ、私の事、実は相当好きでしょ？」

「……臆面もなく、よくそういう恥ずかしいことを自信持って言えるな。お前、今のはかなりイタイぞ」

「照れんなって、実際好きなんでしょ？」

「だから何の根拠があるんだ、俺がお前に秋波を送るような事があったか？」

「うーん……。直接的にはないけどさ、ほら、そこの花瓶が証拠」

「……ああ、花瓶、ね」

実に恥ずかしいものを発見してしまった。隠す余裕がなかった

から、いずれは指摘されるだろうとは覚悟していたが。

「他意はないぞ。俺って義理堅いから、頼まれた事は文句言いながらも実行するんだよ」

不本意だが嘘ではないので照れ隠しではない。

「なあんだ、つまんないの」

理子は殊更残念そうな口振りだった。

「あのな、俺がお前に恋愛感情持っていたとしたらいろいろおかしいだろ。俺は男ツンデレか」

何故だろう。ツンデレという言葉は女に使用すると可愛げのある天の邪鬼を連想出来るのに、男に使用するとどうしようもない我が侘野郎しか浮かんでこないのは。

「あ、ツンデレっていう自覚はあったんだ。ちょっとビックリ」

「そこは論点じゃねえ」

「あ、ケイちゃんが私を彼女にしたいと考えていたらって事？ いいじゃん、私達って案外いい取り合わせじゃない？」

「いや、バリバリ水と油だから」

少なくとも俺は理子という常に内心穏やかでない。

「そっか、そうだね。私達じゃ釣り合わないよね。ほら、理子ち

やん美少女過ぎるから。傍から見たらケイちゃんが私の弱みに付け込んで脅迫したり服従させたりしてるみたいだもんね」

「ツンデレで卑劣漢か、救いようがないな。つーか勝手な事言うな」

「うわっ！ ケイちゃんが怒った。こわーい」

棒読みで一通り台詞を言い終えると、理子は耐え切れなくなったように笑い出した。俺はというと、遣り切れない気持ちと怒りを飲み込んで暗闇を睨み続けていた。

「――なあ、一つ訊いてもいいか」

理子が一頻り笑った頃を見計らって、俺は問いかけていた。

「ん、なあに？ 急に改まっちゃって」

「あの薔薇はさ、一体どういう意味があっただんだ？」

唐突な質問だったからだろうか。すぐには理子の応答がなかった。

「ああ……ブルーロゼット小さな青薔薇のことね」

「お前、あの時、何か言っていただろ？ 全然理解出来なかったんだが」

「覚えていてくれたんだ」

「まあ……消化不良で気になっていただけさ」

何が面白いのか、理子は小さく笑いを洩らす。何とも癪に障るタ
イミングの笑いだ。

「私はさ、あの薔薇を『奇跡が溢れ返ってしまっても、かけがいの
ないものであるように守ってほしい』、そう言ったんだよ」

「……今聞いてもまったくもって意味分からん」

「あはは、そりゃそうだよ。ケイちゃんには解らない。——ううん、
解ろうとしないっていうのがより正しいかな」

穏やか声だというのに、何故か、俺は物寂しい印象を受けた。哀
れみ、諦観。そんな感情が理子の言葉の節々から感じられるようだ。

「どういうことだよ？」

俺の何が解るっていうんだ。そんな気持ちがかもってしまったの
か、我ながら語気の強さに少し動揺した。

「そのままの意味。だって、ケイちゃんはもう知ってるはずだもん」

けれども理子は動じない。昔語りをする老婆のような哀愁に満ち
た口調で話を続ける。

「青い薔薇の花言葉は『奇跡』。今まで不可能とされてきた理想を
実現させた薔薇。人は、不可能な事でも乗り越えられる。青い薔薇
のように、小さな奇跡を幾重にも積み重ねて、やがて大きな不可能
を克服していく。奇跡を望む心がある限り、きっとそれは永遠に続
いていく」

いつかの、遠くを見つめる虚ろな表情の理子が、何かに憑かれたように紡いだ言葉が再現される。

奇跡、不可能、乗り越える、望む心、人は永遠に続けて行く……。

「――ああ、そうか」

簡単な事じゃないか。

それはつまり、人と人が分かり合い、その後もその関係を大切にしていくことを願うということ。奇跡が奇跡であり続けるように、俺が変わることを求めること。

すべての人々に理解されることなんて、ありえない。だからそれを嘆く必要はないし、絶望する事もない。この内心の深奥を知って、余すところなく共感してくれる友人もほんの一握りでしかない事は、弁えておいてもこの先の人生が暗い色に彩られることはないはずなんだ。

他人なんて所詮、その程度だ。

だが、諦観する俺とは対照的に、理子は不可能に近いことと知って、尚、人が分かり合える世界を望む。そして、俺にも同じ理想を追いかけて欲しいというメッセージを込めて、あの小さな青い薔薇ブルーローズに託した。

考えてみれば、簡単な事じゃないか。

解ろうとしない、か。確かに、解りたくもなかった。決して交わる事のない理想との溝を理解したところで、その距離は開くばかり。

理解出来たからといって、すぐさま考えを改めることなど出来るはずはないのだから。

解りたくなかない。神も、死も、運命もどうだっていいんだ、俺は。理解出来ないものに興味を持つ程酔狂じゃない。他人の理想なんて、俺にとっては勿論そんなあやふやな存在と同等だ。

理子はそれを知っているくせに、どうして俺に理想を説くのだろうか。いや、だが言わずもがな、そんな問いすらすぐさま色を失い、冬の到来と同時に散る落ち葉と等しい無関心の対象となる。宙に舞う葉を掴もうとはしない。落ち葉は散り、土の上に横たわって消え行くのが自然なのだ。

「……だから、小さな青い薔薇、ね。お前、やっぱり脳ミソぶっ飛んでるよ。こんなバカなこと考えるなんて」

「だって、私は馬鹿だもん。こういう形でしかうまく表現出来なかったんだ。すごく恥ずかしかったんだよ？」

「そうだろうな、芝居がかり過ぎてる」

「そういうことじゃなくて。あーもう、ケイちゃんの鈍ちん」

何故か理子は機嫌を損ねてしまった。一体何だっていうんだ。

理子はそれきり黙りこくってしまった。俺の脳内では様々な感情と憶測が行き交い、しばらくまともな会話など出来なかったので、好都合と言えば好都合だったが、へそを曲げた理子のアフターケアを思うと気が重くなるばかりだった。

2. 崩された日常 / 23

不気味な静寂が漂い続ける。胃にもたれるような不快な空気には顔を顰めずにはいられなかった。

「なあ、理子」

返事はない。だが、規則正しい寝息が聞こえるわけでもない。不機嫌は自然治癒してないらしい。

「おい、仲原」

呼び方に変化をつけてみるが効果なし。まだまだこのだんまり状態を続けるのだろうか。訳分からんし、勝手なヤツだ。

「――懐かしいね、その呼び方」

諦めて眠りに就こうとした矢先、やっと投げたボールが返って来た。が、受け取るこっちからすれば予想外の変化球である。何の事かさっぱり分からず今度は俺が返答に窮した。

「ケイちゃんは覚えてるかな、私達が初めて出会った時の事」

「あ？ ……ああ、そういうことか。おぼろげにはあるけどな、覚えてるよ。星空を真面目に眺めたのはあの時が初めてだったから印象深い」

「ケイちゃんにもそんなロマンチックな一面があったんだよね、ちよっと意外だったな」

「男の子はな、人生で必ず一度は満天の星空を眺めて、その一つを手に入れようと腕を伸ばすもんなんだよ」

それは星の数ほどある可能性であったり、まだ見ぬ伴侶であったり、人生であったり……。そういう不確かな希望を掴み取る儀礼を、男は野心とか鋭気とかに乘せて経験するものなのだ。身も蓋もなく言ってしまうえば、無我夢中に欲しがる事、求める力が、いわゆる大人の「男らしさ」なのだから。

「なに、ソレ。全然似合ってないよ？」

「うるせえな、言われずとも十分弁えてるっての」

「……でも、ちょっと気が晴れた。ありがと」

「……前から言おうと思ってたんだけどな、お前、おかしい言動が多過ぎるぞ。今の一連のやり取りでどうしてそうなる？」

「覚えていてくれたじゃん、それが嬉しいの」

「安上がりな女だな。そんなことで嬉しいのか」

「女の子はそういうものなんです。さーて、そろそろ眠りますか」

「機嫌が直った途端にフェードアウトとは、マイペースもここまで来ると悪徳だからな」

「何言われてもいいもーん。じゃ、お休み」

「……おう」

気まぐれな理子の事だから、心変わりしてまたぞろ馬鹿馬鹿しい話でも振って来るかもしれないと身構える。が、しばらく反応を待っても何のアクションもない。どうやら本当に眠ったらしい。有言実行したっていうのに他人に迷惑をかける女だ、それだけに性質が悪い。

やっと訪れた安堵感は唐突に睡魔を呼び寄せる。疲労はピークに達したようだ。抗いきれずに瞼を閉じると、数分間で俺は深い眠りに落ちていった。

——昔語りをしたからだろうか。何とも懐かしい夢を見た。それは去年の夏休み。理子と初めて言葉を交わした夜的一幕だ。

＊

八月も盛り。避暑地に訪れたっていうのに、その日はやけに寝苦しい夜だった。

特に理由なんてない。夏期講習の合宿も初日だから疲れもなくて眠くならないとか、高校生特有の深夜のエロ談義に興じるクラスメイト達にうんざりしていたとか、まあもっともらしい要因は数多くあるが、とにかく、いつまでたっても眠気がやって来ないので部屋を抜け出して、見回りの教師と幻覚にびくびくしながらペンションのウッドデッキに足を運んでいた。

人より多くの恐怖に怯えながらやっと辿りついたウッドデッキ。

この場所に來た目的は単純なもので、夜気に当たって気分轉換でもしたいというものだった。俺にとって夜は死を象徴する不吉で恐ろしいものだが、同時に、夜だけは、自然の理を捻じ曲げたでたらめな人間の世界でない、自然そのものの正しい姿だとも感じている。矛盾がないというか、漠然と不条理にすら納得出来る、十時間程度の別世界。だから俺は、夜の空気は割と好きなのだ。

缶コーヒーを調達して、古臭いロッキングチェアに座る。この手の椅子は初めて座ったものだから、予想外の揺れに少し戸惑ってしまった。だがしばらくするとその揺れもだんだん心地良くなる。眼前には月明かりに照らされた神秘的な湖面と深い森林が広がり、頭上は満天の星空。テレビとかプラネタリウムでしかそういう景色を拝んだことのない都会育ちにとっては感動ものである。

感慨に耽っていたら、唐突に背後から肩を両手で掴まれる。驚いて体を硬直させつつ、もう見つかってしまったかと無念さに打ちひしがれながら、俺は観念するように溜息をついた。しかし、教師からのお咎めは一向にない。

「あはは、驚かせちゃったかな？」

子どもっぽい笑いと少女の声だ。女性教師がふざけて若作りでもしているのか。恐る恐る振り返ると、金髪の女の人懐っこい笑みが俺を見下ろしていた。

「……誰だか知らねえけど脅かすなよ。教師の誰かにバレたかと冷や冷やしたじゃねえか」

「ごめんごめん。あまりにも無防備な背中だったから、つい揶揄からかいたくなっちゃった」

女はへらへらと笑い続けながら、テーブルをはさんだ隣のロッキングチェアに腰かけた。

「おいコラ不良娘、夜更かしは美容の天敵だぞ」

「いーのいーの。戻ったところで眠れないから。みんな好きよね、恋バナとか」

うんざりしたかのように女は呟く。

「お前は嫌いなのか？　そういう話」

「嫌いじゃないけど、楽しくない。私さ、好きな人、いないんだもん」

「他人の幸せが妬ましい、みたいな心境なのか」

「妬ましいっていうか……羨ましい。私ってさ、恋を始めること自体に奥手なんだ。恋自体は積極的なんだけどね」

いや、別に興味ない。

だがしかし、高校一年にもなった俺は分別もあるから、そんな素っ気ない言葉は返さない。初対面の相手だし、ここは無難に励ましの言葉でもかけるのが吉。

「まあ焦ることないだろ。中学生とは違うんだ。おざなりなフィードバックとかメールのやり取りだけで勢い余って付き合うのはカッコ悪い」

ああ、思い出すだけでも馬鹿馬鹿しいな。何で中学生の頃ってあ
あいう軽い気持ちで異性交遊に奔走出来たんだろう。

「そうだよね！ やっぱりそう思うよね！」

俺の感慨が伝染したのか、女が予想外に食い付いてきてしまった。

「お、おう。人間、親しくなってからやっと思える中身が重要だからな」

女の興奮した態度に気後れしながらも返答する。だがしかしと、俺は内心呟く。外面もある程度のクオリティがなければ内面を知ろうという気すら起きないのもまた事実。要はどちらか一辺倒ではなくバランスが大事という事。これは真理など滅多に存在しない人類社会の数少ない真理だ。

「みんなおかしいよね、『なんとなく』好きになるなんて私には理解出来ないよ」

「まあ、そういう恋愛も否定出来ないけどな。一目惚れっていう愛の形も確かにあるんだろうよ」

俺は一度も経験がないからイマイチどんなものか想像出来ないが。

「じゃあさ、君は……あの、ちなみに君って同級生だよな？」

「その質問の前に、まずお前の学年を言え」

「あ、そうか、ごめんごめん、一年生だよ。Bクラスの仲原理子」

「……ああ、お前が仲原か」

一年の仲原理子と言えば俄かに有名になりつつある女生徒の名前だった。とりわけ男連中での人気によるものである。何でも顔良し、スタイル良し、性格良しというアニメのような人物設定で、学年問わず男子間では持て囃されている存在らしい。

言われてみれば確かに男受けするツラだろう。黒く大きな虹彩に囲まれた瞳なんかかなり印象的だ。白い肌と少し暗い金髪もいい塩梅に調和している。体貌は……水色の露出度が高いルームウェアのせいか、十五、六歳の女とは思えないほどの艶めかしさを感じさせた。

「いろいろ噂は聞いてるぞ、有名人」

「……私って、君みたいな良く分からない人にも有名なの？」

「校内の大概の男どもはお前の名前くらいは耳にした事があると思うぞ」

「何だか恥ずかしいなあ、私ってちょっと目立ち過ぎ？」

「いや、ちよつとどころかかなり目立つぞ」

「……やだ、変な所見ないでよ」

そう言って仲原は両手で胸のあたりを隠す。まるで犯罪者を糾弾するかのような冷たい視線を向けてきやがる。

「みつともないぞ自意識過剰女。確かにお前は同年代の女子と比べたら発育がいい方かもしれないけど、世の男子生徒全てがお前の身体に目を奪われると思ったら大間違いだからな。目立つってのはお前の存在そのものだ」

「どの辺が目立つの？」

「それは知らん。俺はお前なんぞに興味が湧かないからな」

「でも、さっき私の名前を覚えてたじゃない」

「俺はただ単に好みの声優と同じ苗字だから覚えてただけ」

「せ、声優？」

素っ頓狂な声で聞き返してくる。声優という単語に触れる機会が少ないのか、未知のものに遭遇した人間特有の複雑な表情だ。

「あ、ちなみにお前の苗字ってどう書くんだ？ 中心の『中』に野原の『原』か？」

唐突な質問に仲原はうろたえた。

「ち、違うよ。仲良しの『仲』に原っぱの『原』」

「うっわ、惜しいな。んじゃもういいや」

「ちよ、もういいやって何よ」

「うるせえな、俺の気は済んだからもう帰っていいぞ」

「私の気が済んでない！　　とうか、私だけ素性を明かして不公平だよ、ほら、君の名前は？　　学年は？」

「一年の鈴木太郎」

「嘘っばい」

「おい、全国の鈴木太郎氏に謝れ」

「冗談はいいから本当の事を言いなさい」

仲原はぐいっと迫り寄って来る。面倒くさいので素直に答えて早めに切り上げよう。

「……Aクラスの社慶太」

「社……君？　　うーん、聞いたことない名前だなー。それ、本当の名前？」

「天地神明にかけて嘘偽りない。ほら、気は済んだか？　　だったら静かにしてくれ。俺は気分転換に来たんだ」

ロッキングチェアに深々と座り直して眼を閉じようとする。

「ねえねえ、まだ話は終わってないんだけど」

柔らかな語気の割に、ぐいぐいと力強く肩を揺さぶられる。

「……あー！　　ウザったいぞ！」

「社君が狸寝入りするからいけないんじゃないの」

「誰が狸だ！」

「あ、ごめん。よく見れば狐顔だね。吊り眼だし」

「ちっ……。おい、早く用件を言ってさっさと帰れよ」

「あ、聞いてくれるの？　優しいなあ、社君は」

ふざけんな。聞かなきゃ嫌がらせを延々と続ける気だったくせに。俺は内心、そう毒づいた。

「まあ、大した事じゃないんだけどね。社君は女の子と付き合った事、あるのかなって」

「はあ？　んなこと聞いてどうすんだ？」

「別に何も。私ってそういうの少ないからさ、色々経験豊か人の武勇伝を聞いてみたいだけ」

「それなら人選ミスだな、他を当たってくれ」

「……はあ。そうだよね、社君、あんまりモテそうにないし」

がっかり、なんて言葉で締めくくる仲原。

「お前……割といい性格してるよな」

「えへへ」

皮肉を言ったというのに照れ笑い。スゲーム力つく。

だが唐突に、仲原は神妙な面持ちで空を見上げた。その表情の変化に、俺は訝しげな視線を向けずにはいられなかった。仲原は独白するかのように静かに言葉を紡ぐ。

「――でもさ、そうやって色々な人の話を聞いて、いつも思うんだ。真人人を好きになった人なんて、実際は少ないんじゃないかって。好きっていう感情は、本当は勘違いだったり、思い込みだったり、信じたっていう欲求だったり……。つまりさ、人を好きになる事っていうのはありふれた事じゃなくて、本当はとても難しくて稀少な体験なんじゃないかな。そう考えるとね、好きっていう感情はどういうものなんだろう、どうすれば好きになったと言えるんだろうって、悩んじゃうんだよね」

寂し気に笑う仲原の表情が、月明かりに照らされて、さらに者寂しいものに見えた。

「ごめんね、訳のわからないこと言ってるよね、私。ちょっとどうかしてたな、初対面の人にこんなこというなんて」

拙い弁解だ。話してしまった恥ずかしさなど表情にない。あるのは、諦めに似た静かな切なさだけだ。

コイツもきつと、誰もが当たり前前に信じているものに疑念を持ってしまったが故に傷つき、苦しんでいる、そういう種類の人間なのだ。

だからといって慰めてやる義理もない。ただ、俺が抱く考えだけは伝えたいと思うた。

「おい、仲原」

気も漫ろな笑みで応答する仲原。

「知ってるか？ 恋ってのは体の不調と同じ、自分で感じるものなんだ。それが本物か偽物かなんて関係ないんだよ」

真面目に取り合った人間は少なかったのだろうか。仲原は言葉を失い、硬直した。

「愛情ってのは、この世で最も麗しいものであるのと同時に、確固たる形のない最も疑わしい存在だ。他方、愛情は他の感情の仮面と出来る使い勝手のいい存在でもある。解るか？ 恋愛の原動力たる感情の形にさえ沢山の側面がある。況や恋愛も、ということだ」

未だに仲原は呆然としている。

「人はさ、誰かと寄り添っていれば大抵幸せになれるんだよ。幸せの概念に明確な形がないように、その手段の恋にも定義はない。それこそ、この星の数ほどに愛の形って奴はあるんだろうな」

柄にもない単語を口走ってしまって、内心、かなり恥ずかしい。それに、俺自身、恋以前に他人を好きになれないというのに、よくもまあここまで詭弁を弄せるなど自嘲してしまう。

「――でも、俺達は考え過ぎる。星を掴むにはさ、何も考えず、ただ欲求のままに手を伸ばさなきゃ掴めない高さにあるんだ。途方も

ない高さを憂慮して尻込みする俺達じゃ、まず手に入れられない」

そう、望むものはこうやって両手じゃ抱え切れないほど存在しているというのに、俺達はその一つにすら手が届かない。世の中は理不尽だ。誰もが考えないような物事を真剣に考えている勤勉な奴ほど幸せという二文字から遠ざかっていくんだから。

「ま、お前はまだ大丈夫だ。だから馬鹿になれ。そうすりゃ簡単に幸せになれるぞ」

安っぽい励ましで締めくくった。適当な言い草に反論なり悪罵なりが返って来るかと思ったが、仲原は未だに呆然自失としていた。状況の処理に相当時間がかかっているらしい。やがて正常な意識を取り戻すと、眉根を寄せて拗ねるように一言。

「なんか生意気」

しかし、途端に表情を和らげ、深々とロッキングチェアにもたれかかった。

「でも、それなりに面白かったよ。ありがとう」

どうやら奴は笑い話だと受け取ったらしい。どこに笑う要素があるのか皆目見当がつかない。この女はもしかしたら天気予報で大笑いとか出来る希有な人間なのかもしれない。とにかく、気を悪くした訳ではなさそうだから俺もそれ以上は何も言わなかった。

「ねえ、杜君」

「……まだ何かあるのか？」

「君の論理で言うとき、恋愛っていうのは風邪みたいなものなのかな？」

「あん？ ……ああ、まあそうかも。けど、俺としては季節みたいなものなんだけどな。勝手にやって来て勝手に去っていく。こっちの努力はお構いなしにな」

「へえ、季節か。それいいね。季節は必ずやって来るもんね。私も春はやって来るかなあ」

「やってくるかなあって言うより、春が来たっていう感覚は、自分で感じるものだろう？」

「……そうだね、その通りだね。杜君、今、自分でうまい事言ってるでしょ？」

「思ってたえし。ほら、もうおしゃべりはここまででいいか？ 悩むな感じろ。恋なんてのは衝動だ。やって来た時には何も考えず、ありのままに受け入れればいい。そうすりゃ全部解決だ」

「適当だなあ」

仲原は呆れたように呟く。

「適当で悪いか？」

「うーん……まあ、いいんじゃない？ 杜君には合ってると思う」

「どういう意味だ」

仲原はケラケラと笑い続ける。取り留めもない、ありふれた他人の姿だが、何故か俺は居心地の良さを感じる。この女はシリアスよりコミカルな方が似合うんだと気付いた。俺には真似出来ない、存在としての属性。そういうものに興味を抱かなかった訳ではなかった。だが、やはり俺の心の奥底で渦巻く、他人への恐怖が素直に感情を発露させない。曖昧な気持ちに歯痒さを感じながら、俺はまた瞼を閉じる。もうこの女と話す事などあるまい。

「あ、社君！ 見て、流れ星」

だがそうはうまく事が運ばないらしい。喧しいにも程がある。俺は寝たフリをし続ける。しかし仲原も強情というか無邪気というか、絶えず話題を振って来る。

静かな反抗をすること五分。とうとう耐えきれなくなった。観念して殊勝な態度で話し相手になる。

――満天の星空の下、缶コーヒー片手に空を仰ぎながら、理子のどうでもいいような無駄話に耳を傾け続ける。夢の中の俺は不思議と安らかさと心地良さを感じていて、でもそれを悟られないように努めて不機嫌を演じて……。眼下の湖面がキラキラと輝き始めるその時まで、夢の中の俺は夢のような時間にたゆたっていた。

2. 崩された日常 / 24

薄汚れた白い天井が目覚めの俺を出迎える。いつもの光景だ。けれども、気分は常日頃のようにふわふわとたゆたう心地良さのそれではなかった。気味の悪い程に明瞭に、鋭敏に、この世界の気配を感じ取り、社慶太という自我の存在を意識している。

このところ、よく夢を見る。だが、自分に関しての夢を見たのは久し振りだった。理子と初めて出会った夜の一幕。何だか、身近な異性を夢に見るというのは気恥ずかしい。

……そういえば理子の奴、出会った当初は恋愛恐怖症の感があったんだよな。でも、いつのまにかそんな陰もなくなっていて、「恋は衝動」なんて言えるまでに変貌していた。

あの安っぽいアドバイスで心機一転でもしたのだろうか。……いや、違うな。どうせ恋の一つや二つ経験したに違いない。理子も悩むのではなく感じたんだろう。論理的正しさや整合性に依拠しない、実感というものを。実感は理論に優先されるから、その後納得するのは比較的簡単なんだろうし。

それにしても、と思う。今にして思えば不可思議な会話だ。何故、俺は初対面の女を大真面目に励ましたのだろうか。それに、今思い返せば実に説教臭い。まるで苦難や障害に満ちた壮絶な恋愛を経て来たかのような口振りで我ながら恥ずかしいにも程がある。

俺の俺らしくない一面の発現に対して、理子は運命論なんぞを持ち出してくるんだろう。だが運命なんてない。だからあの出会いも偶然だ。哲学者は世の中に偶然はないなんて言うけれど、論理的必

然性は偶然性を論破出来ない。その時点で、それは必然ではなく蓋然なのだ。だから、偶然俺の舌の調子が良くて、しかも生来の物臭がちよっと出張中で、ちよっと講釈でもぶってやろうという気になっただけという事態は容易にあり得ることである。

もしかしたら、月の魔力の影響かもしれない。都会とは異なる自然の開放的な気分にあてられたのかもしれない。修学旅行の夜のよな、自分をさらけ出そうという興奮感があつたのかもしれない。考えれば考える程、それなりの原因は思いついた。

何にせよ、もう昔の事だ。そう、取り戻せない過去のワンシーン。あの日の正確な心境など思い出せようはずもない。例え真実にたどり着こうと、それすら当時の感情が欠如している限りこじ付けにしか思えない。だからどうでもいい。過去の自分からは逃げられないが、決して取り戻せるわけではないのだ。だから早々に不毛な追究はやめにして、布団からはね起きた。

ベッドに理子の姿はない。一瞬、鋭利な不安感に襲われる。悪漢が侵入して夜の内に理子を誘拐した、そういう可能性に思い至って体中が強張った。けれどもそれは杞憂だった。

「おはよう、ケイちゃん。やっと起きたな」

いつの間にか階段を上ってきた理子がドア付近で能天気な挨拶をかけてくる。カラフルなエプロンと結い上げた長い髪、嫌みの一つでも言いたげな呆れ顔は毎朝嫌でも見かける母親のそれとそっくりだった。あえて違うと言えば、母親の表情はもつと陰険でサディスティックである。

「朝ごはん、といっても、もうお昼近くだけど、用意出来たから下

に降りて来てね」

瞬時に応答する事は出来なかった。日常とは異なる非日常、だが緊張も煩わしさもない変化に、そして呑気な、平和なやりとりに、俺は不思議な感覚を覚えた。

穏やかで、意味もなく笑ってしまいそうな心境だった。充足感もあった。全てが満たされた心地良い時間、声、音、空気。やはり俺と理子の世界は変わらない。命の危険とは無縁な、平和で平穏な取り留めもない、けれど居心地の悪くない世界。

「あ、もしかして怒ってる？」

緘黙する俺の態度に、理子は自らを省みたようだ。

「勝手にシャワー使っちゃったり、キッチン使っちゃったり、猫ちゃんにご飯あげちゃったりしたの、バレてる？」

「いや、初耳だ。そんなことしてたのか、お前」

責任の所在を誤魔化すように理子はぎこちなく笑う。

「ま、別にいい。怒ってるわけじゃねえし。むしろ感謝したいぐらいだ。ありがとうよ」

「え、あ……うん」

理子は物怪顔で俺を注視する。

「何だよ？」

「最近、おかしいことも多いもんだなってしみじみ感じちゃって。あのとんがってたケイちゃんが殊勝にもお礼を言うなんて。気持ち嬉しいけど、なんだかちょっと寂しくて複雑な気持ち」

「何だ、お前、マゾ気質だったのか」

「あー、その一言で雰囲気ぶち壊し！ ほら、早くご飯食べてよ。今日はこれから一緒に出掛けるんだから」

「はあ？ 出掛けるって、お前なあー」

「わかってるよ、ケイちゃんの言いたいことは」

理子が俺の言葉を遮るように右手を前に突き出す。

「危険な事は百も承知なの。でも、前からクリスマス・イヴの計画は立ててた。これだけは諦められない。絶対に、諦める事は出来ないの」

やけに真剣な表情に俺は戸惑いを隠せない。女にとって十二月二十四日はそれほど重要な位置づけの日なのだろうか。それとも、ただ単に理子がイベント好きなのだろうか。それにしてもこの必死さはどうだ。軽い気持ちで掣肘しようものなら激しいヒステリーに会しかねない。

一度決めたら簡単には翻意しない理子の頑固さは折り紙つきだ。制止も説得も土台無理である。

「――後悔しないよな？」

だから確認だけする。その選択に懸ける覚悟と決意を。

「しない。それに、いざという時は、またケイちゃんが護ってくれるもの」

呑気な女。

＊

「――で、どこに行くんだ？」

理子お手製のサンドイッチを齧りながら、何となしに聞いてみる。理子はテーブルの対面に座って頬杖をつきながらこちらを楽しそうに眺めている。

「ん――内緒」

予想通りの返答に俺は呆れざるを得ない。女って何で秘密を作るのが好きなんだろう。しかもヘンゼルとグレーテルよろしく、気になるような段階までパン屑を落とすような勿体をつけるのだ。

不毛な詮索はやめた。行けば分かる事だし。俺はサンドイッチに集中する事にした。

「もふもふ」

「……可愛い鳴き声だね」

何故か引きつり気味の何とも言えない表情を呈す理子。

「そうか？ パンを食べる時って皆こういう声出すんじゃないのか？」

「架空の擬音だと思うけど」

「他にもこんなものがあるぞ。グチヨグチャベツチヨリ」

「それは可愛くない」

俺もそう思う。

「ねえ、可愛いで思い出したんだけどさ、ケイちゃんの寝顔ね、あんまり可愛くなかったんだよ」

「……そこは普通、『寝顔、案外可愛いんだね』とか褒める場面じゃねえのか？」

「だって、本当に可愛くなかったんだもん。どっちかというと……綺麗？」

「何で疑問形なんだ」

「いや、何だかしっくりこなくて。何て言うのかな……まるで、意識はどこか違う世界に行っちゃって、もうこの世界にはいない、みたい」

「勝手に俺を殺すな」

「そういうことじゃなくてさー」

的確な表現が思いつかないのか、理子は呻吟しながら考え込み始めてしまった。大袈裟な奴だ。そこまでして伝える必要のある違和感なんだろうか。

理子の想像はなかなかユニークだが、夢は見ても夢の世界には遠足出来ないし、現に俺はここに社慶太として厳然と存在している。彼岸の向こうに旅だった者で帰って来た人間はいないのだから、俺はまだあちら側の世界に魅入られていないという事。さして問題にする程のものではない。

——というか、むしろその印象は当然なのだ。

世界とは地球の事ではなく、人の住む場所、生活の場、それをこそ世界という。俺は、人々が存在し、生きているこの世界が嫌いだ。だから、眠りにについている時間だけでも、意識を、どこか遠い、別の世界に浮遊させているはずだ。そうでなければ、眠りに就く事が心地よいなどとは到底思えないだろうから。

＊

クリスマス・イヴの市街地は活気があった。誰もが皆、思い思いの幸せを引き寄せようと肩を抱き合い、手を取り合っている。『G件』という非日常を引き摺りながらも、彼らは懸命に日常に回帰しようとしているようだった。笑顔も楽しげな会話も、何だか微妙に空々しく、薄っぺらい印象は拭いきれないが、それでも多くの人々のぬくもりが真冬の街を温めていた。

灰色の街を理子と二人並んで回る。ペットフードから始まり、アクセサリー、ぬいぐるみ、雑貨、洋服、喫茶店……。何がしたいの

か、何を買いたいのか明確でないままに店を転々とし、陽は西の空に落ちかかろうとしていた。

理子は始終上機嫌だった。無為に過ごした一日に不満の一つもありそうものだが。一体、理子の考えていた計画とやらは何だったのか。まさか、こんなそぞろ歩きの延長のようなものではないだろう。そうであるなら、何もクリスマス・イヴにしなければならぬ程の事でもない。むしろ毎日の理子とのやり取りだって似たようなものなのである。

忙しなく目ばしい店を品定めしていた理子が唐突に立ち止まる。

「ねえ、ケイちゃん」

理子は背を向けたまま、

「教会、行こ」

それだけ言って、足早に歩き出し始めた。訳がわからないまま、それでも俺は無言でその背中を追う事にした。問答が無意味だという諦めもあったが、それより何より、理子の小さな背中からいつもの頼りなさや弱弱しさが感じられない事に、今日一日に対する覚悟の度合いを感じ取ったからだ。

藍色とオレンジ色のグラデーションが、見上げる空に塗り込められている。

……腹、減ったな。

世の中総てのモノを可食的か不可食的かで判断するダリの論法で言えば、この空はどっちだろう。

……食えるだろうか？ 食えるのなら、きっと生きた蜘蛛よりはおいしいと思った。

垂涎たる夕飯の姿を思い描きながら、理子とともに教会への石畳の道を進む。

教会の凹の字型の外観は、まったく斑のない白亜の出で立ち。剣のような尖閣の双塔が、グラデーシヨンの空に突き刺さっている。その光景はさしずめ魔物の腹中を挟る勇者の剣だ。

この蒼乃市唯一の旧教系列の教会で、百年以上の歴史を持つという由緒正しいものだ。この蒼乃でも、一年ほど前まではまだ割と賑わっていた場所である。だが、今では廃墟の趣すら感じさせる。『G件』、キッズ・ギャングの増加、少年犯罪の横行、住民の相互不信といった世紀末的社会状況にあっても遂に救世主は現れず、神も降臨しない。自分達の命や生活を守ってくれる絶対者は存在しない、自らの大切なものは自らで守るほかないという認識のみが残り、旧教だけでなく宗教そのものから蒼乃の人々の心は離れて行ってしまった。

だがそれでも、「蒼民教」などという得体の知れない新興宗教が急速に勃興し始めているのは何故なのだろうか。鰯の頭も信心からとは言うが、今の蒼乃市民が、実益のない物事に腐心するとは考えにくい。考えてみれば不思議な事だ。後で治郎に調べさせよう。

さて、もはや廃れて手入れも行き届いていない教会に何の用があ

るのか。疑問に思いながらも先に進む。

二重の観音開きの扉を開け放つ。

内部のシン、と落ち着いた空気は、歴史の栄枯盛衰を感じさせる。呼吸するだけで、まるで老齢の太木に背中を預けているかのような錯覚があった。

整然と並んだ飴色の長椅子、豪華なステンドグラス、頭上には高い天井と、側面には古臭いランプ。正面には巨大な十字架。一般庶民の持つイメージ通りの教会だ。

神などはおろか親の威厳すらも信じていない俺が訪れるには酷く場違いな場所だと思う。

いい加減、教会を訪れた真意を確認しようと連れの姿を探す、いつの間にか辺りは埃の匂いが混じった煙のような薄暗闇が広がるばかりで、生きているものは俺だけだった。音という音もない。若干、不安感を抱いてしまう。

理子の姿を探しながらさらに教会の内部を進むと、仄暗い祭壇、落ちかけた陽の光に彩られるステンドグラスの反射を浴びた、静謐だが賑やかな一隅が目についた。

その薄暗闇の中心に、さながら水彩絵の具を水に滲ませたようにぼうつと白い光が浮かび上がっていた。炎が揺らぐ度四方の壁に現れ上下にゆれる影達は、なんとも不気味だ。まるで闇に蠢く幽霊達を直に見ているような、現実味に欠ける感覚。

不意に炎の輝きが増して、黄金に輝く髪が朧気ながら見て取れた。

恐る恐る近づいてみると、そこには十字架を無表情に見上げる理子がいた。

2. 崩された日常 / 25

息をつき、一步、足を踏み出そうとした時だった。

ドクンと、心臓が一際大きな鐘を打つ。それは本能的な危機感だった。

寸暇、その危機感確固たる現実へと昇華する。身体全体にへばり付く様な、俺を眺め回す気味の悪い視線を感じ、同時に眼の端で異形の存在を捉えてしまった。

——アイツ、だ。

教会を支える太い石造りの柱に寄り添い、相変わらずたるんだゴムのような面貌を俺に向けている。

隠れる気もない。弁解するでもない。まして襲いかかるでもない。ただ泰然と、そうであるかが当たり前のように、虚ろな空洞の如き眼で俺を凝視している。

「——っ」

声にならない悲鳴が漏れる。慄然として俺はその場でよろけ、目の前の現実を拒否するように堅く両の眼を閉じた。

「な、んで」

どうやら薬の服用を忘れていたらしい。このところ見かけていなかったせいもあって、久々の遭遇はかなり堪える。勿論、教会の内

部は暖房などないから凍えるような寒さの渦中にあるというのに、玉のような汗が額から噴き出して来る。

日課を疎かにした軽率な自分に対する後悔よりも先に、嫌悪感が逸早く脳内に充満する。次いで絶望的な恐怖が全身を絡め取ってしまう。

眼を開ければそこには、アイツが迫っていて……。

そんな現実を受け入れられなかった。例え妄想だったとしても、妄想だという確信はない。だから俺は視覚情報を遮断し続ける。絶望の中の一条の希望などいらない。そんな頼りない救いではあの不気味さに挑もうとは思えない。いつそのまま気絶なり昏睡なりしてしまえば、死ぬにしろ生きるにしろラクだというのに。

アイツは何をしでかすか分からない。一向に掴めないアイツの行動、思考、目的は、そのまま俺をがんじがらめにするに十分な不気味さを印象付ける。俺は無様に震え続けることしか出来なかった。

「——ちゃん！」

誰かの声をする。俺はその声を無視し続ける。きっとアイツなのだ。アイツの策略に決まってる。

「ケイちゃん！」

誰かが俺を呼んでいる。聞き覚えのある、少し高い女の声。それでもまだ、俺は拒否し続ける。

「こら、社慶太！」

誰かの手の温もりがある。それから柔らかい痛み。誰かが頬をつねっている。

その痛みには、覚えがある。思い出がある。誰かの楽しげな、平穏な笑みがある。唐突に、恐怖に支配されていた俺の脳内に、金髪の少女の笑顔が現れた。

たったそれだけのことなのに、俺は救われた気分になった。

——ああ、そうだ。俺は一人じゃなかったのだ。

闇に閉ざされていた視界に、徐々に柔らかな灯りが射してくる。ゆっくりと捉えた光景には思った通り、よく見た誰かの怪訝な表情。黒い大きな虹彩に囲まれた瞳、少し暗めの金髪、白い、陶磁器のような肌。

仲原、理子……。俺の友人だ。そう、友人なのだ。これだけは断言出来る。この友人は、俺を害さない。他人であろうとも、この能天気な女だけは信じられるのだ。それはコイツが、どうしようもないバカだから。嘘をつかれる事が耐えられなくて、だから自分でも嘘をつけないバカ正直な、俺の怖れてやまない人間らしからぬ人間なのだ。

「急にどうしたの？ 貧血？」

この女はいつだって笑顔を絶やさない。バカなことをしてバカみたいにケラケラ笑っている。楽し気に、呑気な日常に埋もれたどうでもいい話をし続ける。鬱陶しいけど、俺はそんな騒がしい日常が嫌いじゃなかった。

その日常が長く続けばいいと思っていたのも事実だ。けれど、それは叶わない夢だという事も弁えている。何故ならそれは、俺達が何より人間であるからだ。不変であることなど、今まさに生きている俺達には不可能な所業なのだ。

……人間は嫌いだ。やはり、その思いは変わらない。けれども、否定し難い現実が、今、目の前に厳然と立ち現れている。

俺は、理子に救われたのだ。そして、理子とともにいる時間を、俺は望んだのだ。あの他人嫌いな、他人の潜在的な脅威に怖れていた俺が、この女のそばにいる事を心地良いと感じたのだ。この感情に答えを出せるようになるのは、きつともっと先の事だろう。

「何でもねえよ」

だから今は、強がることしか出来ない。

「けど、ありがとうよ」

だから今は、その程度しか素直になれない。

「うーん、ホント気味が悪いなあ。ケイちゃんももっと傍若無人な性格だったのに」

「殴っていいか」

「あーウソウソ。そんなに怒らないでよ」

身体を起こしつつ周囲を検めてみたが、アイツは姿を消し、不気

味な視線も跡形なく消え去っていた。今はもう、アイツが視界に現れる不安を感じなかった。

休憩と称して祭壇の前の長椅子に並んで腰かける。お互い無言のまま、しばらく時間が過ぎた。

「ねえ、さっきさ、ケイちゃん怖がってたよね。何かあったの？」

世間話でもするかのような調子で理子は問うてくる。好奇心からなどではなく、どうやら努めて自然な振る舞いを意識しているらしい。理子の態度から、先程の俺の様子が尋常でなかった事が窺える。それでも尚、普段と変わらない振る舞いを続ける理子には、内心驚きを隠せなかった。

「別に、何もねえよ。ちょっとした見間違いだ」

嘘ではない。だが真実からはほど遠い。

「もう……素直に話してよね。ケイちゃんがよく何かに怯えているの、知ってるんだから。今日こそはね、そういう隠し事を聞こうと思って、教会にまで来たっていうのに」

やはり理子にはバレていたか。一緒に過ごしていた時間が長いだけにその危惧だけは常に抱いていた。

「教会と真実と、何の関係があるんだよ？」

「決まってるじゃん。十字架の前ではさ、真実を明らかにするものでしょ」

祭壇の奥で厳肅に俺達を見下ろす十字架に理子は視線を移した。

「懺悔、告解、宣誓……、私ってその辺りは不調法者でよく解らないけど、この十字架の前では、その人の本当の気持ちとか事実とかを包み隠さず言葉にすることが求められる訳でしょ？」

「さあな。俺もよく知らん。けど、こればかりは話せねえよ。例えばそこに神様がいて、言わなきゃ天罰を下すって脅されても、絶対に言えねえんだ」

言ってしまったえば楽になる。けれど、そうしたところでこの症状が緩和するわけでも、まして完治するわけでもない。逆に理子の杞憂や心労を、俺が楽になった分そのままに煽るだけだ。この病には、俺自身が決着をつけなきゃならないものである。

「……そうだよな。人には、誰かに言えない事の一つや二つ、抱えるものだよね。私だって、ケイちゃんには言えない事、たくさんあるもの。けどね、そう納得していても我慢出来ないんだ。まるで、お互いがお互いから目を背けて、手だけ握っているような繋がりみたいで。」

私はここにいるの、だからケイちゃんには私を見て欲しいな。逆にね、ケイちゃんはそこにいるでしょ？ だからちゃんと、私に見せて欲しいの」

理解しなくても、されなくてもいい。ただ、本心を晒して欲しいと理子は請う。見たくないもの、見たいと積極的に望んでいる訳ではないけれど確かに胸の内に秘めるものを、共有したいと願う。一方通行でない優しさや思いやりは、そのような素地のもでしか出来ないのだと理子は感じているのだ。

「ごめん、自分勝手な言い分だよ。ケイちゃんにも事情があるのは知っているの。きつと、いつか話してくれるよね。だって、ケイちゃんと私はこの先ずっと友達だもん」

乾いた笑みだった。追い求めているものが決して手に入らないと弁えている機械的な筋肉の動作。やめて欲しい。この女に人生を冷笑するような賢しさは似つかわしくないのだ。

「ずっと、なんて無理な注文だ。命は代謝するものだから。代謝って知ってるか、生まれ変わって事だ。変わらないことなんてありえない。お前、忘れてるだろ。俺とお前は一人の男と女なんだぜ？」

狐につままれたような表情を長く披露した理子は、次第に苦笑し始める。

「それって何かの冗談？」

「茶化すなよ、真面目な話だ。一般論だがな」

「そっか……あはは、何だかちよつと恥ずかしいね」

理子は照れくさそうに顔を背ける。俺は努めて理子の表情を見ろまいと、これまで多くの礼拝者を温かく見守ってきたであろう年代物の十字架を注視し続けた。

その行動は羞恥心からではない。齒の浮く様な台詞ではあったものの、不思議な事に、俺は冷静だった。

「まあ、なんだ……。変わっていくはずなんだ、生きている限りな」

「うん、そうだね」

「いつか……きっと——」

お前の望む未来が俺達に訪れる日が来るかもしれない。言葉にこそ出来ないが、素直にそう思う事が出来る。

いや、仮に理子との関係が友達のままであろうと、恋人関係になろうと、はたまた疎遠になろうと、一向に構わないと思う。けれどそれは理子が他の有象無象の連中と同じだからじゃない。仲原理子という存在がこの世にあるというだけで、俺は他人に一縷の望みをかけられるのだ。誰もが皆、恐ろしい怪物ではなく、意思を伝わせ幸せを分かち合える友人だと希望を持てる。

このどうしようもなく恐ろしい地獄のような世界で、人間らしからぬ、しかし人間性に富んだ友人と呼べる人が確かに存在する。だから探せばいい。目の前の、ありのままの他人も受け入れてみるのだ。人はここまでだと諦めるのではなく、本質的に狡猾で醜悪だと罵るのではなく、信じてみよう。

誰かを、好きになってみよう。

＊

静謐な教会内に似つかわしくない機械音が響き渡る。単調で無味

乾燥な着信音だ。意外にも理子の携帯電話がその発信源である。巷の流行にうるさい典型的な女子高生の割に案外無頓着なんだなと取り留めもない事を考えていたら、理子は電波の向こうの相手と早くも通話を終えていた。その時間はものの二分くらいだ。理子は落胆したように肩を落としていた。

「誰からだ？」

「あーいや、その……お母さん」

「は？」

「ほら、お母さん達が家に着いた時、私はこうしてここにいるからまだ一度も顔を合わせていない訳で……」

回りくどい説明を訥々と語る。どうやら母親から叱責を受けてきまりが悪いらしい。

「……俺もすっかり忘れてた。そうだよ、お前、早く家に戻れって」

「う、うん。戻るは戻るよ。でもさ、まだやり残したことがあるというか……」

先程から要領を得ない理子の言い分に俺も辟易するより他にない。

「何だよ？ 俺、お前に金とか借りてたか？」

「そういうしょうもないことじゃないの。もっとこう……」

言い淀む理子。埒が明かない。

「もういい。話なら今度聞いてやるから今日のところはとりあえず早く戻れって」

沈黙考すること数十秒、理子は渋々首肯する。

「じゃあ明日の約束、忘れないでね」

「明日？ 何の事だ？」

「え、明日クリスマスだよ？」

「だから何だ」

「ケーキバイキングを奢ってくれるって言ったじゃん」

さも当然だと言わんばかりに妄言を断言。言いがかりもここまで凄味があると真実なんじゃないかと不安になってしまいうから厄介である。

「勝手に過去を捏造するな。んなこと一言も言ってない」

「えー！ じゃあ改めて……お願いします！」

「せめて頭を下げろ」

携帯を弄りながら片手間に願われても、一切親切心など湧いてくるはずもない。

「いや、催促のメールが大量に……」

「だから、早く帰りやがれ」

「でも、明日の話がまだ決着ついていないじゃない」

面倒くさい女。

「わかったわかった。とにかく話はまた明日だ。奢る云々の話とはもかくな」

「本当？　じゃあ明日、ここで夜の七時に待ち合わせね」

「何でわざわざ会わなきゃいけないんだよ、電話でいいだろ？」

「コラ、クリスマスに何が悲しくて引きこもらなくちゃいけないの」

「いや、だってお前寂しい女じゃないか」

「そういう他人を徒に中傷する突っ込みはいらない。とにかく、明日ちゃんと来てよね。夜の七時だよ。遅刻厳禁だよ。あと……」

「あーわかった！　わかったから、ほら、とっとと帰るぞ」

＊

日は既に沈み、辺りは薄闇に支配されている。無機質な街路灯の灯りがその空間だけを切り取ったかのように別世界を作り出す。雪は降り止んでいたものの、その冷気はいまだ健在。身体を縮こませながら市街地への道を二人で戻ろうとしたときだ。

目の前に広がる光景に違和感があった。積雪は薄い紙二枚程度だが路面を覆い隠すには十分な量だ。だが、教会の入り口付近だけ雪の化粧が行き届いていない。というより、これは無造作に踏み散らかした痕跡だ。俺と理子の足跡にしては数が多い。それ以前に足跡はなかったのだから、俺達が教会にいる間に誰かが教会を訪れたのは間違いない。だが、来訪者は教会内にはなかった。

「入り辛かったのか？」

「え、何か言った？」

「いや、何でもない」

敵意を持たない一般人の可能性は否定できない。が、そんな安穩な推測を立てられるほど俺達を取り巻く状況は平穩ではない。ここは最悪の事態を想定すべきだ。

もし、誰かが俺達を尾行していたら？ 穿った見方をすれば治郎の冷やかashiという線もなくはないが、より実害のある可能性ならあの男――未だ居場所の掴めない池上大樹だ。奴は未だに逃走を続けている。彷徨するには市街地付近は人目につく危険が大きい、それ以上に後ろ盾のない池上大樹が日々の方便を得るには市街地に根を張るより他にない。だから偶然俺と理子を目撃したという可能性は十分あり得るのだ。池上大樹を社会的にも精神的にも切羽詰まった状況に追い込んだのは他でもない俺である。恨みを買って当然だし、池上大樹としては、良くも悪くも最早後顧の憂いが無い。理子に対する執念も、今や法の網を取り払い実力行使へと転換しているかもしれない。それでも複数を相手にしては分が悪いと奴も先日の失敗で弁えているし、襲撃するにしても各個に対応した方が勝算があると考えたとしたら、尾行という回りくどい方法を選んだ理由と

しても納得出来る。

さて、そうであつたならどう対処すべきか。安全をより確実なものにするのなら、これから複数行動を心がけた方が無難だ。明日の待ち合わせも白紙に戻す方が良い。だがその場合、いつまでも池上大樹の影に怯えながら生活しなければならず、精神的な負担は無視出来ないものになるだろう。それより何より、駄々をこねる理子の扱いに手を焼くという危惧もある訳だが。

やはりここは罫を仕掛ける方が、この一連のいざこざの快刀乱麻を断つ。理子、あるいは俺が単独行動を装い囧となつて、誘い出された池上大樹を一網打尽にする。気が狂れているとはいえ相手はあの貧弱な池上大樹であり、一度対峙したことで奴の殺気に対する免疫もある。キッズギャング達を動員して数に頼れば十分抑え込める。理子の機嫌も損ねずに済むから一石二鳥である。円満な解決策ではあるが、囧となる役者には多少の危険が付き纏う事になるな。少しでもリスクを減らす方策を考えなければ。備えあれば憂いなしというやつである。

「……ちよつと、ケイちゃん、帰るんじゃないかったの？」

沈黙考し、微動だにしない俺に不安を感じたのか、理子は眉を顰めて俺の頬を軽く叩いた。

「わ、悪い。ちよつと考え込んだ。んじゃ、行こうぜ。今日はちゃんと送ってってやるからな」

「あのねケイちゃん、男の子が女の子を自宅まで送るのは当たり前なのですよ」

「へいへい……」

尾行がまだ続いているのか頻りに後方に視線を配り用心しながら、俺達は帰路に就いた。

＊

2. 崩された日常 / 26

「――ふう」

思わず、溜息が洩れてしまった。しかし憂いに非ず。これは安堵の所作である。

理子を自宅まで送る道すがら、終始尾行や奇襲に警戒を強めていたものの何の音沙汰もなかった。もともと池上大樹はまったくこの件に関与していないのか、はたまた様子を窺っているだけなのか、明瞭としない事態に不気味さを感じずにはいられないが、ともかく今日一日の平穏を俺は噛みしめていた。

……いや、違う。確かに生命を脅かされない平穏には違いはないだろうが、俺が日常と認識する平穏とは少し毛色の異なる一日だった。今日一日で何かが変わろうとし、そして実際に判然としない何かが変わってしまった。それは一体何なのか、伶俐な人間ならすぐに答えを導き出せるのだろう。だが俺には出来ない。名状し難い緊張と不安が交錯し、おさまりの悪い心理状態を形成している。

この揺らぎの原因は紛れもなく理子にある。あの女に対する俺の認識と感情が輪郭を引き直し、新たな形を描こうとしている。友人という関係性ではもはや描き切れないのだ。どうやら俺は一線を越えてしまったらしい。後悔はないが、流されるまま行き着いた帰趨に当惑せざるを得ない。

思考は堂々巡り。答えの見つからない精神の彷徨である。現実感の希薄な時間をしばらくたゆたっていたかと思うと、携帯電話の着信音が鳴り響き、着信相手が治郎だということを確認すると、俺の

意識はもう一つの懸案事項へ強引に振り向かせられた。

「社さん、二つばかりご報告が」

「一つ目は棗葉月のことだよな？」

「ええ。事情通を何人か運よく探し出せましてね。今回ばかりは自分を自分で褒めてやりたい」

治郎は柄にもなく自慢気である。それだけ有意義な情報を得られたということだろう。

「前置きはいいいから早く話せ」

「はいはい。棗葉月の生い立ちですが、蒼乃市生まれ蒼乃市育ちの至って平凡な半生ですね。ただ、まあ……ありがちと言っちゃ気の毒ですが若干虐め被害に遭っていたようです」

「ま、あれだけ美人だからな。さぞや妬まれたに違いない」

「理由までは詮索しませんでしたが。とにかく公立高校に進学後、ドロップアウト組に目をつけられ、遊興費調達要員として援交を強要されたようです。ただ、美人である事が災いしましてね、彼女を気に入ったとある客にしつこく付きまとわれ、棗葉月の方も応じるより他なかったらしく相当な頻度で無償労働に従事させられたとか」

「恐喝か？」

「似たようなもんです。何でも死んだ父親の形見をその男が奪ったようでして、ほら、返して欲しかったら云々……という塩梅で」

「腐った人間は何処にでもいるもんだな。しかし、棗葉月にとって余程大切な代物なんだな。自らの身体を傷つけてまで取り返そうとしたなんて」

「かなり父親の事は慕っていたようですよ、その父親は棗葉月が十三の時に交通事故死、ガソリンに引火して遺体はそのほとんどが焼失してしまったようです。辛うじて残ったのは耐火性の手袋をはめた両手首のみ、後は遺品少々。そんな凄惨な死を遂げた父親の形見ですからね、まあ、解らなくもない思い入れですよ」

治郎にしてはセンチメンタリズムな発言である。背筋に悪寒が走った。

「で、その後は？」

「母親は再婚せず、女手一つで娘を養いました。娘の方も泣く泣く非行に手を染めながらも、母親には気取られることなく一切をこなし、バイトで生活費を稼ぎ、学業は優秀な成績で高校を卒業します。しかし、当然の帰結というか、三年の苦行の甲斐もなく父親の形見は返還されず、男との関係も清算されず。棗葉月はどんどん心を閉ざし、口数も少ない陰気な少女になってしまったようです」

「まあ、そうなくても不思議じゃないな。けど、今の棗教諭は……」

「ええ、まるで別人です。というのも、実は棗葉月は、十九歳頃から逆援交に走ったんです」

逆援助交際。つまり、女が男に金銭を支払うタイプの援助交際だ。

「おい、棗葉月にとって援交は苦行じゃなかったのか？」

「それがですね、棗葉月の逆援交はデートをするだけのものとして、しかもお相手は若い男でなく壮年の——つまりオッサンをターゲットに声をかけていたんです」

「……何となく解ったぞ。アレだろ、諸々の悩みを聞いてもらう相手として、大好きな父親をオッサン達に投影していた」

「ご明察。思慕していた父親がいない寂しさ、援助交際を強要される苦しさなんかを吐露しては慰めてもらう、というのがスタイルだったようだ。ただ、あまりいい対応をしてくれるオヤジに巡り合えなかったのか、コロコロ相手を変えましてね。ところが月日は流れて棗葉月が二十歳の頃、当時バイトしていた花屋の店長とデキちゃう訳です。で、逆援助交際は当然やめて、苦行だった援助交際の方も店長の対応でスムーズに解決。ま、どうやら相当額の金を支払ったみたいですけど。」

もう解っちゃいるとは思いますが、その店長というのが——」

「理子のバイト先の店長、か」

「その通りです。二人の出会いから話しましょうか？」

「いや、他人の恋路ほどムカつく話はないからいい。それより気になるのはだな——」

「分かってますよ、店長ことにしなあきひろ仁科明宏は今年で四十一歳、どう見ても冴えないオヤジですが、経歴も人となりも見事に冴えません」

なかなか辛辣な言い草だ。当の店長にとっては大きなお世話とい

うヤツだろう。

「手練手管を弄したわけでもなく、物好きな棗葉月の方が的として飛び出したという訳です。宝籤にでも当たったような奇跡ですね。

しかし、まあ、綺麗な薔薇には棘があるというかタダほど高いものはないというか、棗葉月は超が付く独占欲の持ち主でして、浮気でもされようものなら間男ならぬ間女をナイフで刺しかねないヒステリーを起こすとか」

「あー、やっぱりね」

「は？ 何がやっぱり何ですか？」

「いや、こっちの話。で、続きは？」

「とにかく、棗葉月という女は男性依存の激しい女だ、ということ、当の仁科明宏も辟易することもしばしばだったとか。数少ない友人に愚痴も零していたようです」

「ちょっと待ってくれ、今の話を聞いているとな、まるで店長は女子との接触が数多いみたいに聞こえるぞ」

「ええ、そうですよ」

「冴えないオヤジじゃなかったのか？ それとも、現代の女はそういう甲斐性なしの方が好きなのか？」

「落ち着いて下さい、仮にそうだとしても社さんはやっぱりモテないから安心しろよ。俺は何も女子の方から近づいていくとは言いませんよ。いろいろと黒い噂があるんです」

さらりと俺への中傷を会話に挟んでくるあたりかなりムカつくが、横槍を入れて話をややこしくするのも面倒なのでここは気付かない振りをする。そうさ、ガキの治郎の茶々に一々腹を立てるのも大気ないだろ。

「仁科明宏は女子高校生に並々ならぬ興味関心をお持ちのようで、棗葉月と付き合う以前にはストーカーの嫌疑をかけられた事もざらで、内、何件かは事実です。立件はされませんでした」

「チッ……あのオヤジ。自分こそ真正銘ストーカーのくせして俺を疑うとは、厚顔無恥とはアイツのためにある言葉だな」

丸眼鏡の奥の猜疑に満ちた細い目を思い出すと腸が煮えくり返るようだ。

「一応、理子先輩にも注意喚起しておいた方が良くないですか？ただでさえ池上大樹のストーカー被害に遭ったんだし」

「そうだな、そうしとくよ。で、店長の女子高生好きの性癖は、棗葉月と付き合っても結局変わらなかったってことか」

「まあ、ほとんど手を出さなくなったようですけど、それでもゼロではなかったってことです」

「贅沢なオヤジだ。さて、これまでの話を整理するとだな、棗葉月の方は、まあ気の毒な半生を送ってきたようだが、表面上はこれといって『肉体強盗』を連想させるような経歴はないな。融通の利かない正義感や池上大樹襲撃の際のタイミングの良さなんかには胡散臭さを感じずにはいられないが、怪しい、というレベルは一般人の

それとあまり変わらない」

「ただ、棗葉月に援交を強要した女達がキッズ・ギャングだとしたら話は変わりませんか？」

「キッズ・ギャングを恨んでる人間も、この街にはゴロゴロいるよ。それだけじゃ疑う理由としては限りなく弱い」

「そうですね……。じゃあ仁科明宏の方はどうです？」

「『肉体強盗』の犯人像とは一切重ならないし、いい意味で行動が小物だな。まあ油断は禁物だが……」

釈然としない心理状態に思いを巡らせながらパソコンを操作し、『G件』掲示板のサイトを閲覧する。この際、『肉体強盗』についても情報を整理しておこうと思い立ったからだ。

「『肉体強盗』の情報は……目ぼしいもんは書き込まれてねえな」

「例の掲示板ですか？」

「ああ、今日までに認知された被害者は十二人、男は八人、女は四人。被害者達にこれといった共通項は見当たらないな。まあ例によってキッズ・ギャングではあるんだが」

「女の子達もキッズ・ギャングだったんですか？」

「一人はそうだが残りは違うらしいな。全員十六、七歳の女子高校生。各々異なる高校に通っていたらしいが全て普通科高校だな。風貌はすべて金髪ミニスカギャルチック。そういう種類の女に対して

恨みでもあるのかもしれないが、まあ数が少ないから、彼女達をターゲットに殺人を繰り返しているとも断言出来ないな。けど一応、棗葉月に援交を強要した連中のことも調べてくれ。何らかの関連性があるかもしれないし」

「了解です。しかし、謎は深まるばかりですね」

治郎と俺は同時に嘆息した。被害者数こそ歴代の『G件』犯に負けず劣らず凶悪な事件だが、『肉体強盗』は行状が派手でなく、しかも活動期間がインターバルを挟んで極端に短い。自然、情報は少なく、ほとんど推測でしか犯人像を仮想出来ない。掲示板の書き込みも、どれもこれも関連性が極めて希薄な、ある種個人の偏見や妄想に近い情報が散見される始末だ。

「ま、ここで悩んでも仕方ないな。『肉体強盗』の件はもうちょっとリサーチを進めよう。――さて、二つ目の報告を聞こうか」

「あ、そうでしたね。社さんにとってはこちらの方が喫緊の問題でしょうけど」

治郎の言い草に若干不安を覚えた。どうやら理子関連の話らしい。

「立倉達からの報告なんですけど、駅前付近で池上大樹らしき人物を目撃したそうです」

「……本人だっという確証はあるのか？」

「いや、立倉達には写真を見せただけなので何とも……。ただ、似た風貌の人物が市街地に出没しているというのは間違いないので、一応知らせておこうと思って」

その人物が池上大樹だったとして、やはり俺達を尾行していたの
だろうか。それとも単なる偶然か。何にしろ、これは池上大樹包囲
網完成にとって大いなる情報だ。

「いや、サンキュ。逆に俺の仮説の信憑性は一段と高まった。それ
でな、明日はちよつとした作戦を決行しようと思うんだが……」

＊

2. 崩された日常 / 27

「――わかりました。その手筈通り動きますよ」

「じゃあ他の連中への連絡も頼むわ」

「了解です。不本意ですが社さんの背中には任せて下さい」

「……その発言って、俺は安心していいんだよね？」

「ご自分の判断で。ではでは、クリスマスを理子先輩と思う存分お楽しみください」

「お前なあ――」

抗議の声は電波に乗る事はなく、自室の部屋に虚しく響くだけだった。憤懣やるかたなく携帯電話を睨みつけていたら、怒気が通じたのかまたもや着信音が鳴り響く。治郎お得意の時間差を駆使した嫌がらせかと勘繰るものの、表示された名前は仲原理子。別の意味で緊張しつつ、大きく息を吐いて努めて平静を装いながら受話ボタンを押す。

「んだよ、何か用か？」

「明日の待ち合わせ、十八時にあの教会だからね。忘れないでよ？」

一人気負う俺とは対照的に、理子の方は至って平常である。途端、自分が情けなくもあり、また苛立たしくもなった。

「お前……相当暇人だな。そんなこと言うためだけに電話してきたのか？」

「酷いなあ。せっかく気を回して確認してあげてるのに」

「余計なお世話だったの」

「明日、絶対遅れないでよ？」

「おい、いい加減しつこいぞ」

訳のわからない心境と、懸案事項が山積しているせいだろうか。知らず知らずのうちに語気が少し尖っていることに遅まきながら気付いた。自分の不甲斐なさから周りに当たり散らすのは、かなりカッコ悪い。後悔とともに、理子の鈍感さに若干の期待を抱きながら、リアクションを待つ。理子は一向に話し出さなかった。

「……おい、理子」

「ケイちゃんさ、解ってないでしょ？」

「あん？ だから解ってるって。明日は十八時に待ち合わせだろ？」

「そうじゃなくて」

珍しく苛ついているような口振りだった。訳が解らないのでこっちまで苛々は募る。

「何だよ、はっきり言えって」

「……女の子がさ、クリスマスにさ、男の子を誘うってことの意味……いくら鈍感なケイちゃんでも解るでしょ？」

訥々と聞こえてくる理子の声は、拗ねるかのような口調だった。俺は息を呑んで返答に窮するしかない。一体、どう受け答えすればいいというのだ。

俺は鈍感ではない。むしろ人より人の感情というものに敏感だ。だから理子の言わんとしていることも前々から気付いていた。確信したのはつい最近ではあるが。

無論、クリスマスに相手のいない男女が会う約束をするというのも、十中八九友達以上恋人未満の関係の脱却を狙ってのものだというのも理解していた。でも、だからこそ俺はそのことについて深く考えたくなかった。出来れば、何事もなく、聖なる夜が明けて欲しいと願わんばかりだったのだ。

誰かを好きになってみようと思った。その「誰か」に、今最も近いのは理子だという事も弁えている。けれど、決意したからといって、これまで畏怖し遠ざけて来た物事について、すぐに行動に移せるはずもない。何より、はっきり言ってかなり照れくさい。真っ正面から向き合える奴はよほど神経が図太いか愚鈍かのどちらかではない。

そう考えを巡らせていた最中、いつぞやの治郎の言葉がどこからともなく蘇って来て、容赦なく俺を口撃する。

『男と女の関係において、無知ってのは許されざる蛮行ですけど、気付かぬ振りはそれ以上の悪行ですよ？』

余計なお世話だ、と悪態を吐きつつ記憶にある治郎の仏頂面に蹴りを入れてやったが、反面、妙に納得している自分がいる。特に、理子は言わなくても分かる云々の論理が心底嫌いなのだ。本心を隠して独走しては、また池上大樹ストーカー事件の時のようないざこざに発展するとも限らない。けれど気恥ずかしいものは気恥ずかしい。俺は雁字搦めになった。

「……早く寝ろ。明日はちゃんと行くから」

妥協に妥協を重ねてようやくと絞り出した言葉は、傍から見れば素っ気ないものでしかない。けれど今の俺にとって精一杯の譲歩である。努めて語気を柔らかに、捻くれた表現は使わずに素直に簡潔に。

「……うん」

理子は何かを感じ取っただろうか。それともはっきりした答えが返ってこなかった事に意気消沈したのだろうか。どちらともとれる、微妙な肯定だった。

程なくして電話は切れた。後味が悪い。今までは理子との会話がこんなに苦ではなかったはずだ。

……やはり、はっきりさせねばならないのだろうか。さて、鬼が出るか蛇が出るか……。どちらにせよ、中途半端なこの関係性は最早居心地が悪い。どうにか打開せねばならない。

全ては明日、である。何かが始まるにしろ終わるにしろ。……煩悶で今夜は眠れない夜になりそうだ。

＊

十二月二十五日、午前零時二十八分。

月は雲に隠れていた。

濃い暗闇が重く立ちこめる室内で、女がベッドに腰掛けている。寒さを堪えるかのように縮こまらせた身体は薄いキャミソール一枚だけ。しかし、女の総身は汗ばみ、手にした写真立を食い入るように見つめながら、細い肩を揺らして陶酔の吐息を洩らしている。時折混じる艶めかしい笑い声は、しかし同時に不気味さも兼ね揃えた狂笑だった。

度重なる身体の蠕動に疲れ果てたのか、女はベッドにゆっくりと横たわる。長い茶色の髪の毛がしどけなく女の端正な顔に絡みつく。苦し気に喘ぎながらも女は笑みを絶やさない。

程なく、雲間からのぞいた月明かりがカーテンもない窓から一条の光となって部屋に差し込んだ。青白い月華に照らされて、相貌を覆い隠す髪の毛の合間から、大きく見開かれた瞳が露わになる。黒い空に浮かぶ白い満月と対になるかのような、白い肌と漆黒の虹彩。その眼は、彼女に笑顔を向ける男の写真にしか向けられていない。その視線の奥に、無造作に積み重ねられた人間の手足が、壁際に立てかけられているにもかかわらず。

女は徐に携帯電話を手に取り、緩慢な動作で操作し、耳元へ運ぶ。

「――久し振り。今日の夜、会ってくれる？　仕事？　ふふふ、嘘ね。大丈夫、もうあなたを惑わす彼女はいなくなるから。それじゃ、二十二時にいつものカフェで」

＊

同日、午前零時五十二分。

蒼乃の街は眠らない。目抜き通りは深夜にもかかわらず車の往来は激しく、人の波も絶える事はない。そこかしこでネオンの雑多な光やイルミネーションの幻想的な輝きが我こそはと自己主張を張り合っている。街で続発する猟奇殺人も何のその、夜の主演達は我が世の春とばかりに通りを闊歩し、盛大かつ華やかな場をつくり上げていた。男を誘う者、女を誘う者、金蔓を罫にはめようとする者、妖しげな商売人達、後ろめたさを抱える男女が蒼乃の夜を彩る花形である。

けれども今日に限って、彼らは夜の街の花形を譲らねばならない。人生の酸いも甘いも知った者だけが壇上に立つ事の出来るこの夜の夜という舞台は、この数日間のみ、聖なる夜に愛を誓い合う男女の甘美な会話と抱擁を見所とする恋愛劇へと変貌していた。

夜の住人達の打算や虚栄を隠匿するはずの華美な光は、一転、愛し合う人々を照らし出し、その存在を殊更浮き彫りにするような、祝福の演出に変節していた。

だがしかし、光には影が付き従うものである。

ビルとビルの間、目抜き通りから一步横手に入った路地裏は、表舞台の華やかさに反比例して、饅えた臭気と纏わりつくかのような粘質の濃い闇に支配されていた。

泥や汚水にさらされて本来の色を無くしたポリバケツの脇に、男が蹲っていた。薄汚れたコートにやつれた、まだ少年の面貌が痛々しい。彼は、まるで見えざる怪異に怖れ慄く子どものように、身体を縮こまらせて震え切っていた。

「……やらなくちゃ。でなきゃ、でなきゃ僕は……。アア、あああああ——！」

慟哭は誰の耳にも届く事はなかった。いや、誰も聞く気がなかった。人一人の不幸や苦悩などこの街では日常茶飯事である。涙するには値するが、驚くには及ばない。人々は少年に一瞥をくれるだけで、何の関心も感情も抱かず通り過ぎていく。

誰も彼を救わない。少年の方も誰かの救済を期待などしていなかった。顔を上げた少年の表情は苦悶と悲愴に満ち満ちていながら、決然たる眼差しを湛えていた。その双眸に未来ある展望を志向する清々しさは感じられず、歪んだ使命に殉じようとする邪悪さのみが、漆黒の瞳に蟠っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3353g/>

Blue Rosette

2011年11月19日21時37分発行